
藤の花の匂う頃

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藤の花の匂う頃

【Nコード】

N6635Y

【作者名】

yuki

【あらすじ】

親が金持だが身分の低い花房は、中納言家の姫の婚礼のための新たな女房候補として、京の都に上京するが、この結婚は先の帝に狙われていた。それを知った中納言は花房に姫の身代わりとなる事を要求。花房はそれを引き受ける。その献身的な行動に姫の結婚相手、大将に妻の座を提示されるが花房は返事を出来ずにいた。琴が得意な少女の平安サクセスストーリー。（歴史、文化に明るい訳ではないので、内容はあくまでイメージです）

上京

康行はしつこく食い下がっていた。私はうんざり声でさえぎった。

「いらぬ物は、いらぬの。何よ、そんな安物」

康行は真つ赤になって言い返した。

「安物なんかじゃないぜ」

「嘘おつしゃい。侍で飼われ者のあんたが、たいしていい物を買える訳が無いじゃないの。あんたなんかにもらわなくても、私はお父様から素晴らしい螺鈿細工や、彫刻の櫛をたくさんいただいたているの。田舎長者の娘と侮らないでほしいわ」

まあ、この物のいい方こそが、劣等感の表れなのは分かっているけど、康行があんまりしつこいので、つい、言ってしまう。

「今度の若君のご結婚は特別な事だからと、うちの殿様がお手当を大層弾んで下さったんだ。それを田舎にも送らずにお前のために買った櫛なんだ。若君だつてこれは良い物だとおっしゃって下さった。受け取つて、損は無いはずだ」

そう言つて康行は尊大な顔つきをする。

ふん。しゃらくさい。

確かにあんたのご主人のお父様は、今、京の都を牛耳る大納言様でしょうけど、私の姫様のお父上だつて中納言でいらっしやる。ご主人様の格を言うなら殆んど同格よ。

私は康行を見下した。たとえではなく、本当に縁の上から見下ろしている。なぜなら私はこの、中納言家の一の姫様の女房、と言っても小間使いに近い立場だけれど……であって、康行は武蔵の国から雇われてきた、下男同様の立場、侍だからだ。私はこの屋敷にいる以上、主人の許可も用事もないのに、人前ではしたなく屋根の外へ出る事は出来ないし、康行は大納言家に飼われている立場なので、貴人や女人の上がる建物のうちへは入れない。

しかも、ここは中納言家のお屋敷だ。元の身分は康行と私は同じでも、ここでは私が何かと有利。だから私も強気で受け答えをしているのだ。

「京で男が最初に贈るのは、モノじゃ無くて和歌よ、わ、か。それに私だって国に帰れば武蔵で名をさせた長者の娘。あんたなんかに贈られたものを持っていたりしたら、いい赤っ恥だわ」

「たしかにお前の名前は有名だよな。じゃじゃ馬の花房さんよ」

「なんですって?」

私が康行にかみつこうとしていると、女房仲間で姫様の乳母の娘、乳姉妹の「やすらぎ」に声をかけられる。

「花房、こんなところにいたの? さっきっから探していたのに。早くしないと姫様に怒られるわ」

「いめん。すぐ行く」

実はこれはやすらぎの助け船。私が苦手の康行に引っ掛っている

のを見かねて声をかけてくれたのだろう。姫様の元に参上するのが遅れているのも事実だけど、姫様が私達をあからさまに叱ったり、たしなめたりするのを私は見た事が無い。

それでも康行は美しい漆絵の櫛を縁の上に置いて侍所へと帰って行った。私も結局そのままにはしておけず、その櫛を手にとってみる。

確かにそれはみごとな漆絵の、櫛目の細やかなものだった。上質なものだと一目で分かる。

私の父は身分が低いながらも、金の力を借りて、私にありったけのモノを買い与えていた。だからモノの良し悪しくらいは分かるのだ。

あーあ。無理しちゃって。

でも、本当のところは、私こそかなり無理をし続けている。康行は苦手だし、武蔵の国の侍は乱暴者で有名だから、相手にするつもりはないのだけれど。それに、なんのために作法見習いに、ここに勤めたのか分からなくなってしまうのだけれど。物持ちの父に育てられたとはいえ、所詮田舎者。きらびやかな、京の邸暮らしは何かと気骨が折れる。同郷の康行とちよつとした言い争いをするのは、実はよい気晴らしになってはいるのだ。

本来なら、こんな立派な方々にお仕え出来る身分ではない私が、下働きの下女ではなく、女房として一の姫様にお仕え出来るのは、父の金の力もあるのだけれど、私が何故か姫様に気に入られたのが

一番の理由だ。

姫様は私の一つ下の十五におなりになる、愛らしい顔立ちの方で、一時は帝の女御様候補にも挙がられた。

だが今は中納言様の政治的お立場が難しい時で、やむなく御入内はあきらめられたのだとか。

実際、帝には何人かの女御、更衣様方が寵を競っていらして、すでに后宮に男御子も儲けられているので、その後を追ったとしても、姫様が幸せになられたかどうかは難しいところ。中納言家にとって政治的ならまみもあまりなかった。

しかも、早々とその男御子様か赤子の身で東宮になられたので、これはむしろ、早く一の姫に女の子を産んでいただいて、お年頃になられたら東宮の元に入内させる方が、時も稼げて一石二鳥、と、中納言様は考えられたらしい。

そこで、今やこの京の都で最も権力を誇っている大納言様のご長男と、姫様の縁組が組まれる事になった。

そこそこの家柄の姫君や若様なら、評判を聞いて、和歌や手紙のやり取りをして（それでも互いの顔を見る事は出来ないのだけれど）几帳をはさんで会話をしたりして、気が合えばご結婚の運びとなるのだけれど、ここまで上流の、一度は帝の元へ嫁ごうかとされた方にまでなると、気が合うも合わないもなく、家柄と政治力と、親の相性がモノを言うので、お話が来た時点でご結婚が決まったも同然。

さっそく新しい女房や、下女を増やそうと、中納言様が当てを探していた所に、私の父が、今は亡き私の母の妹につてを頼って私を

推薦させたのだ。

父は今では地元的女性と再婚して、長者としての地位を築いているが、昔は私の母の元に通い、そこで私が生まれたいらしい。母は下流貴族の家の人だったらしく、父が財を築く元手になったのは、母の家の人間関係による援助があった事も大きかった。母は私を生んですぐに亡くなったが、普通、女の子は母方の実家で育てられるのが常なのに、父は私を自分の郷里の武蔵の国へ連れていき、そこで私を育ててくれた。

郷里で成功を治めた父は私に都の様々な情報を与えてくれた。

読み物、詩集、きらびやかな衣装、流行の和歌、美しい細工もの。私は自然と都に憧れをもった。

いつの日か、京の都で暮らしてみたい。

私は父に甘やかされて育ったせいかな、地元で評判のお転婆と言われるようになっていた。父と再婚した義母はその事に胸を痛めていて、

「いつそ花房さんをどこかのお邸にお勤めに出したらどうでしょう？」と、言いました。

義母にしてみれば、地元の国守の邸に行儀見習いに出すつもりだったのだからけれど（そう言う事は良くあることなのだけれど）幸い、私には母と仲の良かったという、母の妹である、伯母とのつながりがあった。都で暮らす絶好の機会である。

私は父に頼みこみ、叔母にきちんと連絡を取り続ける事を条件に、普通では無理であろう権門の家の女房候補として上京したのだった。

叔母の家で支度を整え、他の人たちと中納言様の正妻でおられる北の方、つまり、姫様のお母上様と、姫様にお目にかかる時、誰もがかしこまって顔も上げられずにいる中で、私はどうしても好奇心に勝てずに、顔を少し上げてお二人の顔を見ようとした。

そこを姫様の乳母^{ちち}、やすらぎの母親に見とがめられて、失礼だと叱られたのだが、つい、田舎にいた時の勢いで、

「私は身分がいやしいですから、ここで追い返されるやもしれません。だったら都のお姫様のお顔を、一度くらい拝見しておきたいんです」と、言い返してしまった。

皆が息をのむ中で、一の姫様がコロコロとお笑いになられた。そこで私と姫様は初めて目があったのだが、その一瞬で姫様は私を気に入られたらしい。問答無用で私を姫様付きのおそばの女房に決めてしまわれた。

姫様の周りには、沢山の女房が仕えている。乳母や大人の實務を取り仕切っている女性達と、どちらかと言えば姫様のお話相手を要求される若い少女達。その中でも最も姫様に近いのは、乳母の娘の、姫様と乳姉妹である「やすらぎ」だ。姉妹同然に育っているので、彼女が姫様の事を一番よく知っている。姫様のこれまでのいきさつを教えてくれたのもやすらぎだ。

本来なら、身分いやしく、知識も才も、優れているとは言い難い

私なのに、やすらぎは

「姫様がお気に召したのなら、あなたは絶対いい人よ。都育ちではないけれど、決して頭の悪い人ではないわ。それに堂々と、のびのびとしたところがある。姫様はそういう方が好きなの。きっと私達も気が合うわ」

と、言っつて私を受け入れてくれた。

姫様と同じ年なのだから私よりも一つ下なのだが、とてもしっかりした人なのだ。

田舎者の私がそんな風に出世したのだから、当然周りにはねたむ者もいた。じゃじゃ馬でならした私はそんな事歯牙にもかけないつもりでいたが、風当たりが強くてはいい気持ちはしない。ところがそこをやすらぎが救ってくれた。

「せっかく新しい方々がいらっしやるのですから、今夜はにぎやかに過ごしたらいかがでしょう?」

やすらぎが姫様に提案した。

「それはいいわね。やすらぎの琴も聞きたいわ」

姫様も賛成して琴が用意されるが、やすらぎは琴を二つ用意した。

「花房さん。あなたも少しお引きになっつてはいかが? 合奏も華やかでいい物だから」

そう言っつて私の前に琴を押ししてくる。

私は驚いた。琴は得意中の得意だ。父が都から来た人を呼んで、私に習わせてくれていたのだ。和歌の応酬や、都人の礼義には弱い私でも、琴なら負けずに弾きこなせる。

私がやすらぎとの合奏を終える頃には、周りの見る目が変わっていた。私はあとでやすらぎに尋ねた。

「どうして私を合奏に誘ってくれたの？」

「手を見たのよ。あなたの手には琴を弾く時のタコが出来ていたのよ。よっぽどたくさん練習されたのね。これなら絶対に素晴らしい音を聞かせてもらえると思ったの」

そう答えて、姫様と視線を合わせてにっこりと笑った。どうやら姫様とは何でもピン！とくる仲で、姫様も承知していたらしい。

権門の家のお姫様ともなると、こんな召使の人間関係にまで心配りが出来るのか。私は感心してしまった。

後に、これはこの二人の独特の特性で、どこのお屋敷に上がっても同じとは限らないと知っただけだ。

だから本当のところ、私も和歌や、詩を吟ずるのは苦手で、康行に言った言葉はまるで当て外れなのだけれど、同じ田舎者の私としてはこの方法が康行を手っ取り早く遣り込める事が出来るので、つい、「歌の一つも詠めない」と言ってしまうのだ。

それに父が私を都に出したのは、当然、都人とのつながりを意識している。

私が都の身分が上の男とつながりを持てば、それが一番だし、そうでなくても私を経由して都人たちとの人間関係を父は持つことが出来るだろう。万が一にも、貴人のお手つきにでもなれば万々歳

だ。さすがにそれは無いだろうけど。

だから、同郷で、身分が同じで、経済的には私よりも低いはずの康行なんか私がかかわったとなれば、父はがっかりするはずだ。だから私は康行には辛辣になるのだ。

警護

中納言家では婚礼の仕度が着々と進められている。今後は大納言家の若君が、毎夜通われる事になるので、屋敷の中を増築し、そこを御新婚のご夫婦の寢所にする予定である。

若君は去年の春の除目で、少将から中将に御出世されたばかりだが、あの大納言のご長男、宮廷内での評判もいいとのことなので、今年の春には早くも大將になられた。つまりは出世街道まっしぐら。勢いのついた若い上達部、貴公子という訳だ。

そういう婿君を通わせるのはその家にとっても大変な名誉で、人々の関心も集まるし、家族、親せき一同の出世や立場にも大いにかかわる。そのため婿君へのもてなしは、それはそれは心も贅も尽くしきられたものでなければならぬ。屋敷の中はてんでこ舞いだ。

大工や職人の出入りも激しく、庭先を見知らぬ人の姿が通り過ぎたりしている。今の姫様の部屋の方や、中納言様の北の方の寢所は静かなたたずまいを保っているが、ちょっと用があつて渡廊と呼ばれる、館と館をつなぐ橋状の専用通路を渡っていくと、沢山の人がいてびっくりしたりする。

これは遠い唐土の国や、もっと遠くにある国でも同じだそうだが、貴族の方々は御家族とはいえ同じ屋根の下で暮らすという事が無いらしい。大きな邸の敷地の中に、それぞれの館があり、それぞれに人が雇われ、設備を整えて暮らしている。

私は物持ちの父が贅をこらした邸に暮らしてはいたが、父や義母

と部屋は違えども同じ屋根の下で暮らしていた。

家が違つのは、下男や下女の者たちで、あとは父が通つ先の女人達ぐらいだろうか？

「同じ屋根の下で、家族で毎日ともに食事が出来る。これは貴人には無い楽しさだ」と、父は言っていた。

初めのうちは、姫様のご家族が、まず歌や手紙で御訪問の旨を伝えてきて、お返事の歌を送り、先駆けの者が来訪を伝えてから、ご本人が渡廊を渡ってお出ましになるのを私は物珍しげに見いつてしまった。

物語や本で知識としては知ってはいたが、その段取りや所作を見たのは初めてで、私も憶える必要があつた。

私のお仕える姫君様はまだ御母上である北の方様のお部屋の近くに住んでいられるけれども、増築先が整えば、そちらに移つていただく手筈になっている。だから私達も引越しの仕度に大わらわだ。

婿君とそこご家来のご衣裳の仕度を整えるのもこちらの役目、日が傾いてくると、油に火をともして縫い物に追われる。お針子の下女もいるにはいるが、それでも間に合わないのだ。

そんな忙しい中、私は姫君様の庭先に数人の侍がいる事に気がついていた。その中に康行もいる。

「なんで大納言家の侍達がここにいるの？」

私は康行に尋ねた。

「のんきな奴だな。こんな大きな邸にこれだけ大勢の人間が出入りしているんだ。いつ、何が起こるか分からないじゃないか。中納言家の侍だけじゃ足りないだろうと、俺達も大納言様に言われて助っ人に来ているのさ。お前なんかは知らないだろうが都つてのは物騒な所なんだ。盗人に強盗、人さらいに人買い。特に女子供は狙われやすいんだ。たとえ権門の家の女房でもな」

「まさか。あんた私を怖がらせようって思ってるんでしょ？」

私は秘かに、康行は長者の娘である私を出世のために狙っているんじゃないかと疑っている。郷里に帰れば田畑を耕して暮らしているであろう彼が、私に対して少々なれなれしいのが引掛つているのだ。

「本当にお前さんは世間知らずだな。いいか、都じゃ女はいい金になるんだ。まず、その着物だ、上質の絹の袷から、肌触りのいい綿の下着まで、幾重にも重ねたその着物だけで、貧乏人は自分、面白おかしく暮らせるんだ。それに髪の毛だ。その長い髪はいい、かもじ（つけ毛）の材料になる。髪は女の命だから、買い手は引く手あまただ。そして本人は淀の遊び女の元締めに売られて、春を売ることになるんだろう。その時も出自が良ければいいほど金になるのさ。姫君だつて今時は危ないんだ。へたすりゃかえって狙われる」

そう言えば、女房達の間でも噂になった話がある。さる権門の家の姫君が、家人に裏切られて夜中にさらわれ、そのまま行方知れずになっているが、東の国よりも北の地の遊び女に、姫君にそっくりな女がいたんだとか。

「特に、ここ最近は何騒な事になっている。まして今度のご婚礼は世間の注目の的。何かあったら、大納言様も中納言様も面目は丸つぶれだ。他にも男の社会には色々あるらしいが、俺もそこは噂しか知らない。何にしても俺達はお前さんの姫君をしつかり守らなければならぬんだ」

そういわれると邸の中のにぎわいも、何か落ち着きのない騒々しい物に聞こえてくる。

「嫌だわ。せつかくのお祝い事なのに」

「そう思うのなら、お前さんも姫君から離れないでいてほしいもんだ。それにあんまり動き回らない方がお前さんのためにもなるだろう」

「どつという意味？」

何か遠回りな言い方だ。

「どついう時、新参者は疑われる。ましてあんたは出自がいい方じゃない。金をつかまされて何かしでかすんじゃないかと、疑っている人間もいる筈だ」

「私がそんなことする訳ないじゃないの！」

思わず声を荒げてしまう。

「そういう見方をする人間も多いんだよ、都には。実際そういう事が起こっているんだからな。誰もが用心深くなっているのさ」

そこまで行くと、用心深いというよりも、疑心暗鬼という言葉の

方がしつくりくる。しつかりした紹介があつて、身元を調べつくした召使まで、信用できない世界なのか。

物語で姫君がさらわれると言えば、悲恋の恋人が姫を拉致するか、人妻に恋する間男が、思いあまつて夫人を連れ去るとか。そう言つた美しい世界は、現実にはあり得ない物らしい。

「まさかとは思つけど、あんた達は大丈夫なんでしょうね？」
そう聞いて白状する悪党はいないのだが

「そうそう、そのくらい用心深い方がいい。お前さんは姫君から離れるな。なんだかんだ言つたつて、姫君のいらつしやる所が一番安全だ」

真剣に話していたかと思うと、からかいのそぶりが見える。どこまで気を許せるのか分からない。

「分かつたわ。でも、あまり姫様の近くに姿を見せないでね。ご結婚前の落ち着かない時なんだから、少しでもくつろがれる時間を持つていただきたいの」

本当にそう思っていた。例の琴の一件から、私は姫様への肩入れする気持ちが強くなっていた。

「そこは俺達も若君に言い含められているよ。うちの若君もなかなか面白い人なんでね」

そう言つて康行は仲間の元へ戻ろうとしたが、思い出したように振りかえると

「あの櫛は気に入つたか？」と、聞いてきた。

「何のこと？」

私はとぼけた。

「……まあ、いいか」

そう言つて今度こそ康行は背を向けて歩いて行つた。

それにしても、康行という男はどういう男なのだろう？ 私はちよつと気になつた。

たかが侍。若君付きの従者と言う訳でもないのに、従者や使いの方が来る時にはいつも康行が警護についている。大納言家ともなれば、飼っている侍の数は相当なものだろう。その中でも高貴な方々に近い所にいつもいるような気がする。下男と変わらぬ立場にありながら、それほど信頼されているのだろうか？

その日の夕方に私は姫様にお声をかけられた。

「私の三日夜の宴の席で、あなたも琴を弾いてもらいたいので」

私は仰天した。そんな大切な席の演奏を新参者の私が勤めたりしてよいのだろうか？

ご結婚は三日の時間が必要だ。まずは初夜。婿君が姫君のお部屋を訪れて、お二人が初めて顔を合わせる晩だ。そして翌日も婿君はお部屋に通われて、いわば相性を確かめる。

そして三日目の夜に婿君のお披露目として盛大な宴が催されるの

だ。その後お二人で正式なご結婚をされたあかしとして、三日夜餅と呼ばれる姫君側で用意したおもちを召しあがっていただく。

この時三日間男君が通わなければ結婚は成立せず、女君は愛人という事になってしまふ。だから形式的とはいえ、三日目の夜の宴はとても重要なものなのだ。

この日の客人達は両家の親族は勿論、中納言家の面子をかけたそうそうたる顔触れになることだろう。演奏に携わる方々も、当代一流の演奏家たちが集められるはず。その中で私に琴を弾けと？

「そんなに緊張しないで頂戴。もちろんやすらぎにも弾かせるわ。この間の合奏のような演奏で私の婚礼を是非、飾って欲しいのよ。あなた達の演奏はどんな名演奏よりも私には価値があるの」

そう、言っていただけるのは本当にありがたい、とても名誉なことではあるけれども、じゃじゃ馬の私も、これには緊張する。あまりの事に背筋にひんやりと汗をかいてしまふ。

どのような演奏家がいらっしやるのかとうかがうと、宮中で大切な儀式の時に帝の前で演奏なさっている有名な方の名前がポンポン出て来る。聞かなきゃよかった。

「私はあなた達が心をこめて演奏してくれれば満足よ。でも、急こんなことを言われても緊張するなという方が無理でしょう。あなたはまだ、この邸にも慣れていないとは言えないのだし。練習する時間をあげましょう。花房はしばらく縫い物はしなくていいわ。夜の参上も控えてよろしい。心が落ち着くまで練習に励みなさい」

励みなさい、と、言われても。

しかしここまで言われると断ることもできない。私ひとりならともかく、やすらぎも弾くというのだから逃げ場が無い。

仕方なく、私はしばらくの間、琴の練習に明け暮れて過ごすことにした。

このことを叔母を通じて父に知らせると、父は家の誉れと大喜びで、新しい琴と弦を用意してくれた。使い慣れない物では心もとないのだが、せつかくの心づかいなので、練習で慣れる事にする。

衣装も抜かりなく用意できそうだ。康行ではないが、女房は正装にお金がかかる。格の高い方々は、上質で軽く、暖かい品の良い衣装に身を包むが、私達は失礼のないように、十二の衣を身にまとう。質はともかく、きちんとした光沢のある絹を色とりどりに染め上げて、宴の花としての振る舞いが求められる。見ようによってはひと財産を抱えているような物なのだろう。

演奏するには邪魔なのが本音だが。

上達部（かんだちめ）

それから私は、每晚琴の練習に励んだ。もしも失敗しようものなら、自分の恥は勿論、家族や、この中納言家の人々にまで恥をかかせてしまいかねない。

私は父親が下司（庶民）の娘という事で、陰ではいろいろ言われているはず。そんな私が公の大切な席で失敗などしようものなら、中納言家に泥を塗るようなものだろう。

皆が忙しげにしている中での練習なので、私は遠慮をして、局と呼ばれる私達女房の宿泊場所の前にある縁に出て、一心不乱に琴を弾き続けていた。康行の話を聞いてしまった後なので、少し不安ではあったが落ち着いて弾ける場所が思いつかなかったのだから仕方がない。だから人の気配には全く気付かずに行った。

ふと、品のいい匂いがした。焚き締められた香のにおいだ。

女物の香ではない。中納言様の香でも、その従者の匂いでもない。だが明らかに上質な、貴人が使うであろう香りがする。しかしここは姫君の部屋の近く。いくら寝所からは遠いとはいえ、男性の貴人が案内も乞わずに入ってきてよい場所ではないはずだ。私は一気に緊張した。

こういうことは全くない訳ではない。姫君の元に男君が通う時は、従者や女房、あるいは従者の知り人の上達部にとっても、逢引の機会になっている。昼間、手紙で連絡を取り合って、夜、人気のない場所でこっそり逢瀬を重ねるのは、恋人同士にとっては常識だ。だが、この香はあまりに上品すぎる。それに女人の気配も感じないのだ。

「良い、音ですね。もうしばらくお聞かせいただきたかったな」

そう言つて、暗闇の中から一人の上達部が現れた。すつきりとした顔立ちの、十七、八の青年だ。私は慌てて扇を広げて顔を隠した。いや、隠そうとした。

女が貴人に顔を見せるのははしたないこと。不用意に縁に出たりせず、御簾の中から顔を出さず、いざという時は扇を開いて顔を隠すのがたしなみ。そんな事わかつちやいるけど、不慣れなしぐさに私はうろたえ、うっかり扇を落としてしまう。上達部はクツクと笑いながら私に扇を拾ってくれた。

私はあらためて扇を広げ直し、すでにバツチリみられてしまったであろう顔を隠し直した。顔を見せるということは、裸を見せてもかまいませんと、宣言したと同じこと。大失態だ。自分が一気に安っぽくなつた気がする。

「どなたかとお約束があるのでしょうか？ あいにくこちらには誰もいませんけど」

精いっぱい気取つた声を出す。とにかく落ち着かなくては

「約束事があった訳ではないのですよ。従者や下男、侍達の取り繕わぬ姿を垣間見ようかと思ひましてね。するとこちらから美しい琴の音が聞こえたもので」

「琴は音を楽しむもので、演奏者の姿をご覧になるものではありませんね」

私はわざと相手を非礼だとたしなめた。私の方の失態ではあるけれど、こっちは女。こういう時に身分がどうのと言っていたら、舐められてしまいそうだ。

すると上達部はプーっと吹き出してしまった。そしてとうとう本格的に笑い出す。

「武蔵の国のじゃじゃ馬姫から、そのような言葉が聞けるとは思いませんでした」

「私を御存じなのですか？」

私はビツクリした。実は都に来てから若い公達（公家の若者）をこんなに間近に見たのは初めてのことなのだ。何故私を知っているのだろうか？

「侍所の康行から聞きました。武蔵のじゃじゃ馬姫は琴の名手で、今は局で毎晩琴を弾いていると」

また康行！　なぜ、身分の低いあいつが、この方とそんな話をしているのよ！

「ああ、気になさらないでください。康行は私にとって特別なのですよ」

「特別？」

「私は馬が大好きでね。特に流鏑馬の馬にはことさら凝っているの

ですよ。康行は良い馬を育てる名人なんです。彼はもう、何度も都に来ていて、そのたびによい馬を用意してくれる。ただの侍として飼うにはもったいない男です。身分から従者にする訳にはいかないが、大納言家でも、彼のことは一目置いて、信頼しているのです。初めて大納言家に来た時も、私の可愛がっていた馬が生きるか死ぬかの瀬戸際で、康行の適切な治療と、懸命の介護のおかげで命拾いをしたんです。それにお互いに馬好きですから私は彼と気が合うんですよ」

「康行と気が合うんですか？」

立派な公達が、康行なんかと気が合うのか。荒々しげな武蔵の侍と。

「あなたは誤解している。康行の刀の腕は決して悪くはないが、あれはそんなに荒ぶった男ではありませんよ。一頭の馬のために身を尽くして世話の出来る優しい男です。白状すると、そんな康行が気に入りの武蔵のじゃじゃ馬姫とはどんな女人なのか、確かめてみたくてこっそり垣間見に来てみたのです」

最初から私が目的だったってどういうの？ いかにも貴公子と言った風情の方が、なんとまあ。

「あなたは大納言家の方なのですか？」

私は聞かすにはいられなかった。

「ゆかりのものですよ。こちらの姫君はもうすぐ大将とご結婚されますね。姫君はどのようなお方ですか？」

「美しい、というよりは愛らしいお姫様です。御心も優しくして決

して声を荒げたりなどなさらぬ、私のような、取るに足りない者にまでとてもよくして下さいませ」

「あなたが姫君のお気に入りだということは聞いていますよ。あなたを見れば姫君の人柄も分かるようだ。武蔵の国には素朴でよい人柄の人間が多いのでしようね。よい国なのでしよう」

私は気を良くした。郷里を褒められて悪い気はしないものだ。

「大将も、康行がお気に入りですよ。あなたの姫君とも相性が良いことでしょう。この縁組はきつと良い縁組になる。社会的な事だけではなく、姫君のお幸せのためにもね」

そう言つて上達部は立ち去ろうとする。

「あの、あなたは……」

「私がここに来たのは誰にも内緒ですよ。私のことならすぐに分かるでしょう。では、宴の琴の音を楽しみにしています」

そして上達部は去つて行つてしまわれた。私は呆然とするばかりだった。

「内緒ですよ」とは言われたが、私はこの一件を内緒にしておくつもりはなかった。あまりにも危険すぎる。

私が世間知らずでも、深窓の姫君のお部屋近くに、高貴な身分に見えたといえ若い男がうろつろつていていいはずがないことくらいは分かっている。

昨日の様子や話しぶりから見ると、暇を持て余した大将様のお知り合いの方が、康行から何かしら私の話を面白おかしく聞かされていたずら心を起こして私をからかいに来られたのだろう。

ただ、ここはご婚礼前の姫君の住まうところ。しかもいつも以上に厳重な警備が敷かれている中での出来事である。どうやって忍んでこられたのかは分からないが、放っておくわけにもいかない。

それに若君の事を「大将」と、軽く呼んでいらした。少なくとも従者や、乳兄弟ではない。もっと上の方だ。

身分の高い方は、実の親子でさえも簡単に訪ね歩くことはない。同じ邸のうちでさえ手紙のやり取りをする。

昨日の公達はこう言っちゃなんだけど、ちょっと軽々しい方なんじゃないかしら？

そういう方が何か間違いでも起こせば、大変な事にもなりかねない。でも、いきなり姫君に言うのもちょっとなあ。

康行の事に随分詳しくそうだったし、ひよっとすると康行があの人達にそそのかされて庭先に通したのかもしれない。

私に気をつけるように言っておきながら、油断も隙もありやしな

い。
「そんな事があったの？　なんだか信じられないわ」

私と局で同室になっっている桜子は、目を丸くしてひっそりと声を立てた。

「私は康行が手引きしたんじゃないかと思っっているんだけど」

「そうかもしれないわね。警備にあたっては本人でもない、今の邸の守りをかいくぐるのは難しそうだわ。ねえ、これはそれとなく姫君様に伝えておいた方がいいわよ」

桜子は珍しく人のいい顔を曇らせていう。

桜子は私と女房仲間で二つ年上。越後の国の受領（国司）の娘で、越後育ちだ。とても色が白い。

私に来る前は彼女も田舎受領の娘という事で、肩身の狭い思いをしていたらしいが、人のよい、おとなしい人柄の優しい娘だ。同室になってみると、意外に明るいところもある人だと分かった。肩の凝らない人なのだ。

彼女は私に同情的で、自分と似たような立場の私をかばいたくなるようだ。最も私の身分では本来彼女の下に召し使われてもおかしくないのだけれど。

「でも、警護の侍が手引きしたかもしれないなんて、姫様を怖がらせるだけなんじゃないかしら？」

私はためらう。

「康行の事を心配しているのね？　そこまではつきり言う必要はないわ。約束した女房の誰かと落ち合えなかつたらしい公達が、庭先をさまよっていたとでもいい繕っておけばいいのよ」

桜子はこういうことにも物慣れていて、すぐに知恵を授けてくれる。ちよっとだけ康行が心配でもあった私は、その知恵に乗って姫様にご報告した。

その日の昼間、その康行が私に声をかけて来た。

「お前、昨夜、上達部と話をしたんだって？」
はつきりとご機嫌斜めな顔が浮かぶ。

「私だって姫様付きの女房だもの。そういうことだってあるわ」
私はつん、としたまま答える。

「あんたの事に随分詳しい方だったわ。本当はあんたがあの方を忍びこませたんじゃないの？」

「俺がそんなことするもんか。この間注意したばかりだったのに、顔まで見せたそうじゃないか」

私は真っ赤になった。そんな事まで聞いているのか。

「偶然見られちゃっただけよ。だいたいあの方だって軽々しいわ。ここは大将様のご結婚相手の住まわれている場所なんだから。一体どういう方なのよ？ あんた、知っているんでしょ？」
思わずまくしたてる。

「そんなこと教えられない。まったくなんてじゃじゃ馬だ。琴ぐらい御簾の奥で弾いていられないのか？ 夜に貴人の前で顔を見せればどういうことになるか知らない訳じゃないだろう」

康行も言い返してきた。

「あら、それならそれで結構よ。私が女の身で出世の糸口をつかむかもしれないじゃないの。そうなれば誰も私を見下せなくなるし、お父様の立場もずっと良くなるってものよ」

「お前、本気で言ってるのか？ お前の身分じゃ殆んど間違いなく愛人扱いだぞ。暮らしに困った親無しの娘ならいざ知らず、わずかばかりの地位を上げるために本妻の方々に一生頭を下げ続ける人生を送って、何が出世なもんか。そういう女は表はともかく、裏では男達に見下げられているんだぞ。よく考える」

考えてるわよ。別にそれほど本気で言った訳じゃない。康行が面と向かって「顔を見せた」なんて言うから、引つ込みがつかなくなつたんじゃないの。どうして東男って、繊細さの欠片もないんだらう？

「少なくともあんたみたいな侍なんかの相手をするよりはよっぽどましだわ。それに私がそんなに簡単に男君を近づけると思ってるの？ 馬鹿にしないでよ」

私は心とは裏腹な事を言っていた。あの時は顔を見られてしまった事に動揺した上、初めて若い公達を前にして、すっかり普通ではなくなっていた。私は身分が低すぎるから、本気でかかられれば誰にも助けてはもらえないだろう。向こうもあまりみっともない真似はしないだろうけれど、経験が無いので本当のところは分からない。

正直、今頃になって冷や汗の出るような思いをしている。

「じゃじゃ馬のお前なら大丈夫か。思ったよりは冷静だったんだな」

全然冷静ではなかったのだけど、私にだって意地がある。ここは誤解しておいてもらいたい。

「今日はうちの若君がこちらを訪ねにくるぞ」

「え？」

「中納言様にお話があるらしい。姫君のところへもご挨拶があるだろう。それですべて分かるぞ」

そう言うと、康行は私の返事も聞かずに不機嫌そうに去って行ってしまった

身代わり

その夜、中納言家はわかにはざわめいていた。大納言家の若君、近衛の大将がおこしになっているのだ。

只今中納言様とご歓談中で、後ほどこちらへも御挨拶に来るとい
う。

御挨拶と言つても、姫君と大将様は顔を合わせることはできない。奥に引きこもられた御姿も見えないし、もちろん姫君の御声をお聞かせするわけにもいかない。事実上、周りで働く私達との顔合わせのようなものである。

果して姫君様のお相手はどのような貴公子なのだろうかと、私達はワクワクしながら待っていた。

姫君は部屋の一番奥の御簾の中、さらに几帳を立てたその奥に脇息に持たれていらつしやる。

そのそばには乳母の君と上？と呼ばれる古参の女房が控えている。手前にはやすらぎ達若い女房。その中に私もいて、御簾のうちから出てきては、畳や敷物の用意をする。客人のお世話をするのに顔を隠す訳にはいかないので、皆、かしこまる意味も兼ねて頭を低く垂れている。

知らせを受けてしばらくすると、衣擦れの音とともに大将様がやってきた。私は一層深く頭を下げる。

「春とは言え、いまだ梅も咲き初めぬような冷やかな夜に、わざわざ

ざ足をお運びくださり、ありがとうございます」

姫君の御言葉を声が良くて同じ年ごろのやすらぎが、大将様にお伝えする。

「本日は中納言殿にご相談があつてお伺いしたのですが、こちらに
も少し御挨拶をと思ひまして」

大将様の御声を聞いて、わたしは「え？」と、戸惑つた。聞き覚えのある声だ。

下女が運んでくれた酒と肴を御前にお出しするのに、私は思い切つて大将様のお顔を見た。

そこに座つておられたのは、昨夜、私をからかわれていた、あの上達部だつた。私は啞然とした。

どおりで「大将」と、軽々しく呼んでいらした訳だわ。だつて当のご本人だつたんだから。

警備の間をすり抜けられたのも至極当然。姫様の部屋周りの警備に侍を用意したのは大納言家。おそらく大将様ご本人だ。この警護に誰よりも詳しい。皆の前では私も大将様も知らんぷりをしていたけれど、おそらく大将様の心の中では昨夜のように噴出していたに違いない。

なんてばつが悪い。

こんなこと、誰にも言えやしない。姫様のご結婚相手に、夜、

人気がない所で、顔を見られてしまったんだから。

大将様がお帰りになられた後、皆がかしましく大将様をほめたたえる中で、私はつい、黙りがちになってしまった。

姫様ややすらぎが心配するのは分かっていたけど、私の中で大将様は「変な公達」から「とんでもない公達」に格上げされてしまっていたので、とても口を開く気にはなれなかったのだ。

「どうしたの？具合が悪いのなら下がって休んでいいのよ」
そう姫様に言われると、申しわけなくなるんだけど。

そこへ今度は中納言様のお使者がいらっしやって、私とやすらぎに話があるから参上するようにと言われる。

乳母の君や、上？の方々を差し置いて、私達に話しなんて。昨日から異常事態のてんこ盛りだわ。

中納言様の前に参上すると、中納言様は北の方とともに深刻な趣でいらっしやった。

「実は今日、大将殿がうちに来たのには訳がある。このままでは一の姫の身に危険が及びそうなのだ」

私とやすらぎは顔を見合わせた。どういつことだろう？

「今上の兄帝で、前の帝だった方を知っているな？」

前の帝はお小さい頃から御気性が荒く、帝の地位につかれてからも、中納言様とのそりが合ってはいなかった。

そのため何かと政務上の衝突も多く、国の人心も真つ二つに割れてしまった。

そこで中納言様は一計を案じた。その頃、前の帝には大変ご寵愛が深い女御様がおられたので、その方がご病気になった際に、病氣平癒の祈願に大変効果があるという、ある僧侶を宮中に招いて、日々、祈祷を続けさせた。

その僧侶は日ごろから国の政策が二つに割れている事に心を痛めていて、女御様のご心配のあまり気の弱くなっている前の帝に、連日のように御国譲りをそそのか……いや提案していたという。

その甲斐あってか、前帝は弟宮にその地位を譲られた。そして女御様も回復したかのように思われた。

ところが女御様は翌年にあっけなく亡くなってしまった。

当然中納言様は前帝に恨まれた。このような形で帝の地位を追い落とされた前の帝に同情が集まり、中納言様の信用は落ちてしまつたかに見えた。

それを追って今度は大納言様の力が大きくなっていった。世の流れは大納言様と今の帝へと移っていく。

しかし中納言様もしたたかだった。大納言様が勢力を伸ばすのに、中納言様も自ら全精力をかけて協力していた。大納言様はとうとう

都の勢力のほとんどを支配するにいたった。自らの娘を後に据え、東宮を産ませ、盤石の地位を築いたのだ。献身的に協力していた中納言様もそれに次ぐ力をつけた。

一度、信用を落としているので、いまだに政敵も多く、一の姫様の御入内は叶わなかったものの、こうして大納言家との結婚にこぎつけて、両家の力と依存しあう関係はますます深まっている。これは国中の人間が知っていることだ。だから、前の帝、と言えば、この邸では中納言家を恨む恐ろしい方、というのが普通の見方になっている。

「前の帝が嵯峨野の別邸に、怪しい者達を集めていると聞いた。色々と探ってみるとどうやらこの結婚を阻むために姫を拉致しようとたくらんでいるらしい」

「これ程警備が厳しい中をですか？」
にわかには信じがたい。

「花房、先ほど大将殿に聞いたのだが、昨夜、お前は大将殿と会ったそうだな」

私は思わず青くなった。男君が女房を相手にするのは許されているとはいえ、（むしろ、邸に引き留める理由は多い方がよいとはいえ）今は結婚前だ。間が悪い。

「も、申しわけございません！」

これでは暇を出されても仕方がない。なにもなかったことをどう証明しよう？

「お前を責めるために呼んだのではない。詳しい話は大将殿から聞いている。実はお前に頼みがあるのだ」

「私に、ですか？」

「お前に姫と入れ替わってもらいたい」

一瞬、私は息が出来なくなった。いったい何を言い出すんだろう？

「さつき、お前に聞いたとおり、大将殿は昨夜、姫の近くに忍び込む事が出来た。つまり、内部に詳しい者が裏切れば、姫をさらうことは、決して不可能ではないということだ。昨夜、大将殿はそれを試されたのだ。今、この屋敷には大勢の人間が出入りをしている。このままでは危険だ。そこで姫を別の場所に移そうと思うのだが、姫がいないことを怪しまれては困る。そこでお前に姫の身代わりを務めてほしいのだ」

身代わり？ この私が？ よりによって姫君様になり変われというのか？

「そんな事が出来るのでしょうか？」

私はすぐには頭が回らなかった。隣でやすらぎも啞然としている。

「姫の新しい寢所には、明日にも移る事が出来よう。少し早まったが明日、さっそく引っ越しをする。その時にお前と姫に入れ代ってもらおう。このことを知っているのは私達夫婦と乳母、姫のごく近い女房達だけだ。上？の者達と乳母には姫について行ってもらう。お前には新しい寢所で、やすらぎ達と一の姫として三日夜を迎えて

もらう。その夜の宴の時にまた入れ替わってもらう手筈にしようと思つ。礼はどんなことでもする。これはぜひ、引き受けてもらいたい」

「ここでやすらぎが口をはさんだ。

「待つて下さい。花房さんの身の安全は守られるのですか？」

「警備は今まで以上に厳しくする。もちろん花房は寢所の奥から動いてはならない。出来うる限り家人にも姿を見せずにおいてほしい。やすらぎ、お前は姫の事に一番詳しい。いかにも姫がそこにいるようにふるまつてほしい」

姫様は寢所の奥で結婚を待つ身。確かに黙っていればやすらぎの演技次第でごまかすことは可能だろう。しかし、私としては問題がもう一つある。

「三日夜の宴までの身代わりとおっしゃいましたが、その前の二日間に大将様は御寢所に通われる訳ですよ」

それがどういうことを意味するのかは、知っていたの依頼なのだろうが。

「結婚には三日間、通うのがしきたり。当然大将殿も通われるが、事情はすべて知っておられる。大将殿はお前の顔を見知っているのだし、勘違いなさることはない。大将殿なら決してお前を悪いようにはなさらないだろう」

やっぱり。中納言様は私をかなり軽んじてらっしゃる。命は守っ

て下さるだろうが、あとは大将様の御心次第か。身分のいやしい私
が顔を見られている以上文句は言えないという訳だ。

私だって、ここまでされればこんなお話はお断りしたい。身分は
低くても低いなりに、女人としての自尊心はある。

でも、ここで私が断つても、他にこの役を引き受ける女房がいると
は思えない。こんなことまでするということは、本当に姫様の身に
危険があるということなのだろう。

やすらぎが心配そうな視線を私に向けてくれている。姫様がいな
ければ、私はここにすることは無かった。

「分かりました。お引き受けいたします」

「あなたは昨夜、公達を見かけたのではなく、大将様にお会いにな
ったのね」

姫様の部屋に戻る道々、やすらぎは私に問いかけて来た。

「やすらぎ、私、大将様とは」

「分かってるわよ。なにもないんでしょう？ あなたは琴を弾いて
いて、引っ込み損ねただけ。それに女の部屋の前に忍び込んでこら
れたのは大将様のほう。あなたは何も悪くないわ」

「ありがとう。信じてくれて」

中納言様に軽んじられたあとだけに、やすらぎの気持ちが身にし
みる。

「あなたのような人が姫様を裏切るような真似が出来る訳が無いわ。夜がれ（夫が通わなくなる）の心配がある夫婦ならともかく、これからご結婚なさるうという方に、あなたの方から声をかける訳が無いじゃないの。こういう時は身分を気にしてはだめよ。あなたは堂々としている時が一番輝いているんだから」

こんな風にやすらぎに励まされると、郷里に吹く、一陣の風を思い出す。向かい風に向かって何かに立ち向かっていく時の、湧きあがるような心を取り戻すことが出来た。

「でも、本当に良かったの？　こんなことを引き受けてしまってやすらぎは心配してくれる。」

「ええ、大丈夫よ。両家とも面子をかけて私を守ってくれるはずだし、大将様も、昨夜お話した限りでは少し軽々しいところはあっても、いい加減な方とも思えなかったし。私がしっかりしてさえいれば、事はうまく運ぶはずよ」

私は取り戻した自信を支えに、心がすっと立ち上がったように感じていた。

侵入者

その夜のうちに私と姫様の入れ代わり計画は準備を整える事が出来た。

勿論、姫様は私を心配して反対なさってくれたけれども、私はもう、腹を固めてしまっていた。

こんなこと、叔母や父に言う訳にはいかないので、私は宿下がり（休暇）をいただいて、女房仲間と都でも有名な清水の観音様におこもり（寺に数日間の宿泊をして祈願を立てること）に行くという事にしておいた。これなら私と連絡が取れなくなっても心配されることはない。

万が一のことを考えて、私達は姫様がどちらに身を隠されるのかは聞かないことにした。余計なことは知らない方が安全かもしれないし、最悪、私達の身に何かがあっても姫様の身だけは守られることだろう。

翌朝には新しい寢所に姫様は入られ、その一番奥の、塗籠と呼ばれる四方をふすまに囲まれた、外から全く見えない小部屋の中で、私と姫様は衣装を取り替えて入れ代わった。

姫様は乳母の君と上？達に守られながら、そっと牛車に乗り、いずこかへと姿を消される。

私はしばらくの間、やすらぎと寢所の奥で、声も立てずにひっそりと暮らさなければならぬ。

その時間を利用して、やすらぎは姫様のしぐさや癖、お好み、さらにはお小さい頃の思い出話などを教えてくれた。

やすらぎの思い出話は、姫様の今の性格が作られた理由を知る手がかりになった。

帝が変わられ、中納言様に非難が集中していた頃、邸の外の噂話などを幼い姫様にお聞かせしないようにと、誰もが相当気を使っていたため、姫様は自分の周りの人々が冷たく感じられたらしい。腫れ物に触るような扱いに日々鬱憤も溜まっていく。そのうちにお顔の色も悪くなり、食欲まで無くされて、もののけでもついた様になってしまわれた。御心配された中納言様は、姫様を吉野のお寺へと連れて行かれた。御祈祷を受けるのは勿論のこと、ちょうど桜の時期でもあったので、お気が晴れるだろうとの御配慮でもあった。

その行きがけにお寺に向かう親子の姿があったのだが、幼い子供が足をくじいてしまったらしく、親は懸命に子供の足に濡らした布を当てている。それを牛車の中から見ただけ姫様は子供を哀れに思い、従者に腫れを引かせる薬を親子に分け与えるように言った。薬を受け取った親は大変感激し、

「このようにお優しいお姫様の御父上である中納言様が悪い方であるはずはない。世間のうわさなど当てにはならない。素晴らしい方々だ。もったいない、もったいない」

そう言って、いつまでも頭を地面にこすりつけていた。そうしてたどり着いたお寺で、姫様は御仏の慈愛について説法を聞くうちに、父上の評判や、周りの人間の接し方などに振り回されるよりも、自らの心を穏やかにする事が、巡り巡って、家の幸せにつながっていくのだとお考えになるようになったのだという。

それ以来、姫様は大きなお声を立てて人を威嚇したり、叱りつけるような事のないように、優しく、穏やかに日々を過ごすことに専念されるようになったのだからか。

私などは金持ちの娘であっても、身分の低さを色々言う者は正面切って言って来るものばかりで、腫れ物に触る扱いも、あてこすりで白い目にさらされたこともない。田舎の人間は噂も嘘も真つ直ぐなものだ。

私は父に甘やかされて我がまま放題だったし、人の評判で、家の命運が決められてしまう心配もしたことが無い。しかし、高貴な方々ともなればそんな幼い頃から、人の目と家の名誉を意識して暮らし続けなければならぬのだ。それは一生逃れられない宿命だ。

生涯連れ添うかもしれない結婚のお相手さえも、選ぶ事が出来ない。すべてが決められた人生。

それならばせめて、せめて、召し使える女房達の誠意や、友情だけは本物でありたい。

恋のときめきや、自由は無くとも、穏健で穏やかな結婚生活であっていただきたい。

やすらぎの話を聞くうちに、私は本気で姫君様の健やかな幸せを祈る気持ちになってしまっていた。

その夜私は早くに床についてしまった。おとといからあまりにも

色々な事があり過ぎたし、緊張もつづいていた。なにも身体を動かしていた訳でもないのに（むしろ動けない！）心も身体もくたくたになってしまっていた。

だから綿のたつぷりと入った、真新しいふつくらとした夜具の着物を引きかぶって身体を横たえたとたん、ぐっすりと眠りこんでしまったようであった。

真夜中過ぎの頃、小さな物音に続いて冷たい隙間風を肩口に感じて私は目を覚ました。

早春の都はまだまだ寒い。田舎の寒さとは違う、ぞっとするような冷気が特有の地形から襲ってくる。だから屋敷の建物は床が高く、御格子と呼ばれる戸を閉めて冷気を防いでいるのだが、何処からか冷たい風が入りこんでいるようだ。私は着物をかぶり直そうと寝がえりをうった。

突然人の気配を感じた。声を立てようとして口をふさがれる。

賊は一人ではない。なぜなら私は二人がかりで担ぎあげられていた。一人はふさいだ手を放そうとはしない。息が苦しくなった。必死にあがくが二人掛かりではどうすることもできない。

内部に裏切り者がいるわ。

こんな時だというのに、真っ先にその事が頭に浮かんだ。私達がここに移ったその夜に、警備を一層厳しくした中で、二人もの人間が忍びこんでくるなんて、誰か内通者がいなくては不可能なことに

違いない。

息がとにかく苦しくなる。私は口をふさいでいる手に思いつきりかみついた。その手が緩み、声を上げる。

「誰か！」

助けてといい終えない内にまた口がふさがれる。いつの間にか開けられていた御格子をくぐって外へと連れ出される。風が冷たい。月もない夜なので辺りは真の闇夜だ。

もう一度かみついてやろうともがいていると、タツタと足音が聞こえて来た。

「御免！」

そう、男の叫び声が聞こえたかと思うと、別の男のうめき声が出て、私の体が自由になった。

しかしすぐに誰かに抱えられて、屋敷の方へと引き返す。縁に下るされて、その前に誰かが立ちはだかり、賊に斬りかかっていく。人の逃げ出す気配と足音がして、やがて辺りは静けさを取り戻した。

「失礼を承知で乱暴な真似を致しました。申し訳ありませんでしたが、場合が場合でしたので。お怪我は御座いませんでしたか？ 姫君」

声を聞いて私は慌てていた。そこに、騒ぎに気付いたやすらぎが火を持ってやってきた。

私達の姿に光が当たる。康行が呆然と私の顔を見ていた。

「お前は……お前は一体何をやっているんだ？」

康行にかいつまんで説明をすると、いきなり質問された。今、説明したじゃないの。

「若君の前で顔を晒して琴をひいただけでは飽き足らず、姫君になり変わって大立ち回りをする女なんて、下女でも聞いた事は無いぞ」

「失礼ね。普通の下女だったら、こんな事に巻き込まれたりはしないわよ。それに大立ち回りをしたのは康行で私じゃないわ」

「そんな話をしているんじゃない。これは女房としての役目を越えている。超え過ぎているだろう。まして三日夜の宴まで入れ代わったままでいるだなんて、いくら身分が低いとはいえあんまりだ。なぜ、断らないんだ」

「私が断れば姫様の身が危険なまま、御結婚の邪魔をされてしまうじゃないの。それではお可哀そうよ」

「お可哀そう？ お前今、自分がどんな目に会ったのか分かってるのか？ 姫君の代わりに連れ去られそうになったんだぞ。お前がニセモノだと知れたとたんに、殺されていたかもしれない。人に同情をかけている場合じゃ無いはずだ。こんなこと今すぐ断るんだ」

「それは無理よ。姫様はどちらにいらっしやるか分からないし、急に呼び戻すことも出来ないわ。ここに姫様がいらっしやらないと知

られたら、それこそ、どんなことになるか。もう、後戻りはできないの」

「自分の身をさらしてまで、姫君を守りたいと本気で思っているのか？」

あまりそんな深いところまでは考えていなかったが、康行に問いかけて、私は本気で姫様を守りたいと覚悟を決めた。

「そうよ」

私の覚悟が伝わったのか、康行は黙り込んだ。やすらぎはずっと黙ったまま、私達のやり取りを聞いていた。

「お前も都の人間になってしまっただな」
康行はさびしそうに言った。

そうよ、私はずっとそれを望んできた。ただ、それが今、思っていたほど楽しいことではなくなってしまったけれど。

「今日は俺がここから離れずに見張っていてやる。明日には増員されるはずだ。お前は安心して眠っていていい。ただし、日中は注意しろ。きつと内部に密通者がある筈だ。それも下女や下人ではなく、お前達女房の中にもいるかもしれない。十分に気をつける」

それは私も連れ去られかけた時から考えていた。私も真剣にうなずいた。

「今夜は安心して眠っていていい。ゆっくり休め」

康行は珍しく私をいたわる言葉を言って、私とやすらぎを御格子の開いた所へと連れて行ってくれた。

部屋へ戻るとやすらぎが私の手を握ってきた。

「ありがとう。命懸けで姫様を守ると言ってくれて。私もあなたと姫様を命懸けで守るわ」

やすらぎは涙ぐんでいた。やすらぎにとって姫様は生まれた時からお仕えして来た、姉妹以上の大切な方なのだろう。彼女の必死さが手から伝わってくる。

「一緒に姫様を守り切りましょうね」

私もやすらぎの手を心をこめて握り返していた。

身代わりの初夜

翌朝、姫君様の部屋に侵入者があったことは、屋敷中の話題になつてしまつていた。警備の人数は増員され、庭先にまで、侍や下人達の姿が見られるようになっていゝらしい。

私はこれを幸いに連れ去られかけた衝撃で、気分を悪くしてして寢所の奥に伏せつてゐる事にしてゐた。女房達への対応はやすらぎが一手に引き受けてくれる。夜具をかぶつて寝た振りをしながら、私は考えにふけてゐた。

屋敷内に内通者がゐる事は疑いようがない。でなければ昨日の鮮やかな手口の説明がつかない。

昨夜の時点で康行は侵入者に気付かなかつた。他の侍や下人達もそつだ。それなのに賊は姫君の寢所にやすやすと侵入してきた。これは身分の低い者が手引きをしたぐらいでは、出来ることではない。

私がゐる姫君様のお休みになる場所は、寢所の建物の中でも一層奥まつた所に用意されてゐる。縁に近い庭先の周辺の片方は女房達の宿泊する局が取り囲んでゐるし、もう一方は高い堀から林の様な木々に囲まれた奥の庭に面してゐるので、外部からはかなりの距離がある。しかも今はそのいたるところに侍達が見回つてゐるのだ。

昨夜御格子が開けられてゐたのは女房達の局の近くだつた。女人とはいへ、大勢の人が休んでゐる目の前を、まして定期的に見回りがある中を、間隙を突いて寢所の奥まで入つてきたのだ。

御格子はうちから掛金をかける仕組みになつてゐる。それが外さ

れて開けられていた。これは普通に考えて、下男、下女には入れない、寝所の姫君の部屋の内側から、女房の誰かが掛金を外し、賊を招き入れた可能性が高い。

そうなると自分の同僚である女房達が、全て疑いの対象になってしまう。やすらぎが相手にしている、普段見知った女房達の声聞きながら、裏切り者はあの人だろうか？ この人だろうか？ と考えるのは気分の良い物ではない。

当然女房達も同じように思っているらしく、寝所の中には重苦しい空気が流れている。

中には私がいれば真っ先に疑うところだったが、宿下がりしているのでは疑う事が出来ないと、やすらぎにこぼす人までいた。私がない時にはこんな風に噂をしているのかと、腹が立つやら、あきれやらである。

それを聞き咎めた桜子が私をかばってくれたりして、ああ、こんな時に人柄というのは分かるものだなあ、なんて思ったりする。

結局その日は何事も起こらず、夜も一晩中警備の侍達の気配とたいまつの明かりの絶える事のないまま夜明けを迎えた。

夜が明けるといよいよ姫君様のご結婚の日を迎えた。入れ代っている私としては、朝から緊張の真っ只中にいた。

まず、偽物だとバレないように気を使わなくてはならない。さすがに結婚当日となると、姿は見せないとはいえ様子をうかがう女房達に気取られないように姫様のしぐさや癖を真似ながら気配を漂わ

せなければならぬ。

中納言様のご挨拶は奥でじつとしたままやすらぎに任せておけばよかつた。しかし、北の方が見えられると、母子としての振る舞いに気を配らなくてはならぬ。

出来るだけの演技はしたつもりだが、御簾の向こうではどのような気配に感じられたのかヒヤヒヤものだった。姫の妹君もおこしになり、声を立てずにそつと談笑しているふりをする。二の姫とは初対面だというのに。

二の姫はおん年十二歳になる少女なので、今度の件は事情を理解できている。だから不安を隠しきることはできず、心細そうな表情をしながらも、姉の無事をしきりに案じ私にお礼を言ってくださっていた。

私はかしこまることもできずに、ただ、うなずきを繰り返すしかなかった。

そして日が落ちると大将様は約束の時間通りにお見えになられた。当然、そつと忍んでこられることになるので、この部屋の周辺は人払いが行われて、警備も人の気配も薄くなってしまう。

賊が狙うには絶好の機会だろうし、大将様がどんな心積りでおこしになるのかも分からない。さすがの私もここへきて身代わりになった事をちよつとだけ後悔してしまう。

こうなつたらせめて大将様に言いたい事だけは言わせてもらおう。

身分が低い者にも、それ相応の誇りがある事を知っていただこう。これだけ大将様の思惑どおりに振り回されたのだから、これ以上いになりになる必要はないはずだ。何が起ころうとも自分の意思だけはきちんと伝えたい。狙われた邸に通うのだからあちらも命懸けかもしれないが、こつちだつて一生がかかっているんだから。

忍びやかな人の気配がして、こつちに近付いてきた。大将様だ。私は頭を低くしてかしまる。

「これはこれは。そんなにかしまることはありませんよ。今宵、私はあなたの夫としてここに伺ったのですから」

大将様は楽しげにおっしゃるが、こつちはそれどころじゃない。

「おとといの晩、私は姫様の代わりに連れ去られそうになりました。おそらくこの屋敷の中に内通者がいると思われれます。大将様も狙われているかもしれません」

「それはあなたもですね。よく、こんな無理な事を引き受けて下さいました。まして恐ろしい目にあわれたというのに、あなたは逃げ出しもせずにきちんと身代わりの役目を勤めて下さっている。心から感謝していますよ」

「大将様のためではありません。申し訳ございませんが、私は姫君様のために今ここにいます。姫様と大将様が無事に結ばれる事を願って、この役目を引き受けているのでございます。姫様に見出していただけなければ私は下働きの下女として、この屋敷の庭先を駆け回っていたことでしょう。ひよつとしたら田舎につき返されて、成り上がり者の娘が馬鹿な夢を見た、と、笑い者になっていたかもしれない。姫様あつての私なのです。私は姫様が好き

で、このお邸が好きで、だからこそ、こんな役目を引き受けているのでございます」

大将様に顔を見られて、中納言様に見下げられて、仕方なくここにいるのではない。私は自分の意思と、姫様への感謝、もつと言えば、この邸に勤める事が出来て、色々な人達と友情を育む事が出来ている事に感謝しているからこそ、ここにいるのだという事を大将様に知って頂きたかった。それさえ知っていて頂ければ、この先世間がどう言っても自分が自分の心のうちの誇りは守られるような気がしたのだ。

大将様は私の顔を上げさせ、深くうなずいて下さった。

「あなたには、初めに私が考えていた以上に色々な難題を強いてしまったようです。初め、私が姫の身代わりを考えた時は、妹姫の二の姫や、やすらぎの事を考えました。しかし二の姫では万が一連れ去られてもすれば、今度は中納言家の人質にされてしまう。中納言殿は今、検非違使（現在の警察の様な組織）の強化に積極的で、前の帝に煙たがられている。今度の件もその流れで起こっている事なのです。やすらぎは姫の事を誰よりも思っている乳姉妹だから口外される心配が無い。だからお付きの女房として偽物の姫を守る役目に回ってもらった方がいい。そんな時に康行からあなたが夜、局の近くで琴を弾いている話を聞いたのです。あなたの人となりは康行から聞いていましたし、裕福な環境で育ったあなたは下手な貧窮した貴人の娘よりも精神的に余裕がある。いささか粗忽な所はありのようですよ」

ここで大将様はクスリと笑みを漏らされる。私が扇を落とした事を思い出したのだろう。

「このような方なら、うろたえることなく、事情を呑み込んで下さると私は思ったのです。本来なら昨日で本物の姫と入れ替わっていただくつもりだったのですが、何故か増築の進捗状況が外部に漏れ出して、前帝の動きが怪しくなってきた。仕方なくあなたには三日夜の宴までここに残っていただく事になってしまったのです」

成程。私が今日、ここにいないではなくなっただのは、突発的な事情からだっただのか。それに実際に私は襲われている。大将様のご判断は正しかったのだろう。

中納言様は私に対して軽侮の念があった。これは疑いようがない。しかし、大将様の今の様子に私を軽んじられているような気配は感じられない。

「あなたが襲われたと聞いた時は本当に申し訳ないと思いました。てつきり私はあなたが康行やあなたの父親を頼って逃げていくものと思っていましたし、それも仕方がないと思いました。しかしあなたはそうしなかった。それどころか私の妻になる人のために命を張ると言って下さったそうですね。私はどれほどあなたに感謝しているか」

大将様が頭を下げられる。

「そんな、もったいない」

私は本当に恐縮してしまう。正直なところ、この場だけ手をつけられて、御結婚後は捨て置かれるか、最悪、適当な理由をつけられて郷里に返されるかと内心ハラハラしていたのだ。

「これはあなた次第なのですが、こういうことになったのも何かの縁。もしよかつたら私の感謝の気持ちとして、私の妻になっていただけませんか？ あなたのご一族の事は一生面倒見させていただきますよ」

私は目を丸くする。ちょっと待った。話しがこういう方へ行くとは思っていなかった。

男君は何人の妻をめぐってもかまわない。もちろん主流の本妻はお一人になるが、社会的地位はどの妻も平等に与えられる。正式にお披露目のない愛人や、手近な女房に情けをかける情人とは訳が違う。妻はあくまでも妻なのだ。

だから全ての妻に同じ格式が与えられるので、他の妻の家が良くなり、どうしても足を運べなくなると離婚ということもありえる。そうなつては困るので、夫を通わせる妻の家は邸中を上げて夫をもてなし、世話をするのである。

ただ、それだけの経済力をかけて夫の世話をするのだから、夫になる人の身分や出世はそれ相応の物が求められる。身分が低く、出世の目が出ない男君は妻を一人持つのも大変だし、逆に家柄もよく出世街道まっしぐらな殿方は、各家から引く手あまたの申し出がある。

大将様はまぎれもなく後者で、都中の権門の家が狙っている方だ。それに私と大将様とでは身分に大きな開きがある。この場合、たとえ私の家が裕福だといっても、大将様が私の家から経済的援助を求めめることは無いだろう。その上で社会的、政治的援助は受ける事が

出来るのだ。

大将様は一族を一生面倒見ると言った。額面通りに受け取るのならば、たとえ夜がれる事になっても、離婚はせずに私の一族の面倒を見続けて下さるといふ事になる。女人なら一度は夢見る、大変な名誉だ。

普通なら断らない。一族の事を思うなら、断れない。女の身の大出世だ。私はぼーっとなってしまった。

大将様の感謝の念は本物だ。でなければ口が裂けても言っていない言葉じゃない。けれど。

私は大将様から視線をそらした。姫君様の調度品が目に入る。そうだ、ここは姫様の寝所なんだ。

「その感謝は姫君様に捧げて下さいませんか？ さつきも申しあげたとおり、私は姫君様のためにここにいます。自分の出世のためではありません。そのお気持ちだけで結構です」

私はあらためて頭を深く下げた。さつきは自らの矜持から出た色合いの濃い言葉だったが、今は姫様への想いが言わせた言葉だった。

「姫君には実は了解を得ている。あなたがどれほど命をかけているのか姫君は知っておられる。私は身分がらまだまだ妻が増えていくそれならば人柄の分からぬ姫よりも、あなたの様な方に感謝の気持ち伝えたい。それを姫君も理解してくれている。その上での申し出なのです。受けて下さいますか？」

勝手に話をすすめられても困る！ 私が妻になれば姫君様は私と友情を結んで下さるのが難しくなる。いや、あの姫様なら自分のお苦しみを胸におさめて、私を暖かく見守って下さるかもしれないが、私は姫様をそんな立ち場に追いやりたくない！ やすらぎにだって顔を合わせる事が出来ない！

大将様は物慣れた様子で私ににじり寄ってこられる。私の袴の裾を膝で押さえている。普段女房や女君の相手で、この手のしぐさには慣れていらっしやるのだろう。私は思わず身を引いてしまった。それを見た大将様が膝から袴を放す。その拍子に私の懐からころりと何かが落ちた。櫛だ。康行が縁に置いて行った櫛。

お文

私は姫様の御櫛を使うのが申し訳なくて、この櫛を懐に入れていたのだ。中将様はそれをじつとご覧になった。

「康行。どこに隠れている?」

大将様がどこへともなくそう、お声をかけられた。

すると塗籠の中から何と康行が現れた。なんでここにいるのだろ
う?」

「今日の私は振られたようだ。夜が明けるまで部屋を出ることはできないが、ここにいる事もはばかれる。お前はここで姫君を守っていなさい。私は塗籠で休ませてもらおう」

そう言つて大将様は少し微笑まれながら塗籠の中にこもられてしまった。

「やすらぎさんが俺を通してくれた。若君に言われていたらしい。さすがに今夜は人すくなくなってしまふから、寢所の中で賊が侵入しないか、見張っているように言われていたんだ」

康行はうつむいたままそういった。

私は顔も上げられずに「そう」とだけ言った。

「俺は御格子のそばにいる。御簾の中には入らないから、安心してくれ」

安心？ 何が安心だというの？ こんなやり取りの後で、康行に全部聞かれてしまっていて、何処をどう安心しろって言うのよ。私は何故だか泣きたい様な気持ちを抑えるだけで精いっぱいだった。

塗籠の中から時々衣擦れの音が聞こえる。大将様は起きていらっしやるようだ。康行は私に背を向けて御格子の方を見ているらしい。固まったようにピクリともしない。緊張しているのだろう。

その夜は三人三様が、まんじりともせず夜を明かした。賊が侵入した気配はないようだった。

夜が明ける頃、大将様は塗籠からお出になられて、康行に寢所から出るように促した。侍が建物の中にいたと知れたら厄介だからだ。中将様ご自身も帰り支度をなされる。康行はやすらぎに掛金を外してもらった御格子から外へと出ていった。帰り際に大将様がおっしゃった。

「あの櫛は康行からもらったものですね？」

「……はい」

康行はこの櫛を大将様にお見せして、良いものだといわれたと言っていた。大将様もすぐにお気づきになった。

「あの男は優しい男です。あなた達は真つ直ぐに目を見て話してお互いを知る事が出来るのですね。私などは女人と目を見かわせれば、そこですべてが決まってしまう。そうできなかったのは、あなたが初めてです」

公達に顔を見せて目を合わせれば、それは互いに関係を結ぶ条件の様なもの。女人は顔を隠すか、全てを受け入れるか二つに一つしか道が無い。それはどれほど不自由な事なんだろう。

「たしかに彼の身分は低いが、彼には馬を育てる才能が飛びぬけている。地元でも馬を売ってそれなりの生活が出来ているはずですよ。彼もあなたと同じように私のために身体を張って警護を務めてくれている。彼なら馬の世話だけで、十分暮らせるはずなのだが。彼もあなたと同じなのですよ」

「私と、ですか？」

「ええ、彼も五年ほど前に大納言家に初めて勤めに来ました。馬の事だけでも十分なのに、彼は気の合う私のために、懸命に使えて、性に合わぬであろう侍者となって私を守ってくれています。彼はあなたを昔の自分に重ねてしまい、放ってはおけないのですよ」

そうか。だからここでの手当てをまるきり私の櫛につき込んだり出来たんだわ。康行は決して経済的に苦しい立場ではないんだ。何度も都に訪れるのは、お金のためだけではなく大將様への友情があるんだわ。私が姫様を気に留めているように、康行は大將様を気に留めているんだ。

「正直、あなたの方が私は羨ましくなる事があります。真っ直ぐに見つめあって、真っ直ぐな言葉をかけあう。私には望めない事です」
大將様は軽くため息をおつきになった。

「後で後朝の文を差し上げますが、あなたは読んで下さるでしょうか？」

後朝の文とは、男女が契りを交わした後に贈りあう手紙の事である。本来なら新婚の朝には、当然送りあうのだが、私達はどうすればよいのだろう。勿論、姫様が書き残していかれた儀礼的な文は用意してある。表面上はこれを贈りあわない訳にはいかない。今、大将様がおっしゃっているのは、結婚を示唆された私に対してのお文の話だろう。私はこのお話に一言もお返事を差し上げていないのだ。

「返事を急ぐのはやめましょう。私もあせるつもりはない。では、今宵、またお会いしましょう」

そう言って大将様は朝霧の立ち込める中に姿を消してしまわれた。

その日、私はぼんやりとしたままため息がちに過ごしていた。やすらぎも私に声をかけてはこない。

康行や大将様が出ていく時の様子から、何か察するところがあったのだろう。私も口を開く気にはとてもなれない。

朝食もろくに取らずにいると、大将様から後朝の文が来た。開くと姫様宛のきちんとしたお文の中から、小さく折りたたまれた、もう一つの文が出て来た。私宛のお文だろう。

「藤なみのまだ咲かぬ夜ほととぎす鳴くべき時を今だ知るらむ」

万葉の古歌にかけていらっしやる、歌だった。

元の歌は「藤なみの咲きゆく見ればほととぎす鳴くべき時に近づ

きにけり」という、古くからの有名な歌だ。藤は「花房」という私の名前を現している。実際私の名前は藤にちなんでつけられている。生まれた時には満開だったそうだ。

ほととぎすは藤に寄り添って鳴くもの。遠い昔からの取り合わせで、中将様が私に言い寄る様子を現している。しかし、恋の花は昨夜咲くことは無かった。そもそも藤は夏の花。今はまだ春の初めだが、ほととぎすはいつ鳴けばよいのですか？ そんな意味あいの歌だ。

流石に手なれた読みぶり、私の名にかけ、季節をわざとずらしたお歌。筆跡も墨の濃さ、淡さ、かすれ加減まで良く整えられた美しい文字だ。全体に品格が漂っている。私などが太刀打ちできるお歌ではない。

それでもこれだけきちんとしたお歌を大将様は送って下された。昨夜の言葉はその場の勢いではないとおっしゃっているのだ。これに返事をしないのは、あまりに失礼だろう。仕方なく私も返事を書いた。

「わがやどのいけのふじなみ」

女のかな文字、しかも決して筆跡は美しくない。まして芸術的品位を添えるなんて逆立ちしたって私にはできない。

だから、せめてやわらかい文字で丁寧に、女の最低限の教養と言われる「古今集」の歌の、はじめりの部分だけを書いた。この後には藤の花が咲いた、いつかは山からほととぎすが鳴きにくるだろう。という意味が続く。あくまでも花が咲けば、という意味も込めて私はその部分をわざと書かずに表現をぼかしたのだ。歌は苦手でもそ

の程度のたしなみはある。大将様ほどの方なら、これで通じるだろう。

この文を私も大将様のように姫君の御手紙の中に小さく畳んで添える。奇妙なやり取りだ。

朝食をあまり食べなかつたので、やすらぎが「体によくはないから」と、暖かい甘蔓の湯（甘い飲み物）と柑子みかんを用意するように言ってくれた。暖かい物は心を落ち着けてくれる。

ところが柑子を口にしようとする、指先が思うように動かない。良く見るとやすらぎや他の女房も様子がおかしい。ここに来て私は甘蔓の湯に何かが混ぜられた事に気がついた。身体はすでに軽くしびれていて動かせない。どうやら隙を狙うには警護が厳しくなりすぎて、内通者が思い切って一服盛ったらしい。油断した。

白昼堂々と、こんな荒っぽい手口に出るとは思っていなかった。私は前のめりに伏せつたまま動けなくなってしまう、誰かに大きな布をかぶせられた。どうやら、袋のようだ。そのまましばらくは引きずられ、途中から担ぎあげられる。

外がだんだん騒がしくなる。どうやら下人達が出入りするところまで来たらしい。助けを呼びたいが声が出ない。身体のしびれもひどくなる一方だ。ついには外に連れ出されてしまったようで、物売りの声なども聞こえる。私はしびれる身体を必死に動かし、懐から康行の櫛を出した。

袋の隙間を探り、思い切って外に放り投げる。地面にカラリとモノの落ちた音がした。私は牛車か何かに荷物のように放りこまれ、だんだん意識が遠くなっていった。

康行。落とした櫛に気付いてくれたら、あんたを少しは見直すわ。
最後にそんな事を思った。

目が覚めるとひどく頭が痛かった。身体もまだ少ししびれているようだ。薬の影響があるのだろう。身体を起こし、回りを見回すと農作業の小屋の様な所にいる事に気がついた。都からは大分離れてしまったのだろうか？

反対側に振り向くと、そこに桜子がいた。

「気がついた？ 大丈夫？」

「大丈夫。少し頭が痛むけど。桜子さんも連れてこられたの？」

「そうみたい。気が付いたらここにいたの。ねえ、何故あなたがお屋敷にいたの？ 姫君様はどうしたの？」

そうか、桜子は事情を知らないんだっけ。

「実は中納言様に頼まれて姫様と私は入れ代っていたのよ。姫様が何処にいらっしやるのかは私も知らないの。知らなくて良かったわ。こんな事になるのなら」

私は痛む頭を押さえながら答えた。まだ少しぼんやりとしている。

「そうだったの。あの、とても申し訳なかったんだけど、これがあなたの懐から出てきていたの。私、つい読んでしまって」

桜子は大将様のお歌のお文を手にしていて。櫛を落とそうとした時に出て来てしまったのだらう。

「このお手って、もしかして大将様のものじゃないの？ あなた大将様と何かあったの？」

この状況で隠しても仕方がないだらう。

「私に結婚を申し込まれたの。感謝の気持ちだと言って下さって」

桜子が驚いた表情で私を見つめる。そりゃあそうだらう。私だって実感がなくらいだ。

「じゃあ、まだあなたには利用価値があるのね」

桜子の様子が変わった。利用価値？ どういうことだらう？

そう思って桜子の手紙を持つ手を見ていると、その手のひらの傷に気がついた。何かにかみつかれたような……。

私ははっとした。前に連れ去られかけた時に、私は思いつきり相手にかみついた。一人はうめき声で男と分かったが、あの時もう一人いたはずだ。あの、闇の中にいたのは桜子だったのか？

「あなたが内通者だったの？」 私は驚いて桜子を見つめていた。

人質

桜子はとっさに手の傷を隠そうとしたが、私の目を見ると「ふつ」とあきらめたような表情をして、私に文を返してきた。

「ついにお気づきになったのね」

まるでため息のように言う。

「何故あなたが姫様を裏切るような事を……」

私はまだ信じられない。こんなに人が良くて優しい人柄の人が、自分の主人を裏切るとは思えなかった。

「あなたには分からないわ。豊かな国で自由に育った人に私の気持ちちは」

桜子は私の前で胸を張るしぐさをする。

私には薬の影響が残っていて、身体が利かなくなった。どうしてもうつむきがちになる。

姿勢は人の心に影響する。こんな状況では受ける影響も大きい。

私は桜子に支配されてしまったような錯覚を起こしていた。これも薬の作用なのだろうか？

「あなたは武蔵の国の出だったわね。山があり、広い平野があり、温暖な気候に恵まれた国。私の暮らした越後とは大違いだわ。一年の半分近くは雪に閉ざされ、その雪が時には人の暮らす家さえも押しつぶしてしまう。豊作に恵まれればよいけれど、夏の実に恵まれないければ長い冬に閉ざされてどうすることもできなくなる国。私の父はそんな国の国司になった」

桜子は遠い目をして自分の暮らした国を語る。

「本来なら父は若狭のようなもつと豊かな国の国司になれるはずだった。それなのにあの、帝の急な退位がきっかけで任地が越後に変更されたわ。武蔵や相模、東もあらえびすの国といわれているけれども、それより越後はもつと遠い国。そんな国の国司に父は突然据えられてしまったのよ。それでも父は国司としての務めに励んだわ。けれども運が悪いのか、父が赴任した後の越後は凶作が続いてしまった。そして冬には雪に閉じ込められる。私達はどれほど都を恋しく思い、苦しい思いをしたか、あなたには分からない」

桜子は立ち上がり、まだ体の自由が戻りきらない私を見降ろしている。

「私は父の任地が変わったら、都に戻って結婚することになっていった。しかし父は凶作の影響と、その対策に追われてなかなか都には戻れなかった。その時の越後は飢えと寒さで餓死する者も多かったから」

桜子は私に意地の悪い視線を送る。

「あなた、知ってる？ 京の街にもたくさんの餓死者がいる事を。あなたは牛車に乗って都大路を眺めるだけでしょうけれども、その路地を一步入れば道端にはたくさんの子供の死骸が転がっているのよ。そして何日かすると役人達が死骸を集めて烏野辺で、まとめて焼くの。それも茶毘に伏すんじゃなくて疫病が起こって高貴な方々にうつつたりしないように、まるで物のように焼かれるのよ」

桜子は私の顔色が変わるのを楽しむように眺めている。普段とは別人の様な顔つき。

「父が私に選んだ結婚の相手は、そんな仕事をしている役人だった。それでもその男はさる高貴なお方にお仕えしていて、前途は有望だったから父は私にその男との結婚を望んでいたの。ところが父が都に戻れなくなつた事をいい事に、向こうは私よりも家柄のいい姫と結婚してしまつた」

桜子の表情に、一瞬の陰りが浮かぶ。しかしその影はすぐに消え、私を見下す表情に戻る。

「若い姫様が吉野で子供に情けをかけた話しなんて、私から見れば偽善もいいところ。虫唾が走るわ。たまたま姫様の目にとまつただけのその子が良い目を一時見ただけで、日常の中でどれほどの貧しい人たちが死んで行っているか、誰も気に留めずにいるのよ。あなた、誰にも振り返られず、打ち捨てられる気持ち分かる？ 越後に放っておかれてしまつた、私達のような者の気持ち。なのに役人は威張りかえり、人々は見えて見ぬふりをするばかり。中納言様達は、その役人の力をより強くしようとしている。検非違使を増員したり、彼らの地位を上げようとしていたりしているの」

桜子の目の色が変わる。私に対してねたみと憎しみをぶつけて来る目だ。

「私が中納言家に勤めに出たのはあなたの様な行儀見習いと違うわ。親に迷惑をかけないように、結婚相手が決まるまで、自分が自立をする為に勤めに出たの。あなた達は都見物の延長の様なものだろうけれど、私は違う。自分で身を立て、自らの夫となる人を得るために勤めに出たの。それなのにまあ」

桜子は私に返した手紙を睨みつける。

「人によって、運つてこつても違うものなのね。自分の力で生きる他にない、私のような者には誇りを踏みにじられるような事ばかりが起るのに、身分はずつと下でも恵まれて甘やかされてきたあなたのような人に、大将様からのそんなお文が来るなんて。本当に不公平だわ」

「でも、それでも姫君様達には何の罪もないじゃないの。お二人ともご自分が与えられた中で、精いっぱい生きようとしているだけじゃないの」

私は喘ぐように言う。今や薬の毒毛よりも、桜子の言葉の毒に私は苦しめられていた。

「そうね。姫様達には関係ないことかもしれない。それでも私は大納言家と中納言家がこれ以上繋がり深くして、力をつけていくことが許せないの。彼らが下々の者を見る時はいつも傲慢だわ。前の帝の味方をしたい訳ではないけれど、今の帝や貴族の人たちの鼻を一度は明かしてみたいのよ。この結婚を失敗させて両家に溝を作り、役人ばかりが威張りかえる今の状態を壊してみたい」

思い出す、中納言様が私に入れ替わりを依頼した時の見下した態度。言葉は丁寧であったが、そこにはインギン無礼な匂いがあった。きつと下々の誰もが大きなり小なり一度はこんな思いを味わっているだけだ

「それは世間へのやつあたりだね。あなたや前の帝がやっているような事で世の中が変わるとは思えない。もし変わったとしても、今度は帝の首を挿げ替えられるだけで、また、誰かの思うがままの世の中になるだけ。こんなことでも誰も幸せにならないわ。あなたは姫様が不幸になってもいいというの？」

桜子は私にじっと視線を向ける。そして挑戦的に言う。

「私は姫様やあなたの不幸を心から望んでいるの。私と同じ苦しみを味わうことをね。あなた、少し言葉に気をつけた方がいいわよ。あなたの命運は、今、私達の手の中に有るんだから」

桜子の目は何処までも冷たい。あの、人の良い笑顔の下にこんな目の色を今まで隠していたのだろうか？

「良かったわね。あなたにはまだ利用価値があるわ。殺されずには済みそうじゃない？ 大将様のお気持ちの本物なら、あなたをこのまま捨て置くことはできないはず。でも、やっぱり初瀬の観音様くらいには祈っておいた方がいいかもしれないわ。高貴な方って気まぐれな方が多いから」

「私を大将様への人質にするつもり？」

「すぐに殺されなかっただけでもありがたいと思ってね。二セの姫君様」

桜子はそう言っつて小屋の戸をあけて出て行ってしまふ。私は何とか体を引きずるようにしてその戸に向かって行くが、当然戸には鍵がかけられていた。私はその場に横たわった。これ以上無駄に体力を消耗できない。

身体のしびれは残っているが、頭はかなりはつきりしてきた。もうしばらく待てばしびれも治まるに違いない。薬の効果は間違いなく薄れてきている。

やすらぎ達も同じ薬に苦しめられているはず。屋敷の中とはいえ、薬の効き方にも個人差があるだろうし。やすらぎは大丈夫かしら？

桜子の考え方は間違っている。これは世の中への仕返しなんかじゃない。自らの不運を嘆き、幸せをつかもうとする努力をあきらめただけの泣きごとでしかない。ただのやつあたりだ。

そうは思う一方で、私は北国の厳しい暮らしを知らない。南国の激しい疫病の襲ってくるさまも、恐ろしい海辺の嵐も、深い雪に閉じ込められる息苦しさも経験したことはない。桜子のような人の、苦しみを理解することは出来ない。

桜子の様な不満を持つ者が、この国にはどれほど多くいるのだろうか？その考え方を弱いと切って捨ててよいのだろうか？ 私は気が弱くなっていく。

いけない。桜子の言葉に吞まれてしまっている。

だんだん身体に力が戻ってきた。しびれも感じなくなっていく。身体の内を取り戻すと、心の強さも取り戻す事が出来るようだ。そうよ、こんな理不尽な憎しみなんかには負けちゃいけない。

姫様は周りがどうあるのが、優しく生きていく覚悟を決めてらっしゃる。世の中にはこんな憎しみの感情が渦巻いている事も、きつと知っていらっしゃるのだらう。その姫様を守り続けることをやすらぎは覚悟している。大将様だって自分の出来うる限りの生き方をしてらっしゃる。私に感謝もしてくれている。

父は私に愛情を持って育ててくれた。康行だって私を気に掛け続けてくれている。桜子にだってこうした身近な愛情や友情があったはずなのだ。憎しみでその目を曇らせてしまったただけ。

私は負けない。私を愛してくれる人々がいる限り、つまらない憎しみの悪意になんか負けていられない。

このまま人質として利用されたくなんかない。何とかしてここを抜けだすことは出来ないだらうか？

高い所に小さな窓がある。私はやっと動くようになった身体を精いっぱい伸ばして、外の様子を見ようとす。

外には見張りがいた。侍崩れのような郎党が二人、扉とこの窓を見張っている。普通的手段では逃げ出せそうにない。周りは広い田園で、外に出てもすぐに身を隠せそうなところは無い。どうしようか？

すると何処からか、ごく小さなささやき声が聞こえて来た。

「花房、花房」

私の名前を呼んでいる。

声のする方にそっと近付いて見る。板張りの小屋の、木目の小さ

な節穴から聞こえてくるらしい。

「薬を盛られたそうだな。大丈夫か？」

康行だ。康行の音がする。私は心から安堵した。

「大丈夫よ。よく、ここが解ったわね？」

私も小声でささやき返す。

「あの櫛はお前がわざと落としたんだろう？流石はじゃじゃ馬、こ
ういう時に、はすっこい奴だ。良くやった。櫛の先に車のあとがあ
った。それを馬で追って来たんだ。お前何とかここから出られない
か？」

「馬があるの？ 私も乗せられる？」

「この向こうに小さな林がある。馬はそこにつないであるんだ。二
人なら十分に乗れるさ」

逃げ切れるかもしれない。心の中に一気に希望が湧いてきた。

「何とかするわ。でも反対側に見張りが二人いるの。一人は気をそ
らすわ。もう一人は康行で何とかできない？」

「やってみよう。なるべく騒ぎを起こしたくない。外に出たら林に
向かって全力で走るんだ。俺もすぐに追いつくから振り返らずにま
っすぐ走るんだぞ」

康行はそういつと、じつと息を殺していた。

約束

私はまた戸口に向かって行った。その戸を両手でトントンと叩く。

「誰か、誰かいますか？」

なるべくしおらしい声を立てる。少しでも油断を誘わないといけない。

「どうした？」

男の野太い声が返って来た。

「ひどく気分が悪いんです。お水を飲ませていただけませんか？」

「ここを開ける訳にはいかない。そのくらい我慢しろ」

男はすげなく答える。

「でも、私、薬を盛られてからずっと気分が悪いんです。のどが渴いて、胸もつかえているの。私はまだ人質としての価値があるんでしょう？ 私の身に何かあったらあなたも困るんじゃないの？ お願いです。お水を一杯だけ……」

私はわざと消え入るような声を立てた。

「ちょっと待っている」

そう言っただけで男はその場から離れたようだ。代わりにもう一人の男が窓辺から戸口へと移っていく気配がする。女相手でもなかなか油断はしてくれないようだ。

しばらく待っていると戸が開けられて男が木の椀に入った水を差

しだしてきた。

「今、ここで飲め」

どうやら二人掛かりで見張るつもりらしい。私はゆっくりと水を口に含んだ。

私は途中で腕から口を放すと、着物のひもを緩めて下着と袴だけの姿になる。

「すこし、向こうを向いてもらえませんか？ 胸が苦しいので」

「それはできない。こんなところに連れてこられたのが不運と思っ
てあきらめるんだな」

男二人はかえってニヤニヤと薄笑いを浮かべている。私はもう一度水を口に含む。

私は顔をあげて男の目に水を吹きかけた。もう一人の男に腕を投げつけると、全力で駆け出した。

私を追いかけようとする男に、康行が飛び出して来てみぞおちに宛て身を食らわすのが見えた。私は林がある方角を確認しようとする。そこにもう一人の男が刀を持って私に斬りかかるうとする。殺しさえしなければ、腕の一本くらい斬り落としても良い気であるの
だろう。

康行も刀を抜いて男に斬りかかる。私は必死に逃げていく。向こうに林がある事にようやく気がついた。

刀を合わせる音がして思わず振り返る。次の瞬間康行が男に斬りかかっていた。私は目をつむって走り続ける。下着と袴だけなので

身体はだいぶ動かしやすいが、全力で走ることなど普段は無いので、すぐに息が切れて来る。それでも懸命に走るとどうにか林の中にとどり着く事が出来た。康行も追いついてきた。

「無事か？」

康行が聞いてきた。

「ええ、無事よ。……斬ったの？」

私は戸惑った。康行が人を斬るのをはじめて見てしまった。

「斬った。仕方なかったんだ。あのままではこっちが危なかった」

見ると康行は少し震えていた。全身の気が立ったような気配を感じさせている。

「大丈夫なの？ 康行」

「人を斬れば平気じゃいられないさ。俺は度胸がないんでね。しかしこれが俺の仕事だ。大丈夫、心配するな」

そう言っつて康行は林の奥から馬を引いてきた。私を抱き上げて乗るのを手伝ってくれる。

「暖かいのね。馬って」

こんな時に間が抜けた言葉だとは思ったが、思わず口に登った。

「生きているんだから当然だ。生き物のぬくもりは心を安らげてくれる。だが、今は気を張っていてくれ。大納言家に辿り着かなければならない」

康行も私の後ろに乗り込んだ。すこし、血の匂いがする。返り血だろう。

「子供の頃の願いが叶ったんだ。少し揺れがきついかもしれないが、しっかり掴まっていてくれよ」

そういつが早いか、康行が足を動かしたとたんに、馬は矢のように駆け出していた。

激しく揺れる馬の背で、康行に半ば抱えられるようにしながら私は馬の首にしがみついていた。そして康行が言った言葉を考える。子供の頃？ 願い？ 昔、何かあったっけ？

馬、厩。そうだ、私がほんの小さな頃に子馬の出産を見せてもらった事があった。

私が幼女の頃、子馬が生まれると聞いて私は父にせがんで厩を覗かせてもらった。ところが腹の子は逆子だったらしく、母馬は大変な難産になってしまった。私は父の腕にしがみついて脅えながら様子を見ていた。

そうだ、そこに確か少年がいた。その子は馬の世話をしている下男の子だったと思う。

「大丈夫だ。父ちゃんは必ず無事に産ませるよ。こういつことには慣れているんだ」

そういいながら父親の手伝いをしていたっけ。少年は母馬の腹を

さすつてやり、父親は出て来た子馬の足を懸命に引つ張っていた。

子馬は無事に生まれ落ち、必死に立ち上がった。母馬は子馬をずっと舐め続けていた。可愛い子馬だった。

私はその子馬が欲しいと父にせがんだが、この馬は後に都の若君に買われていくのだといわれた。

「こんなによろよろしているのに」
「なんだかわいそうに見えた。」

「父ちゃんが育てる馬はみんな立派に育つんだ。この子馬だって二年もすれば大きくて立派な馬になる。それにお前のお父様はお前が馬に乗るよりも、都のお姫様みたいになる方が喜ぶ」

「都のお姫様？ 亡くなったお母様みたいに？ でも私は馬に乗ってみたいわ」

けんもほろろな父をあきらめ、私は少年にせがんだ。

「お前は小さすぎて危ないよ。それならお前が大きくなってお姫様の様になつたら、俺が馬に乗せてやるよ」

「本当？ それなら私も都のお姫様になる。そうしたら私に馬を頂戴。この子馬みたいな可愛い馬を」

「お姫様に馬は似合わないよ。その代わりにもっと綺麗なものをやるよ」

「それなら私に櫛を頂戴。お母様の櫛はとっても綺麗なよ。漆で

綺麗な時絵が書いてあるの。あんな櫛なら私も欲しいわ」

「分かったよ。俺が大人になったら櫛を買ってやる。馬にも乗せてやる。だからこの子馬は若君に譲ってくれ」

「ええ、我慢するわ。でも、櫛も馬に乗せてくれるのも忘れないでね。約束よ」

約束。そうだ、その時少年とかわした約束。今思えば、あの少年は康行ではなかったか？

そして私は都人になる事を夢見て暮らし、厩に近付くことは無くなった。少年の事も忘れてしまった。もうあれから十年ほど経つだろう。

康行は私に櫛を買ってくれた。馬にも乗せてくれた。私がすっかり忘れていた約束を、康行は果してくれた。

私はお姫様のようにではなく、薄汚れた下着姿で、康行は返り血を浴びて異様な状態になっているけれど、それでも遠い日の約束は、今、果たされたんだわ。

馬の首にしがみつきながら、私は康行を仰ぎ見る。真剣な顔で馬を操っている。もう、震えてはいなかった。

馬はまるで飛ぶように田園の中を駆け抜けていく……

しばらく走り続けると目の前に桂川が見えて来た。意外と都は近かったようだ。橋を渡ると向こうに馬の集団が見えた。奥には男車の牛車もある。私達の姿を見ると、牛車の中から大将様が顔を出した。

「康行！ 花房は無事か？」

大将様がお声をかける。

康行は慌てて馬から降り、私を抱き下ろしてくれた。そのまま地面にかしこまる。大将様は私の姿を見ると

「おお、無事であったか。康行、よくやった。花房はこちらの車に乗りなさい。その姿では身体が冷える」

そう言って私にご自分の着物をはおらせて下さる。

「大丈夫です。それよりも、検非違使の役人に、以前越後の守の娘と結婚話の持ちあがった方はおられませんか？ 鳥辺野送りにかわる方で」

私は大将様にお聞きした。

「ああ、そういえば以前そんな話があったな。たしか私の叔父の元につかえている男だったと思うが」

「越後の守の娘が内通者でした。彼女の父君が都に戻れなくなり、彼女の結婚もその役人に一方的に流されてしまったようです。そういった事が重なって、大納言家や中納言家に恨みを抱いていたようです」

「そうでしたか。これから康行に場所を聞き、あなたをさらった者

達を取り押さえに行かせます。もう、大丈夫なのですよ。安心なさい」

「違うんです。越後の守の娘は、桜子さんは、ただ、捕まえて処罰を受けるだけではダメなんです。父君が都に戻れなかった苦しみ、結婚を裏切られ、誇りを踏みにじられた苦しみを、中納言様やその役人に知っていたただかなければ、何らかの遺恨をまた誰かにつなげてしまうと思うのです。彼女を処罰しただけでは解決しないのです。彼女のような苦しみを持った人が、きつとほかにもいるんです……」

話しの途中で、私は足元が怪しくなるのを感じた。薬を飲まされ、寒い中を下着姿で走りまわり、馬の背にゆられ続けていた緊張が、緩んできたに違いなかった。私はそのまま気を失ってしまった。

気が付くと私は中納言家の局の自分の部屋に寝かされていた。そばでやすらぎが見守っていてくれたようだ。

「ご気分はどう？ 顔色は随分良くなったみたいだけど」
やすらぎが私のひたいに手を当てて聞いてくれた。

弱っていた身体を寒風にさらしていた私は、あの後ひどい熱を出して、一晩中眠っていたらしい。

「姫様の典薬の助（医師と薬剤師を兼ねた役目）が、皆に解毒のお薬を調合して下さったの。あなたには熱さましの薬も用意して下さったのよ。今夜には姫様もお戻りになれるわ。何か召しあがる事が出来る？ あなたはあまりお食事もとらずに薬を飲んでしまったから、一層深く影響を受けてしまっていたの。何か食べれば回復が早まるそうよ」

そういえば空腹感が襲って来た。昨日から殆んど物を食べてはいなかった。私は用意されていた食事をありがたく頂いた。確かに身体は回復しているのが分かる。

「桜子さんは？ 他の一味とともに取り押さえられたのかしら？」

やすらぎの表情が曇る。

「桜子さんは……。自害なさったそうよ」

自害！

「検非違使の役人が駆け付けた時にはすでに自分の喉を刺してこときれていたそうよ。彼女は自分の誇りだけは守り通したかったみたい」

やすらぎの伏せた眼にはうっすらとした涙が光っていた。

自由

桜子以外の一味は、侍崩れの郎党達と、京わらんべと呼ばれる、ならず者ばかりが捕まった。

彼らは私の脱ぎ棄てていった衣を持って、「女房の衣装目当てに誘拐した」と言っているそうだ。検非違使も取りたてて尋問を強いたりはしていないらしい。康行が賊を切り捨てた事さえ、もみ消されていた。

裏では前帝やそれに群がる不遇な貴族達が暗躍しているに違いはないのだが、朝廷内の複雑な勢力関係を皆が気にしているので（それは表面から見通すことはできない）そういった貴族達に役人が深くかかわることは無い。

ましてや前の帝であらせられた方に、ただ人の役人達が何をできるといえるのか。結局、真実が世の中に露呈することは無いのだ。桜子は何のために大胆な事を企てた拳句、死なねばならなかったのだらう？

桜子の自害は私にとって十分衝撃だったが、同時に桜子への悔しさがかみ上げてもきた。

もう私が何を思おうとも桜子の心に届くことは無い。

桜子さん。あなたは死ぬべきではなかった。死んではいけないかったわ。本当にこの世に恨みがあるのなら。私へのねたみと、憎しみがあるのなら。これじゃ、なにも世の中に届いていないじゃないの。

何故、命あるうちに私にもつとこの世の不幸を知らしめなかったの？ 大納言様達にはつきりとおっしゃらなかったの？

しかし私は考え直す。私達女人が、本当に男君の方々に物を伝える事なんて出来るのだろうか？

もしも本当に桜子さんが、あの検非違使の役人に心の内をぶつけるのなら、越後国司の娘として彼の邸に乗り込むしかないだろう。そうすれば気のふれた愚かな女が男君の元へ乗り込んだと都中の笑いものになり、彼女も彼女の一族も、誇りの欠片も失うような事になるのかもしれない。

まして大納言家にいたっては、彼女の一族の存在すら、もみ消してしまいかねない。彼らの傲慢な耳には、どんなに私達が声を立てても届くことは無いだろう。彼女の胸につかえた心を吐き出すにはあまりにも犠牲が大きすぎるだろう。

御仏は女人は生まれた時から罪を背負っているのだという。その罪ゆえに自らの心のままに生きることができないのだとか。そんなにも罪深い女人を、何故男君は求め、利用しようとするのだろうか？

桜子さん。あなたは結局この世で自分の心を誰にも伝えることはできなかった。私を除いては。

私はあの時のあなたを決して忘れない。憎しみをたたえて立ち上がったあなたを。私だけはあなたを理解するわ。

それでいいでしょう？

「やすらぎ。今日の合奏の他に、私に独奏で琴を弾かせてもらえな
いかしら?」

私はやすらぎに頼んだ。

熱の下がった私は縁に出て康行と会った。康行はだまりがちでそ
れでも私に櫛を返してくる。

「ありがとう。昔の約束を守ってくれて」

私は自然に礼が言えた。

「この後若君に会うそうだな」

康行はさびしげな表情で言った。

「ええ。異例な事だけれど、大将様は今朝、こちらに残られたの。
体裁を取り繕うために空の牛車は返したけれど。このあと私と会っ
て、夜には三日夜の宴にお出になられるわ」

「若君の妻になるのか?」

康行は直接的に聞いてきた。その方が康行らしい。

「いいえ。その話はお断りするわ」

私は言い切った。

「無理をする事はないんだぞ。越後の国司の娘に何を言われたかは
知らないが、お前が若君に認められたのは他でもない。お前の心根
が若君や姫君に通じたからだ。お前は周りに流されるだけの女じゃ
ない。自分の意思で都に入り、自分の言葉で姫君の心を動かし、女
房になった。そして姫君のために命をかけて、若君の心さえも慮っ

て、敵の手から逃れたんだ。お前は胸を張っていい。これはお前がつかんだ当然の権利だ」

康行はそういった。そう言ってくれた。私の行動を間違いでなかったと認めてくれた。その気持ちが嬉しい。

「そうかもしれないわね。でも、私は妻の座はいらさないわ」

「どうせ、世間はお前を若君の情人として見るようになる。お前は若君と密接に関係したし、昨日は若君も隠し立てすることなく、お前をあつかった。車に乗るように指示を出し、御自分の着物を着せかけた。あれですでお前は若君の恋人としてみなされる。お前が何を言おうと世間の目は決まってしまうんだ。だったら妻として認められる方がずつといいはずだ」

それは分かっている。おそらく大将様もそれを承知で私をそうあつかったのだ。やはり女の扱いが巧みでいらつしやる。まるで詰め暮の様に女人達のいきつく先を決め、追い込んでしまう。

しかしそこに悪意は無いのだろう。むしろ自分の誠意を女人に与える手段だと信じて疑わずにいるに違いないのだ。それが女人にとつては時として傲慢に見えたとしても。

「いいえ、違うの。私は根っからのじゃじゃ馬なの。世間の言うとおりになんて生きられないの。身分が低いといわれれば、女房になりたくなるし、田舎者と言われれば都で暮らしたくなる。

大将様の妻になるのが荣誉だといわれれば、そうはなりたくなくなるの。私は誰の物にもならないわ。私は私。この都で、私は自分の力を試したいのよ。姫様のもとで、どこまで世間に逆らって生きら

れるのか力を出しつくしてみたいの」

「本気で若君の申し出を断る気か？」

「本気も本気。私には高い身分もない。でも、卑屈になつて誰かの世話にすぎろつとも思わない。私は都で一番自由な女になるの」

「そんなか弱い女人の身で、どんな自由が得られるつていうんだ」
康行はあきれ顔だ。

「心の自由よ。本当なら誰もが持っている自由よ。きっと桜子さんが一番手にしたかつたものよ。彼女はあきらめてしまったけど、私はあきらめない。この心だけは手放さないわ」

「まさか、お前、尼になる気か？」

尼になれば男女の交わりは禁止される。勿論結婚もできないし、親子の情も、友情さえも否定されてしまう。生きながらにしてこの世の人々と縁を切ってしまう。それは確かに心が自由かもしれない。そして孤独だ。

「違うわ。私は俗世に生きたまま、この世を愛したまま、自由に生きるの。私だけの生き方よ」

私は桜子さんとは違うやり方で、この世の中に逆らつて見せる。あらためて、そう、決心した。

私は大將様と会つた。扇を使わないのは勿論、几帳を隔てる事さ

えしなかった。それは私には必要がない。正面から面と向かって大将様の目を見ていった。

「結婚のお申し込みは、この場でお断りさせて頂きます」

私に歌は似合わない。はしたなくてもいい。田舎くさくてもかまわない。私は自由だ。

「大将様のお気持ちはともうれしいけれど、私は妻にはなれませんが。たとえ姫様がいらっしやらなかったとしても」

大将様は少し微笑まれながら

「そう、おっしゃるんじゃないかと思いましたよ」

と言って、私に文を差し出した。良く見ると私が大将様にお送りした文だった。

「これはあなたにお返ししましょう。ほととぎすは藤に鳴く時を聞いたりしてはいけなかった。しかし私はあなたをあきらめませんよ。あなたの心の池を波立たせるまで、気長に構える事にしましょう。それまでは私達には美しい友情が一番似つかわしい。しかし康行には負けません。薄衣一枚のあなたを抱きかかえるような真似は二度と彼にはさせませんから」

そう言うてにっこりなさる。

「私もあのお文をお返しします」

私は懐から文を出そうとしたが

「それには及びません。いつか私はあなたの花を開かせることが出来るかもしれない。それまで楽しみにとっておいてください」

大将様は強気な、少しいたずらっぽい笑顔をお見せになった。

「今宵の琴は、お二人のために心をこめて引かせて頂きます」
私はそう、はぐらかした。

寢所のひさしの方が騒がしくなってきた。男車がお着きになるといのである。どなただろうか？

「ああ、お着きになったようですね」

そう言つて大将様は立ち上がる。皆がひさしへと向かつて行く。何故か中納言様や、北の方までもがお車を出迎えた。

良く見ると、それは大将様のお車だった。見慣れたお車の中から現れたのは、見知つた上？達と姫様だった。今朝お返しになった車に姫様がお乗りになっていたということとは……。

「そうですよ。姫君は大納言家にいらしたのです。変な所にかくまわれるよりは、よほど安全だろうと思つてね」

大将様は私に説明なされた。

ああ、お二人はすでに真の御夫婦でいられたのか。だから大将様は私の事を姫様に御相談出来たんだ。姫様も今までの一部始終を全て知つてらっしゃるんだわ。

大将様はお車に近づくと、姫様を両手で抱きあげて差し上げた。これは本来、帝の御皇女様が貴族の家に御降嫁される時に行うことである。大将様は姫様をそれほど特別にあつかつて下さつたのだ。中納言様などは「おお」と声を洩らされたし北の方にいたつては涙をこぼしていらつしやつた。

私は頭を下げながらも思ってしまう。まったく大将様は女人の扱いに長けていらっしやるんだから。

一心地つくつと姫様が、私をお呼びになった。

「あなたには本当につらい思いをさせましたね。桜子はあなたと同室だったのでしょうか？」

やはり全てを存じているようだ。

「桜子さんは、私たち女人の水鏡だったのでしょうか」私は答えた。

「あの人は、私達の不満や苦惱、戸惑いを映してみせる水のような人でした。そして私はそれを覗いてしまいました。でもそれは決して真実だけではありませんでした。彼女の心は波打っていて、その姿は歪んでいましたから」

「あなたにはそれが分かるのね。あなたは素晴らしい人だわ。私はあなたに何をして差し上げればいいのかしら？」

私はただ一つ、本当に欲しい物を答えた。

「私が欲しい物は、一つだけ。心の自由で御座います」
姫様には伝わるのであろうか？この思いが。

三日夜（前書き）

「身代わり編」ここまでです。

三日夜

三日夜の宴は華やかに行われた。数々のご馳走が用意され、女房達は華やかに着飾り、従者や、下男、下女にいたるまでが振る舞い酒に酔っていた。

室内は美しく飾られ、大勢の貴人たちが酒を酌み交わしている。この場にふさわしい晴れの歌や詩が詠まれ、それに合わせて管弦の調べが奏でられる。宴もたけなわだ。

続いて女人の琵琶や琴が合奏され、私も皆と音を合わせていく。そしてやすらぎとの合奏が続いた。

そして私の独奏となる。大将様と姫君様の許可を貰ったの演奏だ。私はこのためにここにいるのだ。

初めの音には自分の心を乗せた。軽やかに、一つ調子に。都への憧れ、様々な出会いがもたらしたときめき、都のにぎわい。

だんだん音は穏やかになる。姫様の優雅な御様子、結ばれる友情、穏やかな日々。優しい調べのうちに時折入る穏やかならざる音。桜子の隠された心。

音が変わる。激しく、強く。桜子の苦しみ、悲しみ、怒り、そして、求め続けた思い。琴の弦が切れんばかりに私は奏でる。私に向けられた憎しみを奏で続ける。

人々が息をのむのが分かる。衣はずれ、髪が乱れようと私は全

身で弾き続ける。誰もが耳を傾けている。

やがて音は清浄なものに変わる。弱く、たどたどしいが、細やかな調べ。何かを切々と求める調べだ。

そして音はたおやかに初めの音へと帰っていく。軽やかで一つ調子な音。だが、初めとは明らかに違った印象を与えているであろう音。私はそつと、最後の弦をはじいて演奏を終えた。

誰もがため息をつき、さざめくような声を漏らしていた。きつと伝わった。桜子の心は今ここで蘇り、終息を迎えたのだ。私が出れることはここまで。後はそれぞれの心の中にこの音は生き続けられるだろう。

宴はまた晴れやかな華やかさに満ちていく。桜子の憎しみはそこにはもうない。

宴の終わりに私は姫様に呼びとめられた。

「花房。私はあなたに何をすればよいのか分かりました。あなたはすばらしい演奏家ね。奏で続けなさい。続けなくてはならないわ。あなたの琴は百の言葉に勝るとも劣らないわ。あなたは私達の大切な何かを伝える事が出来る。あなたの心は自由でなくてはならない。あなたの琴は自由なままに奏でられなくてはならない。私はそれを守り続けましょう。あなたは奏で続けるのよ」

伝わった。少なくとも、姫様には私の思いが今はつきりと伝えられた。これこそが私の願うところだった。

「奏で続けましょう。一人でも多くの人の心に届くように」

女人の言葉は世の人々に届けることは難しい。だから、心揺さぶられる歌は流行歌として伝え続けられていく。

私は琴の音でそれを伝えよう。それを伝えられる心を待ち続けていよう。いつでも奏でられるように。

宴が済むと自分の局へと私は戻った。桜子がいなくなったので今では一人部屋になってしまった。何だか部屋ががらんとして見える。

ふと足元を見ると、戸口に近くに手折られた咲いたばかりの白い梅と、折りたたまれたみちのく紙があった。手紙だろうか？

普通、女人に贈られる手紙はうすよつと呼ばれる、薄く、淡い色の付いた美しい和紙が使われる。真っ白な厚手のごわごわしたみちのく紙で手紙がよこされることは無い。開いて見ると力が入り過ぎて、やたら太いばかりの文字が飛び込んできた。こんな手紙をよこすのは康行しか思い浮かばない。

中には歌が書かれていた。あんなに苦手なはずの歌が。

「我が駒が足を止めたる琴の音は初花よりも深く匂へり」
いい演奏だった。良くやった。

真つ直ぐでひねりのない、康行らしい歌だと思った。私の琴はこの梅の香よりも深みがあるらしい。

おそらく康行の居る所にまで琴の音は届いていたのだろう。私の演奏はよほど良かったらしい。私は一人、笑みをこぼした。一人部屋の虚無感が少し和らいだ気がする。康行なりに気を使ったのだろう。私も返歌を書いた。

「みちのくの ゆきとみまがう しらうめの かおりたつよに ころなくさむ」

今度の手紙はうすように書いてね。

みちのく紙なんかには和歌を書いてしまふ康行に、ちよつぴり皮肉を込めたのは照れ隠し。康行はこれからも私に手紙を書いてくれるだろうか？ 会った方が早いと、また縁に近寄って、私を呼びとめるだろうか？

散々な目にも会ったけれど、都暮らしも悪くは無いわ。私は梅の花を眺めながらそう思っていた。

翌日、康行はご機嫌斜めだった。彼にしてみれば歌に花を添えて人に贈るなんて、一世一代の決心がいる事だったようだ。

「お前は本当に何にも分かつちやいないんだな。俺みたいな男が雅やかな真似なんか出来る訳がないんだ。もう二度と歌なんか送るもんか。どうせ若君と比べられるのがオチだ」

そう言っつてすっかりむくれてしまっつ。

それを見て私は逆にご機嫌になっつてしまっつ。知っつてるわ、そのく
らい。私が大將様からお歌を送られてるのが気になっつて、わざわざ
慣れな歌を読んだのよね。だから私は嬉しくて、次の手紙も書
いてほしいと暗にほのめかしたのだけれど、康行は気付いてるの
かどうか？

「ニヤニヤして、何を考えてる？」

そんな事言える訳ないじゃないの。

「別に。あんたの歌の読みぶりをちよっと思ひ出しただけよ」

「もう絶対に歌なんか送らないからな！」

「怒らないでよ康行。あの歌はいい歌だっつたわ。ありがとう、私の
琴を褒めてくれて」

「ふん、歌なんか書かなくてもこうやっつて言葉でかわした方がずっ
と手っ取り早いや。都のやり方は性に合わない」

そうね。本当にそうだと思っつ。でも、都で暮らす女人には、自分
の意思を伝えるためには、こんな方法しかないんだわ。歌を歌い、
琴を奏で、しぐさ一つでものを伝える。私はそんな世界で、琴の音
一つで立ち向かおうとっつているんだわ。それは苦しいことかもしれ
ないけれど、康行や、姫様、やすらぎ、大將様が見守っつていてくれ
れば、勇気を出してやっつていけそうなきがする。

「康行。私、都で生きるわ。どこまで頑張れるか分からないけれど、

姫君様のもとで、粘れるだけ粘ってみる。当分郷里には帰れないわ。あんたはもうすぐ馬の世話に戻るんでしょう？お父様達に伝えてね。私はここで生きていけるって」

康行はむくれ顔を少しだけゆるめて、こつくりとうなずいた。

「俺もすぐに都に戻るさ。こんなじゃじゃ馬危なっかしくてほっとけるもんか。若君にだって気をつける。あれでなかなかお人の悪いところもあるんだからな」

そう言って康行は侍所へと帰っていく。

今度会う時、私は、都に染まらずにいられるだろうか？

染まらぬように精いっぱい逆らって生きていきたいと思うけど。

私はそう思いながら康行の背中を見送った。

三日夜（後書き）

次はちょっと無理やりだけど「御所編です」

噂

姫様の三日夜の宴からふた月。私の事は、すでに都中の話題になっ
てしまっている。

中納言家のとんでもない、やんちゃ女房と言えば、私の事。ある
いはこの春の除目で近衛の大将に御出世されたばかりの、大納言家
のご長男にまわりついた、たちの悪い女君、と言ったところか。

そう言われても仕方がない。この三カ月は、御世辞にも平穩無事
な日々だったとは言えなかったのだから。

大将様との事だつて、世間が言うような仲になつた事なんてない。
たった一度、お歌をいただいただけだ。

それにしてもこのふた月の間、都人の口さがのない事と言つたら
！噂話の質でいったら、故郷の武蔵の国の方がよっぽどマシだった。

初め、私はかの、悪評高い前帝一派にさらわれた悲劇の女房とし
て持ち上げられたらしい。実際、それは事実だし。

問題はその後だ。私は大将様と、姫君様のご婚礼の三日夜の宴で
琴を弾いたのだが、かなり、斬新で、独創的な弾き方をした。全身
で、感情をこめて、髪が乱れようと、裳が、ずれ落ちようとま
まわず弾いた。

これに都人の意見は真つ二つに分かれたらしい。

これまでに誰も聞いた事のない、初めての調子、初めての音色。

天女が弾く虹の琴のようだと云う、称賛の声。

そして、心を乱す、乱暴で、独りよがりで、もののけがついて人を惑わしているようだという、非難の声。

そんな声が渦巻く中で、私は思い切った行動に出た。わが身を隠す事をやめたのだ。

貴人に仕える女房と言うものは、屋根の下で暮らし、邸の外の者にはなるべく姿を見せず、御簾の中に几帳を立てて、その影に扇で顔を隠して暮らすのが、しとやかで恥じらいのある生き方だと世間では言われている。特に都では。

しかし私はそれを良しとしなくなかった。その考え方を否定して生きる覚悟を決めた。堂々と顔をさらけ出した。

当然それは、あつという間に噂となって広まった。私のそれまでの行動にも尾ひれがついた。

実は私はさらわれたのではなく、自ら前帝達に近づき、薄衣一枚の姿で誘惑して金品をだまし取っていたとか、本当は姫様を恨んでいて、しびれ薬を盛ろうとしたとか、大将様に姫君様の悪口を吹きこんでいるとか。

しまいには、あの、宴で琴を弾いた時は、天岩戸にこもったアマテラスを誘うのに、胸元を広げて踊り狂った浮かれた女神のように、半裸になって弾いていたとまで言われてしまっている。

なんでこんなに言いたい放題言われるのかと言えば、なんてことはない、私の父の身分が低いからだろ。

人の噂をある程度信じるなら、私なんかよりも凄い事をしている女房なんていっぱいいる。

実家に金銭的な余裕がなければ、自ら儲け話を振りまいて、貧乏公家に金を貸して蓄えを増やしている人もいるらしいし、地方の受領に情を通じて経済的に援助を受けている人もいるらしい。現実問題として、女房暮らしは華やかな分手当もいいが、支出も結構かかるのだ。

それまで私は身分は低いが、金には困らない父のおかげで、そういうことにはまるで疎かったのだが、都暮らしが長くなるにつれ、そういう裏事情も理解できるようになってきた。

そんな都で、上京したての小娘が、親の金の力で女房に成り上がり、雲の上人であるはずの姫君様のそばにお仕えし、その、背の君である大将様を恋人にして（これは誤解なのだが）二人の後ろ盾をいい事に、好き勝手にふるまっているのだから、そりゃあ、恨みもねたみも買って当然なんだろう。

だから私の噂が、都中に広がっても仕方のないことだと思っただし、姫君様と大将様の後ろ盾も私は大いに利用させてもらって、堂々と顔をさらしたまま、姫様のお世話をし、暮らしを整えて差し上げ、琴を弾きならしていた。

ところが、まさかその噂が、今上の帝のおられる、九重の宮中のかなた、御所の奥深い御簾のうちにまで届いていようとは思っても

みないでいたのだ。

その夜、大納言の長男である近衛の大将は、久しぶりに御所の宿直をしていた。

中納言家の一の姫と結婚したばかりの新婚と言う事で、しばらくの間は目を開けずに中納言家に通っていたため、帝の身をお守りする近衛の大将と言う身分に出世したばかりだったにもかかわらず、ふた月の間ほど宿直は免除してもらっていたのだ。

大将はしばらく、私的な時間に主上とお目にかかる事もなかったので、その大将が宿直していると聞きになると、主上（帝）は早速、大将を暮のお相手にお呼びになられた。

前帝は「訳あり」で失脚なされているので、今上の帝はまだ十九とお若くていらっしやった。

だから、年の近い一つ下の大将などは、御公務から離れられると良い話し相手になるらしく、管弦の遊びのお相手や、宿直の夜の話し相手などには、よくお呼びつけになるのだ。今夜は久しぶりの暮のお相手らしい。

大将の方でも、主上おかみからの誘いは嬉しかった。暮のお相手も楽しみである。

大将は幼い時から主上の元に童殿上して、主上とともに手習いを受けて育っていた。

おそらく父である大納言が、前帝よりも当時東宮だった主上に目をつけて、自分を親しい位置に据えたに違いない。実際、そのおかげで大将は今の地位を手に入れている。

それはさておき、幼い頃からまるで乳兄弟か、幼馴染のように育った主上と過ごす時間は、大将にとっても楽しいものがある。身分は違えど、腹を割った親友に会うような心地さえするのだ。

貴族たちの世界はとてせまい。まして上流ともなれば、付き合いのある人間は、皆、血縁が誰かに突き当たってしまうほど世間が狭い。その中でさまざまに接するのは、むしろ召し使う身分の下の人間たちだ。

貴族の生活とは昼夜問わず、人々に囲まれた生活でもあるのだから。人がいなければ成り立たないのだから。

彼らは自分達の地位を守るためにも、長年慣れ親しんでしまう心情的にも、召し使う者たちを懸命に養っていく。

召し使われる者たちも、そんな彼らに心を寄せるし、まさに手足となつて働いている。

実生活ではあまり顔も合わせる事もなく、関係も希薄になりがちな親類縁者や、離れて暮らす父、母、兄弟など、政治的な風向き一つでいつ、心が変化するか分からない同じ血筋の人間よりも、時として、より深いきずなが生まれることだつて少なくは無い。

恋や友情だつて当然生まれる。主従関係とは奥の深い物なのだ。

それはたとえ、帝と臣下であつても変わりはないらしく、主上と大将の関係は、まさにそうだったものであるらしかつた。要するに二人は気が合うのだ。

そんな気の合う主上と、大将は久しぶりの暮で主上に押し気味の展開をしていた。遊びで花は持たせない。それが主上との、昔からの約束事である。

「うづむ。腕をあげたな。ここの隅を取られたのは痛かつた。こつちの地を取られまいとムキになり過ぎたかな？」

「婿入り先の中納言殿は暮の名手でいらつしやいますから。お相手をしているうちに、私の腕も上がったようでございます」

「なんだ。宿直もせず暮の特訓をしていたのか？ これではかなわぬはずだ。それでは夫の務めも果たしているか分からないな」

主上は負けを認めて暮石を器に戻しながら笑つた。

「新婚と申しましても、妻はまだ、十五で御座います。まだまだ形ばかりで、子供の遊びのようなものですので、中納言殿と暮を打ちましたり、女房達に話し相手になつてもらつて居るのですよ」

大将がそういうと、主上がまるで待ち構えてでもいたかのように視線を合わせて来た。なんだ？

「そうそう、中納言家の女房と言えば、大将は早速、お気に入りのお房を見つけたそうじゃないか。まだ新婚だというのに、偉く手回しが早い事だ」

主上はそうからかつて笑われる。

花房の事か。これはちょっと厄介だ。普通の女房を落とした後なら戯れ話を主上と楽しくできるところだが、花房は事情が違う。こんなところにもまで噂が広まっているとは思わなかった。

「別に手などまわしていませんよ。実務的なやり取りなどを言付かってもらっている、普通の女房の一人です」

「普通かな？ 何でも大変なやんちゃぶりで、顔も隠さずに歩くそうではないか。しかもたいそう面白い琴の弾き方をするのだろうか？」

噂ほどの辺までねじれて伝わっているのだろうか？ あまり品のない事もいいかねる。

「それほどでもありませんでしたよ。やや、斬新ではありませんが、美しい、良い音色で御座いました」

「良い音色か。本当は大将が手とり足とり教えたのではないかい？ 衣を着せかけた仲だそうじゃないか」

大将は返事もせず、曖昧な笑い方をした。自分は宮中では名うての色事師、女人相手ならそんじょそこらの男達には負けないという自信がある。そういう自分が結婚まで持ち出したのに、身分の低い、わずかか十六の娘に袖にされたとは絶対に知られたくない。あまり突っ込まれたくない話だ。

「お前は笛が得意だが、その琴の音と合わせた事はあるのか？」

「いいえ、そのような機会がありませんので」

大将はなるべくそっけなく答えた。

「それはもつたいないな。私はその琴の音と、お前の笛を合わせた演奏を、ぜひ、聞いて見たくなつた。今度、後宮で女雅楽の演奏をしたいと思います。その、中納言家の女房も殿上させて、お前の笛と合わせてみよう」

主上は好奇心丸出しで、面白そうにおっしゃつた。

これは厄介な事になつたと、大將は心の中で齒がみする。

好奇心

主上のお戯れに、大將はややうつとうしさを感じた。本当のところ、花房を宮中に連れて来たくはないのだ。

まさか花房が自分の顔を潰すような事は無いのだろうが、小娘に気を回す姿を主上に勘づかれたくもない。

それに自分が花房に興味を持ったのは、主上と同じくもともとただの好奇心からだった。

金持ちとはいえ極端に身分が低い父を持つ娘が、大胆にも中納言家に入り込んで、一の姫の最もそばに仕える身となっている。しかも姫のお気に入り。さらには琴の名手だという。これだけでも好奇心をそそられた。

さらに、馬の世話を任せている朴念仁な康行が、その少女の行動に振り回されている。目が離せず、気がそらせず、わずかな事でもうるたえているのが分かった。これは面白そうな娘だ。

実際に会ってみると、田舎者らしく、粗忽で無遠慮で気が強い、そのくせ、おおらかで、慕わしそうな、明るく人を引き付ける、意志の強さを持った娘だった。

女君と呼ぶには、まだ幼さが残るような娘なのに、明るい何かを一つ信じ、それを真っ直ぐに貫こうとする強い輝きが感じられる。そこには不思議な信頼感があつた。

役目がら、宮中にいると、沢山の女房達に囲まれている大将としては、ちょっとした恋のやり取りは日常生活のうちだった。

若い女君には自分の寛容さと大胆さを見せつけて、華麗な歌を送っては時に冷たく、時に情熱的にふるまって見せる。年上には少し背伸びをしているように見せ、そのくせただどしい歌を細やかに、まめまめしく送っては、丁寧な気遣いを見せたり、甘えてみたりする。

そうすると女君たちは、自分との程よい距離感を旨く見つけ出して、自分をくつろがせてくれたり、勇気づけてくれたりする。目上の方々のいる席で、さりげなく褒めてくれたり、話がまとまりやすいように助けてくれる事もある。

朝廷では正論を交わして、自らの意見を通さなくては潰されてしまう恐れがあるが、後宮の行事や、私的な宴の席では、若い自分あまり強くものを言う訳にもいかない。そんな時に自分に有利な雰囲気を作り出してくれる女君たちの存在は、大将にとっては必要不可欠だった。

そんな暮らし方をして来た大将に、信頼感を寄せられそうだと思わせる少女。その真っ直ぐな気性は都の女君には無いものだった。

何もかもに恵まれて見える大将にも、苦悩はある。父親の作り上げた地位に対する重圧だ。

自分は長男である以上、父の作り上げて来た現在の権力を、受け継がなくてはならない。自分達の一族で、都を牛耳続けるのが、我々の悲願だ。自分はその中心とならなくてはいけない。

そのために、幼い頃から努力はして来た。人に認められるように、遠い大国の最新の政事を学び、これまでの朝廷の出来事を学び、季節の行事や、管弦の遊びにすら、手を抜かなかった。

そうやって自分を固めた大将が、何よりも必要としているのは信頼して話す事が出来る、身近な人物だ。

主上は御信頼申し上げている。身分から御自分の思うようにならぬ事も多いだろうが、それでも大将の事を全力で守ろうとして下さるに違いないと、大将は信じている。

父もおそらくはそうであろう。長男の自分への信頼は、他の兄弟や役人たちよりは持って下さっているようだ。当然、生みの母からの愛も感じてはいる。

では他に？ と、考えると、乳兄弟と、康行ぐらいしか思い当たらない。他の家来たちもそれなりには信用しているが、安心して信頼できるかと言えば、物騒な今時のこと、多少の不安が付きまわってしまう。

それなのに、花房には信頼できそうだという勘が働いたのだ。

花房を妻にしても良いと思ったのには、勿論、一の姫を守ろうとする心根に対する礼の気持ちもあったが、これからも信頼を寄せられそうな女君と言う、心づもりがあつたからだ。だから、彼女には自分が与える、最大限の条件を告げたのだが、何と、断られてしまった。そんな予感はあつたのだが。

容姿にも、恋の手管にも自信はあった。まして、最良の条件を告げたはずだった。

やはりこれは普通の女君ではなかった。しかも、我々の顔を立て、一の姫の命を守ろうとする、物怖じをしない女人。

まだ年若いというのに、何という手ごたえだろう。身分はいやしなくても、この真っ直ぐさ、この自尊心の高さは、宮中の女官たちにも、決して引けを取ることはあるまい。

これほどの手ごたえ、これほどの矜持。これは強引には奪えない。そんな事をすれば、彼女の最も素晴らしい部分を失ってしまうだろう。

しかも彼女は康行を意識している。彼が送った櫛をその身から離さずにいる。悔しいが、彼女にとって私は康行と同列、いや、もしかしたらその下に位置しているのかもしれない。彼女の心のはかりにかげられれば、身分など何の役にも立たない。花房とはそういう女君なのだ。

その花房に、主上は好奇心を向けられた。お会いになれば、彼女の持つ、独特の何かに気付かれるかもしれない。自分がそこに太刀打ちできずにいることにも。ましてあの琴の音を聞けば……。

大将は気が気ではなかったのだ。

「その女房は身内を頼って上京しているのか？」

主上は脇息に持たれながら、のんびりと聞いてきた。

「母親の妹が、御所勤めをしているそうでございます。梅壺の更衣につかえる女房で、命婦と呼ばれているそうです」

「梅壺か。しばらく足を運んでいなかったな。女官に言つて、その命婦とやらに話を通しておこつ。女雅楽まではまだ、十日あまりある。その女房にはそれまで梅壺に滞在させるがいい」

「本当にお呼びになるおつもりですか？」

大将は未練がましく聞いた。

「なんだ？ 大将はいくらでも聞ける琴だろうが、私はこうでもしなければ聞けないというのに、嫌がるのか？ これは余計に聞きたくなるな」

「彼女の身分では、役人の許可が下りないのでは？」

「親はともあれ、本人は今、中納言家の女房だ。お前の後ろ盾もある。そういうことはお前の方が得意だろう。その、命婦の身の回りを世話する者として、宮中にあげればよい。雅楽の日には私が呼ぶ」

そういつて主上はすっかりその気になつてしまわれた。こうなると、大将は花房を宮中に上げない訳にはいかない。

「お前も笛の練習をしておけよ。女君の前で恥はかきたくあるまい
そういつて主上は楽しげに笑われた。

いつものように大将様が姫君様の寝所にいらっしやった晩に、私は姫様がたの御前に呼ばれた。いつものようにお二人お世話をしようとしたが、大将様がお話があるとおっしゃった。

「実はお前に宮中が上がって欲しいのだ」

あまりの急な話には私はピンとこなかった。宮中？ あの、御所の？ そばにいたやすらぎさえもが動きを止めた。

大将様は事の次第をかいつまんで説明された。私の噂が、そんなところにまで伝わっているとは思わなかったので、私もびっくりしてしまう。

「お前の叔母には明日、宿下がりをさせるから、お前の叔母のもとで支度を整えるといい。後宮の中の事は叔母が教えてくれるだろう。私も決して詳しくは無いのでね」

大将様は淡々とおっしゃるが、私にとっては一大事だ。ただ人の中でもいやしい私が、後宮に上がって琴を弾く？

私のような者にとっては御所は天の上にも等しい場所だ。ましてその奥深くの後宮なんて、いくら身内が勤めているとはいえ、まるで別世界だとばかり思っていた。上がるどころか、門前に近づく事も恐れ多いとっているのに。

「私と中納言殿が後ろ盾になっているのだ。お前は余計な事は気にせずに、と言っても、お前が人目を気にしないのはいつもの事だが、思うがままに琴を弾いてくれ。主上もお喜びになるだろう」

そういう噂を耳にしてのご所望じゃ、どのくらい真面目に聞いてもらえるか分からないけれど、まさか帝の命を断る訳にもいかない。あんまり恐れ多すぎる。

そんな訳で私は全くの突然に、御所に上がる事になってしまった。これで世の人々は、一層私の噂を面白おかしく広めてくれるんだろうなあ。

「あなたのお父様に、雅楽の日のご衣裳と身の回りの物をお願いしなければなりませんね」

叔母は突然の事にうるたえながらも、私の仕度を手伝ってくれた。

「ご衣裳は前日までに役人の手元に届くように手配しましょう。お化粧道具は今の物で事足りると思いますよ。あなたの身元を証明する書面は、明日、御所で、役人に渡しますから、忘れないようにね」

さすがに普段御所に勤めているだけの事はあつって、速やかに支度が整って行く。

「こんな突然の事に、色々手をまわしていただいて」

私は叔母に礼を言おうとしたが、叔母がさえぎった。

「いいえ、とんでもないわ。これは私がお仕えする、更衣様にとつても、大切な機会になるの。ここ最近では中宮様（皇后）のご威勢がとても強くて、他の女御様は皆、かすみがちだったし、まして更衣でしかないうちのお姫様には、長らくお渡りもなかったのよ。あな

たの事がきつかけになって主上が梅壺にも、こまめに通われるようになったら下されば、こんな目出たい事は無いわ。あなたには是非、頑張ってもらわないと」

頑張れって、言われたって、あちらは噂話の好奇心で、私を見せものように考えてるっていつのに、私が何を頑張ればいいのか。そんな期待を背負わされても困るんだけど。

そうは思ったが、お世話になってる以上口にも出せず、私は叔母に言われるがままにあれこれと準備を整えていった。

正直、話を聞いた時は「御所ってどんなところだろう?」と、こちの好奇心も掻き立てられたが、叔母にいきなり妍を競う話を聞かされて、ああ、またそういう世界が見えてしまうのかと、夢が一つ壊れた気分がしている。

果して私は御所で、いったい何を見せつけられるのだろうか?

御所

叔母に連れられて初めて訪れた御所は、ただただ、広いところだった。新参者が一人で入ったりしたら、間違いなく迷って出られなくなってしまうそう。

中納言家も大きなお屋敷だし、大納言家も外から見ると、塀がどこまでも果てなく続くような、広大なお屋敷だ。

ところが御所となると、もうこれは町が一つ、いや、三つ四つはあるのと同じで、そういう部分では大納言家にも似ているのだが、中に、古木がたくさん見受けられて、まるで森のようなところが沢山ある。

庭の一つ一つも大きく広くて、その中に巨大な建物が、いくつも連なっているのだ。女車の中で叔母が指さす。

「紫宸殿は、国の政事が行われている場所よ。帝の詔もここで下されるの」

牛車は奥へと入っていく。

「ほら、ここが主上がお住まいになられている清涼殿よ。向こうに女御様方が暮らすそれぞれの御殿が見えるでしょう？それから梨壺、桐壺、梅壺」

叔母は次々と案内してくれるが、私は御所の巨大さに呑まれて、まるで耳には入っていない。

それにここはすべてが古めかしい。京の都が作られてから、ここ

は国の中枢だった。その歴史が脈々と生きている事が感じられる建物だ。御所の中には鬼が済むという世間の噂も、成程これならば、と、思わせるものがある。古めかしい建物に巨大な森。夜、とても一人では出歩けまい。

私達は真つ先に梅壺の主である、梅壺の更衣様にご挨拶に上がった。

更衣様は小柄できゃしゃで、おとなしやかな、いや、もっとはつきり言えば、気の弱そうな方だった。何と云うか、覇気がない。こんな広大で古めかしい御所の中で、ひっそりと隠れるように生きている感じがする。

多数の女御、更衣が妍を競っている後宮に暮らしているのだから、もっと、堂々と、きらびやかにしている方かと思ったら、随分地味な印象がある。中納言家の一の姫様もおとなしい方ではあるが、ずっと明るく、生き生きとしておいでだ。お歳はこちらの方の方がずっと上だろっけど、性格は正反対なようだ。

申し訳ないけれど、私は最初の印象で「うっとうしい方だなあ」と思ってしまった。これじゃ、主上の足も遠のくわ。

ただ、私を基準にしたら、すべての女人がおとなしい人になっちゃうんだろっけど。

かけていただいたお言葉も

「雅楽まで日がないけれど、よろしくお願いするわ」

と、言ったきりで、たいして表情も変わらない。そっけない方だなあ。私の噂のせいかしら？

そういえば他の女房達も、何となく身を固くして、ひっそりと暮らそうとしているように見える。のびのびとしたところがない。ここで十日以上も暮らすのか。私はうんざりしてきた。

ところが私の気を引きつけるものがあつた。庭だ。梅壺の庭はその名の通り、美しい梅が咲き乱れていた。

パツと目につく紅梅は勿論、清廉な白さが光る白梅も今が盛りとばかりに咲き乱れている。

室内には梅花香の香りがたかれているが、この香はそれだけではない、きつと外には自然な梅の香りがいっぱい広がっているに違いない。私は嬉しくなって挨拶がすむと御簾から出て、御格子をあげ、縁に出ると思う存分庭の様子を満喫した。

紅白それぞれに幾本も咲き乱れる梅、広がる香、美しいやり水と池。そよぐ風と暖かな日の光。池の周りには、苔むす岩が彩りを添え、水仙が咲いている。私は庭に出ようと足をのばしかけた。

「まあ、何をなさるんです！」
何処からか厳しい声が飛んできた。

見れば白髪の、年老いたいかにも古長けた古参の女房と言った感じの女人が、私を睨みつけていた。叔母の顔色には、はつきりと「

まずい」という字が書かれたような表情が浮かんでいる。

「何って。ちょっと庭に出てみようかと思ったんですけど」

「今時の人は、平気で端近によって、困る困ると思っただけですが、よもや、縁に出て庭にまで出ようとする方がいよつとは思いませんでした。世の中乱れるにもほどがあります。あなたのご両親はどんなご教育をなされたのやら」

私はかなり、むっとした。女人の教育は、乳母めのや、召し使う者よりも、両親の人格が現れやすいものと世間では言われている。だから両親の育て方を非難されてむっとしない女人がいたら、私は顔を見たい。

「お見かけしない方ですが、あなたが新参の方ですか？」

「本日から、この叔母の使い走りに使われることになっている、花房と申します。女雅楽の琴を弾くことにもなっていますので、よろしく願います」

私の挨拶を聞いて、古参の女房は、ますます嫌な顔をした。

「ああ、あなたが。お噂はかねがね伺っております。あなたは運がよろしいわ」

「は？」

「この私の居る、梅壺につかえる事が出来るのですから。私は梅壺の更衣の乳母で、小侍従と呼ばれています」

「乳母？ あなたが？」

言ってしまったから失礼だと気が付いた。が、もう遅い。だって、白髪の彼女がまさか若い更衣様の乳母だなんて想像が出来ない。じやあ、更衣様の乳兄弟の方は、この方のおいくつの時の子なんだろう？ そんな私の顔を見て、小侍従も察しがついたらしく、すかさず言う。

「これでも私は姫様と、そのお母さま、自分の子供も六人を育て上げた、乳母の中の乳母です。乳の出も、それは豊かなものでした。今でも女人として現役です。慎み深い女人というのは、いつまでも現役でいられるものなのです。あなたにも、女人としての生き方をじっくりと教えて差し上げましょう」

これは相当うるさそうな方だ。人に小言を言うのを生きがいにもしていいそう。それにしても

「現役、現役って、要は男君が切らさずにいたって事じゃない。どこがつつしみなんだか」と、口に出してしまう。

勿論、小侍従は聞き咎めて

「あなたには、目上の人間への言葉の使い方から、お教えする必要がありそうね」と、私を睨みつける。

「良いですか？ この梅壺は、古式ゆかしい暮らしぶりこそが似合うのです。あの、麗景殿とは違うのです。あなたは御所の事などなにもご存じではないでしょうから、私が一から教えて差し上げます。女雅楽の時までには、あなたも素晴らしい貴婦人となられますよう」

麗景殿とは女御様の住まわれる御殿の一つで、今は、大納言様のご長女が、中宮としてお住まいになられている、現在の後宮の中心となっているはずのところだ。

中宮様は半年ほど前に男御子を無事、お産みになられ、今度の女雅楽の折に、宿下がりがりされている御実家の大納言家から、御所に戻られることになっていた。でも、なんでここに、麗景殿の話が出て来るんだらう？

「あの、花房はまだ、こちらに着いたばかりで、私の局に案内もしておりませんので、この辺で失礼させて頂きたいのですが」

叔母がいつまでも小言が止まらなくなってはいけなと思ったのか、小侍従の話に割って入ってきた。

「そうでしたね。では、一旦下がってよろしい。夜にはまた、参上するように。一度、その琴を聞かせてもらわないと」
そういつて小侍従は私達を解放してくれた。

でも、私は小侍従がさつき言った言葉の方が耳に引つ掛った。私を貴婦人に仕立てようなんて、以外に大胆な事を言う人だ。

私の噂が届いている以上、私の父の身分がどれほど低いかは、真つ先に伝わっているはず。

つまり、私をどんなにしつけた所で、所詮は下司の子。誰に感謝される訳でもないだろう。むしろ、私にはあまり表に出ずに、おとなしく引つ込んでいてほしいとは思っても、自分が恥をかかない程

度のしつけさえすれば、そんなにかかわりたくないというのが、本音のはず。でも、小侍従は（あれが嫌みでなければ）本気で私をしつける気持ちがあるようだ。

「どうやら彼女は貴族としてはかなり珍しく、身分で人を判断しない人らしい。案外悪い人じゃなさそうだ。」

私と気が合うかどうかは、全然別の話だろうけど。

叔母の局に着いて一心地つくと、私は早速尋ねてみた。

「ね、なぜ、小侍従さんは急に麗景殿の話を持ち出したりしたの？」

「こちらの更衣様に長らく主上のお渡りが無かった話はしたわよね？ 実はお渡りが途絶えたのは主上が中宮をお迎えになってからなの。小侍従の君はそれをとても気にしてらっしゃるのよ。」

「それは、主上と中宮様の気があったからじゃないの？ 御夫婦なんだから、相性ってあるもんでしょ？」

「違うわよ。もちろんお二人の御相性もあるのでしようけど、主上は大納言家の大将様と、大変仲の良い御学友なの。中宮様はその大将様の姉上に当たられる方なので、主上は一層、中宮様へのお渡りが多くなるみたい。それに大納言様のご威勢も大変強い物があるから、他の女御様もお父様方の事を気遣って御遠慮気味になるのよ。ましてうちのお姫様は更衣でいらっしゃるから、女御様方を差し置くような真似はできないしね。それに」

「それに？」

「こう言っちゃ失礼だけど、梅壺の更衣様の御実家は、あまり経済的に恵まれている方じゃないわ。お母上は皇族の出だから女御様でいらしてもいいくらい血筋は申し分ないけど、御父上は先の帝にかかわっていらつしやった方だったから、今では政治的権力は無いに等しいし、財力だつて……。実はあなたのお父様の援助に頼つてらつしやる所も大きいのよ。表には出せないけどね。だからせめて、きらびやかで華々しい、中宮様に負けないように、つつましかで品のいい、皇族らしいお暮らしを小侍従の君は更衣様にお求めになつているの。私達にもね」

それで、みんな、あんなに縮こまるように暮らしているのか。ああ、うつとおしい。

「だから、大将様とゆかりのあるあなたの事を、みんな、どこかで気にかけているの。あなたによくない噂がある事は知ってはいてもあなたの存在が、更衣様のお立場を強くしてくれるんじゃないかと心の中では期待しているのよ。あなたには飛んだ災難でしょうけど、あなたが梅壺の切り札になつてもらえる事を私も期待しているわ。どうかあなたも大将様の気を引いて頂戴ね。無理なお願いをしているのは分かっているけど」

無理を承知のお願いが、どうやら私には付きまとうものらしい。私は自然にため息が出てしまった。

更衣の涙

夜の参上まではまだ時があると、叔母の局で私達はくつろいでいたが、突然、役人が来て

「今夜は梅壺に主上がお渡りになります。命婦の方にお付きになられている方にも、お琴のご所望があるうかと思われまますので、そのおつもりでお支度下さい」と告げていった。

早速に主上のお渡しとは。帝はなかなか好奇心旺盛な方らしい。

私達は大急ぎで、失礼のないように身支度をした。おかげで琴の調子を見る暇さえなかった。

暇がないのは小侍従も一緒に、久しぶりの主上のお渡しという事で、人に言っただけを片づけさせたり、自ら更衣様の身支度を整えて差し上げたりしている。私に声をかける暇など無さそうだった。

間もなく先づれの声が出て、お使者が帝の到来を告げる。そして主上が古式ゆかしくお渡りになられた。

さすがの私も、主上をお相手に、顔をあげていられるほどの肝は無く、おとなしく深く頭を下げていた。

「こちらでは素晴らしい琴の名手を迎えられたようですね。楽しみにして、公務も手に着かず、うつけたようになってしまいました」
そう言っただけで笑われているのは、おそらく主上だろう。

「ま、そのような諧謔（かいぎやく）、冗談（じゆたん）をおっしゃって」
そう答えている声は小侍従。

「本当の事です。私は梅壺の方のように、聞きわけの良い人間ではありませんから。年下の大将などにいつも諫められているのです」

「大将様もご一緒でいらっしやられるなんて、お久しゅうございますわ」

これを聞いて私はぎくりとした。大将様まで来ているの？

「少し、宿直が無かっただけで、久しいとは大げさだな。あなた方も、時には御簾の外に出てきて下されば、もっと、お話もできるんだが」

確かに快活な声をあげているのは大将様だ。

「女人の身でそのような訳にはいきませんの」

小侍従らしく、冗談にもそのまま真つ直ぐに答えている。固いなあ。

「私は梅壺にはめつたに用がありませんからね。今日も主上に引つ張り回されてしまつて。後で大納言家に宿下がりにしている姉上の所にも顔を出さないと、ひんしゆくを買いそつですよ」

そうか。大将様は姉君が中宮になられているんだから、後宮には仕事でなくても頻繁にいらっしやっているんだ。知り人もいっぱいいるだろうし、これじゃ、梅壺から出て歩いたら、いつ、ばったり会つてもおかしくないわ。大将様も、結構型破りな方だから。

「いやいや、こちらの名手の琴と大将の笛を、どうしても合わせて聞いて見たかったんですよ。それが叶わぬうちは私は仕事を呆けたままになりそうでしたから」

大将様の笛と合わせる。それも即興で。やはり、主上は好奇心がお強そうだ。

帝と聞いて、ついつい天上かなたの方と恐れ入ってしまったが、考えてみれば、主上も聴衆の方のおひとり。果してこの方は楽の音から何かを導き出そうとしている、心ざまの深い方か？ それとも好奇心に駆られただけのただの男君か？

「大将が女君と合奏する顔も眺めてみたかったものだし」

きまり。ただの男君。私はそう、判断した。

「して、その琴弾きは、どちらにいますか？」

主上はそういって女房達を見渡した。

「私です。私が命婦に付きしたがっている、琴弾きです」

私は真つ直ぐ、顔をあげた。たとえ主上と言えど、私は扇を使わない。主上が私の演奏をご所望なら、主上は聞き手。他の聴衆の方と一緒にしろ。私は琴弾きである時にはへりくだる必要はないと考えた。

「花房。扇はどうされました？」

たまりかねたのだらう。小侍従が聞いた。

「私、琴を弾く時には、扇は使いません。たとえ聞いて下さる方が、どなたであろうとも」

私ははつきり言った。

私の噂通りの態度に、主上は一層好奇心むき出しの顔をされる。そのお顔は明らかにこの状況を楽しんでいらっしやる。

「私の琴を、大将様の笛と合わせてお聞きになりたいとのことですが、さっそく演奏させてもらってもよろしいでしょうか？」

「勿論です。今夜はそのためはこちらに伺ったのですから
主上は何心もなく、明るくおっしゃる。」

すぐそばの御簾のうちには、長らくお渡りが無かった、更衣様がおられる。そんな事は一向にかまっていらっしやらない。私への好奇心が勝ってしまわれている。

よおし、それなら。

「では、大将様。この曲は御存じですか？」

そういいながら、私は大将様の隣に行つて、そつと耳打ちをする。大将様は、一瞬、驚いたお顔をしたが、私の顔を見て、にっこりとうなずかれた。

私達は早速演奏を始めた。曲は「想夫恋」。妻が夫を慕う物語の伝えられる曲だ。

私は以前のような大胆な弾き方などしない。あくまでも優しく、そつと、妻が夫に寄せる心はこんなものであるうかと、たおやかな響きが人の耳に残るように弾いていく。大将様は、私の琴の音を煩わせないように、静かに笛の音を添えて下さった。私も琴に、悲しみの哀切を添えて演奏する。

すると、演奏に聞き入っていた更衣様のすすり泣くお声が聞こえて来た。御簾の内側に居られるので、私達にはお顔は見えないが、更衣様は明らかに泣いていらっしやる。

主上の角度からなら、そのお涙はおそらく見えておられるはずだ。啞然とその姿に見入られているようだ。

やがて、演奏が終わると、主上は御簾のうちに入られた。更衣様の元に寄り添われる気配がする。

「今宵は梅壺の方と、積もる話がありそうです。二人でゆっくりしたい。大将には下がってもらっていいか？」

御簾のうちから、主上のお声だけが聞こえた。

「勿論でございます。私も、帰りまして姉上のご機嫌伺いに参りますので」

大将様も、そう、御答えになった。

それを合図に、皆、そつとその場を離れていく。私も叔母につき従って、その場を離れた。

そのまま叔母について、局に戻ろうとしたが、行く手に大将様が

立っていた。

「先ほどは失礼いたしました」

そういつて頭を下げて、私は叔母とともに通り過ぎようとしたが、大将様が、袖で私の行く手をさえぎってしまう。叔母は目くばせをして、そのまま行ってしまった。いや、それじゃ、困るんだけど。

「先ほどは、良い機転を利かせて下さいましたね。これで梅壺の方の面目も、おおいに立ったことでしょう」

「たまたまです。主上がおおらかなお人柄でいらしたから。もし、御怒りを買っていたら、面目どころではありませんでした」

私はそう言つて、するりと身をかわしてその場を離れた。

それでも私は軽く振りかえり、大将様にそつと会釈をする。大将様が私の考えを察して下さらなければ、さっきの演奏は成り立たなかつたのだから、感謝はしているのだ。大将様も会釈を返して下さいました。

大将様も急ぎ足でその場を離れて行く。きつと、姉上の中宮様への御報告に、大納言家に戻られるのだろう。

その夜、寢床に着いてから、私は眠れなくなってしまった。急に自分のしたことの大胆さに気が付いたので。

本当に主上がおおらかな方でよかつた。良く考えてみれば、顔も隠さず、あんな皮肉な選曲をした私は、あの場で御不興を買つてつまみ出されてもおかしくなかつたのだ。

そうならば、梅壺の更衣にも害が及んだかもしれないし、叔母の立つ瀬もなくなってしまうていたに違いない。

あの場では、主上がちょっと無神経な方に思えたし、あんな風に無視されて咎め立てもしない更衣様も、情けないような気がした。おまけに大将様がいらっしやったから、私もつつい、強気になっていた。

でも、相手はこの国の帝。お言葉一つで、私はどう扱われても仕方がなかったはずなのに、主上はお咎めにはならなかった。主上も一見、無神経に見えたけれど、きっと、御心のうちはお優しい、素直な人柄の方なのだわ。

そういう方にあんな態度をとってしまうなんて、浅はかだった。

私は一晩中後悔して、良く眠れぬまま朝を迎えていた。早く支度をして、更衣様に謝らなければ。

ところがそんな朝早い時間に、叔母の局に女官が訪れた。叔母は大いに慌てていた。その女官は主上に直接仕えている、尚侍といないしのかみう大層位の高い女官が、召し使ってらっしやる方なのだそうだ。その方から叔母あてに、美しい桂（うちぎ、女性の衣装）が贈られた。

「これは。主上から花房に下賜されたものだわ。まあ、まあ、大変。こんな名誉な事があるなんて」

叔母はうるたえながらも、私にお礼の手紙を書かせ、こういう時にちょうどいい、儀礼的な歌をつけて、女官に散々へりくだりながら手紙を渡していた。私は呆然としている。

「表面上は尚侍から、私への贈り物に、あなたがお礼をしたことにしているけれど、彼女は主上のお使い役よ。彼女があなたにお渡し下さいと言ったのだから、間違いなく、これは主上からあなたに贈られたもの。これは大変な名誉だわ。あなたのお父様に、さっそくお知らせしなくては」

何だか、叔母の方が舞い上がっていた。

この話は宮中にパツと広がった。私は初日の緊張で気付かずにいたのだが、私の事は後宮に住む人全てが注目をしていたらしく、昨日からの一連の話が、宮中の話題をすっかりさらって行ったらしかった。

そんな注目を一身に浴びたまま、私は更衣様の元に参上した。

小侍従は苦虫をかみつぶしたような顔をしていたが、更衣様は昨日とは打って変わった晴れ晴れとした面持ちで、私に近くに来るようつと言った。

「昨夜はあなたのおかげで、主上と本当に久しぶりに、ゆつくりとお話が出来ました。主上は、中宮や、大納言様に気をお使いになって、麗景殿にばかり足をお運びになっていたのではなく、最近はず世の中の乱れが激しく、御公務でも、お気を回さなければならぬ事が多いので、つい、お親しい大将様がよくいらっしゃる、麗景殿の方に足が向かいがちになるのだと、おっしゃってくださいました。決してあちらの華やかさにひかれるのではなく、心をくつろがれる

時間が欲しくて、同じ方にはかり通いがちになっていらつしやうた
そうです」

ふうん。男心と言うか、主上の様なお立場の方のお心と言うか、
そういうものは分らないけれど、やっぱり精神的なお疲れがある
時って、立場的な気遣いをしなくてすむ所に自然と足が向いてしま
うんだろうな。特に、中宮様の弟の大將様は、主上とお親しくなさ
っているみたいだし。

「でも、梅壺にも、華やかさとは違う、落ち着いた静けさと、丁寧
な心づかいがあるとおっしゃってくださいました。私は自分と、
この梅壺が地味であることを気にしすぎていたようです。あなたの
琴のおかげで、私は素直な自分を主上に知っていただけました。本
当にありがとう。主上もあなたには感謝しているそうですよ」

更衣様はそうおっしゃって、ご満足そうな頬笑みを私に向けて下
された。

昨夜は、完全に勢いに任せてしまっていて、浅はかな行動をとっ
ていた私としては、こう、臆面もなく褒められても、居心地の悪い
物がある。

でも、更衣様が御満足して下さっているなら、これでよかったの
かな？

人気者

更衣様が御満足なようなので私は胸をなでおろしていたが、小侍従はそうはいかないようで、

「更衣様はああおっしゃったけど、あなたの身が無事でいらっしやるのは、主上の温情あつてのこと。昨日のあなたのお振る舞いが正しかったとは私には思えません。一つ間違えれば大変な事になっていた事を、あなたには分かっていただかないと」と、さっそくお小言が始まった。

「それは、私も反省しています。今朝は更衣様にお詫びに上がるつもりでしたから。正直に言つと、後から怖くなりました。何事もなくて良かった」

つまらぬ意地を張つてもしょうがないので、私は本音を伝えた。

「まあ、無駄に舞い上がつてはいないようですね。あなたには大将様の後ろ盾がおりになるから、一層大胆になつておられるのでしようが、そこに頼るのはお辞めになるべきです」

「別に頼っているつもりは」

「いいえ。あなたはやっぱりお若い。相手に悪意がないと感じると比較的すぐに安心してしまふ。まだおわかりにはならないでしょうけど、公達（公家の男性）というのは悪意は無くても気まぐれで時に残酷なものなのです。あなたのように無防備な方は、いつ、面食らうような思いをすとも限りません。女人がつつましやかに生きることにはそれなりの先人の知恵があるのです。女人には女人の知恵がある。それを生かせる方こそが、本当の貴婦人となられるので

す」

へえ。やっぱり小侍従は、世の人々とは少し違うみたい。女人は早く位の高い良い男君に恵まれて、屋根の奥で子供のしつけにいそしむのが一番幸せだといわれているけど、この方は長い乳母勤めのせいか、御所に勤めているせいか、もう少し、理に勝っているところがあるみたい。

でも、私にも言い分はあるわ。

「私の事を心配して下さるお気持ちは嬉しいですけど、私は、世の人々に、伝えたい事があるのです。女人にだって言いたい事、伝えたい事があるというのを、色々な人に知って欲しいのです。他の方々が歌や、しぐさに込める思いを、私は自らの言葉や、琴の音、この姿で堂々と伝えたいのです。女人の名は役職は残されても、名前そのものは記憶にも、記録にも残してはもらえませんか？ 名を隠し、姿を隠し、わずかな歌と、人の口に登った容姿だけを残して、あとは誰とも知られることなく消えてしまっなんて、なんだかさみしい。私は悪口でもいいから、この都に思いつきり、爪痕を残してみたいんです」

「先人の方々が、女人が傷つかず、他の方々も傷つけずに済む知恵を授けて下さっているにも関わらず、あえてそれをしないというのですか？」

小侍従は、あきれた顔で私を見ていた。

「だって、心を閉じ込めて、なにも伝えられずにいれば、やっぱり傷ついてしまうもの。表面が穏やかでも、物言えぬ自分が、自分を傷つけるんなら、意味は無いわ。私が琴を弾く時は、誰かに何かを

伝えたい。そのためなら、中納言様や、大将様の後ろ盾だつて、利用するわ」

小侍従は軽くため息をついた。

「あなたは大人や、男君を利用してはいるつもりでしょうけど、人は利用するものでもされるものでもありません。若い女人のあなたは必ず情が上回ってしまう時が来るでしょう。その思い上りが大切なものを失うことにつながるかもしれないよ。あなたが姿を隠さない事をとがめるのは控えましょう。けれど、もつと良く考えて行動できなければ、あなたが私に何を言つてこようと、私はあなたを認めませんからね」

そう言つて小侍従は、私に自分の扇を渡してよこした。これだけは使えということなのだろう。

小侍従にはお冠を受けた私だったが、宮中では、私はすっかり有名人名人になつてしまつていた。

もうすぐ御所に麗景殿の女御がお帰りになると他の女御、更衣様方が、戦々恐々となさつてゐる所に、宮中に着いたその日に主上の関心を惹き、大将様と合奏をし、主上と更衣様の御夫婦仲を深めて、主上から桂を下賜された。

そんな私の大胆な行動で梅壺の更衣様のご注目度が、いっぺんに上がることとなつた。

他の女御様方は、うらやむやら妬むやらで、梅壺の琴弾きはなか

なか機転の利く、はしっこい女人。主人を立てるのがうまい、やり手の女人。そんな評判が立っているらしい。

梅壺の女房達は、皆、私をほめそやしてくれたし、他の御殿の女房方も、私に注目しているという。

人に褒められて悪い気はしないが、今朝方まで「やり過ぎた」と後悔していた私は、ほっとした気持ちに先に立っていて、それほどしてやったりという気分にはなれなかった。

それがかえって誤解を生んだらしく、私は世間の噂よりは奥ゆかしさがある女人、ということにもなったらしい。

おかげで私は宮中で、ちょっとした人気者になる事が出来た。

皆に受け入れられてみると、宮中はとてもおもしろおかしいところだった。

大きな邸で深窓の令嬢や、北の方様などに使えるのは、情緒あふれる「もののあわれ」が感じられる暮らした。

それも勿論、素敵な事なのだけれど、宮中はもっと刺激的で、社交的な場所。「おかし」を感じる暮らした。

御簾のうちからそうそう出られないのはここも同じなのだが、何せ御殿の広さが違う。召し使えられている女房も数が多いので、それだけでも華やかだ。

それぞれの御殿が妍を競っているだけあって、女房の衣装も華がある。宮中は流行りごとの発信源でもあるから、みな、それぞれに工夫を凝らしているのだろう。

確かに梅壺はそういう意味からすると少し地味なところはあるが、古風な梅を基調とした統一感があつて、落ち着いたたたずまいが感じられる。寄せ集めた華やかさとは違う、しっとりとした趣があつた。

そして、主上につかえる女官たちが、清涼殿に彩りを添えている。何をするにも御所に伝わる、古式ゆかしい習わしがあつて、普通のお屋敷とは違う雰囲気がある。

そついう、女房や女官、彼女たちに使われる、私達のような少女たち。それだけの女人達が活発に仕事をこなすのだから、そこに生まれる社交も華があつた。

互いの衣の重ね方を指摘し合つたり、刺し色の話に興じたり、流行情の和歌を教え合つたり、恋の話にも花が咲く。何よりも噂話やしやべりに興じるのには、最適だった。

そう、誰それは恋仲と噂も立つはずだ。ここには殿上人の公達達も集まってくるのだから。

お邸では公達達は邸の主として君臨するか、客人としておもてなしを受ける人々だが、ここは彼らの職場でもある。そして後宮は社交の場所でもあるのだ。

御簾を一枚挟むとはいえ、共に物語を楽しみ、歌を詠み、楽を奏で、諧謔を楽しむ。扇で顔を隠してはいるが、御簾の外へ出て事務的なやり取りだってする。こんな世界は初めてだ。

その公達達が、噂の私と一言言葉を交わしてみようと、叔母の局や、ひさしの近くを訪れて、私を待ちうける。

彼らは私にお世辞を言ったり、嬉しがらせたり、からかって見せたりする。何とか私の顔を、外にさらけ出させようと、あれこれ言っっては持ちあげて来る。

私も楽しくて、つい、乗せられそうになるのだけれど、小侍従の扇を目にすると、何となく心配してくれている彼女に申し訳ないような気がして、なんの意味もない時に顔を晒すのはやめようと思いなおす。

そのせいで、初めほどには「噂ほど大胆な女人という訳でもない」と、口の端にのぼる事も少なくなった私だったが、彼らと物怖じすることなく冗談を言い合ったりする私に、別の面白みを感じるらしく、公達達は私に声をかけるのをやめずにいたので、結局私は宮中暮らしを十分に満喫した日々を送る事が出来ていた。

それでも私の身分の低さを陰であれこれいう人たちもいたけれど、ここまで身分が低ければ、かえってもの数には入らないので、誰も私に干渉する人などいない。唯一苦言を言うのは小侍従だけだ。

女雅楽の練習も、それぞれの御殿から腕自慢の人たちが集められているだけあって、とてもやりがいのあるものだった。

田舎育ちの私は、もともと都で女房勤めをしていて、大変琴が得意だったのだが、結婚して夫につき従って武蔵の国に来ていた女人に、琴を一から教わった。

でも、あまり他の方の演奏を見聞きする機会が多くは無かったので、どうしても彼女の癖がうつってしまい、さらに私の性格からか自己流になってしまっていたので、こうして大勢の方々と練習するだけでも、いろんな事が解って楽しかった。

女雅楽はお帰りになる中宮様をお慰めするためのものでもあるので、麗景殿で行われる。

そのため、取り仕切っていらっしやるのは、あの、大将様だ。ばったり出会うどころか、毎日顔を見る羽目になった。

そこは少々ばつの悪い物ではあるけれども、大将様が笛を合わせを試みたり、童殿上している子供達も一緒に、太鼓をたたいたり、笙を吹いたり、大きな琵琶を懸命に支えながら弾いたりするのも、賑やかでかわいらしかった。

大将様は後宮の人気者らしく、どこに行っても誰かしらからお声がかかってくる。

特に美しい女房の方などが、大将様にお声をかけると、大将様もわざと私に見せつけようとなさっているのが分かる。この方にそういうかわいらしいところがあるとは思わなかったので、そんな事も私には楽しかった。

しかも、私と梅壺の更衣様を大将様が常に気にかけているという

ので、更衣様も自然と皆に注目されていた。

決して華やかな、活発な方とは言えない更衣様だが、さすがは皇族の血をひかれるだけあって、どこか気品がおりになる。昨日今日付け焼刃ではない、奥ゆかしさがあつた。

初めにお会いした時は、心を閉ざされていたせいも、小さく固まっ
っているような印象を受ける方だったが、それは主上のお渡りがな
くなつたにもかかわらず、中宮様に対抗しなければならぬという
重圧から来るものだったらしく、そこさえ和らげば、この方も、お
優しい、控えめで落ち着きのある方のような。

このような方に華やかな暮らしはかえって肩がこるんだろうな。
注目されるのはいいけど、かえってご負担にならなければいいんだ
けどな。

そうは思いながらも、私は御所暮らしの楽しさに、すっかり浮か
れてしまっていた。ここが妍を競うのは、男君たちの思惑が絡んで
いるのだという事を、すっかり忘れてしまっていた。

そう、ここはあくまでも、後宮政治という、政治の世界だったの
だ。

後宮政治

女雅楽の日まであと二日と迫った日に、梅壺の更衣様の御父上様がお役目をしばらく謹慎することになったとの知らせが入った。誰も寝耳に水の事だったので、驚き慌てていた。

梅壺の女房達は、皆、知らせを伝えに来た役人に詰め寄った。役人も小さくなりながら答える。

「ですから、先日、ある権門のお屋敷に押し入った強盗が、前帝とつながりがあつたようなんです」

「でも、更衣様のお父様は、今は前帝とは何の御関係もないんですよ。それなのに、なんで今更、御謹慎をしなくてはならないんです？」

小侍従が役人に一層詰め寄る。

「今は御関係がないとはいえ、強盗の一味には、更衣様の御父上が昔召し使っていた者がおりましたので、やはりここは御責任を果たす意味での御謹慎ではないかと思われませんが」

「そんな！ もう、何年も前に勝手に行方をくらました者のために、責任を取れとおっしゃるんですか？」

「しかし、これはもう決まってしまったことですので。ですから、こちらの更衣様にも、今度の女雅楽が済みましたら一旦、お里下がりなさせていただくようにと、大納言様の仰せです」

「大納言様の……」

誰もがこれでピンときたに違いない。

最近、更衣様の注目が後宮内で上がって来ている上に、ここ数日、主上のお渡りも続いている。

女雅楽の日は、当然主上は中宮と過ごされるだろうから、その翌日に更衣様を御所から遠ざければ、梅壺の勢いは明らかにそがれるだろう。ましてあちらには、東宮となられるであろう生まれたばかりの男御子をお連れしての御所入り。梅壺の作りだした雰囲気など、あつという間に掻き消されてしまふに違いない。

所詮は後宮政治。やはり陣の座の権力は大きい。結局は力がものを言う世界なのだろうか？

大納言様もこういう時には人も無げな事を容赦なくやってくるよ
うだ。

殿方達の世界はそういうものなのかもしれない。追うも追われるも、勝つも敗れるも、当人達の時流の読み次第。いうなれば本人の実力なのだろう。

しかしそのために送り込まれて、一生を決められてしまった、更衣様はどうなるのだろうか？

このまま御所の奥深くで、ひっそりとお暮らしになれというのだろうか？

そうでなくても更衣様は御父様の後ろ盾がおぼつかないお立場だ

った。自らのお血筋と主上のご寵愛だけに頼るほかにない状況に追い込まれている。それなのに肝心の主上との御愛情にまでこんな政治的圧力がかかって来たんじゃない、立ち打ちのしようがないじゃない。

私は頭にきた。

癪だけど。本当に悔しいけれど、私は大将様に手紙を書いた。本来なら女人は手紙を待つもので、先にこうして手紙を送るのはかなり関係が深くなってからの事だ。こうやって、事実上の親しい関係を裏付けていくのは、女人の私には不利なのは分かつてはいても、一言文句を言わずにはいられなかった。大将様は大納言家のご長男。今度の事をどう思っているんだろう？

前帝が怪しい者たちと付き合いがあつて、色々と利用しているのは前から分かつていた事。私がさらわれた時などは、事情を知っていた女房が自害して、直接かかわった男が一人、斬り殺されたのをいい事に、その時の陰謀も、前帝達の存在も、大納言様方にもみ消されてしまったはず。

それなのに今回は、更衣様の御父上様からとくに手元を離れて行方知れずになっていた男が、前帝を頼って強盗を働いていたという、まるで筋の遠い罪で御父上様を謹慎させてまで、更衣様を主上から遠ざけようとしている。これって職権乱用じゃないの。いくら都の安寧のためとはいえ、更衣様に対して思いやりがなさすぎる。

お立場についてはともかく、主上との絆まで断とうとするやり方はひどいじゃないの。

私の手紙は無事大将様に届いたらしく、返事を待つまでもなく大

将様自らが、叔母の局へとやってきた。

「大納言様はひどいじゃないの。なんでこんな無法な事がまかり通るのよ」

「あなたのお怒りはもつともですが、今は仕方がないのですよ」

「何が仕方ないんですか？ 大将様だつて、この間の合奏の時には更衣様の面目が立ったと言つて下さつたじゃないの。ようやくお二人のお心が繋がりがかけたというのに、どうしてこんな真似をなさるんです？」

「それは、更衣様が皇族の血を継いでらつしやるからです」

大将様は説明した。

「今、都は大納言家の力によつて、ようやく人心が一つにまとまっているところです。前帝の世では、人々の心が落ち着かず、政事は滞つてばかりでした。今はそれに取つて代わつて大納言家が都を統率しています。それでも、世には盗賊や人さらいがはびこり、さらに、前帝の悪事に人々は脅えている。それが今度は大納言家への不満となつて現れ始めているのです。それを抑えるためには、大納言家は絶大な権力を維持しなければなりません」

「それと、更衣様と、どう関係があるのよ？」

「更衣様のお母様は皇族のご出身。御父上も今は権力を失つてはいませんが、もともと身分は低くありません。そんなお血筋の更衣様の元へ、主上が頻繁にお渡りになるようになった。これが続いて、今、更衣様に男御子がお生まれにでもなつたら、どうなると思ひますか？」

「あ……」

ここまで言われて頭に血が上っていた私にもようやく理解できた。

中宮様は大納言家のご長女。権力は絶大だし、御身分も悪くはないが、皇族の方との血筋は近いとは言えない。女御様の下のお立場とは言え、純粹に血筋の良さを比べれば更衣様の方が上になってしまふ。

それにお生まれになった男御子もまだほんの赤ん坊。更衣様が男御子をお産みになれば、これはお歳の近い東宮候補がお二人になってしまう。まとまりかけた人心が、また二手に分かれないとも限らない。

「更衣様のお立場は分かります。本来そのために後宮に上げられたのですから。世が前帝の時世のままなら、華やかにときめかれて、もしかしたら東宮の一方のお立場であられたのかもしれない。もともと更衣様も主上ともお歳が近く、後宮に居られる年数も長いのですから、主上とも幼馴染のように親しみ合っておられたはず。ですから主上も本来は更衣様と睦まじくなさりたい気持ちは持つておいでです。それだけに、中宮の男御様のご成長なさるまでは、我々は油断できないのです」

「では、では、更衣様はどうなるのです？ お父様の後ろ盾も頼りなく、やむなく更衣の身に甘んじて、その上肝心の主上との絆まで断たれてしまったら」

「ご夫婦の絆はそう簡単に断たれてしまうものではありませんよ。我々も主上がたまさかのお慰みにお渡りになるのをお止しようとは思いませんが、頻繁にお渡りになるには今は時が悪いのです」

「そんなの勝手だわ！ お二人のお気持ちはどうなるのよ！」

「姫、ここはそういう場所なのですよ。後宮とは、時流に合わせて調整しながら、次の世代を育成する場所なのです。世の中を安定させるために」

私はこの方に姫などと呼ばれる身分ではない。その私に大将様がそう言ってくるときは、私を説き伏せようとする時だ。まるで幼い子供に諭すような口調になる。

「身分が高くなればなるほど、これは仕方のない運命でしょう。情けを通じると、結婚は、意味が違います。ましてや後宮では世の流れをも変えてしまう。我々は政治家なのです」

政治家。

そういう目で大将様を、ううん。殿上人や公達を見た事は無かった。彼らはただただ憧れの人たちで、本来なら口もきいてもらえないような人たちと、思いがけずこうして言葉を交わせるようになって、私はなんて幸運なんだろうと思っていた。

でも、彼らは確かにこの国を動かしている。彼らが帝に色々な提案をし、意見を交わし、人々の暮らし方や、国のありようを定めて、それを帝が詔として発するからこそ、この国は成り立っている。その意見を通すためなら、殿方達は多少の強引な手立てもためらわず

に使う物らしい。

後宮なんて、世の流れを最も象徴する場所なのかも知れない。

私は大将様を今まで見たことのない、全くの別人を見るような思いで見ていた。

もしも私がそれなりの家柄の姫で、大将様の政敵になる立場に陥れば、大将様は多少のためらいはあるうとも、私を切り捨てるなり、利用するなり、なされるに違いない。それは男君の情としてではなく、冷たい政治家の顔でなされるのだろう。

大将様が何心なく私にお話をされ、親しみを感じて、結婚まで持ち出したのは、私がそう言った事に巻き込まれることのない、身分の低さの気楽さもあつたに違いない。そう考えると何だか裏切られたような気分になる。

「公達というのは、時に気まぐれで残酷なもの」

小侍従の言葉が蘇る。確かに大将様に悪意はない。それでも彼らの政治家としての顔に、傷つけられる女人は多いかもしれない。更衣様のように。

でも、人は人を利用するものでも、されるものでもないと言った、小侍従の言葉はきれいごとすぎるわ。男君はこうして女人を利用しているじゃないの。

何だか私は愕然としてしまい、沈み込んでしまった。

「すいませんが、少し休みたいのでこれで失礼していただけますか？」

私は沈みながら言った。

「分かりました。夕方の琴の練習にはお越しく下さい」

大将様はそういつてその場を離れようとする。

立ち去ろうとして、大将様は足を止めた。そして振り返っていう。

「私は主上と幼い頃から親しくしてきました。主上はそれほど情け知らずな方ではありませんよ。あなたはあまり心配なさらない事です。きつとお二人は、姉上とは違う絆をお持ちだと思いますよ」

大将様が私を慰めようとしてくれているのは分かったが、私はつい、聞いてしまった。

「その絆は更衣様の苦しいお立場を救ってくださるのでしょうか？」

私は沈んだ気持ちのまま、大将様に尋ねた。

「……」

大将様はお返事を下さることなく、衣擦れの音だけを残して、立ち去られてしまった。

視線

「大将はあの琴弾きに、随分責められたようだね」

主上は大将の顔色をうかがいながら言った。

「いえ、どうという事は無いのですが、身分から後宮の事は良く分かってはおりませんし、何しろ気の強い女人ですので」

大将は気を張って、笑顔で答えて見せる。

本当は気の強い花房が沈んでいた事を気に病んではいるのだが、今度の事をもっと気にしているのは当事者の主上のはずだ。

「主上の方こそ、梅壺の方をお里下がりさせられるのは、不本意な事でしょう。心中をお察し申し上げます」

「いや、父親の謹慎中に更衣をなまじ宮中に残しても、私の通いもないままに、心ない視線にさらされるよりは良いのかもしれない。私も更衣には、少し情が傾き過ぎたようだ」

主上も、中宮が不在の間は出来るだけそれぞれの女御方の元へ一通りにお通いにはなられていたが、どうしても更衣様にまで足を向ける機会はそう、多い物ではなかった。

更衣様は主上と最も長く連れ添われている方なので、主上も本当のところはもつとお通いになりたい方ではある。

しかし、今では主上には、中宮の他にお二人の女御様がおられる。お立場から言ったら女御様方を軽んじられる訳にはいかない。更衣

様が女御様を差し置いて、主上のご寵愛を多く受けたとなれば、どんな所から、人のねたみを更衣様が受けるとも限らないし、その父親も難しい立場に追い込まれるやもしれない。

そうになると、それぞれの方のお立場や、様々な人の思惑を考慮しながら通わなくてはならない。中宮様が不在の時は向こうも待つているだろうとは思ってはいても、色々な事情を気にしなければならぬ。

更衣様もそこを気にかけていて、いつも控えめに、一步引いた態度でいらっしやるが、やはり寂しさは現れてしまう。その姿を見ると主上も哀れに思われて、つい、情が傾き過ぎて通いつめたり、それを反省して全く足が遠のかれたりしてしまうようであった。それがかえって更衣様を苦しめるのではあるうが。

「梅壺の方は長く私を理解しているので、私もつい、あの方には甘えてしまった。多少通う事が途絶えても、あの方なら我慢して下さるだろうと思っていた。あの涙を見るまでは。だから、あの方へのお詫びのつもりで、通いつめてしまったんだ。私はかえってあの方を追い詰めたようだ」

「主上のせいでは御座いません。ここはそういう場所です。お二人のお立場ではこういう事が起こるのも仕方のない事でございます。お里下がりまではまだ二日あります。お二人でこゆっくり話し合われるのがよろしいでしょう」

大将もそう言って主上をお慰めするが、生涯を縛られた女人の立場からすれば、このような事に耐えるのは、やはり苦しい事に違いない。同じ女人の花房に理解しろというのも、無理があるのかもしれない。

こういう事で主上が出来る事は殆んどないと言っている。あるとすれば主上のお優しい温情ぐらいのものだろう。

その主上の優しさが、更衣様をお救いする事は出来るのだろうか？

こればかりはお二人の心のうちの問題だ。大將は花房に尋ねられた答えを見つけられぬまま、主上の心情に思いをさせていた。

夕方の琴の練習の前に、私は梅壺を覗いて見たが、やはり皆、元気がない。更衣様の御父上が御謹慎中なのだから静かにふるまっているせいもあるのだろうが、ようやくはなやぎが戻ったところに冷や水を浴びせられたような事態に、皆が沈んでいるのだろう。

私が余計な事をしなければ、こんなに急に更衣様のお立場が追い込まれるような事は無かったかもしれない。私はすっかり後ろめたくなってしまうた。

今日は公達達が、叔母の局を冷やかに来る事もなかった。公達だけではない、誰もが梅壺を遠巻きに眺めているような気配がする。昨日とは打って変わって、手のひらを返したような空気が流れている。

これが後宮というところの本質か。私は梅壺に注がれる痛いまでの視線を感じていた。

更衣様のお立場では、ちょっとした事が起こるたびに、こんな視

線が集まったのだろうか？ これでは最初に更衣様にお会いした時の梅壺の雰囲気もうなずける。皆、普段から慎重にならざるを得なかったのだらう。

初めて梅壺に来た日は、ここをうつとおしいと感じたが、本当にうつとおしいのは、後宮にかかわる政治的思惑と、それに左右されている人々の視線だったんだ。

麗景殿に入ると、その視線はさらにあからさまになった。同情と悪意が私に向けられる視線の中に入り混じっている。皆、私から顔をそむけながらも目でちらちらと様子をうかがっているようだ。

こんな態度を取られたら、いつもだったら黙っていられないところだが、私はすでに更衣様にご迷惑をかけてしまっている身だ。ここで下手な騒ぎを起こすわけにもいかない。我慢のしどころだらう。

おかげで私は大将様に、かなり八つ当たり気味な視線を送ってしまった。これもそれも、大納言家が更衣様を追い詰めているせいなんだからね！ 私は一言も大将様と言葉を交わすことなく、その日の練習を終えた。

「姫、花房の姫。藤花の君」

大将様が私にお声をかけているのに、無視して梅壺に戻ろうとしていると、さらに追いかけてこられた。

「どなたをお呼びですか？ 藤花の君なんて、聞いたことのない名ですこと」

仕方なく私は足を止めて、嫌みたっぷりに返事をした。

「そんなおっしゃり方をしないでください。前に言ったでしょう？
私はあなたのほととぎすだと」

大将様は「やれやれ」といった様子で私の前に立ちふさがった。

確かに以前、大将様は御自分を花房という名の私に寄り添って鳴くほととぎすにたとえられた事があった。

「梅」には「うぐいす」。「紅葉」には「鹿」。「藤の花」には「ほととぎす」。遠い昔からの決った組み合わせ。

そこにたとえて大将様は私に言い寄られてこられたのだ。

「私は自分の蔓枝にほととぎすを泊らせた覚えはありませんけど？」

「まあ、そうおっしゃらずに。二人の時は私はあなたにお気楽に、ほととぎす、とでも呼んでいたきたいのですよ。ですからそんなに怒らないでください。更衣様の事は、私にも主上にも、どうする事も出来ない事なんですから」

なーにが「ほととぎす」よ。一国の帝と、国一番の権力者の息子が、か弱い更衣様一人お助け出来ない癖に。

「どうにもできないのでしたら、私達の事はほつといってもらえませんか？ こうして大将様とお話している事も、ひよつとしたら更衣様の「ご迷惑になるかもしれせんから」

「そう、苛めないでくださいよ。困ったな。実は私はあなたにお願い

いがあるんですよ」

「大将様が、私にですか？」

「私が、あなたにです。あなたにぜひ、琴を弾いていただきたいのですよ。更衣様と、主上のために」

梅壺に戻ると、皆の元気がない中で、小侍従が一人、気を吐いていた。

「こういう時こそ、更衣様のお憤み深さ、気品のあるお過ごし方が物を言うのです。人の目を引くことだけが、女人の価値ではありません。皆、もっと胸を張って、恭しく主上をお迎えしなくてはなりません」

そう言って、逗子の置き方、几帳の下ろし方一つにまで、こまごまを指図をしたりしている。

「けれども、女雅楽が終わればすぐに御所を離れなければならないんですよ。今更気を張ったところで、こちらの更衣様はかすまれてしまふんじゃないでしょうか？」

女房の一人が、そんな愚痴を吐く。言葉にはしないものの、そう思っている人は他にもいるに違いない。

「何をおっしゃるんですか！ 今度の御退出は一時的な事。更衣様はすぐにお戻りになられます。その時に主上に更衣様の事をおなつかしく思われるように、精いっぱい努めるのが私達の役目ではあり

ませんか。ここは麗景殿とは違います。主上を面白おかしく過ごさせ給う場所ではありません。たとえたまさかでも、おなつかしく、心安らかに過ごしていただくところなのです。そこを私達は忘れてはいけません」

小侍従は扇を開いた中からも、目を鋭く光らせて、私達をしつかり見据えながらきっぱりと言った。

ああ、やはりこの方は、心から更衣様の事を思ってお仕えしてらっしゃるんだわ。更衣様の良い所を良く御存じの上で、決して他の方々に劣ることのない方だと信じていらっしゃるのだろう。

でも今宵はこの方から、私の思うがままに弾く琴を、認めていただかなければならない。先日を通り一遍の弾き方ではない、私が魂を込める時の琴の音をお二人にお聞かせしなくてはならない。

そのためなら私はどんな弾き方もする。小侍従はそれを認めて下さるだろうか？

「小侍従さん。今夜は私はお二人のために琴を弾かせて頂きたいと思いますが、私がどんな弾き方をして黙って見届けていただけないでしょうか？ 几帳を立てて、決してそこから姿をあらわしたりはしませんから」

私は真剣にお願いをした。心からお二人のために弾きたいのだという思いを込めた。

小侍従は頷いて、私の願いを受け入れてくれた。

主上が梅壺にお渡りになる。

「こんな時に梅壺にお渡りなんて」と言った、無言の視線が他の御殿から突き刺さってくる中を、主上はかまうことなく訪れて下さる。私達もそれに応えなければならぬ。落ち込んでいる暇など無いはずだ。

まして私は女雅楽が終わったなら、ここを去らねばならない身。ご迷惑をかけた更衣様のために、精いっぱい事をしなくてはならない。

私は几帳の陰に用意された琴の横で、主上と更衣様に深々と頭を下げていた。

「私などの、つたない琴の音ではありませんが、今宵は是非、更衣様にお聞きになっていただきたく存じます」

「私に、ですか？」

「そうです。僭越では御座いますが、大将様から主上が今度の事で、どれほどお心を痛めておいでか、お聞かせいただきましたので、その御心をつたない私の琴の音に乗せて見たく存じます。どうか、お聞き届けいただきますよう」

更衣様も、主上も、しばらく無言でいらしたが、やがて

「その演奏を聞かせてもらいましょう。あなたが語りたという、主上のお心を」

そう、更衣様がおっしゃられて、主上もつなずかれたご様子だった。

「ありがとうございます」

私はお礼を申し上げると、さっそく几帳のうちに回り、琴の音を奏で始めた。

疑惑の目

私の演奏が終わると、お二人とも感慨深げに私にお言葉をかけて下さったが、実は私は演奏に納得はできてはいなかった。

確かに私は大将様から、主上の心情を教えては貰った。そのお気持ちのありようも分からないでもなかった。

でも、やっぱり私には男君であり、この国の帝であらせられる主上の本当のお気持ちは分からない。

以前の更衣様のお気持ちを表す気持ちで弾いた時は、そこに自分だったら、という思いを重ねる事が出来たが、今度はそう言う訳にはいかなかった。思いをはせるにも限界がある。所詮は自己流の解釈だという、納得のいかない部分が残っていた。まるで自分の心に嘘をついたような気持があつて、すつきりしない。

それでもお二人は、私への気遣いだけではなく、本当に何かを感じられて、お二人の心を寄せる事が出来たようなのだ。そこも私には釈然とは出来なかった。

居心地の悪さに、私は一人で先にその場を下がってしまった。

叔母の局に戻ると、局の前に大将様が待ち構えていた。私が先に戻る事を読んでいたようで、私は面白くない。

「女人の部屋の前でどうされたんです？」

「そろそろお戻りになる頃かと思ったので。演奏はいかがでしたか？」

「こちらにも聞こえていたんじゃないやありませんか？ 主上にも更衣様にも、ご満足いただけただけなようです。お約束は果たしました」

琴の音というものは意外と良く響く物なので、同じ梅壺の敷地にいれば聞こえていたはずである。

「そのようですね。ただ、ご自分では満足されてはいないようだ。大将様は私の顔色を見ていった。」

「私などには主上のお心など、図れるはずありませんから」

「そう、おっしゃると思いました。姫」

大将様が、私をまっすぐに見つめられる。

「物事を表現するという事は、決して自分の心をさらけ出す事ではありません。勿論心をこめる以上はそういう部分もありますが、それだけになってしまつては決して人に受け入れてはもらえないのです。私は人に歌を送る時は、その人の事を思います。どんなに儀礼的な歌であつてもです。それが私が歌詠みである時の心のありようなのです。そこには当然私の思いも込められます。しかし、歌とはそれだけではありません」

大将様は、あの、諭すような態度で私に話しかけられる。

「歌とは歌を詠む者と、それを受け取る者がいて初めて成り立つものです。一方的に詠み捨てた歌は歌とは言えない。それはただの独

りよがりでしかありません。こちらがどう思おうが、受け取った側がどう感じるかによって、歌の解釈など変わってしまうのです。こちらが喜びを歌ったつもりでも、相手には悲しみに受取られるかもしれません。しかし、それこそが本当に生きた歌なのです。受取ってくれた人が、何らかの感動を覚える。それこそが歌の価値です。これは雅楽にも言えることではないのでしょうか？」

「受け取った人の感動……」

「そうです。自らの一方的な感情を相手に押し付けて、分かってもらうことだけを目的にしては、そこに本当の感動は生まれません。受け取る人が、自らの人生観や、心情に合わせて感じ入って下さる。そのことこそが大切なのです。あなたは物言えぬ女人の心を伝えるつもりでいるかもしれませんが、それではただのおごりになってしまふ。人の心というのはもっともっと深い物なのです」

「大将様は、私が間違っているとおっしゃるんですか？」

「そこまでは言いませんが、あなたはもっと、視野を大きく持つ必要があるでしょう。それが難しいのであれば、中納言家の姫のお世話だけに明け暮れるか、郷里に帰って父上のそばで暮されるか、さもなければ私の庇護の下で暮らされるのがよろしいでしょう。そうでなければどこかできっと、人の心につまづく時が来るでしょう」

「ご自分は人の心につまづかれた事があるようにおっしゃるんですね」

わたしはついつい、皮肉で返してしまふ。大将様のような方にそんなご経験があるとも思われなかった。

「ありますよ。政事も恋の道も人とかかわらなければ成り立ちません。人の心に流れる感情とはどうにもできぬもの。現に、あなたは私をそでになさったじゃありませんか」

大将様は笑いながらそう言われる。まるで幼子をあやすような口ぶりだ。

そんな風に言われると、私も意地を張ってはいられなくなる。何よりも和歌の道ではこの方は一流の歌人。その方の言葉には重みがあった。

やはり私にはどこかにおごり心があったらしい。さっきの私の琴の音も、お二人がご自分達の立場に重ねられることが出来たのなら、それで十分な価値があったのだろう。

「ですからあなたは、今度の事を後ろめたく感じてはいけません。こう言う事が起こるのが後宮の定め。気後れしたり、強気に出過ぎた態度では、かえって人に付け込まれますよ。堂々としていらつしやい」

言われて私は気が付いた。大将様は私をお諭しになるだけではなく励ましに来て下さったんだ。

やっぱりこの方は悪い方ではないわ。たとえ公達として私を戸惑わせることがあったとしても。

事が起こったのは、その夜も遅くなつてからの事だった。

「火事だ！」

役人のそう騒ぐ声に皆が驚いて飛び出してくる。

「火元はどこです！ 主上は？ 更衣様はご無事ですか？」

小侍従が役人に叫んで聞いていた。

「お二人は御無事です。他の女御様方にも害は御座いません。火元は麗景殿の一部のようでございます！」

問われた役人も叫び返して、麗景殿の方へと走り去って行ってしまった。

御所中が騒然としている。どうやら人が出ていないらしいが、その騒ぎは結局夜が明けるまで続いてしまっていた。

京の街で火事は決して珍しい物ではない。むしろ、田舎よりも可燃物に囲まれた暮らしをしているので、ちょっとしたボヤから、邸を舐めつくす大火まで、火事は日常茶飯事だった。

勿論御所と言えども例外ではない。幾度となくボヤや火事騒ぎは繰り返されている。時には他の邸に御所の機能を移したことであった。役人たちの速やかな処理により、大した大事にならずに済んでいるというだけの事だ。

しかし、御所での火事は色々な思惑をかきたてられてしまう。今回の火事もそうだった。

なにせ、中宮様がお帰りになる直前に、そのお住まいになるべき麗景殿で起こった火事である。しかも梅壺の更衣様の御父上の御謹慎中という、最悪の時。当然、一層冷たい視線が梅壺へと注がれた。

しかもその視線は、私への疑惑という形で現れたのだ。

私が梅壺の更衣様に心を寄せているのは一目瞭然だった。しかも、私は大将様と関係が深いという事になっている。その大将様の御父上である大納言様が、更衣様に圧力をかけられ、私が面白く思っていない事も、大将様に反抗的な視線を送っていた事も、皆が知っている。さらには言い争う声を聞いたという者までいた。昨日の話に尾ひれがついたに違いない。

その夜のうちに起こった火事。しかも私は他の女房よりも、先に退出しているのだ。

麗景殿では私が大将様との痴話げんかの果てに、麗景殿に火をつけたという話が持ち上がってしまったらしい。

私が更衣様に後ろめたさを持っていた事や、大将様に気強い態度を取っていた事が、さっそくあだになってしまった。大将様の氣遣いが当たってしまった訳だ。当然麗景殿から私への苦情が来た。

「命婦に使われている、花房とかいう方を女雅楽から外していただけませんか？」

しかしこれは、小侍従がきつぱりと断ってしまわれた。私の琴は、主上も、更衣様もご所望だからと。

「何の証拠もないのに、言いがかりで主上のご所望を無視する訳には参りません。女雅楽は予定通りに行われますので、そちらもつまらない噂に浮足立つのはおやめ下さい。中宮様への御威光にかかわりますよ」

ドンと構えた小侍従にこんな事を言われたら、あちらもぐずぐずとは言えないらしい。やはり小侍従は優れた女房らしく、向こうもしぶしぶ承諾した。

こんな風の後宮での身の振り方を身につけ、周りの意見に振り回されず、更衣様の行く末にいつまでも心を傾けられ続ける。

これは思った以上に大変な、そして素晴らしい生き方だ。小侍従の姿を見て私は本当に恐れ入ってしまった。

小侍従は御自分の事を「今もって現役」と、胸を張っていた。私は下世話な皮肉で返したけれど、そんな事をして良いような言葉ではなかったんじゃないか？ 主人と定めた方を愛し、守り、お育てし、我が子も育て、さらに男君にも愛される。その男君たちにどんな態度を取られようと、女人の知恵とやらで乗り切ってきたのだろう。

小侍従は家庭に入らずに今だに御所勤めをしている。おそらく男君とも色々あったに違いない。それでも自己を通しながら、他人の事も認めて生きている。これこそ、女人らしい、真心のある生き方

なのかもしれない。

私は挑み心で凝り固まっていた自分を反省せずにはいられなかった。我を張ってばかりでは琴の音で人の心など表しようもない。大将様も、小侍従も、ここまでして私に琴を弾かせようとして下さっている。私の琴の音は、私ひとりの武器なんかじゃなかったんだ。

現実的な私への疑惑は、大将様が役人へ証言して下さったことで晴れたらしい。でも、火が出たのは私と大将様が会った後のことだし、証人が大将様という事で、人の目は一層厳しくなってしまったけれど。

それでも私は胸を張って麗景殿へと向かう。大将様とのお約束通り、自分の琴の音を信じるために。

大勢の好奇の目の中で琴を据えて練習を始める。

正直、お父様や、お義母さま、康行と言った故郷の顔が懐かしい。私はここで何をしているのだろうと思う。

でも、ここで私を認めて下さる方が一人でもいる限り、私は演奏をやめたくない。やめられない。

私は明日の雅楽で、琴の音に何を込めようか？ そう迷いながら、ただひたすらに琴の稽古に励む。

外野の声に心を惑わせないようにと、集中をしながら、私は一心に琴を弾いていた。

窮地

そんな練習の真つ只中に、叔母の姿が躍り出たのは最後の合奏曲の仕上げに入ろうかという頃だった。

女雅楽は明日に迫っていたので大がかりな合奏を合わせて稽古できるのがこれが最後。皆が気を引き締めたところだったので、叔母の姿は一層目立ってしまった。

しかし、叔母の顔色は芳しい物ではなかったので、私はすぐさま叔母のもとへ駆け寄った。

「どうしたの？ また、何かあったの？」
すぐさま叔母に聞く。

「それが、こんな時間になってもあなたのご衣裳が届かないから役人に問い合わせたら、あなたの衣裳が行方不明になっていたの。どちらの御殿に問い合わせても出てこないのよ。こんなこと一度もなかったのに」

宮中での催し物は、それなりの格式が要求される。表立った晴れの儀式は勿論だが、今回のような後宮の女人達による私的な催しであっても、そこに主上や、様々な公達達が居並び、それぞれの才を競う場であれば最低限の格は守られなければならない。それは当然衣裳にも及ぶ。用意出来なければそれぞれの女御、更衣様方の顔がつぶれてしまう。勿論後ろ盾をしている高貴な方々もだ。

「役人の手落ちにも程があるわ。こちらの更衣様のお立場を甘く見て、舐められてしまっているのかしら？ 上の役人に言っつて、責任

を取らせないと」

役人の責任となれば、手落ちのあった役人には出世の機会が遠のくだけでなく、彼の家族、一族郎党にまで影響が及ぶはず。

後宮勤めの上？（身分の高い女房）である叔母には下つ端の庶民の役人が、そう言う責任を負わされる事がどれほど大変な事か分かってはいないだろう。そのあたりの感覚は私の方が見当をつけやすかった。それに、

「今は役人の責任を問題にしている時じゃないわ。明日の衣装の事を考えないと」

私達は小声で話していたが、状況を察したのだろうか？ 何処からともなく忍び笑いが漏れている。私達をチラチラと窺う視線も不愉快だ。だが今はそんな事を気に留めている場合ではなかった。

「桂は主上にいただいた桂があるわ。これ以上の礼装は無いはずよ。あとは持っている中で一番いい物を着る他にないでしょう」

「桂以外は私の持っている中で一番良い物を着ればいいわ。あなたには少し地味かもしれないけれど」

確かに叔母はとても質の良い、鮮やかな浅縹（あさはなだ、藍色）の唐絹を持っていた。まだ腰結（女性の成人の儀式）を済ませて間もない私には多少地味ではあるが、格式は守られる。

「でも、裳をどうしよう？」

裳というのは腰から下に身につける女人の装束で、格式の高い場

では自らより上の方々にかしこまって見せるための、正式な礼装に欠かせない物である。勿論御所に上がっている以上、今も身につけている物はあるが、華やかな場で年不相応な唐衣と合わせて着るのは、不自然さが目立ってしまう。

本来、十二単と言われる女房衣装はすべてが統一された合わせによる、総合的な美を競う衣装だ。

だから、今回のような催し物があれば、誰もかれもが早いうちから衣装の織り、染め、重ね目、焚き締める香にいたるまで統一された物を用意する。

しかも私はまだ成人して間もないために、あまり衣装の用意も多くは無い。仕える者の姿や容姿はその主人の威厳にかかわる。本当なら年若い私などは精一杯めかしこんで、梅壺の服飾感覚をお見せすべきところなのだ。

「しかたがないわ。こうなったら更衣様にご相談申し上げましょう。黙っていても更衣様にご迷惑をかけてしまうのだから」
そう言っただけで叔母は私を更衣様のところへと引っ張っていく。

これは役所の手落ちなどではない。おそらく誰かが仕組んだ事に違いない。更衣様の後ろ盾の父上は只今ご謹慎中の身。とつさに動きがとれない事を知った上で、あわよくば私が女雅楽から外されるように仕組み、私を窮地に立たせようとしている者がいるのだらう。

私達が更衣様に事情を説明すると、更衣様はしばらく考え深げな顔をなさった後、小侍従に手紙を書く用意をさせた。そして、何

事がご決心された表情でお手紙をお書きになると、それを小侍従に渡す。

「よろしいのでございますか？」

小侍従が手紙を見て更衣様に確かめると

「ええ、これで分かっていただけると思うの。もし、断られた時には私の裳を花房にお貸ししましょう。大丈夫よ、心配いらぬわ」

そう言つて更衣様は私にほほ笑まれる。一体どなたにお手紙を書いたのだろうか？

「あなたは早く戻つて、琴の稽古をしなさい。私達はあなたの琴を楽しみにしているのだから」

更衣様にそう言われて私は後ろ髪を引かれながらも琴の稽古に戻つて行つた。

私に裳をお貸し下さるといつても、私と更衣様とではあまりにも格が違うすぎる。お気持ちは嬉しいが叔母の古い裳を借りた方がましだろう。

衣装で琴を弾くんじやないわ。私の琴の音で、皆に衣装の事など忘れさせて見せるわ。

気強くそう思い込もうとしても、やはりちぐはぐな衣装を着た自分の姿を想像すると気が重くなる。大将様が心配そうな視線を下さつてはいるが、今、大将様と言葉を交わせば、また何を言われるか分かつたものではない。

もうこれで何度目の我慢だろう？ そう思いながらも、私は口を真一文字に結んで、黙って琴を弾き続けた。

その後、一晚私の衣装についてあちこち訪ね回ったが、結局気の毒がられたり、意地の悪い視線を投げかけられるだけで、衣装は出てこなかった。あまり赤い目で御前に出る訳にも行かず、明け方は叔母の局でうつらうつらしていたが、叔母の声で起こされてしまった。

「ご衣裳よ！ あなたの衣裳が届きましたよ！」

「衣装が届いたって、何処から？」
私は寝ぼけていた。

「中納言家の一の姫様からですよ。あなたのお仕えするご主人さまから、お祝いの品として届けられたんです！」

私はいつぺんに目が醒めて飛び起きた。見ればそこには見事な紅梅色の唐絹と、それに合わせた裳がとりそろえられている。主上から頂いた海老茶色の袴とも色を合わせてあり、梅壺の代表として琴を弾く私にはピッタリの衣装だ。

私はとても姫様にこういうお願いが出来る立場ではない。と、言うことは。

「昨日の更衣様のお手紙は、一の姫様に宛てられたものだったんだわ」

中納言家の一の姫様は大将様とご結婚なさる前には、女御として御所に上がられるお話のあった方だ。

つまり、もしかすると、ここで更衣様方と妍を競わっていたかもしれない、競争相手だったかもしれないお方。しかも更衣様は主上に一番古くから寄り添っておられる。その更衣様が私などのためにその身を下げられて、一の姫様にお願いのお手紙を書いて下さったのだ。そして姫君様も、その意をお汲み取りになって私に衣装を送って下されたのだ。

衣装にはお手紙が添えられてあった。しかも御真筆で。

「あなたは弾き続けるのよ。そうするだけの価値があるわ。決して迷われたりしないように」

形式的には使いの女房が私に送った手紙になっているが、私が姫様のご筆跡を見間違える筈は無かった。

本当なら一生私などは姫様から直筆のお手紙などももらえる身ではないのに。

私はどれほど多くの人に恵まれているのだろう。身分が低い？ 育ちがいやしい？ そんなのなんだって言うの？ 私はどこに行っても、こんなにも大勢の人に愛されているじゃないの。郷里にいた時も、都に出てからも。

今夜、私が奏でる琴に込める思いは決まったわ。私を愛し、心寄せて下さるすべての方々のために。人は人を利用出来たりはしない。

人の心はこうした思いだけが動かせる。

つまらない張りあいなど、真心や友情の思いの前では足元にも及ばないという事を、この、琴の音に寄せて演奏しよう。

私は体の内から充実した思いが沸き上がってくることを感じた。今日はいい演奏が出来そうだ。

取り急ぎ姫様へのお返事を書き終えると、私は早速装束にそでを通した。重い礼装に身を包み、しっかりと化粧を施すと、いつもとは違う私が鏡の中にあった。

衣装は女人の心を引き立たせるものだが、今日の衣装は特別だ。

主上が贈って下さった、私なんかを認めて下さった桂を身にまとい、更衣様と姫様が私のために心を尽くして下さった唐絹と裳を身につけて、私はいま、誰よりも守られていると思う。幸せ者だと思ふ。

もう、卑屈になったりなんかしない。誰にも後ろめたさなんて感じない。少なくともこの衣装を身につけている間は、誰よりも強くありたいと思う。

私はお礼を申し上げるために、更衣様の御膳に向った。小侍従から渡された扇を広げて、深々と頭を下げた。

「顔をあげなさい」

更衣様にそう言われて、私は顔をあげる。

「美しいわ。女人が最も美しく映える時って、こういう時なのね。自信と誇りを持って、まさに全力を出し切ろうとする姿。綺麗ですよ。花房」

あまりの讃辞に私はお礼を言うつもりが言葉を失ってしまった。

「お礼の言葉はいらないわ。あなたは琴の音で十分、その言葉を聞かせてくれるから。あなたを見てみると、私はこれからここまでのように生きていくべきかが見えるような気がするの。楽しむ心、感謝する心、挑んで行く心。そんなものをあなたは教えてくれた。短い時間だったけれど楽しかったわ。あなたのような女房を召し使えるなんて、中納言家の姫君が羨ましい。また、機会があったら、是非、御所に琴を弾きに来て下さいね」

「ありがとうございます。ええ、ぜひともまた、更衣様にお目にかかりたく存じます」

私はそう言うのが精いっぱい、ただ、ひたすら頭を下げ続けていた。

でも、私は再び顔をあげた時に、常につつましやかで、私をほほえましく見て下さっている、今の更衣様の方が、ずっと美しいと思っただ。横に控えている小侍従の目も、同じように思っているだろうと思っただ。

女雅楽（前書き）

歴史や当時の文化に詳しい訳ではないので、こんな風な世界だったんじゃないかと、イメージだけで書きました。

女雅楽

日暮れとともに女雅楽が始まった。宮中では定められた年中行事の他にも、こついった管弦の遊びや物合わせと言った遊びの行事が頻繁に行われるらしい。

遊びと言ってもそこは社交の場である。どちらかと言えば非公式な催し、宴と言った色合いが濃いものになる。

特に後宮では「物合わせ」は行われることが多いらしい。女御様や更衣様方が競われるのにちょうどよいからだろう。

「物合わせ」とは、何か一種類の物を、様々な趣向を凝らして互いに披露しあい、優劣を決めるといふ遊びである。

良く行われるのは「香合わせ」、「絵合わせ」、「歌合わせ」。少し趣向を凝らすと「春秋あらい」と呼ばれる春と秋、それぞれに分けて漢詩や歌を合わせる遊び方をする。

例えば「香合わせ」では、様々な香の調合による香りを競うのももちろんだが、そこに使われる香炉は勿論、その香に合わせた衣装、装束、小物、当の主人と女房達、使われる子供たちにいるまで、色目や姿形を統一して、その調和と華やかさ、交わされるやり取りのゆかしさまでもが競い合わされるのだ。

勿論、判定をするのはその道の専門家で、遊びと言っても真剣勝負。しかも金や物をそろえるだけでは秀でる事は出来ない。人や物を調和させ、その場を盛り上げるだけの知識と感覚が問われる。それぞれの御殿の方々の面目もかかっている。

その中で総合的に特に優れていると判断されれば、殿上人たちに一目置かれるようになり、宮中での権限や、発言力にも影響を及ぼしてくるのだ。

今夜の女雅楽にも、そんな雰囲気の色濃く反映されている。それぞれの御殿から楽の名手が選出され、それに合わせて、皆、美しく着飾っている。

お帰りになった中宮様を歓迎する意味もある雅楽だが、その中宮様のおられる麗景殿の方々は、咲き始めたばかりの桜を意識したような、桜重ね（表を白、裏を濃いピンクにした特有な着物の重ね方）の衣装を中心に、萌黄や若草色を添えた爽やかな衣装の女房や少女達が、美しい柄が打ち出された白の唐絹に高貴な紫を重ねた格調高い装いの中宮様を囲んでいる。

本当なら麗景殿で行うはずだった雅楽だが、昨夜の火事騒ぎで場所を主上のお休みになる清涼殿に移したので、中宮様の周りにも御簾とは別に几帳を巡らせているが、その几帳にも白と薄紫が、裾にかけて濃くなっていく、美しい布がかけられている。春の盛りを思わせる、美しい装いだ。

同じ春でも私達梅壺は、紅梅色や海老茶色に、白をきりりと加えた早春の引き締まった色で統一されている。

残念ながら、実際の梅の季節は終わろうとしているが、梅壺の象徴は常に梅の花なのだろう。

小物や衣装の柄なども、梅の花で統一され、浅縹の叔母や、青鈍色の小侍従でさえ、刺し色に紅梅色を重ね、華やかな梅柄の扇を手にしている。

御簾の外に列席している公達も、各大臣の方々や、それにまつわる人々。そして、楽の音に秀でた方々が、私達の演奏を聴き比べられるはずである。いうなれば「音合わせ」とでもいったところだろうか？

女人達は皆、琴や琵琶を手にし、童殿上している可愛らしい子供たちは、横笛や太鼓、筆箒ひちじりまき、笙の笛などを手にしている。

主上も席にお着きになり、殿方達の席では、すでに酒などが酌み交わされているようである。女雅楽の始まりだ。

大将様の高らかな笛の音を合図に、皆、一斉に演奏が始まった。

横笛の清らかな音色。笙の笛や筆箒の荘厳な音。そして女人達の琴と琵琶。まるで天界のような荘厳な音が、春の夜に響き渡って行く。この世の音ではないようだ。

しばらくすると興に乗ってこられた公達などが、漢詩などをゆるゆると吟ぜられる。

そうすると他の公達も、負けてはならぬと催馬楽呂などを唄ったりする。男君たちにとっても、この機会は良い披露の場になるらしい。

声に自信のある方らしく、良く通る、美しい声を、ゆったりと響かせ、調子を添えてお唄いになる。

やがて曲が変わると笛や太鼓の音は止み、女人達の弦の音だけが響き渡る。

そうするとその音に聞き入りながらも、

「誰それに召し使えるあの女房はなかなかの音を聞かせる」だの、

「あの女人の琵琶の音は聞かせどころを良く知っている」だのと評論が始まっている。いよいよここからが本番か。

女人達の演奏にも一層の熱がこもってくる。その時だった。

「ピン！」

無様な音を立てて、私の琴の糸が切れてしまったのだ。

私は一瞬、この悪夢が現実とは思われなかった。思わず手が止まり、琴を見つめる。

琴の糸は比較的切れやすいものだ。私の使う箏の琴の中間に張られた糸は、より高く繊細な音が奏でられるようにある程度の力をかけて張っているので、いささか細くなっている。「中の細緒」などと呼ばれるゆえんだ。だから余計に切れやすい。琴を弾いたことがあれば誰でも知っていることだ。

知っているからこそ、大事な席に出る前には、入念に糸の状態を

確認する。今日の私だって何度となく確認した。

いくら切れやすい糸だと言っても、そんなに急に切れる物ではないはずなのに。

演奏は続いている。それでも冷たい視線が突き刺さる。時折遠くから忍び笑いが漏れる。

「あなたは弾き続けるのよ」

姫様のお言葉を思い出した。今、あきらめてはいけない。

今、私がここにいるのは、私の力だけではない。私の琴にはいろんな人の思いが込められるべきだ。私が奏するのはその人たちの思いだ。琴は私にとってはただの道具ではない。

私が今宵、奏するのは、私を思ってくれる人たちの愛情。私を慕ってくれる人たちへの友情。それは甲高い音に頼らずとも表現できる世界。

私は高音を捨てた。高い音で弾くべきところをむしろ低く、やわらかく丁寧に弾いてゆく。

人の優しさ、思いやり。そんな思いに高い音や、人の気を引くような派手な音は似つかわしくない。低く、やわらかく、さりげなく。他人の心を思いやる時の寄り添う心。そんな心の伝わる音。

気が付けば他の琴や、琵琶の音が止んでいた。今、私は一人で私

を支えてくれた人たちの心を、みんなに伝えている。この世にはこんなにも優しい音がある。美しい心があるのよ、と。

曲が終わって、私は糸を張り直す。次の曲にはまた笛や太鼓の合奏に戻り、間を縫って春の唄が軽快に唄われたりなどしている。座の人々は、一層心柔らかく、華やいだ気持ちになったようである。私はあらためて心をこめて人の心の優しさを奏で続ける。

中空に美しい月の登る中で、女雅楽は華やかに繰り広げられる。

その夜、私達梅壺は、もっとも美しい演奏をしたと評価され、主上からのお褒めのお言葉と、更衣様へと美しい絵物語の巻物をたまわった。お里下がりの際の間のよすがとされるようにとの主上のお心づかいと思われた。

それでも主上は中宮様と、お生まれになって初めてご覧になられる男御子様とお時間を楽しみななされていたようで、さっそく麗景殿へとお出ましになってしまわれた。

それはそうだ。宮中のしきたりに阻まれて、ご自分のお子様を今までご覧になる事さえできなかつたのだから。

しばらくは主上も、やっと果たした我が子との対面に夢中になれることだろう。考えてみれば更衣様のお里下がりは、良い間を計る事が出来て、かえって良かったのかもしれない。

翌日、私は更衣様方よりも先に御所を退出することになった。更衣様もお支度に忙しく、ゆっくり別れを惜しむ間は殆んどなかったが、

「あなたには、また御所で琴を弾いてもらう約束がありますから。これからも楽しみにその日を待ちましょう」と言ってお別れした。

更衣様のお言葉は勿論嬉しかったけれど。私のそのつもりでいるのだけれど。

不思議な事に、私は昨日、姫様から頂いたお手紙を見て以来、早く姫様の元へ戻りたいと思ってしまうていた。

郷里は遠くに離れているけれども、あのお手紙で姫様のおそばへの懐かしい想いがいつぱんに湧いてしまっていたのだ。私は早くも都の中に、心のふるさとでも言うべき場所を、姫様の元に作ってしまったようだ。

私もこうして都の人間になって行くのだろうか？ 私は自分の心の変化に戸惑いと、少しばかりの寂しさを感じていた。

私は一人で女車に乗り込んだ。来た時のように叔母に付き添われてはいない。叔母は更衣様の女房として、更衣様の御実家のお屋敷にこのままついて行かなければならないのだから。

私は牛車の中から離れていく御所の姿を感慨深く見送っていた。

すると一頭の馬に乗った公達らしい人影が、車のそばへとかけ寄って来た。

良く見ると、あろうことが大将様だ。近衛の大将ともあろう方が、お伴の一人もつけずに私の車に寄ってくる。

「なんてことなさるんですか？ 今頃お伴の方々が困っていらっしやるでしょうに」

私のあきれ声を愉快そうに聞きながら大将様はおっしゃった。

「なあに。時期に皆、気がついて追いかけて来るでしょう。いつも私は彼らに小言を言われながら追われているんです。たまには彼らに追い駆けさせないと。それに私は自分の妻の元に帰るんですよ。誰にも文句は言わせません」

「姉君様の中宮様も、ご心配なさるでしょうに」

「あつちは主上と親子の団欒ですよ。私がいたらかえって野暮ってものです。それとも姫は、主上の近衛の大将が護衛では、ご満足いただけませんか？」

そう言って大将様は楽しげに笑われる。

何だか私も笑いながら、御所という場所を後にしてしまった。

女雅楽（後書き）

「御所編」終了。次は「苦惱編」って感じ。主人公に悩んでもらいます。

撫子

康行は広い所に立っていた。目の前には粗末な作業小屋が立っている。

彼は緊張していた。作業小屋の陰に隠れて、相手の気配をうかがっている。

花房が襲われようとしている。康行は小屋の陰から身を躍らせ、一人はみぞおちに当て身をくらわした。その間にもう一人が花房に斬りかかろうとするのが見えた。思わず太刀を抜く。

すぐさま相手に反撃される。とっさに身体を翻し身をかわす。ほとんど反射的に太刀をふるうと、太刀が相手の身に当たり、いやな感触とともに振り斬られる。生温かい返り血が、彼の全身に降りかかった。

するとその血が康行の身体にしみこみ、侵食し始める。力が抜け、粘着質な血が鼻と口を塞ぎ、息が出来なくなった。

そして何処からともなく声が聞こえる。「苦しめ、苦しめ」と。

「うわああああ！」

康行はガバツと身を起こした。また、あの夢だ。

「大丈夫か？ 康行」

共に旅をしている仲間が、眠そうな目をこすりながら声をかけて来る。

「ああ、すまない。起こしちまったな」

「いや、どっち道夜明けだ。仕度をして出発した方がいいだろう。そうすれば今日のうちに、都に入る事が出来るはずだ。草枕の旅はもう結構だよ」

そう言って先に立ち上がると、つないでいた馬達を軽くたたいて、機嫌をうかがっている。

「そつだな。早く立とう」

康行もそう言って、馬の一頭に声をかける。

全く俺は度胸がない。仲間たちにも心配をかけている。実際皆は、俺が京に旅立つのをやめるようにと言ってきた。故郷での様子がよほど悪く見えただろう。

だが、丹精込めて育てた馬達の献上に立ち会わずにはいられないし、花房の事もやはり気になる。

故郷に居る時、花房が御所に呼ばれ、帝の前で琴を弾くと聞いた。

花房はますます自分から離れて行く。我々下司の者にとって、御所や、殿上人などは、遠い遠い雲の彼方の世界。彼女はそこで時の帝に認められた人物となった。

もう、彼女には簡単に近寄ることはできない。花房はこのまま琴を弾き続ける事を望むに違いない。そういう生き方を望む以上、そして、高貴な方々が彼女の事を認めている以上、花房はもう、自分と同じ下司の身分とは言えなくなるだろう。

自分は花房には近寄れなくなる。いや、近寄ってはいけないのかもしれない。

遠い昔、「子馬が欲しい」と、自分の着物の袖をつかんでねだった少女は、今、中納言家の女房として、立派にその地位を手に入れた。普通なら我々いやしい身分の者には、決して手に入れられないものを、彼女は手に入れたのだ。

これからは今まで通りではいられない。それは分かっている。

だが、やはり花房の気性を考えると、彼女の行く末が気になった。

あの花房の事だ。決して素直に若君の妻になるとは思えない。何としてでも中納言の姫君のそばにいる事を望むだろう。しかしそれが、世間体やしきたりに縛られて暮らす貴族の世界で通用するのだろうか？

花房がいくら気強くしていても、若君と姫君の庇護にも限りがあるのではないだろうか？

それでも若君が強引にでも花房を娶るかもしれないし、それなら彼女の地位は確定的になるだろう。しかしそれでは花房は姫君との板挟みに一生苦しむ事になる。

自分の嫉妬心を抜きにしても、そんな事態はできれば避けさせたい。若君を信用してはいるが、それだつて状況次第だろう。

あるいは他の貴族の情人になるか……。あの花房がそう簡単にそんな打算的な事をするだろうか？ なにしるあいつは武蔵の国のじやじゃ馬だ。

ここまで考えて康行は我に帰る。

自分が花房の心配をしても、花房に近寄ることはできない。むしろ彼女の出世の邪魔になるばかりだろう。本当なら彼女のことはずぱりと忘れる事が一番いいはずだ。

それなのに、彼女が気になって、馬の献上をいい訳に、また京の都に戻つて来てしまった。

京に来たからには、自分は侍者として若君の護衛をするしか、京にとどまるすべはない。だが、今の自分は悪夢にうなされ、花房への未練を断ち切れずにいる。こんな状態で都に居て何になるのかは分からないが、故郷でじつとしていいる事も出来ない。

康行は自分の弱さに苦悩をしながら都に入ろうとしていた。

京の都は相変わらず、賑やかなところだった。早くに出立したのが幸いし、まだ、日が傾く様子もない内に康行達は大納言家に到着する事が出来た。

馬を厩に無事納め、下人達が休む小屋に入ると、いつものように

邸の下女達が康行達の旅の疲れをねぎらってくれた。手足を洗えるように清らかな水を用意してくれ、僅かな酒と、ささやかな干し魚を少し用意してくれる。

その中に見慣れない顔があった。花房と同じくらいの年頃の少女だった。

「初めて見る顔だな？ 最近勤めに出たのかい？」

少女はもの慣れぬ風に恥じらいながらも、康行に足を洗うための藁を編んだものを手渡し、はきはきと答える。

「ええ。つい、十日前にお邸に入ったばかりなの。至らないところが多いけれど、よろしくお願いします」

そう言って頭を下げる。

身のこなしなどがまだ垢ぬけていない。いかにも上京したばかりの仕草だ。

「慣れるまでは大変だろうが、慣れてしまえば都は若い娘には楽しいところだよ。早く友人でも作るといい。故郷はどこだい？」

「若狭。実はこの干し魚も、父と母が私に持たせてくれたものなんです」

「じゃあ、これは君の故郷の味なんだね。やはり若狭は豊かな国だなあ。こんなにうまい魚が獲れるなんて」

「獲りたての生魚はもっとおいしいわよ。私の父さんは漁師だったの」

「そうか。これはお父さんが獲った魚なんだね」

すると少女は悲しげに眼を伏せた。

「いいえ。これは母さんが買ったものなの。父さんは病気に掛かって海に出られなくなってしまったから」

これは余計な事を聞いたかもしれない。彼女が親元を離れて不慣れな都の邸勤めに出たのは、おそらく父が仕事に出られなくなったせいだろう。ひょっとしたら口減らしの意味もあるのかもしれない。

「ねえ、都って、そんなに楽しいところなの？ 私まだ、あまりお邸の外に出た事がないの」

少女が明るく言う。康行の考えた事の見当がついて気を使ったのだろう。

「ああ、きつと楽しいだろう。だが、物騒な事も確かだ。一人では出歩かない方がいい」

「それなら、今度私を町に連れて行ってくれる？ 私、まだここに知り人も少ないし、そんなにお邸を出た事もないの」

田舎者らしくすんなりと心を開いて、甘えて来る。自分も昔はそうだった。花房もほんの少し前まではこうだったのだろう。

そういえば他人に心を開く様子は、花房に似ている。年の頃も同じくらい。不慣れな暮らして緊張した態度も見えるが、こうして甘える時には瞳の奥に意思の強さを感じられる。そんなところも似て

いるような気がする。

「ああ、かまわないよ。君、名前は？」

「撫子。ありきたりでしょう？」

「そんなことは無い。可愛らしい名だよ。俺は康行だ。若の警護を務める侍者だ。侍所か、厩にいつもいるから、見かけたら声をかけてくれ」

「康行……いいの？」

「まだ、知り人も少ないんだろう？ 一人じゃ心細いだろう。遠慮しなくていいさ」

そう笑いかけると、撫子は少し恥じらうように、ほんのりと笑った。

こういふ所は花房とは違うな。何だか可憐な可愛らしさがある。

「さて、もう一度馬達の様子を見るか」

そう言って康行は腰を上げると、小屋を出て行った。

その後ろ姿を撫子がいつまでも見送っている事に気づきもせず。

町にて

その数日後、康行は約束通り、撫子を町に連れ出した。

「すごい人の数ね」

「京ではこれが普通さ。どうだい、邸に少しは慣れたかい？」

「ええ、少しは」

撫子は初めのうちこそ心細げに康行の横を黙ってついて歩いていったが、物売り達のにぎやかな声に誘われて、あちこちの品を覗き始めた。

「まあ、綺麗」

高貴な人々が仕立てに使った布の小さな切れ端が、色とりどりに並べられている。撫子の様な下女の娘は、身体を動かす作業や、食べ物を扱う時には、こういう端切れで長い髪をきりりと結ぶ。撫子は髪をまとめる時は粗末な麻の、地味な端切れを使っていた。

「これなんか、似合うんじゃないか？」

そう言って端切れを手にとってやると、撫子は嬉しそうに顔をほころばせる。こういう事には疎い自分だが、やはり若い娘はこんな物への興味がつきないのだなと実感した。

「これをくれ」

そう言って端切れの代金を払ってやる。撫子が慌てて制しようと

するがかまわず払う。

「買ってもらう訳には……」

そう言つて撫子は自分の懐を探ろうとするが、

「ここは黙つておごられておけ。気にすることは無いから」

と言つて、人混みに足を向ける。撫子も慌ててついてきた。

「その、懐の金はお前の両親がなけなしの金をお前のために持たせてくれたものだ。無駄遣いするんじゃない」

そう言つと撫子もハツとして、懐から手を離した。

「それに撫子はまだ知らないだろうが、都は何でも値が張るんだ。

田舎とはモノの値段が違うのさ。簡単に懐を開けると、あつという間に金なんて無くなってしまう。よく、覚えておいた方がいい」

「怖いんですね。都って」

「そうさ。だから田舎ものが一人で出歩いたりしちゃいけない。まして若い娘の身ではなおさらだ。だが、用心していれば楽しい事もある。おや？ あつちで軽業を見せているようだ」

康行は撫子を人だかりの方へと引つ張った。見ると身軽そうな小男が、逆立ちをしたまま蹴鞠のまりを器用に足で回し、やんやの喝さいを浴びていた。

次は大きなざるを回し、ついには畳（当時は四角いものを座布団の様に使った）をくるくると器用に回してみせる。

こんな見せものなどみた事もなかったのだろう。撫子は夢中になつて目を皿のようにしている。この年頃の娘は、花房でなくともこんな風に好奇心が働く物らしい。

小男が回し終えると、拍手とともに小銭が彼に向けて投げられる。小男はさつき回していたざるの中に小銭を拾い集めていた。

「器用なもんだな。あの、琴弾きの三日夜の宴にはちょうどいいんじゃないか？」

隣にいた下卑た男が昼間からほろ酔い加減で、連れの男にそんな事を言っているのが耳に入った。

「なんだ？ あの琴弾き、ついに大将殿の妻になるのか？」

町の男どもが「あの、琴弾き」と噂する時には、はっきりとした軽侮の色が含まれる。今ではちょっとした色ごと話の枕詞のようにも使われているのだ。本人は知りもしないのだろうか。

「違うさ。あの女人を召し使っている中納言家で、あの琴弾きを家臣の養女にしようと言う動きがあるらしいんだ」

「なんだってまた」

「なんでも今、飛ぶ鳥を落とす勢いの三条殿に対抗する手立てらしい。三条殿の北の方は琵琶の名手だから世間の注目で負けたくないんじゃないかって噂だ。大納言家も何か絡んでいるらしいぞ。詳しい事までは知らないが」

「それでどうしてあの琴弾きが、結婚するんだよ」

「鈍いなあ。どうして中納言家が養女にしてまで後ろ盾すると思う？ あの琴弾きに今更よそへ逃げられちゃ困るからさ。実家を出た女はいい男が出来ればどこに行くとも分からんだろう？ あの琴弾きのおかげで、中納言家は注目の的。大納言様にも常に一目置かれているんだからな」

「それにしたって、いくら目立つと言っても所詮下司の娘じゃないか。なんだってそんなに手元に置きたがるんだらう？」

「下司と言っても今の母親は育ての親で、実の母親は一応貴族だったらしいんだ。その母親の実家が、昔、中納言家と関わっていたらしいぞ。ま、ただの噂だな」

聞き捨てならない噂を聞いた。花房が養女に？ 彼女の母親がどんな人だったのかは知らないが、中納言様は本当にそんな事を考えているのだろうか？

「すまない。今日はもう、帰ってもいいか？」

撫子に聞くと、撫子は暗い顔で頷いた。

「今度、また連れて来るから」

そう言ってやるが、撫子は軽く首を横に振る。

「それはいいけれど。康行は花房様を助けるために、危ない目にあつたそうね」

「俺は侍だよ。危ない目に合うのは仕方のない事だ」

「本当はそんな目にあつたのは初めてだったんでしよう？　花房様を助けるまでは人を斬つた事もなかつたそうじゃないの」

撫子が真つ直ぐに目を見つめて言う。真剣な表情だ。

「人なんてむやみに斬る物じゃない」

「花房様は康行とゆかりの深い方なの？」

撫子は視線を外さずに康行を見つめ続けていた。悲しげな眼だった。

「幼馴染だ。もつとも俺の親父は花房の父上に使われている厩番だが」

「康行は花房様が好きなのね」

撫子は視線を外し、さっき買ってやった端切れを握り締め、そこへ視線を落とした。

康行は返事が出来ずに黙り込んだ。

「聞いたの。康行は花房様のために命懸けで人を斬つて、それから毎晩のように夢にうなされてるって。侍所の人たちはみんな心配しているわ」

「もう、花房は俺の近づける女人じゃない。それに俺がうなされて

いるのはあいつのせいじゃない。俺が弱いせいなんだ。そのうちやんと吹っ切れる」

いや、吹っ切ったりなど出来るのだろうか？ 今、噂を耳にしただけで、こんなに心がざわついていると言っのに。

「だって、それでも花房様が好きなんでしょう？ その上、人を斬った事に苦しんで、毎晩うなされてばかりいるんでしょう？」

撫子がそう問いかけた。まるで今にも泣きそうな顔だ。撫子の方が苦しんでいるような顔だ。

「大納言家も関わっていると言っのなら、きっと若君のことだろう。若君は俺の主人だ。事の真偽を確かめたい。早く帰ろう」

康行は撫子に返事もせずになんと言っつと、人混みの中を歩き始めた。

「三条殿の姫君を若君の妻に？」

邸に帰るとさっそく侍所に戻り、町の噂を仲間に知らせると、仲間一人がそういう噂があると教えてくれた。

「ああ、お前は出かけて知らないだろうが、下男下女の間で今日はその話で持ちきりさ。中納言家の姫君も気の毒だな。まだ、御新婚だと言っのに」

これは、口さがのない都人がすぐに話に飛び付くだろう。京を牛

耳るこの、大納言家と、今、最も勢いがあると言われる三条家が、縁故で結ばれようとしているのだ。中納言殿は大層焦っておられるに違いない。

その中での花房への養女の話。これは果して花房にとって、良い話になるのだろうか？

「康行」

気がつくとも撫子が声をかけて来ていた。

「花房様が心配なのは分かるけど、花房様はもう、御簾のうちの方なんでしよう？ 康行にはどうする事も出来ないことよ。考え過ぎない方がいいわ」

心配そうな、悲しげな眼で撫子が言う。こんな風に女人に心配された事など今までなかった。優しい娘だ。

「分かってる。花房のことはきつと、若君が見ていてくれる。俺なんかじゃ口を出せない事なんだ」
そういいながら口調に苦みが混じるのをどうする事も出来ない。

すると突然、頬のあたりが温かくなった。撫子が自分の手を康行の頬に寄せていた。

そして康行をじっと見つめる。やはり、悲しそうな眼だった。

「綺麗な端切れを、ありがとう」

そう言って手を離し恥じらうようにうつむくと、撫子は足早に去

って行った。

その頬に、撫子のふれた指のぬくもりを微かに残して。

身分

私は久しぶりに、本当は半月にも満たなかったのだけれど、気持ちの上では本当に久しぶりな思いで中納言家に戻ってきた。

とにかく早く、自分の女主人であるところの、一の姫様にお会いしたかった。話したい事は山ほどあるけれども、何より先にお礼を申しあげたかった。勿論、女雅楽での衣装のお礼だ。

あの衣装はただの衣装ではない。姫様は勿論、色々な方々の心使いや思いのこもった衣装なのだ。そして姫様が私を心から信じて下さった、友情のあかしでもあったはず。私は一刻でも早くそのお礼を述べたかった。

しかし、姫君様の婿君でいられる大将様が、私に「護衛」と、おふざけになられながらくつついてきてしまわれたので、まさか私が先にしゃしゃり出る訳にも行かず、ただただ、お声がかかるのを待っていないければならなかった。

当然、女雅楽での出来事は大将様が姫様に詳しくお話になって聞かせられているはず。

一番おいしい所を大将様に取りられてしまい、私はちよっぴり癩な思いを味わいながら待っている。

すると、肝心の姫様からのお声がかかる前に、中納言様から声がかかってしまった。仕方なく私は中納言様の元へ先に参上する。

普段はそもそも身分が低すぎる上に、何かと人の口の端にも上りやすい私の事を、お世辞にも快くは思って下さらない中納言様ではあるけれども、さすがに御所からお呼びがかかった事で私への評価がぐっと上がっておられるらしく、以前のように軽んじた態度や視線を向けられるような事は無かった。

いや、むしろ、何だかひねこびた笑みを漏らされていて、手をすりあわせんばかりの態度でいらっしやる。これはこれで何だか気味が悪い。

「いや、御所での務め、御苦労であった。主上からのお褒めのお言葉を我々も受ける事が出来て、中納言家としても大変鼻が高い。もう、お前は今までの身分という扱いにはしておくわけにもいかない。そこでお前には私の家臣の養女になってもらう事にした」

コレまた、突然に、一方的な話だ。養女？ 両親の揃っている私か？

「お前は高貴な方々に認められ、さらには御所で、主上にも認められた身の上。いつまでも下司の娘として扱う訳には行くまい。一の姫のもとでも、いつまでも小間使いと言う訳にはいかぬ。そこでお前の身分を相応のものにするために、私の乳兄弟の忠光の養女とする事にしたのだ」

「でも、私には里に立派に両親がそろっております」

下司の娘。この言葉にカチンときて（仕方のない事なんだけど）つい、私は言い返してしまう。

「別に里の親を忘れろと申しているのではない。あくまでも形式上、

お前の身分を整えるための事なのだ。一の姫も、これからは近衛の
大将殿の正妻として身が重くなつていく。そこに、お前の身分があ
まり低くては置いておくにも具合が悪い。それではお前も困るだろ
う？ 我々もお前を認めたらこそ、この話を勧めているのだ。ま
ずはお前から父親に手紙を書いてやるが良い。その後、正式に養子
縁組の運びとなる。お前にとつても悪い話ではないはずだ。一の姫
の元にも長くいられるし、良い婿をとる事もできる」

迷う事は無いだろう？ そんな視線を私に中納言様は向けられた。

確かに父は私の出世を望んでいる（はずだ）。そうでなければ、
私を都に出してくれたりしなかつたはず。父の思惑をこれ幸いに
と都に出て来たのは私の意思だ。

私自身だつて、これは人生の転機になる。この話を受ければもう、
人に身分の事であれこれ言われるわずらわしさは無くなるだろう。
大手を振つてここにいる事が出来るのだ。

この話を喜ばない人は私の周りにはいないはず。やっかみは別に
して。

中納言様から解放され、ようやく姫君様からお声をかけていただ
き、私は姫様に頂いた衣装のお礼を言う事が出来た。そして、養女
の件もご報告させていただく。姫様は早速私にお聞きになった。

「花房はその話、受けるつもりなの？」

「勿論でございます。ありがたい、もつたいないお話でございます」
私はそう、答えた。

「「」両親とは身分が違ってしまつたのよ？ それに」

「こんな話、もう、私の身には二度とない事でしょう。せつかく姫君様と長く共にいる事が出来る権利を得る事が出来るのです。私にとつて、こんなに素晴らしいお話はありません」

つい、私は言葉をひつたくつてしまった。

「……」

姫君様は何か言いたげになさっていたが、何もおっしゃられない。すると、

「花房さん、ちょっと」

やすらぎが私の袖を引いて、視線を御簾の外に向ける。

「お話中すいません。花房に相談したい事がございますので、少し、中座させていただきとう存じます」

やすらぎがそついつと、姫様もつなずいて「下がってよろしい」と言われた。

「花房さん、あなた、本当にその話、お受けしてしまつていいの？」
さつそくやすらぎは聞いてきた。

「仕方が無いのよ。中納言様にはお世話になつてゐるし、姫君様の元に長くいるためにはこうするよりほかにないわ。むしろ、今まで追い出されずにいられた事の方が異例だったんだから。これで安心して姫君様につかえる事が出来るわ」

「康行はどうするの？」

やっぱり。それを聞かれると思った。私の身分が上がると言う事は、康行とも身分が違ってしまうと言う事だ。下手をすれば顔を見せるどころか、口を聞く事さえ難しくなるかもしれない。

親、兄弟とは身分が違ってても、肉親の情までさえぎられる事はないだろう。今までのように気安くは行かなくても、肉親が気心を通わせる事に、そう、文句を言う人間は多くはないはず。ただ、養子先への遠慮はしなくてはならないだろうけれど。

だけど、康行と私には、なんの特別な繋がりもない。身分が違ってしまえば、ただの他人だ。いや、今だってただの他人か。

「あなた、康行からもらった櫛を、肌身離さず持っているでしょう？ あなた達、何か約束しているんじゃないの？」

約束。確かに遠い昔、幼かったころにした約束はあった。しかし、それももう、果された。今はなんの約束もなければ、康行からの言葉も受取った事もない。だいたい私はいつも康行をはねつけてさえたのだから。

「康行は関係ないわ。約束どころか、私はあいつが苦手で、逃げ回っていたのをやすらぎも知っているでしょう？」

「でも」

「気にしないで。これは私が望んで来た事なの。都に出て来る時から、ずっと。憧れの都で、お姫様につかえて、御殿の中で一生を暮

す。夢見て来た世界が目の前にあるのよ。康行の事なんか気にしちやいられないし、康行だって私みたいなじゃじゃ馬に付きまとわれてちゃ、迷惑かもよ？」

「本気でそんなこと思っただけじゃないでしょうに」
やすらぎはため息をつく。

「本気であろうと、無かろうと、私が大手を振って姫君様の元に仕える事が出来る機会を、逃すと思う？ 姫君様に目を止めていただかなかつたら、私はここにいられなかつたし、御所で琴を披露する事もなかつた。こんな養子のお話をいただくことだつて無かつたのよ。私は誰よりも姫君様が大事なの」

私はここを力説した。やすらぎだつて、姉妹同然の姫様が、何より一番大切なはず。私の気持ちが分からないはずはない。

「ねえ？ あなたの気持ちは分かるけれど、ここは良く考えましよう。何故、姫君様があなたにお言葉をさえぎられても黙っていらしたと思っただけなの？ 姫君様があなたに考え直せと言ってしまったら、お立场上、それはあなたに命じた事になってしまう。あなたの意思を無視する事になってしまうからよ。あなたには姫君様のご心配なされる気持ちが分からないの？ 一度養女となつてしまえば、もう、元には戻れなくなる事がたくさんあるのよ？ あなた、本当にそれでいいの？」

やすらぎは言葉の一つ一つに、力を込めるように言う。

やっぱりやすらぎはしっかり者だ。私とその場の勢いで決断しないように慎重に物を考えている。私の心の中にある、ためらいや戸惑いを見抜いてしまっているのだろう。

私もわずかな間に貴族の暮らしや考え方を垣間見てしまっている。都に出て来た時の憧れだけではどうにもできない部分を見せつけられてしまっている。私がこれから入ろうとしている世界は、そういう世界なのだ。

「ね、本当に良く考えて。この話を受けなかったからと言って、すぐここを出される訳でもないでしょう？ 第一、そんなこと姫君様がお許しにならないわ。この寝所で暮らしている限り、姫君様は女主人でいらっしやるのだから」

確かに私は、中納言様のおっしゃった「下司の娘」という言葉に、反発してしまっていた。少し、勢いに乗せられているのかもしれない。

「それにね、何故中納言様がこんなにあなたに固執するのも分からない。実の親にもこんな大切な事を手紙一枚で済ませるなんて、おかしいじゃない？ 軽々しく返事をしない方がいいわ」

言われてみれば確かにおかしい。「下司の娘」と言いながら、中納言様は頻繁に私に目を付けているような気もする。

「分かったわ。もう少し、良く考えてみる。お付きの女房が姫君様に「心配をおかけしちゃ、おしまいだわ」

私の頭が少し冷えたようだと思ったのか、やすらぎは安心したようにほほ笑んだ。

「良かったわ。これで私も安心して、宿下がりできるわ」

「宿下がり？ なあに？ 長くお休みするの？」
私は何気なく聞いたのだが、やすらぎは言いたくそつじにして
いる。

「実は、結婚が決まったの」

「へ？ 誰の？」

思わず聞き返す。

「私の」

失態

私は口をあんぐりと開けた。私が御所に行く前にはそんな気配もなかったのに。いつの間に。

「驚いた！ 誰？ お相手はどなたなの？」

私は勢い込んで聞いてしまう。

「それが……。忠光様の御子息で、今は大将様にお仕えしている、忠長様なの」

忠長様なら私も分かる。何と言っても、大将様のいちばん身近なお世話係で、大将様からのお文係として、姫君様付きの私達の元へ頻繁に出入りしていたのだから。でも、忠光様の御子息とは知らなかった！

「あなたが御所に行かれた頃、忠長様からの文が届くようになったの。私もよく知っている忠長様の事だったから、しばらく文のやり取りをしていたのよ。そうするうちに気があってしまって」

はあ。私が御所に行っている間に、そんな事になっていた訳。確かに身近な相手だし、気心も知れているだろうけど、慎重な人ほど、こういう時には思い切った事をするもんだわ。

「それじゃ、中納言家を離れてしまうの？ 寂しいわ。あなたとはずっと一緒に姫様を見てさし上げられると思っていたのに」

するとやすらぎは真底驚いた顔をする。

「私が姫君様の元を離れる？ そんな事、ある訳ないじゃない」

「でも……。忠長様が」

普通、男君は女君が結婚後も邸勤めを続けることを喜ばない。邸に勤めていれば、高貴な方々に接する時は、顔や姿を見せない訳にはいかないから。そういう「はしたない」と言われることをする必要に迫られる女房でいることを快く思わないのだ。

「忠長様は大丈夫。私に女房を辞めるなんていう訳ないわ。忠長様はね、私と姫君様のように大将様の乳兄弟なの。それも、形ばかりなんかじゃない、本当に心から大将様のことを思って仕え続けてらっしゃるの。私は忠長様の気持ちが分かるし、忠長様も私の気持ちが分かるのよ。そう言う方だからこそ私、忠長様と一緒にになりたいと思ったの」

すこい。

私が御所に行っている僅かな時間のうちに、ここまで互いが理解し合っているなんて。

さすがはしつかり者のやすらぎだわ。浮いた言葉や家がらに惑わされたりしないのね。忠長様も、やすらぎがどれほど姫様を思っているか知ってらっしゃるだろう。その上で通り一遍ではない、やすらぎを理解していることをきちんと伝えるお言葉を送り続けたに違いない。そんな忠長様だからこそ、やすらぎの心をつかんだんだろうな。

なんだかついでに惚気られた気もするけれど。

「私、決して姫様付きの女房を辞めたりしないわ。出来ればお母様のように、立派な姫様のお子様の乳母になりたいの」

やすらぎは恥じらいながらも、嬉しそうにそう言った。

「おめでとう。それなら私も嬉しいわ。でも、よく、あなたがこんなに急に結婚を決めたわね？ 以外だわ」

こうとしか言いようがない。

「それがね、訳があるの。中納言様は一の姫様を大納言家の別邸に住まわせる事になさるの。大納言家でも、姫君様を正式に大将様の北の方になさるおつもりみたい。まだ、お歳若でいらっしやるのに」

「ええ？ もう、大将様は姫君様をご自分の身のうちにお引き取りになるの？ 随分とまあ、早い事」

本来、若いうちは婿として通いながら、女君の実家から様々な支援を受けて、自らの地位を確立していき、さらに、事実上の正妻として世間を認めさせてから、初めて自らの邸を用意して、そこに女君を引き取って北の方とするのが、通常の手続きだろう。それを結婚からわずか数カ月で北の方を据えると言うのは、異例な事だ。

ただし、大将様は、すでにご出世を果たされているし、自らの御実家は都で一番の権勢を誇っている。おまけに姫様はご結婚の際の特殊な事情で、すでに一度、大納言家で幾日か暮らされている。普通のご結婚とはかなり事情が違ってしまっているけれども。

「これは大将様のご意思じゃないわ。きっと、大将様も今頃初めて中納言様から聞かされているはず。これは中納言様が大納言様にお願ひされて、大納言様が許可された事なのよ」

「親同士で、突然、勝手に決めちゃった訳？　なんだってまた？」

「これは、あくまでもまだ噂なのだけれども、大将様は三条殿の姫君を新たにお迎えになるかもしれないの」

「何ですって？」

三条殿と言えば、こちらの中納言様と同格の方。その方の姫君を迎えられるとなれば、ウチの姫様とは、モロに妍を競う事になってしまう。まだ、こっちも新婚だって言うのに。

「今、三条殿は勢いがあるよ。盗賊達を取り締まる立場に直接当たっておられて、役人の数が増えて以来、実績を積み上げてらっしゃるから。大納言様にとっても無視できない存在らしいのでも、ウチの中納言様とも、長いお付き合いで、政務上の勝手も良く分かってらっしゃる仲でしょう？　決してこちらを軽んじてはいないという所を、お示しになりたいんじゃないかしら？　何より、大将様と姫君様は仲がよろしいのだし」

そういう事だったのか。それでは三条殿の勢いというのは相当なものだろう。長い間政務上の事では手を携えて来た両家の間に割って入る事が出来るなんて、かなりの勢いだ。

「だから、あなたの養女の話も、この事と無関係ではないんじゃないかしら？」

「なんでそこに、私が出て来るの？」

「あなたはご自分が、今、どんなふうに見られているか、分かって

いないのよ。あなたはこの所都の噂の中心だわ。良くも、悪くもね。あなたが姫君様に仕えていると言うだけで、世の人々はあなたと姫君様に注目する。中納言家も自然と脚光を浴びているの。中納言様は大納言様との関係が世間に広く知らしめられる今のうちに、この勢いに乗じてその関係を一層密にしようとしてらっしゃるの。実際、朝廷でのご自分の立場も強めてらっしゃるみたいだし。三条様と言う手ごわいお相手が現れた今、あなたの様な注目を浴びる存在を中納言様は手放したくはないの。だから、ご自分のご家来の養女にしようとなさっているのよ」

私が。私なんかが、中納言家にそれほどの影響を与えていたとは思ってもみなかった。

でも、そう考えれば、中納言様の今にも手をすり合わさんばかりだった態度も合点がいく。

「とにかく、大将様が姫君様を御身のうちにおかれるのなら、私は姫君様について新しいお邸に入る事になるし、そのお邸の主は大将様。忠長様もそこに住まわれる。姫君様達が落ち着かれるまでは私達も落ち着けないし。だったら今のうちに宿下がりして、せめて三日夜だけでも済ませてしまおうかと」

成程。それで話が急に具体的になっちゃった訳ね。しばらくは同じ邸の部屋に通わせにくいし、その内通うにしても正式に一緒になっちゃった方が都合は良さそうだし、宿下がりのお願ひもしやすそう。やすらぎも恥ずかしそうだが、聞いてるこっちの方が赤くなる。

「だから、あなたもこの件は良く考えた方がいいわ。決して、あなた一人の問題ではないんだから」

うーん。これで私が養女になって、問題でも起こさうものなら、それはそれで厄介そうだ。

養女になった以上は、決して今までのように自由奔放でいられなくなるだけではなく、養父の忠光様のために、中納言家が安寧に過ごせるように気を使わなくっちゃいけない。

おまけにやすらぎは忠長様が大將様の従者である以上は、その妻として大納言家とのつながりが保てるから、まあ、先々も安心だろう。姫様は正式に北の方とされるのだから、一生の保証を得たのも同然だわ。ただし、どちらも大納言家の権勢が崩れなければの話だけれど。まず、それは大丈夫だろう。

でも、私は、もしも中納言様が三条殿に取って代わられることでもあれば、そして、何かと噂になりがちな私を悪目立ちする厄介な存在だと思われれば、多少強引な手を使ってでも、私を姫様から遠ざけるかもしれない。

私は中納言様から用済みと見なされれば、忠光様の足かせになってしまう。大將様だって、私に何かとお味方下さったのは、私の身の上が気楽な下司だったからこそ。普通の貴族の姫と同格になった時には、情勢次第では私への態度を変えられてもなんの不思議もありはしない。それを私は先日御所で学んだばかりだ。

そして、ふと思う。信頼だけでは繋がる事の出来ない貴族の方々は、なんて孤独なのだろうと。

翌日、大將様から私達に正式に大納言家の別邸へ姫君様の身を移

される話しがあった。一応、私達はお祝いを申し上げる。三条殿の姫の話はまだ、ただの噂なのだし、姫様が正式に北の方になられるのだから、ご夫婦にとっては目出たいお話と言う事になるのだ。

勿論、私達は三条殿の姫の話など、毛ほども姫様には漏らす事はない。それは大将様がごく、内密に姫様にお伝えすべきことだ。その事があるせいか、大将殿もどうも落ち着きが無い。懸命に姫様のご機嫌をうかがっている。

そんな調子だったので、私は大将様に自分の養女の件など、言う訳にはいかなかった。

だからその日の夜も遅くに、中納言様の暮のお相手に行っていた大将様が、そろそろ休もうと下がりかけていた私の元に吹っ飛んでこられたのには驚いた。

「花房、何故あなたは養女の件を私に話してくれないのだ」

どうやら暮の席で直接中納言様から聞いたらしい。

「話すも何も、大将様にお話しなくてはならない事とも、思いませんでしたので」

これは私の個人的な事だ。

「中納言殿は言っておられたぞ。一の姫は北の方となり、あなたは忠光の養女となる。これだけこの家と深く縁が結ばれるからには一の姫は勿論、あなたの事もゆめゆめ軽々しく扱うなど。私はあなたを一度たりとも軽んじた事はなかったはず。あなたはいつから、そんなに私を疎んじられたのか」

「めっそももない！ 私が大将様を疎んじたりするはずが、無いじ

やありませんか」

私は慌てて否定した。

確かに私は大将様からの結婚の申し込みはお断りしたし、その手の仲になりたいとは思っていない。大将様自身も私に無理強いはなさらなかった。だいたい、大将様なら私みたいな風変わりな女人を相手になさらずとも、宮中にも行けばもつと素晴らしいお相手は掃いて捨てるほどいらっしやる。

「とんでもございません。誤解です。むしろ私は大将様が私に向けて下さる、友情や信頼に心から感謝しているくらいです」

私は誠心誠意、心をこめて言う。

「これは、中納言殿にやられたな」

大将様が苦々しげにおっしゃる。

「は？」

「中納言殿が焦り出したのだ。今、私があなたから離れては困ると」

「離れるも何も、私は姫君様の女房ですし」

「しかし、世間的には私の情人だ。あなたが忠光殿の養女になるなら、正式に妻の一人とするか、私とのかかわりを断たせてあなたに別の婿を取らせるか、どちらかはつきりさせたいはず。でなければ中納言殿は体裁が立たない。北の方の一女房にすぎないならともかく、きちんと婿取りが出来る姫を、ましてや中納言家が後ろ盾する気のある姫を、私が情人扱いする訳には行くまい。中納言殿は、何が何でもあなたを私の妻にさせたいらしい」

「そのために私をご家来の養女に？」

「あなたは私に色よい返事を下さった事はない。私はてつきり、あなたが私から離れるために養女の件を御隠しになつていたのかと思つたのです。あなたがこつそり婿を決めてしまえば私は手出しできませんからね。中納言殿はあなたにその気が無い事を勤づいておられる。だから私を煽つたのですよ。あなたを早く妻にしてしまえと」

私はまたしてもカツとなつてしまふ。眞実はともかく、そういう噂を姫様が快く思つてなどいないはずなのに姫様は全て聞き流して下さっている。なのに、一番お味方して下さる筈の御父上様である中納言様が、そんなことをなさるなんて、ひどすぎる！

「冗談じゃないわ！　そこに私の意思も姫君様のお気持ちもあつたもんじゃないじゃないの！」

「花房、声が大きい」

大將様が私を落ち着かせようとする。でも私はその態度が余計はらたらしい。

「実の御父上がなんてことなさるの？　いくら女人は男君の道具のようだとはいえ、あんまりだわ！　そもそも大將様が三条殿の姫君を迎えようとなさるからこんな事になつたんじゃないの！」

大將様が怒鳴り散らした私を見て鼻白んだ。それを見て私も我に帰る。ここは姫様の御簾の近くだった……。

「殿。それは本当の事ですか？」

御簾の向こうから姫様の通る声が聞こえた。大将様が御簾のうちに入られる。

「皆、下がっていなさい」

また、姫様の声が聞こえる。女房達が御前をそつと離れていく。

やってしまった。ご夫婦の繊細な難しいお話を、私が勝手に暴露してしまった。

「花房さん、さあ」

そう言ってやすらぎが呆然としてしまっている私を引っ張った。

御簾の内

その夜、私は姫様の御前に出なかった。どの面下げて姫様に会う事が出来ようか？ だからと言つて部屋にも居たくない。閉じこもつてしまうと、いろいろ悪い事ばかり考えてしまう。部屋でなくたって考えてはしまうけど。

せめて外の空気だけでも吸いたい。私はそつと庭に出た。

春の夜は、意外と暖かかった。勿論空気はひんやりと冷たいのだが、都特有の冬の底冷えするような冷気はもう感じなかった。むしろ、少しだけ冷たい風が、心地いい。

忠光様の養女になんかになったら、こんな風に庭に出る事も難しくなるんだろうな。やっぱり私にそういう暮らしは向かないわ。姫様に仕え続けるには不利になるけれど、養女の件は断ろう。

その前に今日の不始末を姫様にお詫びしなければ。姫様に許していただけなければ、仕え続けるも、養女になるもないんだから。

私は半月の月を眺めながら、姫様へのお詫びの言葉を考えていた。すると人の気配を感じる。誰だろう？

月夜なので目を良く凝らすと姿が見えて来る。康行だ。都に来ていたんだわ。また、大将様についてきたのね。

私は思わずホツとした。康行なら私の愚痴を全部聞いてもらえる。そら見た事かと言われるだろうけど、今はそれもかまわない。むし

る康行と口喧嘩の一つも交わしたい。

しかし、そこにもう一人の人影が現れた。長い髪を束ね、足元をキリっとたくし上げた下働きの少女だ。私とそう、変わらない年周りだろう。思わず私は身を隠してしまった。

いくら下男と下女とはいえ、こんな夜更けに庭で会うなんてただの用事とは思えない。二人は何事か会話を交わしているが、何を話しているのかは聞こえなかった。私は音をたてないように、でも、急いで立ち去った。

そうだ。康行が都で会っていたのは私だけじゃないはずだ。共に働き、共に主人たちの世話をする、沢山の下女たちとも会っている。大納言家でも、中納言家でも、むしろ、彼女達の方が親しくしているはずだ。

私のように縁の上から見下ろし、見下ろされて話をするのではない。男女でも、同じ地面に足をつけて、同じ目の高さで面と向かって会話をする。

今まで当たり前だった事が、ここでは当たり前ではなくなっている。

ふと、思い出した。大将様はそれをとっても羨ましがっておられたっけ。自分達には出来ない。

私は顔を隠すのをやめた。几帳に隠れるのもやめた。それでもなお、庶民の暮らしとは違ってしまふ。

大將様は今頃、姫様に自分のお立場と、姫様への想いをこんこんと語って聞かせておられることだろう。そして、姫様のために自分の出来うる精いっぱいのことをなさることだろう。

やすらぎももうすぐ結婚する。姫様の乳母であるやすらぎの母親も、忙しそうにしている。きっと、実家では三日夜の準備が進んでいるのだろう。

私は何だか、ひどく孤独に思えて来た。私だけが、都で取り残されてしまったような。

康行は私に櫛をくれた。馬にも乗せてくれた。幼い時の約束は果たされてしまった。それから、なんの約束も交わしていない。不器用な手紙で、私の琴を褒めてくれただけ。

もし、ただの下女として仕えていれば、夜更けの庭で、康行と面と向かって話をしていたのは、私だったかもしれないのに。

もう、庭にいる事も嫌になって、私は仕方なく部屋に戻った。なかなか寝つかれなかったが。

「どうしても、私と一緒ににはなれませんか？」

撫子が康行を見つめながら言う。

「撫子と一緒になれないんじゃない、俺の心は人殺しの罪から逃れられなくなってしまったんだ」

「それなら、私はなおさら康行のそばにいたい。康行は傷ついてい

るんだもの。花房さんは康行のそばにいられないけど、私は康行を慰める事が出来るわ」

撫子が見かけに似合わぬ意思の強い瞳で言う。花房によく似た瞳で。

「傷ついてるんじゃない、花房のせいでもない。ただ、俺に度胸がないだけなんだ」

「度胸って何？ 人を傷つけ、殺す事？ そんなもの要らないわ。康行には優しさがある。上京したばかりの私に優しくしてくれたり、馬達を心から愛しんだり、若君のために誠意を尽くそうとしたりしているわ。それで十分よ」

「撫子がそんな風に行ってくれるのは嬉しい。だが、それじゃ、俺は納得できないんだ」

「納得なんかしなくていい。ただ、私は優しい康行が好きなんだから！」

撫子がそう言って近づいてくる。花房は遠い世界に行ってしまう。この娘は自分のそばにいてくれる。

あの、頬に残ったぬくもりを想いだす。今この娘を抱き締めれば、すがりつく事が出来るかもしれない。苦しみを和らげてくれるかもしれない。一瞬、手を伸ばしかける。

だが、それは俺の望む生き方じゃ無い。どうすればいいのかわからない今でさえも、それだけは分かっているんだ。この娘の優しさを利用してはいけない。

「すまないが、俺は自分の望む生き方をしたい。傷ついたって構わないんだ。君に逃げたくはないんだ」

それだけ言うと、康行は撫子に背を向け、その場を去って行った。

あとに残された撫子は、康行が買ってくれた端切れを髪からほどき、何か、決心でもしたかのようにそれをじっと見つめていた。

翌朝、とにかく私は姫様にお詫びを申し上げに行く。まずは何より謝らなくては。

一晚経って、姫様も落ち着かれたのだろうか？　いつもどおりに私を御簾のうちに通して下さった。

「気にすることはないのよ。昨夜のうちに殿はお聞かせ下さるつもりだったのですから」

姫様はそう言って下さったが、私は穴があつたら入りたかった。

絶対に大将様から先にお聞きしたかったに違いない。だってその後、

「やはり、花房に妻のお話を受けてもらっておけばよかったわ。そうすれば少しは慣れて、こんなにも憂い思いはしなくて済んだでしょうに」と、洩らされたのだから。

私が相手でも、さぞやご気分が悪かろうに、まして突然、妍を競う相手の事を私の軽い口から聞かされたんじゃ、さぞや御不快だっ

たに違いないのだ。身近な女房に手をつけたのと、同格の姫を妻に迎えるのでは、天と地ほどの差があるのだから。

大将様の御身分では、いつかはこうなる事とは思っていたけれど、それをこんな形で姫様に私が伝えてしまったのは、我ながら口惜しかった。まして、それならいつそ、私を先に妻にさせておけばと言う姫様の心情はあまりあるものがある。相手がだれであろうと、自分の夫が別の妻を迎えて平気なはずはないだろう。

大将様が同格の姫君を迎えられるという事は、姫様にそんな言葉をもらさせるほど、悲しい出来事だったのだ。

本来ならこういう時にこそ、姫様をお慰めするのが年の近い私達若い女房の務め。それなのに今回は私がその張本人だ。当然、周りの視線も冷たく感じてしまう。

「琴を」

突然、姫様がつぶやかれた。

「花房、琴を弾いて頂戴。今のあなたの自由な心を聞かせて」

ああ、そうだった。私には琴があった。こんな時に姫様をお慰めできる、私の唯一のとりえ。私は姫様の心を琴の音に表す事が出来る。私の思いを伝える事が出来るのだ。

私は弾いた。姫様の望まれるがままに。誰に聞かせるともなく、心のままに。

弾いているうちに、私は姫様を慰めると言うよりも、私自身が琴

の音に慰められてきた。そして、今こんな中でも私に琴を弾かせてくれる、姫様に感謝していた。

そう、姫様は私に琴を弾かせるために私を守り続けて下さっている。こんなに姫様自身が苦しいであろう時でも、私には琴が必要だと言う事を分かって下さっているのだ。

ようやく私は気持ちを立て直す事が出来た。中納言様にお会いしよう。そして養女の件はきっぱりとお断りしよう。

もともと私は女人を手駒のように扱う世の中に逆らおうと、琴を弾き続けて来た。いつの間にかその力の大きさに呑まれようとしてしまっている。これではいけない。姫様は、私の気概と、立ち向かう心を認め続けて下さったのに。

康行のせいなんかじゃないわ。

一瞬だけ、昨夜の庭の光景が頭をかすめたが、すぐに振り払う。

私は早速中納言様の元に向かった。非礼なのは承知の上だ。私はいつだって、非礼なやんちゃものだったんだから。

だが、その康行を、中納言様の元へ向かう途中で見かけてしまった。昨夜の事があるのでためらったが、あつちは私には気がつかなかったのだから、気にする必要はないはずと思い直して、私は声をかけた。

「康行、都に来ていたのね」

ところが康行は、縁の下で膝をつき、私に向かって頭を下げた。私は驚いた。

「いつたいなんの真似？」

「あなた様は御身分が上がられる方ですから」

康行は頭を下げてまま言う。

「養女の事を聞いたの？ それはこれから断りに行くところよ。私は今までと、何にも変わりはないわ」

「それでもだ。お前は俺の主人の北の方になられる方の、女房になるんだ。侍者の俺とは違うんだよ。邸の人目の着く所で軽々しい態度でいる訳にはいかないんだ」

康行は声をひそめながら言う。

「養女の話は断るのか。大将様との結婚話の時と言い、お前らしいな」

康行は軽口をたたくが、顔はあげない。

「そうよ。私は逆らって生きるのが性分なのよ。だからあんたも頭をあげてよ、康行」

「俺はそういう訳にはいかないんだよ。お前とは違う」

「なによ、何が違うって言うの？ 私の身分は変わらないのに」「私はイライラと聞いてしまう。」

「それは、俺は男で、お前は女人だからさ」

「どういこと?」

私には意味が解らない。

「俺の身分はいやしいが、男だから侍として大将様を守ることができ。馬の世話もできる。自分の身分のまま職務を果たす事が出来るんだ。しかし、お前は女人だ。女人のお前が女主人に直接仕え、お守りするには女房になるしかあるまい。それしか、御簾の内に入る手段はないのだから。だが、御簾の内と外では世界が違う。お前が女主人を選ぶ以上は俺とは世界が違ってしまふのは仕方のない事なんだ」

康行は低い声のまま言う。

御簾の内の世界。

そつだ。考えてみれば当然のことだ。身分の違いの他に、この世界ではそつという違いもあったんだ。

「俺に氣遣う事はない。お前の気持ちは分かる。俺だって大将様を放つておくことなんか出来やしない。だからこそ、人を殺すような侍者にまでなつたんだ。お前が一の姫様に寄せる思いも同じだろう。だから俺はお前がどんな決断をしたって、それを認めるよ。誰が何と言おうと俺だけは認めてやる。お前はそれを忘れずにいれればいい」

そつか、今まで気づかずにいたけれど、私が姫君様を選ぶ以上、それだけで康行とは立場が離れて行ってしまふんだ。それなのに康行は私の生き方を認めると言ってくれているんだ。

けれど今のままでは私は康行と疎遠になつて行ってしまふ。そして康行の周りには昨夜の少女の様な下女がいっぱいいるんだ。それ

は仕方のない事なんだ。

私は返事も、礼さえも言う事が出来ずに黙り込んだ。康行は頭をあげようとはしない。彼がどんな表情をしているのか私には分からない。ただ、ひそめていた声を一転させて

「一の姫が別邸に移られる時には、私も護衛させていただきます。その後の邸の警護も我々が当たらせていただきますので、これからもよろしく願います」と、はきはきと言う。

康行はさらに丁寧に頭を下げると、私に背を向けて去ってしまっ
た。

母

いざ、こうなってしまうと、私はやはり寂しかった。康行は私の気を晴らしてくれるだけではなく、故郷の風を運んで来てくれる人だった。

それでも私が姫様に仕えたい気持ちは変わることはない。姫様は御新婚だと言うのに、大将様が新たな妻を、それも、姫様と同格の妻を迎えられようとしていて、不安定になっておられる時だ。そんな姫様の元から、私が離れることなど考える事も出来ない。

けれど、養女の話はまた、別だ。私は中納言様達の庇護のもとで姫様に仕えるのではない。私は私のままで、自由な心のままで、姫様をお守りするために戦うのだ。

寂しい今だからこそ、戦わなくてはいけない気がした。

私は中納言様の元に乗り込むと、はつきりと申し上げた。

「忠光様の養女の件、お断りさせていただきます」

「断る？ お前は一の姫の元に長く居続ける事を望んでいたのではなかったか？」

中納言様は意外そうに私を見た。私が断って来るとはつゆほども思っておられなかったらしい。

「お前は本気でこんな良い話を断るつもりか？ お前の事など私の

言葉一つでいつでも追い出す事も出来るのだぞ。いくら大将殿が以前の後ろ盾になっても、このままでは所詮情人。大将殿のお気が変わらればお前など、すぐに都での行き場を無くしてしまうだろう。それを承知の上で断ると言うのか？」

中納言様は御不快な様子を隠そうともせず、あの、私を見下すような目つきをお見せになる。しかし私はひるまない。

「たしかに結構なお話では御座います」

そして、中納言家に都合のいい話でもある。

「けれどもそれは、私の心の自由を失う道でも御座います。姫君様は私におっしゃいました。私は心の自由を失ってはならないと。私の琴は、私の自由な心のままに弾かれなければならないと」

「お前は、私に受けた恩をあだで返そうと言うのか。ただの下司の娘でしかないにもかかわらず、お前を姫の元に仕えさせてやった私に」

「私を選んで下さったのは姫君様でございます」

「お前を女房候補として、ここに来る事を許したのは私だ。そうでなければお前は姫の足元にすら近寄れなかった」

よく、ぬけぬけとおっしゃるわ。どうせ、私のお父様にたんまりと金を握らされたくせに。

そんな事を考えて中納言様を睨んでいたら、中納言様は妙なお顔の表情をなされた。

「お前、自分が何故ここに呼ばれてこの邸に入ったか、知らぬだろう？ これでも私はお前を憐れんでやっているのだぞ」

中納言様が、一層私への嫌な視線を強く投げかけられた。

「憐れむ？ 確かに私は下司の娘ですが、中納言様にそこまで同情いただく事は……」

「やはり、父からは聞いておらぬのだな。お前の生みの母の事は」

「お母様の事？」

何故、この方が私の母の事を知っているの？

「お前の母は、本当ならこの私の妻となり、北の方の座を得る事が出来たはずなのだ。お前の祖父が我を張らず、お前の父が現れなければ」

「お母様が？」

お母様が貴族の出なのは聞いていたけれど、中納言様の北の方になられようとしていたなんて、聞いてないわ。

「いいか、お前の母はあの、前帝の側近中の側近だった大臣の娘だ」

「あの、前帝の？ まさか！」

「それにお前の祖母に当たる大臣の妻は、さらに前の帝の御皇女で尊い血筋の方だった」

「私のお婆様が、元の女宮様だった？」

「なんでも琵琶の名手だったと聞いている。お前の母親は琵琶よりも和琴を得意としたらしい。その評判を聞いて、私もお前の母を娶ろうかと思っただけだから」

私が琴を得意とするのは、祖母や母から受け継がれた血のなせる事だったのか。

「その大臣は前帝の激しいご気性を、きちんと抑え込む事が出来なかった。詔は口々に発せられる事が無くなり、世の中は荒れかけた。にもかかわらず、お前の祖父の大臣は無責任にも己の官位を返上し、無位無官の身で仏門に入ってしまった。あの岩窟者は私からの援助も、お前の母との結婚さえもはねつけた。そのせいで家は貧窮し、お前の母と妹は苦しい生活を強いられ始めていた。妹はつてを頼りにかろうじて後宮の女房として勤め始めたが、それでお前の母親の世話までは出来かねたに違いない」

貴族の娘の人生は、父親の後ろ盾に寄って決まる。母は、あの梅壺の更衣様のような身の上になったのか。いや、更衣様はすでに後宮に入られていて、難しいお立場とは言え、その身が立っている。弱々しいながらも御父上の庇護もある。母の場合は未婚のまま父親が無位無官になったのだから、その心細さは大変なものだったかもしれない。近頃は宮様のお血筋とも言えども、お立場が弱くなって人が寄りつかなくなれば、いつともなく噂を聞かなくなったと思ううちに、食べる物にさえ事欠いて、はかなく亡くなられることだってあるのだ。

傾きかけた家の、立ち歩くことさえまれに育った貴族の娘ほど、心もとないものは無いだろう。叔母の様に勤めに出られるほどしっかりした人など、そうはいない。

「そこにお前の父が付け込んで、お前の母に近づこうとした。当然一族はお前の父を拒絶しようとした。しかし、お前の祖父は仏門に入った身、俗世の事には疎くなっていたのか、お前の母をまんまと盗み出されてしまった」

「盗み出した？」

「用は、お前の父は母を無理やりさらって、妻にしたと言う事だ。後に母は返されたが、お前を身ごもっていては、すでにどうする事も出来なかったのである。一族の者たちを協力させ、お前の父が財力を蓄える元手を作り出した。まあ、彼らもお前の祖父母も、それ相応に利益は得たのだらうがな。まるで娘を盗人に売ったようなものだ」

お母様が。顔も知らずに亡くなられたお母様が。

今まで懂れて、慕わしく思っていたお母様が、そんな目に合っていたなんて。私を誰よりも可愛がってくれたお父様が、そんな事をしたなんて。

「そんな……。信じられない」

「お前にとつてはそうだろう。しかし、おかしいとは思わなかったのか？ 貴族になんの繋がりもなかったお前の父が、貴族の母と結ばれるなど不自然ではないか。それに、母親を亡くした娘は普通、母親の実家で育てられるもの。お前は父に、武蔵などと言うあらえびすが暮らすような田舎に連れられて育った。当然だ。このような事情のある娘、とても都には置いておけまい。お前は祖父母からも厄介者として追い出されたのだ」

信じたくはない。信じたくはないが……確かに、おかしい。

何か事情がなければいくら貧しいとはいえ、実の母の実家のある娘がわざわざ他の土地で父親に育てられるなんて事は無いだろう。中納言様のおっしゃっている事には筋が通っている。今まで、父のもとでは当たり前前に思ってた事が、都人の考え方になぞらえてみると、とても不自然に思えた。

「心労がたたったのか、お前の祖父母は相次いで亡くなった。お前の母の家系はお前の叔母がかるうじて繋げているだけで、没落の一端をたどっている。にも関わらず、お前の父は厚顔にもお前を私の姫の女房にしたいと言ってきた」

だから、中納言様は私をいつもさげすんだ目で見ていらしたのか。これでは私にいい感情など起るうはずもない。だが、父には他に都でのつてなど無いのだろう。

「それでもお前は多少なりとも皇族の血を継いでいる。育ちのせいで多少田舎臭くはなっているだろうが、我が姫の元で磨かれればその血がお前を輝かせるに違いないと、私は考えた。現にお前はその才覚を現したではないか。今のお前があるのは、私の憐れみがあったこそ。その恩にお前は報いようとは思わんのか？」

確かに、中納言様が私を女房候補として認めなければ、私は姫様に仕える事は出来なかった。だが、そこにあるのは私への憐れみなどではない。おそらくは昔、母に断られ、顔を潰された恨みを娘の私を召し使える事によって、晴らそうと思ったに違いない。だつて、中納言様は私に危険な姫の身代わり役をさせたんだから。

私は崩れかけた気概を奮い立たせた。母と祖父はこの方に信頼を

寄せられずに断った。それをこんな形で恨みを晴らすなんて、中納言様のおごり心だ。そんなものにくじけたりなんかしたくない。

「私は……。姫君様の女房です。姫君様から離れたりはしません。でも、養女にはなりません」

かろうじて、そう、言い返した。

「私はお前の主人の父親だぞ！ 私に逆らって、ここにおられると思つのか！」

中納言様は、顔を赤く染めて怒ってらっしゃる。しかし、私は言う。

「私の主人は、あくまでも女主人であるところの姫君様です。その姫君様が私の琴を求めて下さる限り、私はどこへも行きません。姫君様のおそばにいます」

生意気で結構。どうせじゃじゃ馬と言われてきたんだから。ぐつと腹に力を込める。

「それに、本当は中納言様だって、私を追い出すわけにはいかないんじゃないですか？ これだけ良くも悪くも都中の噂になってしまっている私を、急に追い出したりしたら、中納言家にも余計な傷がつきかねないんじゃないですか？ 人の口に、戸は立てられないのですから」

私はわざと強気に出た。姫様が私に琴を弾かせ続けているお心をお思つと、弱気になつていけない。

私の弾く琴は、私一人の物じゃない。今、姫様が味わっているお

苦しみも、私を支えて下さっている御心も、伝えるための物なんだから。私は逃げてはいけないんだ。

中納言様は忌々しげにしてはいらっしやるが、私に反論はなさらなかった。私の言葉は結構凶星だったようだ。

「姫君様のところへ、戻ってもよろしいでしょうか？」

「お前が勝手にここに来ただけだ。勝手に戻ればいいだろう」

中納言様は相変わらず不機嫌なままだったが、私を追い出すとは言わなかった。戻ればいいというのだから、私はこのまま姫様のそばにいて良いと判断した。

私の主人は姫君様だ。私はそれを中納言様に宣言した。姫君様が私の味方でいて下さる限り、私は中納言家や大納言家に逆らっても、姫君様について行く。私はあらためて決心がついた。

これまで私は望んで琴を弾いてきた。今は望まれて弾く事を覚えた。

そして、私は姫様に望まれてここにいる。康行も認めてくれる。私は決して孤独なんかじゃ無い。

少女

それでも私は話を聞いて、頭の中がぐるぐると回っていた。とても落ち着いて考える事など出来ない。初めて聞く母の事、祖父母の事。

ああ、あのお父様が、お母様にそんな酷い事をなさったなんて。

私はお父様とお母様の、睦まじい愛の中で生まれたのではなかったの……？

都に出て来る前なら、男君が愛する姫をさらって愛を遂げると言うのは、とても美しい世界だと思っていた。絵巻物や、物語の世界ではそんな風に描かれていたから。

けれども私は知ってしまった。現実に盗み出される姫は、そのよくな美しい気持などになれるはずがないと言っ事を。

ある日突然現れた男によって恐ろしい目に遭い、何者かに売り飛ばされたり、殺されたり、母の様に身ごもらせられたりして、つらく、苦しく、悲しい目にあわされてしまうのだ。

そして私はそんな風にしてこの世に生まれてきた。おそらくは母にとっては望まぬ子として。

これが本当なら、私はもう、父の元には帰りたくない。いや、帰れない。これまで大切に慈しんで下さった、その心までもが信じられない。だって、どんなに父が私を愛して下さるうとも、それにはお母様を深く傷つけた代償が伴っているから。そんな愛情なんて、

欲しくない。

お父様のために、都で名を上げるとか、人繋がりをよくするとかなんて、考えたくない。

動揺と混乱の中にはいたが、私は姫様の元に戻る事にした。もう、随分と時が経つたはず。姫様にご心配をかけたくない。

故郷に自分の居場所を失う以上、私の帰りつける場所は姫様のところしかない。姫様は私をお認めになって下さった。中納言様の恨みなど露ほどもお知りになる事もなく、私自身をお認めになり、私の琴を必要として下さっている。やすらぎだつて認めてくれている。

ふるさとを失つても、私の心のふるさとは姫様のおそばだ。

それに康行も私の琴を認めてくれた。私がかここにいるのは確かに中納言様の思惑の結果なのかもしれないけれど、姫様や、やすらぎや、康行が私の琴を認めてくれているのは確かだ。きっと私の琴の音は、他の方々の心にも響いていらつしやるに違いない。お母様は私を望まなかつたかもしれないけれど、お母様の琴を弾く心は、私の中に受け継がれていた。

お母様。私、琴を弾き続けるわ。何があつても。お可哀そうなお母様の分まで。

お母様が望まぬながらも生んで下さった命だもの。決して無駄になんかしない。

そんな思いで姫様の御寢所に戻る途中、私は突然、誰かに呼び止

められた。見ると、下働きの少女が縁の下でかしまって膝をつき、頭を下げている。よく見ると昨夜康行と会っていた少女だと気がついた。

「お呼び止めて申し訳ございません。私、大納言家の下女で、ここへは康行に連れて来て貰いました。少し、お話をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

私はまだ、混乱から立ち直ってはいなかった。一瞬、どうしようかと迷う。

「私のような者がこのように奥まったところへ近づいてはいけない事は分かっております。こんな奥まで入って来たのは私の勝手な振る舞いでございます。康行は知らないことなのです」

少女は頭を地面にこすりつけたままそう言った。とはいえ、彼女のような身分では高貴な方々の住む建物に、容易に近づく事は出来ない。侍者の康行が通したからこそ、彼女はここにいるのだろう。私は少女が僅かに震えているのに気がついた。

それほどまでして少女は私に話したい事があると言う事だ。私は彼女の話聞く事にした。何と言っても少女の声が、とても断れるようものではなかったから。

「かまいません。私も本来、こんな所にいられる身ではないのですから。それで私になんの御用でしょう？」

私は緊張した。少女にただならぬ気配を感じる。

「花房様は一の姫様とともに大納言家の別邸にいらっしゃるのです

ね？」

「ええ、勿論です」

「こんなこと、私が言うのは大変失礼なのは承知しております。でも、私は覚悟してお声をかけました。どうか、康行をあなた様から解き放つてやって下さいまし」

少女は初めて私に向かって顔をあげた。燃えるような目をしている。

「解き放つ？ どういうこと？ 私は康行を縛った事なんかないわ」

私はうろたえた。それほど強い視線だった。

「いいえ、あなた様は、あなた様の存在そのものが、康行を縛りつけています。今、康行は苦しんでいるのです。とても。本当にとても苦しんでいます」

「どういふこと？」

「康行は、あなた様のために人を斬り殺してしまったからです」

少女は視線を外さずに言った。

ああ、前にもこんな目を見たことがある。これは桜子さんの目だ。あの人もこんな目で私を睨みつけていた。恨みと、嫉妬と、憎しみを帯びた目だった。

「康行は、あなた様の身を守るために、やむを得ず賊を斬り殺しました。けれど、その事にあの人はいまだに苦しんでいるのです。あの人は侍には向かない、本来、優しい人なのです。馬達を育て、慈

しみ、大将様にも優しい、仲間にも優しい、あなた様にも、私にも優しくしてくれる、そんな人なんです」

少女の視線が、ふっと柔らかくなる。康行への思いが、その目から恨みの炎を遠ざける。

「けれど、賊を斬ってしまったて、あの人の表情には陰りがあります。仲間達も心配しています。夜中にうなされる事もあるようです。あれからずっと、康行は苦しんでいるのです」

そして少女の目に、再び恨みの火が燃え上がる。

「康行は侍になってからも、決して人を殺した事はありませんでした。たとえ刀を合わせる事があっても、人の命を奪うような真似はしなかったそうです。そんなこと、出来るような人じゃないんです。きっと、自分の身が危険にさらされても、人の命を奪うことの出来ない人なんです。それなのにあの人は人を斬ってしまった。あなたを守るために。あなたのために人を斬ってしまった自分が、あの人は許せずにいるんです」

恨みで赤く染まった少女の目から、今は涙がこぼれおちている。

「康行が……可哀想……」

少女は泣きながらうなだれてしまう。

知らなかった。康行がああした後、そんなにも苦しんでいたなんて。私に歌を送ったり、励ましてくれていたその陰で、そんな風に苦しみもがいていたなんて。

私は何にも知らないまま、御所で楽しく暮らしたり、更衣様に肩入れしたり、姫様に気を回したりして、自分の事ばかり考えていた。あの賊を斬った時、康行はあんなにも震えていたのに。人を斬って平気じゃいられないと、康行自身が言っていたのに。私は康行の歌をからかってさえ、いた。

「優しい人なのに。優しくて、みんなから好かれて、幸せにしていたのに、あなた様のためにこんなに苦しむ事になってしまつて。それなのにあなた様は御簾のうちの一の姫様に付き添つて、康行と同じ邸に暮らす。あなたの姿を見れば、康行は一層苦しむのに。もう、十分でしょう？あの人を苦しめるのは」

「ごめんなさい。私だつて康行を苦しめたくはないわ。でも、私は姫君様のおそばにいなければならないの。私はどうすることも出来ないわ」

「それは存じております。決してあなた様のせいとは申しません。けれど、せめてさっきのように康行に声をかけるようなことはしないで頂けますか？」

少女は再び顔をあげた。

「さっきの話を聞いていたの？」

「申し訳ございません。でも、あなた様も昨夜、私達のことをご覧になっていらつしやいましたよね？」

少女の方では気づいていたのか。女人の勘が働いたのかもしれない。

「あの時私は康行に自分の気持ちを伝えました。私の方から一緒に
なつて欲しいと言いました。でも、康行は受け入れてくれませんでした。
自分は一殺しだと。人の心に応える資格はないと言っていました。
勿論、それだけではないはずですが」

少女の目から、嫉妬の火は消えずにいる。私はその目をそらして
しまつ。

「私は言いました。それでも康行が好きだと。お願いです。もう、
康行にかまわないでください」

少女の目が、嫉妬から哀願へと変わる。本当に康行を想っている
のだろう。

「あなた様には大切にしている方が、他におられます。康行も大切
なのでしょうが、一の姫様の事も大切に思っついていらつしやる。でも、
私には康行より大切な人はいないんです。お願いです。康行をあな
たから解き放つてあげて下さい。そうでないと、康行は苦しんだま
まなんです」

康行は私のために人を殺して苦しんでいる。なのに、私は姫様
にお仕えする道を選んでいる。しかも、それを康行は認めてさえくれ
ている。少女の言うとおりだ。私はこれ以上康行を苦しめてはいけ
ない。

「勝手な事ばかり申し上げました。私の事はいかようにも御処分下
さい。でも、康行の事は、もう、かまわずにいてあげて下さい。名
も告げずに失礼な事ばかり申しました。私の名は」

「いいえ。名のすることはないわ。あなたは独り言を言っただけ。私

はそれを聞いてしまっただけよ。そして、もう康行に声をかける必要はないって思っただけ。私達はただの通りすがりよ」

そう言っつて私は自分の局に向かう。今、姫様のそばに行く気にはとてもなれなかった。

私は心配して様子を見に来たやすらぎに「気分が悪い」と言っつて、姫様に少し休ませてもらうとことづけてもらった。とにかく一人の時間が欲しかった。

私は康行に助けられた後の事をあらためて思い出してみた。男を斬つた後の康行は、小さく震えながら異様な気配を漂わせていた。あの時は無事に帰りつく事だけを考えて気を張っていたが、それでも康行は普通ではなかった。

240

私が目覚めてから会つた時も、明らかに様子がおかしかった。もとよくしゃべる男ではないが、それにしても黙りがちだった。ついには私が尼になるんじゃないかとさえ、勘ぐっていた。私がそんな性格じゃない事はよく知っているのに。

あんなに嫌っていた和歌を、私に贈ってくれたのも考えてみればおかしかった。もう、どんなに私を心配しても、これからは距離が離れていく事を、康行は知っていたのかもしれない。

私が姫君様のそばに近づくほどに、康行との距離は離れていく。彼は私のために人を斬りさえしたというのに。

私は姫様から離れることはできない。姫様は私の心のふるさとだ。

それだけははっきりしている。それならもう、康行に近づいてはいかない。

甘い時間

ここにきて私はどれだけ康行に甘えていたのか思い知った。いや、康行だけじゃない。大将様にも、姫様にも、やすらぎにだって甘えていた。

大将様だって、三条の姫君をお迎えになる以上、より、姫様との絆を深めなければならぬ。姫様を正妻として御身の内に置きながら、もし、三条様よりもお通いが少なくてもなるうものなら、口さがのない都人は何を言っても分からない。かと言って、三条の姫を軽んじるそぶりを見せれば、これも立場を危うくするだろう。きっと、私どころではなくなるはずだ。

姫様だって、まだそうとうお若いにもかかわらず、身分も責任も一気に重くなられる。ご両親のもとでお暮らしになるのとは違い、大納言家の別邸とはいえ、大きなお邸を一つ、ご自分で采配し、切り盛りしなくてはならなくなる。それに、三条の姫と寵も競わなくてはならないし。これからは大変なはずだ。

やすらぎだって忙しくなるだろう。何せ、夫が同じ邸の中にいるのだ。自分の実家に通わせて両親が夫の世話をしてくれるのならともかく、彼女は母親とともに邸の中で夫の世話をすることになる。金銭的な援助は実家から受ける事が出来るだろうが、何かの席での衣装の用意や、こまごまとした雑務は母親と二人で実家に伝えなくてはならない。とても、私に気を回す余裕は無くなるはずだ。

姫君様が北の方となられる事で、色々な事が変わっていく。全てが今までとは違ってしまふのだ。

今までのように人に甘えていては、姫様をお守りするどころか、自分が都で生きていけなくなってしまう。もう、私は姫様のおそばにしか生きてゆける場所など無いのに。

これからは本当に覚悟が必要なんだわ。寂しがってなんかいられない。しっかりとしなくっちゃ。私は衣装や化粧を直して、あらためて姫様の元へと向かった。

それから私は不用意に御簾の外へ出ないように気をつけた。まして、縁になど近づかない。出来うる限り康行に姿を見られまいとしていた。

そんな私の様子に、やすらぎが気がついた。仕方がないだろう。それまではちよくちよく縁に出ていた私なのだから不審がられて当然だ。仕方なく私は康行の事を白状した。下働きの少女の事は告げずに。

あの少女の名前を聞かなくて本当に良かった。これであの人まで傷つけてしまつては立つ瀬がない。

「康行らしいわね。彼はあなたが身代わりになっている事を知らない時でも、全力で姫君様を守ろうとした人ですものね。でも、それだけに心配だわ」

そうだ。その時やすらぎも私達のそばに居ただっけ。

「ええ。でも、もう私にはどうする事も出来ないわ。康行自身が立ち直ってくれるのを信じるしかないのよ」

「それはそうなのだけれど。今はね、また物騒になっているの。これまでの盗賊達だけではなく、山賊達まで都に入ってきているらしいの。真夜中に都大路で牛車が襲われたりしているのよ。そういう時に真つ先に盾となって主人を守るのは、従者よりも侍者でしょう？　もし、そんな事になったら、康行は大丈夫なのかしら？」

「そんなに怪しげな者達が増えているの？」

私は不安になった。康行は今後も姫様の護衛につくと言っていた。

「いい話は聞かないわね。三条殿も検非違使を手配して、懸命に賊を追いかけているらしいけれど、捕まるのはいつも雑魚ばかり。数は多く捕まっているけれども、肝心の親玉や、先帝の息のかかった貴族達の尻尾はつかめずにいるのよ。かえって都の外からならず者を呼び集めてしまうみたいで、ちっとも安心できる状態にならないわ。せつかくの桜の季節だと言うのにな」

そう。季節はすでに桜を満開にしていた。あちこちで毎晩花見の宴が催されている。大将様も、色々お声がかかるらしく、あちらこちらへとお出ましになっているらしい。当然、その後を康行もついて行っているのだろう。

「康行も、向いていないなら侍なんて辞めればいいのに」と、やすらぎは言つが

「ううん。康行は辞められないと思う。私が姫君様から離れられないように、康行も大将様から離れる事は出来ないの。それがどんなにづらい仕事であっても。私には解る」

そう、私には康行の気持ちがよく解る。康行が私を理解し、認め

てくれたように。どうしても解ってしまうんだ。

「花房……」

やすらぎは心配そうに私の顔をじつと見ていた。

いよいよ姫様が、大納言家の別邸に移られる日取りが決まった。占いに手間がかかったらしく、あと、十日足らずしかない。私達は引越しの準備に大忙しとなってしまう。

大將様と三條の姫の結婚も本決まりになったようで、こちらの引越してからひと月の間をおかずに、ご結婚される事となったようだ。向こうも勢いがそがれない内にと、急いでいるのだろう。

引越しの支度や手続きをするのに、御簾の奥に引越込んでばかりもられない。私も寢所の縁や、ひさしの周りに出て歩く機会が増えてしまった。ただし、のんびりと庭を眺める余裕など無く、気ぜわしさに追われて、バタバタと歩きまわるような日々ではあるが。

そんな中で偶然、康行の姿を見かけた。彼は刀を腰にさし、何やら広げた紙を片手に、仲間の男と話をしていた。おそらく引越しのために物を運んでいる者達の、出入りを確認しているのだろう。次々と庭先を通る人たちに、声をかけたり、手を振って見せたりしている。おそらくは皆、顔見知りになっているのだろう。

康行は皆に愛想のいい笑顔を見せていた。

私と居る時の康行は、いつも心配そうな顔をしていた。そして時

折あきれたような顔もした。

康行が私に見せる笑顔は、少しひねくれた、意地の悪い、からかうような笑顔だった。こんな素直な笑顔を私に見せたことなど無かった。いつだって私をからかって、心配して、それでも目の奥は優しく、私を元気にしてくれた。故郷の匂いを運んで来てくれた。

そういえばこんな風に、彼の姿をしげしげと眺めた事もなかった。思ったよりも元気そうだ。表情も雰囲気も、前より明るさが感じられる。良かった。

そう、康行は私に会わなくても一人でちゃんと元気になった。私もすっかりしなくっちゃ。

いつまでも立ち止まっただけでは康行に気付かれてしまう。私はそくさとその場を立ち去ろうとした。

ところが去ろうとする気配が伝わったのか、康行がこちらを振り返った。私は慌てて御簾の中に引っ込む。そんなことをしていると何だか急に恥ずかしくなってきた。康行を盗み見るような真似なんて今までした事が無かったから。いやに胸が高鳴った。

そつと、康行の方を振り返る。康行がその場を去る気配はない。私は近くに琴が置かれている事に気がついた。誰の物かは知らないけれど、ちよつと拝借する。

私は琴をつま弾いた。出来うる限り優しい音が出るように、康行に届けとばかりにそつと、想いを込めて弾いた。

そういえば以前、康行は姫様の三日夜の宴で、私の琴の音を聞き分けてくれた。そして良い演奏だったと褒めてくれる歌を送ってく

れている。

もう、康行とは関わることはできないかもしれない。それなら、せめて。

私はひたすら心をこめて琴を弾く。康行からは御簾の中にいる私の姿は見えない。それでもまるで見えているかのように視線をじつとこちらにあてている。その視線は何処までも深く、どこまでも優しい。いつだって康行はこうやって私を見守ってくれた。

私は琴の音に康行を想う心に乗せた。子供の頃約束してくれた優しき、都に出てからも私を見守ってくれた優しい瞳。彼に会うたびに感じていた故郷に吹く風の匂い。そんなものをこの音に乗せる。

目を合わせる事も叶わず、声を掛け合う事も許されない。そんな恋の形を、今、私は初めて知った。この都に暮らす姫君達は、皆、こんな心を抱えて生きているのだろうか？

そこに仕える女房達も、こんな苦しい思いを幸せに変えるすべを手にしようと、必死に生きているのだろうか？

康行に見つめられて、見守られながら琴を弾ける幸せ。私はその甘い時間に酔っていた。

出来るなら、このままずっと、時が止まればいい……。

「康行」

声をかけられて康行がハツとした。私の手も同時に止まる。

康行はさっきの仲間に顔を向け、どこかへと向かって行ってしまった。

伝わっただろうか？ あの、夜に弾いた琴の音の様に、康行の心に。

私はしばらく呆然とそこに座り込んでいて、姫様がお呼びだと他の女房に声をかけられるまで気づかずになっていた。

三條邸

「何をしているんだ？ 交代の時間だろう？」

同じ侍者の仲間が、康行に声をかけた。

「ああ、すまない。ちょっと、ぼうつとしていた」

「大丈夫か？ 今夜もお前は若君に付き添って、三條様の邸でおこなわれる花見の宴の護衛をするんだろう？ 不安があるなら俺が代わってやってもいいぞ」

「いや、大丈夫だ。心配いらない」

皆、自分が夢にうなされ、苦しんでいることをよく知っている。侍者を辞めて故郷で馬を育てればいいと言ってくれる者もいる。若君に尽くすのは、何もおそばに仕える事ばかりではないと言える。れる。

それでも俺はここを離れようとは思わない。少なくとも、今は離れてはいけないと思う。

今、都を離れると言う事は、自分に負けると言う事だ。若君の身を守り、花房の行く末を見守ることを、俺は目標にしていた。都を離れて故郷に逃げ帰るのは、自分の苦しみに負け、目標を放り投げるのと一緒に。今、故郷に帰ったからと言って、人を殺した苦しみは逃れられるものではないのだから。

それに、あの琴の音。

俺には高貴な方々のように、演奏の良し悪しなんて分からない。何が上手くて、何が下手かもよく分からない。

だが、花房の琴の音は何かがちやうに伝わってくる。時に心苦しく、時に心優しく、耳の中に寄り添うように、心の中にしみこむように、あの音が何かを揺さぶってくる。

さっきの音色は、いつも以上に優しい音色だった。苦悩も罪も、まるで洗い流される様な、すべての事が許されるような音色だった。

この音を絶やさせてはいけない。花房を見守ってやらなければいけない。何故か、強くそう思う。

花房の琴の音は、俺に必要な勇気をくれるんだ。

そんなことを考えていたら、そばに撫子が寄って来た事に気がついた。しかも、その頬が濡れている。

「どうしたんだ？ こんなところで。泣いているのか？」
驚いて声をかけると、

「違うの。ごめんなさい、付け回してしまって。今、あの琴の音を聞いていて……。あの琴は、花房様が弾いていらしたのでしょ？」

そう言って、撫子が袖で涙をぬぐった。

「美しい、優しい音色だったわ。康行を心から慕う音色だった。康行にも分かっているんでしょう？ 花房様も康行の事が好きだと」

そして、目を伏せて苦しげな声を出す。

「私、花房様に申し上げたの。もう、康行をかまわないでって。花房様が御簾の内におられる以上、かえって康行を苦しめるからって」

「撫子」

「でも、そんな事は無いのね。あんなに素晴らしい琴の音で、花房様は康行を慰めて下さる。康行も花房様のお心を想いやってあげている」

撫子は軽く首を横に振った。

「あんなことを一方的に告げたのに、私達はただの通りすがりだと言って、花房様は私の名をお聞きにならなかったの。強い、お優しい方なのね」

「……あいつらしいな」

「私なんかには敵わないわ」

そう、撫子はほほ笑んだ。

「そんな事は無い。撫子は本当に優しい娘だよ」

そう言つと、撫子の笑顔に少し、さびしげな影が加わった。

「俺よりも、その優しさに似合う奴が必ずいるよ」

康行がそう言つと撫子は、

「その言い方、ずるい」

と言って、口をとがらせた。

「綺麗な端切れをありがとう。そして、素敵な気持ちも。思い出にするにはまだ悲しいけど、ずっと大切にするわ」

「すまない。ありがとう」

そう返事をする、撫子はどこか満足そうな表情で、頷き、去って行った。

本当に可憐な少女だったと、康行は思った。

その夜、三条様のお邸に向かう前に若君からお呼びがかかった。しかもこっそりと耳打ちされる。

「すまないが、三条の邸に行ったら向こうの下人達の噂話を、聞き集めておいて貰えないか？ どうも三条殿は気の許せぬところがある。検非違使の役人の態度も良くないらしくて、主上もひっかかっておいでらしい。こういう事はお前にしか頼めないのだ」

無事に三条邸に着くと高貴な方々は早速、春の宵の桜の宴を楽しみ始めた。

お付きの従者や侍者の我々は、ささやかな酒と肴をもてなされたが、食事はともかく、酒はほんの口を湿らせる程度に抑えなければならなかった。

近頃は帰り道が物騒だ。こちらの姫君の元へは通うと言ってもい

結婚なさるまではお泊りにはなれない。宴が終われば暗い夜道を遅くに帰らなければならぬので、若君をお守りする立場の我々が酔う訳にはいかない。

しかし、おりしも桜は満開の時。宴は盛り上がり、高貴な方々は上機嫌で下々の下男下女にまで酒がふるまわれたらしい。帰り道の心配がない三条邸の使用人たちは、いい機嫌で酔っ払っている。

「三条殿はご機嫌なようだな。使用人にまでこんなに酒をふるまっ
て下さるなんて。羨ましい限りだ」

康行は三条邸の侍者に声をかけた。

「まあ、今は勢いがおありになるからな。以前は結構ケチで、冬の炭まで使う量に文句を言っていたもんさ。それがどうだい？ 最近
は物取り、強盗の類を捕まえているおかげで、春の宴の振る舞い酒
お宅の若君のような公達まで娘婿に迎えようっていうんだから、雲
泥の差だよ」

酒のせいか、侍者の口もなめらかに動いている。様子からすると同郷か、似たようなあたりから上京した者に思えた。それで気を許しているのかもしれない。

「三条殿はこのところ、ご活躍が目立つからな」
康行はそう、水を向けた。

「そのご活躍って奴も、ちょっと怪しい感じなんだがな。大きな声
じゃ言えないが」

「どづい事だい？」

「実はこの間捕まったはずの盗賊が、こっそりこの邸にかくまわれていたようなんだ。広い邸だから一部の者しか姿をみなかったそうだが、人相は確かにその盗賊だったそうだ。検非違使を使うのが三条殿になってから、いやに盗賊達を捕まえるのが素早くなったのは、案外三条殿が盗賊達の手引きをしていてわざと捕まえては逃がしているんじゃないかって、下男たちの間で噂になってるんだ。……噂だぞ、あくまでも噂」

「ああ、分かってるよ。噂だな」

「今時、お偉い方が悪党を使いこなすつてのも、ない話じゃないかな。あの、先の帝もそうだったって言うじゃないか。ひよっとしたらまた、前帝が裏で手を引いているんじゃないか？ あの方も帝の位を降ろされてから、すっかり執念深くなられているようだし」

「そうかもしれないな」

「こつこついう時は帝がすっかり、兄の前帝を処分しなければ世の中は安定しないんだがな。他に誰も前帝を諫めたり、押さえつけたりできる者はいない。だが、今の帝はどうも情に流されやすい。特に身内に甘過ぎるから前帝だつてつけ上がるんだらう」

「御兄弟の事でもあるし、帝位をあんな追われ方をなさっているからな」

「まあ、どつちにしたつて、そのおかげで俺達は美味しい思いが出来ているんだから、文句は無いんだ。だが、三条殿が危ない橋を渡っているならいつまでものんびりはしちゃいられない。何処でこつちにとばっちりが来るか分からない。なあ、あんだ。六条殿の邸に

仕えてるんなら、俺を紹介しちやもらえないか？ そろそろ俺も鞍替えしないと。高貴な方々が右往左往しようとか関係ないが、こつちは飯が食えるかどうかがかかってるからな」

そう言われると康行は苦笑いを浮かべるしかない。身分の高い貴族たちは自分達のようにやしいものを人もなげに扱ったりもするが、庶民は庶民で世の中の事より自分の事。明日も飯を食っていけるようにしたたかに生きて行くものなのだ。

どんな身分であろうとも、この都で生きて行くのは生易しいことではない。

上の者は下の者を見下しているし、下の者は上の者を影で嘲っている。悪党であろうと、善人であろうとそれは同じだろう。

悪党だったとはいえ、俺はそうやって日々、懸命に生きていた命をこの手で奪ってしまった。

そうまでして助けた花房の命だ。やはり俺は彼女の人生を見届けてやりたい。

たとえ世界が違ってしまっても。

信頼

私はいつものように姫様の元へと急いでいた。ところが、ひさしの下を歩いている途中、突然、何者かに衣の裾を引つ張られ、転びかけた体制を立て直そうとした途端に、ぐいと身体ごと近くの部屋の内に引き込まれてしまった。

あまりの事態に何が起こったのか分からずにいると、そこに、大将様がおられた。私の衣の裾をつかんだままでおられる。私をここに引つ張ったのは、どうやら大将様らしい。

「どうなさったんですか？　こんなところで」

私はとりあえずホツとした。大将様はなかなか型破りな方なので、時にはこのくらいの、戯れ心をお見せになってもおかしくは無いから。

「どうもこうも。あなたを待ち伏せしていたんですよ。あなたの方こそ一体何があったのです？　ずっと様子がおかしいじゃありませんか。姫ややすらぎも心配しておいでだ。私はてっきり康行の事だと思つてやきもきしていたが、どうやらそれだけではないようですね。あまりにも沈み過ぎています」

「何を勘違いなさっているんです？　別に何でもありません」

「いいえ。勘違いなどしていませんよ。今までに幾度あなたの琴の音を聞かせていただいたと思つていらっしゃるんですか？　このところ、あなたの弾く琴には悲しい音が響いてくる。哀切を帯びているんです。まるであなたらしくない。さあ、何があったか教えてくれないと、

この衣を離しませんよ。正直に白状しなさい」

「大将様には、関係のない事です」

「そんなおっしゃり方をしてはいけませんね。あなたは私の藤の花なのですから。藤の花が萎れてしまつては、ホトトギスはなすすべもありませんよ」

そう言つて、私に少し、にじり寄つてこられた。

「何だか思いだしますね。あの、初夜の時のことを」

そう、懐かしそうにおっしゃられる。

大将様がからかつておっしゃっているのは分かっている。いつもだったら、私もツンと澄ましてやり過ぎるところだ。だが、私は嫌な記憶を思い起こしてしまった。

あの身代わりの初夜の前夜、私は桜子さんと、前帝方の手の者に連れ去られそうになった。口をふさがれ、息もできずに身動きを封じられて連れ去られる恐怖。お母様もあんな恐怖の中で、お父様に連れ去られてしまったのだろうか？ そして、強引にお父様に押し通されてしまったのだろうか？

私はぞつとした。大将様のもの慣れたしぐさも厭わしくなった。思わずバツと背を向け、身を縮め固くなつてしまふ。自分が震えているのが分かった。

大将様は呆然となされている。私自身も驚いていた。

「本当に、どうなされたのです？ 何でもないとはいわせませんよ」
大将様の言葉が、詰問するように変わった。

「男君って……みんなこうなんですか？ 女人の気持ちなど考えず、自分の想いを遂げるためなら、平気でこんなことをなさるんですか？」

私は裾を引きちぎれんばかりに引っ張ったり、喘ぐように言った。

「私をさらった男達も！ 大将様も！ お父様も！ みんな、女人のことなどお構いなしに、平気で傷つけたりなさるんですか！」

いつの間にか涙がこぼれていた。

「その拳句に、望まれずに生まれて来る人もいるんだわ。私みたいに……」

嗚咽がこらえきれなくなった私は、その場に突っ伏して泣きだしてしまっただ。

大将様はさぞ、驚かれたことだろう。なんの関係もない事だったのに。

私だってこんなこと、言いつもりなんかなかった。だけど、大将様のしぐさにどうしようもない恐怖を感じて、自分に抑えが効かなくなってしまうのだ。

それでも大将様は、私に寄り添って下さった。まるで幼子をあやすかのように頭を優しくなでて下さっている。でも、決してそれ以上、私に近づこうとはなさらなかった。

私は子供の頃、お父様にこうやって慰めてもらった事を思い出した。確かにお父様は私に心から優しくかった。あんなにお優しいお父様だったからこそ、お母様になさったことが許せないと思った。

でも、今こうしてお父様のことを思い出していると、やはり、お父様がお母様に酷い事をなさったとは思えない。私をあんなに慈しめる人が、困窮したお母様につけるようなことが出来るのだろうか？　そして、そんな女君を傷つけるようなことが出来るだろうか？

「少しは、落ち着かれましたか？」

大将様にそう聞かれて、私はどうにか鼻をすすりあげながらも、「はい」と返事をした。

「とにかく話を聞かせて下さい。何か、私がお力になれることがあるかもしれませんが」

そんな、大将様のお優しい言葉に促されて、私は中納言様から聞かされた、私が生まれてきたいきさつをお話した。

「そのような形で、ご自分の御母上の家のことを知ったのは、さぞかし驚かれた事でしょう。しかしその話、すべて信じる必要はありません。おそらく中納言様に都合の良い憶測が入っています」

「憶測？」

「たしかに当時、あなたの母上が下司の者にさらわれたと言う噂はありました。しかしそれは、怪しげなところへ連れ去られたと言う訳ではない。あなたの祖父殿のお身のうちの邸に、かくまわれていたそうです。ひよつとしてあなたの父上の身分では、あなたの祖父殿は表立って母上の事を許すわけにはいかないのです、見て見ぬふりをなさったんじゃないでしょうか？」

「どうして、大将様がそんなことをご存じなんですか？」

私が生まれる前の話なら、大将様もまだお小さかったはず。

「申し訳ありませんが、あなたの事は大納言家でも少し、調べさせていただきました。あなたは私の北の方となられる方の身代わりを勤めようとなさったんですからね。その時に大納言家でもあなたの素性を知っておく必要があったのです」

「では、私を妻にしたいとあの時おっしゃったのは、私が身分の低いお気楽な相手だったからではなく、一応、宮家の血を引いているからだっただんですか？」

血を引くったって、孫じゃ薄くなってるし、下司の血も混じってるけど。

「どちらも違います」

「じゃあ、どうして」

大将様はあきれたように目を丸め、ため息を突かれた。

「あなたは私にそんな野暮なことを言わせるおつもりですか？ 私
はあなたのホトトギスで、あなたには歌まで贈っていると言つのに」
そう言つて大将様はクツクとお笑いになる。

「とにかくそのお話は、すべてが真実ではありません。あなたの祖
父の大臣は前帝のことを最後の最後まで、真剣にお諫めなさつてい
たそうです。それは私の父も見ているそうですから間違いありませ
ん。むしろ、そのせいで大臣は本当に身の上が大変な事になってお
られた。そのままではご自分の一族はおろか、ご自分に味方をして
下さつた他の大臣の方々にまで累が及びかねないと自ら官位を返上
し、仏門に入る決心をなさつた。一族を栄えさせる貴族としては良
くない選択をなさつた愚かな行為でしょうが、大臣たちを守り、政
を硬直させなかつた政治家としては立派な振る舞いであつたと父は
言っています」

立派だつた。私の祖父は。決して国を見捨てたり、母を見捨てた
り、私を見捨てるような無責任な方じゃ無かつた。

「父はこうも言いました。あの大臣の孫であるなら、中納言家の姫
の身代わりを買つて出るのも領ける、と。父がそう思つほど、あな
たの祖父殿は責任感のお強い方だつたのでしょう」

あの大納言様が。都を実質的に支配しているような方が、私のこ
とをそんな風に言つてくれていたなんて。

「そのような方が、ご自分の大切な娘を粗末になさると思えますか
？ あなたの父上と、母上がどのようないきさつで結ばれたかまで
は分かりませんが、決してあなたが誤解しているようなことではな
かつたと思いますよ。男と言うものは確かに愚かかもしれません、
女人が思つほど、情け知らずな者ばかりではありません。私の事も、

もう少し信頼していただきたいものです」

「申し訳、ありませんでした……」

大将様は、こんなにもお優しいのに。

「謝る事はありませんよ。先に戯れたのは私ですしね。私には姉君と弟がおりますが、もしも妹姫と言う方がいたのなら、このような気持ちになるのかもしれないね」

大将様はそう言ってほほ笑まれる。私も明るい気持ちを取り戻す事が出来た。

「ありがとうございます。さあ、もう、姫様のところに参らないと、そう言って私が立ちあがると、

「そうですね。だが、お忘れにならないでくださいよ。いくら妹姫の様だと言っても、私はあなたに衣を着せかけた仲なんですからね」

そう言って大将様は、快活にお笑いになられた。

陰謀

忠長は足取りも軽く、月夜の下、都大路を歩いていった。いつもは主人の車に寄り添ったり、馬の横に徒歩で付き添ったりして歩くか、仲間たちと連れ立って歩く事が多いが今夜は一人だ。

いや、昨日も一人、おとといも一人歩きだった。何故なら、結婚のためにやすらぎの元へ通っているのだから。

今夜は三日目の晩、三日夜の宴の晩だ。

宴と言ってもまだ若い彼の身分ではやすらぎの両親と身内、彼の親しい仲間が数人殆んど冷やかしまぎれに酒と肴を楽しみにしているような物で、質素な、ささやかなものである。

それでも忠長は満足していた。年は若いがかっかり者で、声が良く、見た目も可愛らしいやすらぎは親元も良く、忠長の仲間内でも狙っている男は少なくは無かった。

しかし、中納言家の一の姫の女房の上、母親は姫の乳母。御簾の奥で働き、母親がいつもそばについているやすらぎに、手紙を送るのはなかなか骨が折れた。

正直、手紙さえ送ればそれなりに自信が忠長にはあった。やすらぎは一の姫の乳姉妹。自分だって若君の乳兄弟だ。権門の家に仕える出自のいい女房を手に入れられれば得だと考えているような輩の、自己保身が透けて見えるような誘いには、やすらぎは乗らないはずだ。

乳兄弟として主人に仕えると言う事がどういう事か、自分とやすらぎには分かっている。血こそ違えども、共に育ち、共に学び、それでも、その家の繁栄があつてこそ、主人の健やかな成長があつてこそ、自分の人生が成り立つ。人に仕えて一生を生きる覚悟を持つというのがどういう事か、やすらぎとは共に分かち合う事が出来る。

信じる心と、支える愛情がどういうものかを彼女は知っているはずだ。

そんな事も知らずに、彼女の噂と、出自につられて口説きにかかる様なやつらに、負ける訳が無いと思つていた。

余計な甘言は一切使わなかった。もしも気持ちが悪いたら、自分と逢つて欲しいとだけ書いた手紙を、母親の一瞬の隙をついて、若君の手紙の下にこっそり忍ばせ、目くばせをしただけだ。

その代わり、手紙を渡す前には十分に自分の事を見てもらえるように、工夫を凝らした。見た目に自信がある訳ではないが、若君に仕える態度がどれだけ真摯なものであるのか知ってもらふ努力をした。自分を良く見せる事よりも、その方がやすらぎには効果的だと分かつていた。

そして、やはりやすらぎは、色よい返事をよこしてくれたのだ。

実際に逢えるまでには時間がかかったが、忍びやかな文のやり取

りで、互いの気持ちは十分に伝わっていたので、あせる必要もなかった。そしてやすらぎは受け入れてくれたのだ。

「そうやって迎えた結婚。そしてついに迎えた三日夜。足取りだつて軽くなるつと言つもの。」

明日には中納言家の姫が、大納言家の若君の北の方となられる。そうなれば北の方をお迎えするお世話で、こつちも忙しくなつてしまふ。やすらぎだつて同じだろう。夫婦で睦まじくできるのは、今夜をすぎるとしばらくは難しくなつてしまう。だから余計に今夜は特別なのだ。

一刻も早くやすらぎの元へ、と思つ反面、冷やかすのを手ぐすね引いて待つているであろう仲間達を、ちよつとじらしてやるうかなどとも考えてしまい、歩を緩めたり、先を急いだりと、落ち着きのない歩き方をしてしまつてゐる。

そんな落ち着きのない歩き方をして、何度目かに歩を緩めた時に、不意に夜風に乗つて人の話し声が耳に入ってきた。

忠長は一瞬ひやりとした。夜の京の街は物騒だ。物取り、強盗の類が暗闇で待ちかまえていることもざらだ。思わず足を止めてしまふ。この辺は下町なので小さな建物の間は暗闇で、悪党が潜んでいてもおかしくは無いのだ。

「では、姫君の行列が三条の大路を通る事は間違いが無いんだな？」
ひそひそと囁くような声がする。

「ああ、ここだけはどうしても避けて通れないはずだ。この辺の警護の者には金をつかませるがあるが、あの方のお力を借りれば、より、

手薄にする事も出来るはずだ。旨く行けば大将殿の動搖は相当なものだろう」

「中納言殿も……しっ！」

会話が突然途切れる。忠長はとっさにモノ売りか何かが出しっぱなしにしていたらしい荷物の裏に身を隠した。じっとして、息まで止めてしまふ。

「何か影が映っていた気がしたが。樹の陰か？」

「またあとで連絡する」

そして人が立ち去る気配。やがて周りは静寂に包まれた。忠長はようやく息を着いた。

これはえらいことだ。役人に知らせるべきか？ いや、警護の者に金をつかませていると話していたのだから、役人はあてにはならない。中納言家に伝えるか？ それならやすらぎの母親に直接伝える方がいい。何せ、姫、いや、若の北の方になれる方の、乳母なのだから、一番確実だ。

忠長は浮かれた気分から一転して、やすらぎの実家へと駆け出していった。

一方、やすらぎの実家では、酒や肴の用意も出来て、花婿はまだかと意気揚々として待っていた。

だからその花婿が案内も乞わずに転がるように飛び込んで来た時は、皆、啞然としてしまっていた。

「たつ大変です！ 中納言家の一の姫が何者かに狙われています！」

忠長は息も切れ切れに、事の次第を説明した。

「暗い路地裏の事なので、賊らの顔も分かりません。声もかなり忍ばせておりました。しかし、明日、姫君が三条のあたりで狙われる事は間違いないでしょう。検非違使の役人をつかさどる三条殿の目と鼻の先で警護の者を買収するほどの輩です。何が起こるか分からない。御移りになる日取りを変える事は出来ないものでしょうか？」

「それは難しいと思いますわ。でなくても、占いに手間がかかってなかなか日取りが決められなかったんですから。これ以上日を伸ばすとなると、御移りになること自体、難しくなってしまうでしょう。それだけでなくも中納言様はあせってらっしゃるのに」

やすらぎの母は几帳越しに狼狽しながらも、大納言家にチクリと皮肉を込めた事を言う。

「だったら、警護を厚くするとか、三条のあたりをしらみつぶしに見回るとか、何らかの手を打たないと。姫君の身の安全が一番大切な事なのでから」

主人の家への皮肉にめげることなく忠長は言った。

「そうですね。とにかく私が中納言家に知らせに行きます。下男に行かせるよりも話が早いでしょう」

やすらぎの母がそこまで言った時、奥からやすらぎが顔を出した。母親が慌てて娘を押しとどめる。

「何ですか！ 人の妻が人前に顔を出そうとするなんて！」

「そんなことかまっていられませんわ。姫君様の身に危険があると
言うのなら、私もすぐ、姫君様の元に行きます」

「落ち着きなさい。すぐにどうこうということではありません。明日の事について、中納言様にご相談申し上げて来るだけです。あなたも人の妻になられようと言うのに、そんなに軽々しくてどうしますか？ 明日には姫君様の元に行けるのですから、まずは部屋にお戻りなさい。忠長様、やすらぎをお願いします。あなた、この御友人方をお送りがてら、大納言家にもこの事を伝えていただけませんか？」

妻に言われて、やすらぎの父も慌てて支度を始める。妻の牛車の用意や、自分の馬の用意をさせる。客達も帰り支度を始めた。忠長は無遠慮にやすらぎの部屋に入ってきた。

「なんです、不作法に女の部屋に入って来るなんて
やすらぎは八つ当たり気味だ。」

「何が不作法なもんか。俺はお前の夫だ。黙っていたら、お前は一の姫様のところへ飛んで行ってしまっじゃないか」

「当たり前じゃないの。姫君様は私の御主人なのよ」

「そんなの俺だって同じだよ。俺の大事な若君の北の方になられる方だ。だが、今はいけない。お前を放す訳にはいかないぞ」

そう言つて忠長は小さな餅が盛られた器を差し出した。夫婦が契りを交わした証し、三日夜の餅だ。

「明日になれば俺達は若君、いや、殿とお方様の事で頭がいっぱいになるだろう。俺達はそういうふうに着てきているんだ。他の事なんて考えられなくなってしまう。だから、今夜はどうしてもお前と無事に共に過ごしてこの餅を食べてもらうまでは、お前をこの部屋から出さない。殿とお方様に負けないくらい、俺はお前が大事なんだ。文句があるか？」

そう言つて忠長はどっしりと腰を据えてしまう。やすらぎの着物の裾をつかんだままで。

やすらぎはじつと忠長の顔を見ていたが、やがて不満そうだった顔を和らげると、黙つて忠長の横に寄り添った。そつと、その頭を忠長に持たせかける。

「かえつて、うるさい冷やかし屋達が居なくなつてせいせいした。最高の三日夜だ」

そう言つて忠長は笑つて見せた。

つられてやすらぎまで、一緒に笑いながら

「肝心のお餅を召しあがるのを、忘れないでくださいね」と、言つた。

行列

知らせを受けた中納言家では、急ぎ、占いをやり直させた。しかし、やはり近い日にちに吉日とされる日が無い。

日を伸ばしては三条家の姫君の結婚と、殆んど間がなくなってしまふ。それでは中納言家の威厳が保たれない。

「やはり、明日大将様の邸に入られるしかないだろう。これだけの行列になると、道筋を急に変えるのも困難だ。姫の護衛を多くつけて、侍の数を増やすより手はあるまい。姫の車は他の女房車よりも護衛を手厚くしよう。いざという時身軽に動けるように、女房達は乳母を除いて皆別の車に乗せて、その護衛も姫の方に回す事にしよう」

中納言様は私達女房にそうおっしゃった。姫様のお世話をすべき女房がおそば近くにいられないのは異常な事だけでも、安全のためには致し方ない。逆に女房の護衛が手薄になってしまふが、姫様が狙われている事がはっきりしているのならば、まずは姫様の安全が第一だ。

朝を迎えやすらぎも戻ってきたが、お出かけになられる支度に追われながらも、皆、襲われるかもしれないと脅えながら心ここにあらずと言った風情になっていた。

「母が姫君様の身の周りを手厚く固めるために、かなりの役人と侍を用意してもらったと言っていたから、きっと大丈夫よ。もしかしたら、あんまり警護が固いので賊もあきらめるかもしれないわ」

やすらぎはそんな事を言つて笑つてゐる。遅しくなつた、と言うより、結婚直後の喜びがこれから起こるかもしれない不安をも上回つてゐるのかもしれない。やすらぎの幸せそうな顔を見て、私はそんな事を思つた。

牛車の準備が整つと、姫君様は母上様や妹姫様としばらく別れを惜しんでゐた。別の建物に分かれて暮らされてゐたとはいへ、やはりお身内。邸を離れるとなると特別な思いがあるようだ。

これからも手紙のやり取りは頻繁に行われるだろうが、それぞれに簡単には屋根の外へ出る事も叶わぬ高貴な女人の身。直接お会いになれる機会は一層少なくなつてしまふだろう。古くから中納言家に仕えていた古参の女房達も感慨深いものがあるらしく、中納言様や北の方様、妹姫様にお付きになつてゐる女房達と、それぞれ別れを惜しんでゐるようである。

お世話になつた大勢の下男、下女、小者たちともめつたに会えなくなるので、皆が別れを惜しんでゐる。懇意にしていた大納言家の使用人達もお別れに来てくれてゐた。決して遠くに行く訳ではないが、やはり邸が変わればどうしても仕事に追われて疎遠になつてしまふ。邸とは沢山の使用人が暮らしてゐる一つの町の様なもの。私などは暮らした時間が短いからいいものの、長く勤めてゐる人達はその住み慣れた町を離れるのだから晴れがましくも悲しい時間だ。

私はその中に、あの下働きの少女の姿を見つけた。一瞬、目が合う。

少女は深々と頭を下げた。私も礼を返す。が、互いに言葉は掛けなかつた。私達は通りすがり。そう、決めてゐる。

あれから彼女と康行がどうなったのかは分からないけれど、彼女の瞳にあの日の嫉妬の炎は見受けられなかった。きっと、彼女なりに納得のできる何らかの結果が出たのだろう。私はそう思う事にした。

そんな訳で牛車の列が邸を後にしたのは定刻よりもずいぶん遅くなってからだった。でも、やすらぎが言うにはこの手の行列の出発が遅れるのは、ごく普通の事らしい。まして権門の家の姫が邸を移るとなれば大事なので、この程度の遅れは皆、許容範囲なのだそうだ。どおりで中納言様が簡単に道筋は変えられないとおっしゃったはずだわ。普通の引越しとはわけが違う。

その上中納言様や大納言様が手配した沢山の役人や侍達が、姫様の牛車の周りを物々しくぐるりと取りまいていて、一層行列をいかめしくしている。少し猛々しくはあるが、やはり心強い。

しかし康行がどこにいるのかは分からなかった。あまりにも侍の数が多すぎるのだ。この中のどこかにはいるはずだけど。私はつい、康行の姿ばかりを探している事に気がついて慌ててその思いを振りきった。

一の姫様や私の車の近くにいないのならその方がいい。少しは危険から免れやすくなる。もう、康行に人を斬る事は出来ないだろうし、斬らせたくない。そんな事になったら康行の心はどうなってしまうのか。危険な所には欲しくなかった。

ゆっくりと牛車が動きだして行列が前へと動き始めた。門前に居並んだ使用人達に見送られながら、私達は出発した。京の街の中を

見た目は悠然と進んでいく。

街中の事なので道を譲る下司や、商人、様々な人たちが野次馬になつて物珍しげに行列を遠巻きに眺めている。しかし、私達はいつ賊に襲われるか分からないと緊張して、周りを眺める余裕などなかった。誰もが先に行く姫君様の車に注目していた。

女房達の中には、こんな街中では人目につくから大丈夫だろうと囁いたり、いいえ、だからこそ野次馬にまぎれて襲う者がいるかもしれないと、身を固くして声をひそめる者などがいて、とても落ち着いてなどいられない。

それでも行列はゆるゆると進み、様々な屋敷が連なり、少し人通りの少なくなつてきた通りへと入ってきた。

もうしばらく行けば、問題の三条の通りだ。皆の緊張が高まってくる。そこに馬の蹄の音が近づいてきた。

馬にはなんと、別邸でお待ちになっているはずの大将様と、康行が乗っていた。行列に近付くと、

「止まれ、止まれ！」と叫んでいる。

行列は慌ててその歩を止めた。

「康行、姫の元へ！」

大将様がそう叫ばれて、康行が姫君様の車の前に馬で近づいてきた。

「この行列に、三条殿の回し物がまぎれている。行列を狙っている

のは三条殿だ！ 手の者はとつと立ち去れ！」

大將様はそう叫びながら、ご自分も姫様のお車に近付いていらっしやうた。康行と二人で馬上のまま姫様のお車に立ちはだかる。

「三条殿のたくらみは全て調べがついている。三条の邸の前で待ちかまえていた者達は全て、取り押さえた。あきらめて早々に立ち去るが良い！ でなければ容赦はせぬぞ！」

普段のみやびやかな物腰からは考えられないような大声をあげて、大將様は叫ばれる。皆、ざわざわと騒ぎ出した。

当然だ。三条殿と言えば盗賊、強盗たちを取り締まる検非違使の役人を統率する役目をしておられる方。その方が悪人達に加担しているのなら役人たちの動きは全てが筒抜け。どんなに追いかけてまわしても雑魚しか捕まらないはずである。皆、一様に信じられないと言った面持ちで大將様をご覧になっているようだ。

大將様と康行は姫様のお車を守るように立ちはだかっている。この中に三条殿の回し者が混じっているならば、どの人が敵なのか分からない。私は一気に不安にかられる。大將様や康行に、敵がいっぺんに襲いかかったら、どうしよう？ 康行は無事で済むものだろうか？

すると、突然姫様の護衛についていた侍達の何人かが、私達の女房の乗っている車に向かって来た。なんと検非違使の役人まで混じっている。車にかかっている御簾を跳ねのけ、男達が車の中に入ってくる。

「花房と言う女房はどいつだ？ 返事をせい！」

いきなり名前を呼ばれて私は驚いた。なぜ、私が狙われるの？ 考えている暇はない。このままでは他の女房まで巻き込まれてしまう。

「私よ！ 私に一体なんの用なの？」
私は叫んだ。

「おお、こいつが大将の想い人か」
男が私の腕をつかもうとした。

そうか、狙いはあくまでも大将様か。大将様の動きを封じ込める事が出来るのであれば、別に姫様でも私でも、こいつらにはどっちでもいいんだ。ついでに中納言家の威厳に傷が付けば上々と言ったところなんだろう。これは簡単に捕まる訳にはいかない。

そう思っただけでも抵抗はするが、男の力にはかなわない。あっさりと腕をつかまれてしまう。すると、

「いいえ！ 私です。私が花房よ！ その人をお放しなさい！」
あろうことかやすらぎが男に向かってそう叫んだ。

「どっちだ！ 正直に白状せい！ でなければ二人とも斬って捨てるぞ！」

男はそう叫びながらも戸惑っている。私は顔色が変わりそうな思いを必死にこらえた。何とかこの男を混乱させて時を稼ぎたい。男はどうやら私の顔までは知らないらしい。私は男の手を振り切り、

思い切つて車の外へと飛び出した。こつちに気をそらさなくては。他の女房達に危害を加えられたくない。

しかし男はやすらぎの腕をつかんだまま、私の後を追つて来た。なんとかやすらぎから男を離したい。なのに私まで待ちかまえていた別の男に捕まってしまった。

私達は車の前で、それぞれつかまつたまま男達に取り囲まれる格好になった。その姿を見て大将様が動揺されたらしい。

守る

「花房！」

大将様が馬を下り、私に向かってこようとすることを康行が慌てて止めた。

「やすらぎ！」

忠長様もやすらぎに向かって駆けつけようとする。

「忠長！ 大将様を止めて！」

やすらぎが叫ぶ。言われて忠長が大将様にしがみついた。

「大将様！ 姫君様を守って！」

私もとっさに叫んでしまった。

その拍子に大将様と私の目があった。その目に苦渋の色が浮かぶ。たぶんそれで分かってしまったのだろう。

「こっちか！」

そう言っつて男は私を引つ張っつていこうとした。

「あなた達、本当に私が大将様の想い人だなんて信じてるの？ そんなの都人が好き勝手に立てた噂に決まってるじゃない。大将様とは何でもないわ。私は何の役にも立たないわよ」

私は抵抗はし、ずるずると引きずられながらもそう言った。向こうでは忠長様がやすらぎを助けようとしているのが見えた。

「そんなこと、どっちでもいい。三条様の後ろには前帝様がついて

いらつしやる」

「前帝様が？」

「前帝様は中納言とあんたの祖父を大層恨んでおいでだ。中納言家の顔を潰し、ちよろちよるとうるさい大将の動きを封じてあんたを差し出せば、前帝様はさぞかしお喜びになるだろう」

前帝様が二条様を後ろ盾しておられたなんて。

「それじゃ、最初から姫君じゃなく私を狙っていたのね」

「そうさ。その身分で中納言家の姫のそばに仕え、身代わりまでさせるなんてただの女房とは思えねえ。ちよいと調べれば分かる事だ。生き残りの娘の方は御所勤めで後宮に引っ込んじまっているから手が出しにくかったが、お前は身分が低くて隙を狙えそうだったからな」

叔母様も狙われていたのか。でも、御所の奥深くの後宮までは、さすがの前帝も手が出せなかったんだわ。

「だが、お前は前帝様が真底恨んでいる中納言家の女房だ。前帝様の恨みを、一身に受けちまったのさ。俺はあんたにや恨みは無いが、前帝様がお前をご所望だからな。都に出て来たのが運のつきだったとあきらめるんだな」

なんてこと。私のせいで姫様達を危険な目にあわせてしまったんだわ。

このまま黙って連れ去られてたまるもんですか。

男は私を馬に乗せようと、私の身体を抱えようとした。私をつかみ直すためにその手が襟元にかかる。

「あきらめたり、するもんですか！」

私は男が襟をつかんでいるその手に、思い切り噛みついた。

男は「ギャツ」と言う声と共に私を離す。

「この、小娘！」

その顔に怒りが現れ、私の頬を大きな手で叩いた。その勢いで私の身体が投げ出され、地面にたたきつけられた。

そして男は大きな太刀を抜いていた。そのまま私に太刀を振りおろそうと構える。男は頭に血が上って見境なくなっている。斬られる！

その時誰かが男に向かって斬りかかってきた。康行だ。何やってんのよ！ バカ！

男は私の身体を放し、康行と刀を合わせた。このままでは男と康行は斬り合いになってしまう。私は叫んだ。

「ダメ！ 康行！ もう、人を斬ってはダメ！」

康行に人を斬らせてはいけない。これ以上、康行を苦しめさせて

はいけない。今、人を斬ったりしたら、康行の心は壊れてしまふ。まして、私のために苦しめたくなんかない。

「逃げて！ 康行！ 逃げて！」

私はそう叫ぶが、康行は引こうとしない。

二つの太刀は咬みあつたままビクとも動かない。斬りに行く男の力を、康行がしっかりと押さえこんでしまっている。ギリギリという刃のこすれるような嫌な音だけがその場に響いた。

ついに康行は男の刀を振り落とした。さすがは武蔵の男、力勝ちしたらしい。そのまま男を突き飛ばす。

すると今度は別の男が私に迫ってきた。康行がすぐに気がついて男につかみかかるうとする。

その時、さつき突き飛ばされた男が、康行に向かって斬りかかって来るのが見えた。康行は気がつかない。

「危ない！」

何も考えられなかった。一瞬だった。全ての迷いも戸惑いも消えた。ただ、康行を守りたかった。

私は賊に背を向け、康行を突き飛ばし、覆いかぶさった。私の背に向かって刃が振り下ろされる気配がした。避け切れない！

康行が目を見張るのが見えた。太刀をつかみ直して私に斬りかか

った男に向かおうとするのが見えた。

私の長い髪が風に舞って飛んで行くのも見えた。背中にも冷たい風を感じる。衣装も斬られたのだろう。

ああ、きつと、私の人生もこれで終わるのね。康行はあの下働きの少女と幸せに暮らせるかしら？ 私のように迷ったり、意地を張ったりするばかりでなく、あんな風に一途に思いを寄せる人に想われていれば、きつと幸せになれるだろう。その時に、ほんの少しでも、私の事を思い出してくれるかしら？

康行は私を守ろうとしてくれた。その康行を私は守る事が出来た。それで私は十分だわ。痛みもまるで感じない。ありがたいことだわ。このまま幸せな気持ちでお母様の元に逝けるのなら。

しかし、それにしておかしい。周りの怒号や、悲鳴ははつきり聞こえるし、背中に通る風も感じる。ちゃんと五感は働いている。私は……斬られてはいない？

思い切って背中に手を回す。髪はぶつつりと斬られ、沢山重ねられた女房装束は大きく斬り裂かれている。だが、自分の背中は無傷だった。とつさに逃げられ相手の刀に力が入らなかつた上、間一髪、長い髪と分厚い衣装に守られて、わが身に太刀が及ばなかつたらしい。

目の前で康行が男に太刀をかまえていた。大きく降りかぶろうとしている。目が怒りで燃えていた。

「康行！ 斬らないで！ 私は無事よ！」
とっさに、そう叫んだ。

康行は太刀を止め、私を見つめた。そしてすぐさま男に殴りかかった。男が伸びてしまったのを見ると、私の所に駆けつけてくる。

「大丈夫なのか？」

「ええ、大丈夫。髪と衣装が切れただけ。賊も捕まっただけだ。役人たちが取り押さえているわ」

私の周りで役人たちが、賊を次々ととらえて、縄をかけていた。康行が殴った男も縄をかけられている。どうやらやすらぎも無事らしく忠長様に寄り添い、その身を身を気づかっているようだ。

「主上がよこして下さった、応援の役人たちだ。ようやく駆けつけてくれたようだ」

気がつくともそばに大将様がいらして、周りを見回しながらそう説明して下さった。

「三条殿が怪しいと探りを入れてはいたのだが、その事で私の動きを封じようとしていたらしい。しかし、姫ではなくあなたの方を狙ってくるとは。すまなかった」

そういいながらご自分の着物をお脱ぎになったが、それを康行の方に差し出ししながら、

「これはお前が着せかけるべきであろう」

と言って、康行に着物を渡すと、姫君様のお車の方へと向かわれ

た。

故郷

康行は受取った着物を、私に着せかけてくれた。切れた髪が肩先に広がるのが分かった。

「こんな姿になっちゃったわ」

私は毛先をつまみあげて笑った。長い髪は女の命であるが、私は今、おそらくは尼削ぎ姿よりもみっともない様子になっていることだろう。

「まったく、お前はいつも無茶をする」

そんな姿にもかわらず、康行は笑わなかった。

「でも、あんたが人を斬らなくて良かったわ。私のために苦しむなんてバカみたいよ」

「違うよ。お前のせいじゃない。侍になる事は俺が望んだ事だった。なのに俺は、お前の半分も覚悟がきちやいなかったんだ。侍にならなくたって大將様を守る方法はあったはずなのに、簡単な道を選んでおいて、そのくせ自分の度胸のなさを後悔していたんだ。あまりに俺が弱過ぎたんだよ」

「でも、康行は私を二度も守ってくれたわ。大將様や、姫様も守ってくれた。人を殺す度胸なんかより、ずっと大切な勇気があるわ。弱くなんかない」

「そして危うくお前を失うところだった。一度目はお前の心を、今度は命さえ失うところだった。俺は気づいた。失った命を悔いるよ」

りお前を守る方がずっと大事な事だった。もう、苦しんだりはしない。だが侍はやめるよ。やはり俺には向いていない」

康行がやっと見せた笑顔は寂しげなものだった。

「私も、もう、姫君様の元へは戻れないわ。この姿では御簾の内には入れないもの」

私は肩に揺れる切れた髪を見た。

長い黒髪は女人の命。つまり、女人の髪は長くなくてはならない。髪を短くすると言う事は女人では無くなる事。つまり、まだ女人ではない幼子か、俗世を断つて人の世で生きることを捨てる、尼となるかしかない。

尼でもない女人が、短い髪で高貴な方々がいらっしやる御簾のうちに入るのは許されないことなのだ。

私は悲しかった。康行を傷つけた上に、姫様にお仕えする事も出来なくなってしまうた。

もう、私に帰る場所は無い……。

「気にするな。髪はきつとまた伸びる。それまでの間、一緒に郷里に帰らないか？ お前の父親には遠く及ばないが、俺も出来る限りお前の面倒を見るよ」

「康行と一緒に？ だって、康行には大将様が」

「大将様は大丈夫さ。主上がお守り下さる。主上も前帝様はお身内と言ふ事があつて、なかなか思い切つた事はなさらなかったが、今回は御親友の大将様のために動いて下された。これからもきつとお守り下さることだろう。これ以上の強い庇護者はおられない。今度の事で三条殿の姫君の話も流れることだろう。姫君には気の毒な事だが、そこは大将様も気をつかつて下されるに違いない。俺は元通り、馬を売つて暮らすよ。その方が俺にはあつている。花房、一緒に帰つてくれるかい？ お前の父上には、必ず許しをもらつから」

私は驚いた。そして嬉しかった。ただ、ただ、嬉しい。でも、姫様と離れる事は悲しい……。

「姫君様に、もう、琴をお聞かせすることは出来ないのね」
私はぽつりと言つたが、

「そんな事は無いさ。髪が伸びたらまた、女房として仕えればいい。俺はお前を縛ろうとは思わないよ。お前はこれくらいであきらめるような女じゃない事は分かつてる。無理に俺の妻になれとは言わない。ただ、今だけはお前を郷里に連れて帰りたい。お前の髪が伸びるまで、俺が馬を育てるまで、お前の元に通いたい。その先はお前が決めればいいさ。たとえお前が都に戻ろうとも俺はお前を待つていてやるよ」
と、康行は言う。

「男が女を待つなんて聞いたことが無いわ」
私はあきれていつたが、

「俺は変わり者なんだろう。変わり者のじゃじゃ馬を相手にしよう

なんて男は、変わり者でちょうどいいさ。どうする？　こんな男は他にはいないぞ？　それとも歌の一つも贈らないと、答えられないのか？」と、言われてしまう。

私は思いつきり康行にしがみついた。

「そんなことないわ。康行、私に櫛をくれてありがとう。馬にも乗せてくれてありがとう。歌ももらって嬉しかったわ。でも、もう何にも要らないわ。今は康行がいてくれればいい。いつかは姫様の元に戻りたくなるだろうけど、でも、今はあんたさえいてくれれば、何にも要らない」

私はやつと本音が言えた。そう、いつかはまた、姫様に仕えたいなるに違いない。けれど今は確かに康行が一番大切だ。康行の一番近い所に私は居たい。

「帰ろう、花房。俺たちの故郷に。そしてまた、元気を取り戻すんだ。元気を取り戻す事ができれば、俺達はまた、それぞれの目的を見つけて歩いてゆけるだろう。その時にはきつと都に戻って来る。そしてお前は都で一番の琴を弾いて、俺は都一の名馬を大将様に献上するんだ。そのために俺達は一緒に帰るんだよ」

故郷に帰る。康行と共に。

康行は私の母の事など知らない。私がお父様に戸惑いと不安を抱いている事も知らない。私が故郷に帰ると言う事は、そう言う事に決着をつけに行くと言う事だなんて、全く知らずに言ってくれている。

帰れば私はお父様に、お母様の事を問わずにはいられないだろう。そして、お父様も私にお母様と結ばれた事情を話してくれるだろう。

その時に、良い話が聞けるのか、聞かなければよかつたと後悔することになるのかは分からない。ひよつとしたら、辛い話を聞かされることになるのかもしれない。あの家にいる事は苦しい事になるのかもしれない。

それでも、康行と共に帰れるのなら。

あの、武蔵の山々から吹き下ろされる、風の匂いを思い切り吸って、その隣に康行がいてくれるのなら。

たとえ真実を知ってあの家にいられなくなるうとも、康行のそばにいられるのならばどんなことにも耐えられる。

「いいえ。都で一番になんかならなくてもいいわ。私の琴は、私に友情を下さった人たちの想いを伝えるためにあるの。その想いさえ伝えられれば、私には十分なの。そのために、いつか私はここに帰って来るんだわ。康行、あんたと一緒にね。私はあんたを待たせたりなんかしない。ずっと一緒よ」

そう言っつて康行に顔をあげて見せようとして、髪の毛の短さに気がついた。顔の周りに切れた髪がハラハラと童女のようにまとわりつく。

「ごめんね。こんな髪で」

思わず言っつてしまったが、

「なあに。おかげでお前は俺と帰る気になっつてくれたんだ。俺もあ

の男を斬らなくって良かったよ。お前がその気になったのはあの男のおかげだからなあ」

と、言って笑いながら私の短い髪をなでてくれた。

「お前が琴に込めている想いは分かっているよ。先日の音色も優しくて美しかった。あれを聞いて俺は、何があってもお前だけは守りたいと思ったんだ。お前の琴が俺に勇気をくれた」

そう言っつて、そつと抱きしめてくれる。

ううん。勇気をもらったのは私の方。康行と一緒になら、どんな真実だつて受け入れられる。

そのために私は、故郷に帰るんだわ。

「それにしても髪が短くてもお前は似合うな。おつと、余計な事は言わない方がいい。お前の事だから、都恋しさに調子に乗って、やんちゃ者の尼にでもなられたらたまらないや」

そう言っつて康行は笑っていた。

藤の花の匂う頃

それから数日後、三条様は流罪が決定した。都からは遠い筑紫へと流される事となった。

前帝様は都の外れ、嵯峨野のお邸で役人たちに厳しく見張られながらお暮らしになる事実上の幽閉状態となられた。監視は本当に厳しく、いよいよ仏門に入られる日も近いだろうと都人にはもっぱらの噂となっている。

三条の姫君と大将様の結婚話は当然流れたが、姫君や北の方に直接の咎は無いのだからと大納言様のお心づかいで、姫君は来年大納言様の三男の方とご結婚の運びとなるようにとり計られているようだ。

大納言様の三男はまだお歳若の元服前でいらっしやるので三条の姫君がかなりお歳上になってしまいが、三条様が流されてしまった今では、かえって先々の見通しの明るい、まだお子様めいた若君の方が姫君の将来のためには良いのかもしれない。おそらく大将様もお気づかいをなさるに違いない。

今回の件で主上がお強く出られたので、街の悪党や盗賊達の動きも封じ込められつつある。

主上もこれまではお身内の事と、実の兄である前帝様にはどこかご遠慮気味で強気に出られずにおられたようだったが、官職のある程度にまで上り詰め、役人をつき従えるお立場の方が悪事に加担なさっていた事に緊迫した思いをなさったらしい。

主上のそうした態度が役人たちにも伝わったようで役所にも隙がなくなつて来たらしく、悪党どもがはびこりにくい雰囲気が出来て来たようだ。京の町の秩序が取り戻されつつあり、とりあえずは都人たちも一安心と言ったところだろう。

勿論、一の姫様は無事に大将様のお邸に移られて、大将様の北の方としてお若いながらも邸の女主人としての地位を確立なさった。お立場としては大変になられるだろうが一の姫様個人としては大将様との御新婚の時間を取り戻されて、お幸せそうである。

私は大将様から頂いた、お歌の書かれた手紙をお返しした。

「とうとうあなたの心を私に振り向かせることはできませんでしたね」

と、大将様はおっしゃるが、

「それは違います。大将様も、本当はお気づきになっておられるのでしょうか?」

私はそう、お答えした。大将様も照れくさそうに微笑まれた。

そう、大将様も姫様を命懸けでお守りになった事が姫様は勿論、ご自分のお心にも変化をもたらしたようでお二人は一層仲睦まじくなられたようだ。きっと、私の様な気楽な身の上の者を養うのではなく、姫様のような方を覚悟を持ってお守りすることの大切さや素晴らしさに気付かれたに違いない。支える御愛情とは本来、そういうものなのだろう。信頼を深められたお二人の御様子が私には嬉し

かった。

勿論、やすらぎと忠長様は新婚の真つ只中。やすらぎの次の宿下がり待ち遠しくて仕方ないらしい。二人とも本当に幸せそうだ。それも私には嬉しい。

中納言様と言えば、大将様が御身分も顧みずに、自ら一の姫様の行列を守って下さったことが都中の話題になり、さらには大納言様が、

「姫が危険にさらされたのは、こちらの不手際もあつたのだから」と、政務上の条件もかなり中納言様に譲られたらしく、かえってご機嫌なようである。

おまけに私が髪を斬られてしまうと言うやむを得ない事態により、姫様の元を離れる事も本当のところは喜んでいるに違いない。

しかし姫様……いや、大将様の正妻となられた、お方様はおつしやって下さった。

「あなたが幸せになる道を選ばれるのに、私になんの文句がありませんよう？　けれども、あなたは必ず私の元へ戻って来てくれるのでしよう？」

「勿論でございます。髪がまた、元通りに伸びましたら、必ず都に帰ってお方様に仕えとう存じます」

「その言葉が聞けて、嬉しいわ。出立はいつになりそうなの？」

「康行の馬達の世話が無事、引き継ぎ終えましたら。藤の花の匂う頃には、旅立つと思います」

「そう。これからは、藤の花を見る度に、私達はあなたを思い出すのでしょね」

お方様は寂しげにおっしゃられるが、

「ほんのひと時で御座います。お方様が大将様と楽しくお暮らしになられるうちに、あっという間にその日が来る事でございますよ」と、私はほほ笑んだ。

「それはあなたも同じね、花房。康行と仲良く暮らすうちに、すぐにその日はきてしまうわよ」 と、お方様もからかわれる。

「それではあなたにお祝いをあげましょう」

そう言ってお方様は私にご自分の琴を、差し出された。

「私はあなたにこの琴をあげましょう。代わりにあなたの琴を私に下さるかしら？ あなたの魂の欠片のこもった、その琴を」

そうだ。お方様とやすらぎは、一番初めに私に琴がどれほど必要なのかを気づいてくれた。私自身でさえも気づかずにいた、琴を弾く事の大切さをこの方々は私に教えてくれたんだ。

「勿論でございます。この琴には京で暮らした日々のが詰まっております。お方様にお仕えた魂がこもっております。それをこそ望みただけなんて、私は幸せ者でございます」

私は深く頭を下げ、琴を差し上げた。

「あなたは私の琴を弾き続けてね。私も弾くわ。やすらぎとともに。時には殿も弾く事でしょう。この身は離れても、私達の魂は琴の音を通じて繋がっているのよ。どんな時も。それを忘れないでね」

私は返す言葉を失ってしまったので、さっそく、お方様の琴を掻きならした。私には言葉以上の事をこの音に乗せて、伝える事が出来る。それに気づいて下さったのはお方様だった。そのことへの感謝をこめて、私は琴を弾き続けていた。きっとこれからも、弾き続けるんだらう。様々な人の想いを乗せて。

出立の朝、お方様は特別に私達をひさしの下までお見送りに出て下さった。北の方様がこんな端近に出ていらっしやるなんてとんでもないことだが、この主は大将様とお方様だ。お二人が御認めになる以上、誰も文句は言えない。お方様は短い間に、すでに北の方としての風格をお持ちになられたようだった。ご結婚からわずかの間に起こった様々な出来事と、大将様に守られている自信がお方様を少し早く大人にされたようである。

「本当に、牛車の用意をしなくてもいいの？」
やすらぎが私に聞いた。

「いらないわ。どうせ途中で返さなければいけないし、馬の方が身軽で動きやすいわ。武蔵の国は遠いのだから身軽なのが一番なの。それより護衛の人や、こんなに立派な市女笠やご衣裳をいただいてしまつて、申しわけございません。お方様」
そう言つて私は頭を下げたが、

「いいえ。これは私からの餞別よ。少し動きづらいでしょうけれど、

都を出るまではこれを着ていなさい。これは康行の希望なのよ」「
そう言ってお方ははにっこりなされた。

「康行が？ どういうこと？」

私は隣にいた康行に聞いたが、康行はいきなり私を抱き上げてしまった。そして、そのまま私を馬に乗せる。

「ちょっと！ 大将様やお方様の前で失礼じゃないの！」
私は慌てて叫んだが、

「いいのだ、花房。私が許可した。これでお前達の約束は果たされ
たな」

と、大将様がおっしゃる。

「約束？」

私は康行の顔を見た。

「昔、約束しただろう？ お前は都の姫様のようになって、俺が馬
に乗せてやると。前の時はひどい恰好だったからな。あらためてや
り直した」

そう、康行は笑っていた。

「康行。花房の身はあなたにすっかり預けるわ。けれども心のひと
かけらは花房の琴とともに、ここに置いて行かせるわ。必ず取りに
戻って来るのよ」

私を抱えるように馬に乗り込む康行に、お方様がそう声をかけら
れた。

「勿論でございます。私の心の欠片も、殿の元に置いてまいります。私達は必ず帰ってまいります。馬上にて失礼いたしますが、皆様もお元気で」

そう言つて康行は馬を邸の門へと向かわせた。皆が手を振つてくれているのが分かる。私はすつぱりと康行の胸の中にくるまれたまま、

「帰りましょう。私達のふるさとへ」と言つた。

「ああ」

と、康行は短く返事をした。明るい朝日とその顔を照らして、まばゆいくらいだ。

今度は康行と二人でここに戻つて来るんだわ。

どこかから藤の花の香りが漂つてくる中、私達は京の都を後にした。故郷へと帰るために。

藤の花の匂う頃（後書き）

「苦惱編」はここまで。次は波乱の「帰郷編」です。

帰郷（前書き）

ここから「帰郷編」です。

帰郷

長い、長い旅だった。

時には馬の背にゆられ、時には舟に乗り、時には自らの足で歩いて。

京の都から武蔵の国までは途方もない長い旅路。その旅を私達はようやく終えようとしていた。

「お前の父上には必ず許しをもらう。一番最初にお前の事をお願いしよう。お前は父上に自分が生まれたいきさつを聞きたいだろうが、まず、先に俺からお前の邸に通いたいと言つ事を伝えさせてくれ。俺は堂々とお前の元に通いたいんだ」

康行はそう言つて私と共に私の父の邸に入った。邸の前で私達の姿を見つけてから、顔なじみの使用人たちが皆、こぞつて出迎えてくれる。父も建物のすぐ入口にまで出て来て私を出迎えた。

「おお、花房。長い旅でさぞ疲れただろう。早く中に入ってゆっくり休むがよい。食事もお前の好物をたくさん用意してある。都は意外に食べ物は質素だからな。ここでは滋養のある物を思う存分食べるというだろう」

そう言つてお父様は使用人が持ってきた足を洗うための水の入った桶をもどかしそうに奪い取つて、私に麻布と共に差し出した。

「ちよつと待つて、お父様。着いたそうそうで気ぜわしいんだけど、康行からお父様に話があるの」

今にも私を座らせて、子供のように足元を洗おうとしている父に、私は慌ててそう言った。

「康行？ いや、話なら後にしてくれ。今は花房と積もる話をしたいのだ。大将様との噂は耳にしたぞ。それに御所で帝からご衣裳を賜った話し、ゆっくりと聞かせておくれ。ああ、私は本当に鼻が高い。私のようなしがない者の娘が、このような立派な榮譽を受けるとは。お前は本当に素晴らしい子だ。良い子だ、良い子だ」

父はそう言いながら私の市女笠を外し、私の頭を幼子のようになでて……その手を止める。

何故なら、その拍子に私の切れてしまった髪が、衣装からこぼれ出て少し長めの尼削ぎ姿のように背中に広がったからだ。

「これは……なんとしたこと
事情を知らぬ父は仰天した。

「申し訳ございません！ 花房の髪が斬り落とされたのは私のせいなのです。太刀で斬られかけた私を花房がかばって……」

「太刀？ 斬られかけた？」

父は目を白黒させ、手にしていた桶を落としてしまう。

「そうです。花房は私を命懸けでかばって、太刀でその髪を斬られてしまったのです。それほど花房は私を想ってくれているのです。私は御父上に、花房の元へ通う事を許可していただきたいのです」

康行は必死な顔で父にそう告げた。が、途中から父の耳には届いていない。

何故なら父は、白目をむいてそのまま気を失ってしまったから。

使用人たちが父を支え、お義母様が奥から呼ばれ、邸中が騒然となってしまった。

結局、康行は自分の家に帰り、お義母様はお父様に付き添い、私はその間に着替えを済ませ人心地ついた。やっぱり話があんまり急過ぎたかしら？ これは事情を理解してもらうのが大変そうだな。そう思ってたため息をついていたらお義母様が、

「お父様が気がつかれました。私とお父様に詳しい話を聞かせて頂かないと」

そう言っただけ私をお父様の前に連れてくる。

お父様は顔色こそまだ優れないようだったが、気はすっかりなさったようだ。

「で、一体どういう事なのだ？ 康行をかばって太刀で女の命の髪を斬りおとされるとは」

そこだけ話しても理解してもらおうのは難しそうだ。

「待つて、お父様。順を追って話をするから」

私は上京してからの出来事を、事細かに説明した。

途中、姫様の身代わりになった事や、賊に連れ去られた事のところでまた気を失うんじゃないかと思っただけ（お義母様は実際、気を失いかけたけど）、どうにか耐えて私の話を聞き続けてくれた。

そして私は、康行がどれほど私を守ってくれたかを語り、彼がいなければ私は命が無かったに違いないと、康行を褒めそやした。

ただ、お義母様はすっかりおびえてしまい、

「もう、そのような姫の元にお仕えする必要はありませんわ。いつ花房さんの身に危険が及ぶとも分からないじゃありませんか。それにいくら身分が低いとはいえ、お付きの女房は沢山いるのになぜ、花房さんばかりが身代わりにされたり、狙われたりしなくてはならないんでしょう?」

と、顔色を青ざめながら言う。当然の疑問だわ。

でもそれは私がお父様に聞きたい事の確信に触れてしまう。そしてその話はお義母様の前では持ち出しにくかった。

「その事で私、お父様にお聞きしたい事があるの。私の生みのお母様の事なんだけど」

そう言って父の顔を上目遣いでうかがう。父も気まずそうにお義母様の顔を見た。

「……私は花房さんが持ち帰ったお土産物でも拝見させていただくわ。お二人でゆっくりお話して下さい」

お義母様はそう言ってその場を離れた。

「お父様。中納言様は私に、お父様はお母様を邸から盗み出して強引に妻にしたとおっしゃいました。そして、お父様が財をなす元手を作ったと。それは本当の事なの？」

「中納言殿は約束を破られたのか」
父は苦々しげにそう言った。

「私にお母様の事は告げないでも、約束していたの？」

「その通りだ。私は中納言様が前帝様を惑乱させた僧侶に送った、『帝に御国譲りを促すよう進言せよ』と書かれた文を持っている。昔、お前の母の父上から受取ったものだ。これを持っている以上、中納言様は私とのお約束を破られる事は無いと思っていたのだが」

「お父様は都から離れていらっしやるからご存じないでしょうけど、今や、大納言家を後ろ盾に中納言様は大変な力を持っていらっしやるの。康行が一人斬り殺そうともみ消してしまえるくらいにね。そんなお文、きっと今では簡単に無かった事にされてしまうわ」

「そうか。私が甘かった。田舎者の浅知恵などこんな物か」

「中納言様がおっしゃったことは本当なの？ この髪は前帝様が私の御爺様を今も恨んでいて、孫の私を狙って斬り落されてしまったの」

私は肩の下に広がる髪に手を触れながら、父の目を見た。

「中納言様は私の御爺様はお父様にお母様を売ったようなものだとおっしゃった。でも、大将様は御爺様は立派な方だったとおっしゃったわ。ねえ、本当は何があったの？ お父様はお母様を無理やり妻になさったの？」

聞く前は口にするのが恐ろしいとさえ思っていた質問が、矢継ぎ早に飛び出してしまふ。一刻も早く父から否定の言葉を聞きたかったのかもしれない。

「中納言様の言うとおりだ。私はお前の母をさらって、妻にした。私がそんなことをしなければお前の母は中納言様の妻となっていただろう」

聞きたくなかった言葉が、父の口から語られてしまった。

「そんな。それでは私は、お母様に望まれずにこの世に生まれてきてしまったの？ 御爺様は私を疎んで都から私を追い出したの？」

私は父を問い詰めるような口調になった。

「いや、違う。中納言様の言った事も本当だが、大将様がおっしゃったことも本当だ。お前の祖父殿は大変、立派な方だった。おそらく誰よりもお前の母を愛してやまなかったに違いない。むろん、お前の事もだ。あの方はお前達を愛するためなら身分も、都の常識も覆す事を厭わなかった。それにお前の母がどれほどお前を可愛がったか。お前が小さすぎて憶えていない事を私がどれほど残念に思っているか」

父は私の切れた髪が広がる肩に触れ、まるで懇願でもするのかのよう
に言った。

「……詳しく、聞かせて下さい。お父様と、お母様の事」

「そうだな。話さねばなるまい」

そう言って父は、真実を語り始めた。

身投げ

私はその頃武蔵の国の豊かな恵みを都人たちにいい値で売ることができないだろうかと考え、一念発起して京に出てきたばかりだった。

もともと親の代からそこそこは豊かな暮らしだったので、郷里に居れば相応の暮らしは成り立っていたのだが、やはり一度は都人を相手に物売ってみたい気持ちがあった。

京の都は何でも物の値が張るのだが、田舎の物となるとどうしても見下げられるところがあって、普通に取引をしたのでは分が悪い。

武蔵の国の物は決して都に劣らない。絹糸にしても、馬、牛と言った家畜にしても、十分都人に喜ばれるに値する価値があると私は思っていた。

ある程度身分のある方々にその良さを分かっていたら、きっと商売が成り立つ。

そう考えていたが、肝心のそういう方々との繋がりが無い。田舎者と言っただけで都の邸では下人でさえも相手にされず、まして高貴な方々に仕える人たちに品物売り込むなど到底かなわない。

それに、郷里の品は質はよいのだがそれを生かす技術に長けていないとは言えない。たとえば絹糸も、都の機織りの技術があればもっと立派な絹として通用するはずなのだが、織が稚拙なばかりに「所詮、田舎の絹」と言われてしまうのだ。

だからそういった技術で良い立派な品を作り、高貴な方々に認めてもらえたら。

若い私はそんな理想を抱いて都にやって来ていた。

しかし現実には甘くなかった。どこに行っても、誰に声をかけても門前払い。話しすら聞いてはもらえない。どうやって当てを作ろうかと私は思案していた。

そんなある夜、その日は暑い夏の日だったので私は外に涼みに出ている。都の夜は物騒だと知ってはいたが暑さにはかなわなかった。

川岸は少しは涼しかろうと川べりに向かって歩いていくと、向こうに白い何かぼろりと夜の闇に浮かびあがる。いったいなんだ？

どうにか闇に慣れた目をよく凝らして見ると、それは女の姿に見えた。

こんな夜更けの川岸に女の姿？ これは夢か？ 幻か？

京の都は庶民には過酷なところで、行き倒れた者がそのまま餓死して川に流れる事も多い。そんな者の魂がものけとなつてさまよひ歩いているのだろうか？

ひよっとしたらもののけに取りつかれるかもしれない。関わらない方がいい。

頭ではそう思つものの、すうりとした女の姿に私は思わず近づいた。

それはとても美しい女で、はかなげな姿に白い肌。とても質の良い衣を一枚身にまとい、豊かな黒髪が美しく流れ、まるで天女のように見えた。私はすっかり見とれてしまっていたが、天女のような女は目から一筋の涙を流した。

これは幻でも、まやかしてもない。まして、もののけなどではない。生きた人間の女だ。

そう確信した時、女が岸から川に身を躍らせ、飛び込んだ。身投げだ！

私も慌てて川へと飛び込む。決して泳ぎが得意な訳ではなかったが、目の前の美しい女を助けたい。その一心で身体が動いてしまった。

まず、自分が浮かび上がると、女の姿を探す。その身をつかんで自分の元に引き寄せようとするが、女の長い髪が川の流れに持って行かれてしまう。

私は女の頭を支えながら無我夢中で岸を目指した。ようやく身体が水からはい出ると、ゼイゼイと息を切らしながら女の身を横たえ、頬をたたいた。

「もし、あんた、しっかりしろ。目を覚ますんだ」

そう言いながら何度かたたくと、幸いにも女は意識を取り戻した。

「よかった、気がついたか。怪我は無い様だな。その衣や風貌を見ると結構な御身分の娘さんに見えるが、あんたが暮らしている場所

はどこだ？　いくら夏とはいえ濡れたままでは身体に悪い。送ってやるから早く着替えた方がいい」

私はそう言ったのだが女は、

「何故、死なせてくれなかったのですか……？」

そう言ってさめざめと泣きだしてしまった。

「何故も何も、目の前であんたのような綺麗な女が身を投げて、放っておけるわけがない。気がついたら俺も川に飛び込んでいたんだ」
「助けられても困ります。私はこのままではお父様達の足を引つ張るばかりです。私はお父様を追い詰めた憎い相手に娶られるか、死んでしまうよりほかに道が無いのです」

そういう女の表情はまるで死人のような眼をしている。身を投げる以前に心がすでに冥土へと旅立ってしまったたかのような顔だ。

「そんなことを言っちゃいけない。あんたのような身分のありそうな人たちの世界の事はよく分からないが、あんたに大事な親がいるならその親はどれだけ悲しむと思ってるんだ？　今は何も考えない方がいい。とにかくあんたを送って行こう。立つのが難しいようなら背負ってやる。そら、この背に乗ってくれ」

すると女はためらうようなしぐさをする。

「怖がることは無い。俺はいやしい身だが、身投げしようとする女に手を出すほど愚かじゃない」

「いえ、そうではなくて。あなた、腕に怪我をしています」

「ああ、田舎者の俺でも夜の川に入ったのは初めてだから、もがくうちにどこかにぶつけたんだらう。この程度の傷、何でもない。さあ、しっかりつかまって」

そう言つて女を背負い、女の案内ですぐ近くの大きな邸の前に着いた。

着いてみるとその邸は何処までも塀が続く大きな邸で、牛車や馬が楽に通れるような立派な門が構えてあつた。一目でかなりの高貴な方が暮らす所と分かる。

しかし、その様子はどこかさびしげで、うらぶれている。よく見ると築地塀の所々が崩れ、場所によっては夜目にも向こうが見通せるほどの穴さえあつた。

「門は閉ざされていますが、この先に壁の大きく崩れたところがあります。私はそこから抜け出しました。そちらを回つて下さい」

「これじゃ、どんなに門を堅く閉ざしても戸締りの意味が無い。塀をしっかり直さない」と

そう言つと女は一層悲しげな顔で、

「今の私達に塀を直す余裕はないのです」と、
ため息交じりに小さく答える。

塀をくぐつて広い庭を表に回ろうとすると、向こうから松明の明かりが見えてきた。

「ひ、姫君様！」

背に載せた女の顔を見て、使用人らしき年老いた男が目を見開きながら叫んだ。

「心配をかけました。この方は私を助けて下さった方。決して怪しいものではありません」

姫と呼ばれた女はさっきまでの頼りなげな姿とは違った、凜とした声で使用人にそう言った。

明らかに人を使いなれた、自らに強い誇りを持つ人の言い回しだった。

「分かりました。すぐに殿にお知らせします。このままではいやしい者たちに御姿を見られてしまう。早く建物の中に入って下さい」

深窓の姫君は決して位の低い者にその姿を見せたりはしないし、身分のないものも遠慮をして見ないようにするもの。私は戸惑った。

「私はここで……」

そう言いかけたが、

「あなたは私の命を助けた方。それにあなたは姿を見るどころか、この身に触れているではありませんか。今更脅えたりなさらないでください。その傷の手当てもしなければなりません、きつと父はあなたにお礼を言いたいはず。このまま私の父に会って下さい」

脅えるなど言われても無理がある。この姫の様子や邸の規模から

考えてもこの主はかなりの身分のはず。だが、ここでこそそと帰ったら、逆にこの姫に何かしたのではないかと疑われかねない。こうなったら腹を据えるよりなさそうだ。

私は姫を背に抱えたまま、邸の建物に入った。すると姫に仕えているらしい中年の女房が真っ先に姫に駆け寄って、

「そのようなお姿では身体に障ります。早く、早く中でお召し替えを」

そう言いながら姫を奥へと連れて行く。おそらくは姫の乳母なのだろう。姫は一瞬振り返り、私に視線を送ってくれた。さっきまでの死人のような眼の色が抜けて、鮮やかに華でも咲いた様な瞳だった。

悲しみの姫君

その眼に吸いこまれたように立ちつくしていると、入れ替わるようにいかめしい姿をした、立派な袈裟姿の僧侶が姿を見せる。

私はその威厳に雷にでも打たれたような思いで、思わずその場にひざまずいた。そのまま丸くなるように頭を下げ、かしこまる。私のような下司にとってそれほどその威厳は気高く、神々しくさえあった。

「そなたが姫を助けてくれたそうだな。父親として心から礼を申したい。本来なら何か望みの品を授けてやりたいが、事情があつて今、私には大した事をしてやれぬ。せめて今夜はここで濡れた着物を着換え、傷の手当てをし、僅かだが酒と肴を召していただきたい」

その僧侶はその威厳に似合わぬ程身を低くして、私にそう言つて下さつた。

「とんでもないことです。そんなご褒美を欲しくてお助けしたわけではありません。ただ、目の前で溺れて行く人を見捨てるわけにはいかなかつただけです」

「それでもそなたは姫の命を救つてくれた。とにかく今夜はここでゆっくりくつろがれて頂きたい」

そう言つと、さっきの使用人の男が、

「こつちに着替えと酒を用意してある。あんたはウチの姫様の恩人だ。ささやかだが俺もあんたに礼をさせてもらいたい。ここの御庭はこつちからいい夜風が入ってくるんだ。俺の部屋は風の通り道だ。

そこでゆっくり休んでもらいたい」

と、言いながら私を邸の庭にある使用人の部屋へと案内してくれた。

使用人の男はさっそく私の傷の手当てをしてくれた。傷口を洗い、薬草を練ったと言う傷薬を塗ってくれる。さっきの僧侶様が修行で傷を負った時に僧侶が使う薬を分けて下さったのだと言う。そしてさっぱりとした着替えを用意してくれた。肴はささやかなものだったが、酒は遠慮なく呑んでよいと私の杯についでくれる。

「いいのか？ これはあなたの酒なんじゃないのか？」

「かまいやしない。俺は年でもう、そんなに呑めるものじゃないし、ここにいた若い下男たちは皆、ここから去って行ってしまった。ここは主の殿でさえも仏門に入った身。酒を楽しむ者なんてもういないんだ」

「そう言えばこれほどの邸にも関わらず、随分人の気配が無いな。なんでこんなに人がいないんだ？」

「ここは前の右大臣様のお邸だ。主である右大臣様が官職を辞してから、皆、ここから去って行ってしまったんだ」

「前の右大臣様？」

右大臣様が職を辞すると、何故使用人が去って行くんだ？

「あんだ、都に来たばかりだね？ ウチの殿の失脚騒動を知らない

なんて」

そう言って使用人の男はこの邸の主の事情を説明してくれた。

「この主はついこの間まで、帝の信頼の厚い右大臣でおられたそうだ。どおりで気高い威厳を持っておられた訳だ。私の様なしがな
い者が本当ならお目通りできるような方ではなかったのだから。」

だが、帝はご気性の激しい方で一度何かに激昂されると、どなた
の意見にも聞く耳を持たなくなる厄介な性質をお持ちになっていた。
それも無理なからぬ事で、帝はお小さい頃から周りの者の都合に
振り回されてお育ちになったと言う。

帝の母上は帝がお小さい時に亡くなられたが、その後を追ってす
ぐに次の中宮様が立后なされた。その中宮様に帝の御養育は任され
たのだが、中宮様は後に男子を授かった。

やはり中宮様も人の親。次の帝にと育てられた兄宮よりも、ご自
分のお腹を痛めた弟宮に帝位を継がせたいと言う思いが起こったら
しく、何かにつけて弟宮と比べては、

「兄宮様には帝としての素質が足りないのではないか」

などと中宮様方に皮肉を言われながら帝はお育ちになってしまっ
た。

しかし、兄宮を差し置いて弟宮を帝位につかせるなど、さすがに
中宮様と言えどもお出来になるはずは無く、兄宮が無事に帝の座に

お付きになった。

だが、嫌みや皮肉を浴びせられ、何かを成し遂げようとなさるた
びに押さえつけられてお育ちになった帝は、本来利発な方だったに
もかかわらず、疑り深く、浮き沈みの激しい御気性をお持ちになっ
てしまわれた。

帝位につかれてからと言うもの、些細な論議のやり取りなど事あ
るごとに大臣たちの位を奪い、気まぐれに僻地へと追いやった。

誰もがそんな帝を恐れ、その怒りに触れぬようと顔色をうかが
うようにして政が行われるようになった。内心の不満を抱え、帝へ
の信頼や忠誠が失われていく。

そんな中で帝を心から理解していたのが、右大臣だった。

彼は帝が本来持っていた利発さを導き出そうと常に帝に寄り添い、
その政務を助け続け、時に帝の片腕となり、時には帝の御気性から
来る気まぐれを身を張ってお諫めした。そんな誠意が通じたのか、
帝もこの右大臣には心からの信頼を寄せ始めていた。

だが、帝への不信感は大臣たちの間ではぬぐいきれないところま
できてしまっていたらしい。

帝への不満を高めた者たちが、秘かに帝を追い落とそうと企み始
めていた。今の帝より弟宮の東宮に早く帝の座について頂くとう考
えたのだ。

とはいえ、東宮はまだいとけないお年頃で元服までも時が必要。
当然実際の政は大妃となられた元の中宮と、その方に寄り添う大臣

達が仕切る事となる。そのような東宮を帝の座につけるためには、今の帝に自らその座を退かせる他に方法は無い。

そこまでするには古くから大妃方に寄り添っていた方々の自己保身もあつたのかもしれないが、それは各々の大臣方のお心うちの事で、本当のところは誰にも分からない。だが、明らかに帝への不満が高まつていた事は確かだった。

そのため帝の味方としてそばに着き従っている右大臣は邪魔ものにされてしまった。何とか大臣の座から引きずり落とそうと、中納言を中心とした者達が策を練り上げた。

その頃帝には後宮に中宮とは別に大変お気に召されている女御様があられた。

その方は大変穏やかで優しく、お心の広い方であるらしく、帝の激しい御気性でさえもその方の前では、幼子のようにお心を解かれ、甘えていらっしやるようだった。

それゆえ、そのご寵愛は眩しいほどで、これほどお一人の女人に夢中になられたのでは政務に差し障りがあるのではないかと心配する声上がるほどだった。

中納言たちはその噂を利用した。

あたかも右大臣がその女御様を煙たがっておられるようなことを、帝に吹き込んだのだ。

実際、右大臣はお一人の女御様に御偏愛がすぎると、帝にも女御様にも良くない事になるとお諫めの言葉をかけていた。そこに中納

言たちの進言が加わり、帝は右大臣に疑いを持ち始めた。

そんな時に女御様が御病気にかかられた。帝は大変動揺された。御心弱りのあまり政務も滞るほどだった。

そこにさらなる噂が流された。女御様は右大臣にあからさまに煙たがられるあまり、御心痛がもとで御病気になられたのだと。

これに帝は激昂された。激しい御気性があらわになり、右大臣だけではなく、そのお味方に着いた他の大臣までも処分なされようとした。

そんな事になれば政務の場は帝を追い落とそうとする者達だけで固められてしまう。いや、それだけではなく、本来の職についている多くの大臣がその職を追われては、国の政そのものが滞ってしまう。

悪い事にその頃、北の国では天候の悪さから飢饉が起こり、南の国では疫病が猛威をふるっていた。人々は苦しみ、国政を滞らせることは国を衰退させる事となりかねない。だが、帝のお怒りは和らぐ気配は無かった。

とうとう右大臣は決断した。他の大臣に累が及ぶ事のないよう、自ら大臣の職を辞し、それが己の自己保身から来るものではないことを証明するため、無位無官の身となって仏門に入ってしまったのだ。

このことは都人の格好の噂になって、しばらくはにぎやかに語られ続けていたらしい。

「そんな訳でウチの殿は今は無位無官の僧侶の身。しかも高貴な方々は帝を恐れるやら、中納言様に御遠慮するやらで誰もこの邸に寄りつかなくなつた。そうなる、いつ、お手当が滞らないとも限らないって、仕えていた者達までこのお邸を見限つて姿を消して行つたのさ。今じゃ、俺のように年老いて行く当てのないものや、古くから邸に仕えていて離れられなくなつた使用人や古参の女房が僅かに残るばかり。あの姫様付きの女房たちでさえ、こんな邸にいて何かあつたら困ると親たちがさらうように無理やり連れ帰つてしまつた。優しい姫様だから若い女房達も懐いていたのになあ」

「ああ、確かに優しそうなお姫様だつたな」

「だから余計にお可哀想で。今じゃ姫様のお世話をしているのは乳母と身寄りのない女房だけ。それでは手が足りないから、俺のような下男まで姫様の近くで雑用をこなしているんだ。お母上は皇族だつた方だから本当なら誰よりも大切にお世話されてしかるべきなんだが」

「そんな尊い方が、どうして身投げなんかしようとしたんだ？」

「気まづくなられたんだと思う。姫様はあの、憎い中納言様から結婚を申し込まれているんだ」

「父親を追い落としておいて、その娘と結婚したいって？ 随分な話じゃないか」

「だが、現実を考えるとそれしか姫様がお暮しになる手立てはないんだ。殿には他の妻との間に別の姫様がいるんだが、その妹姫は気

丈な方で、なんとかつてを頼って御所の後宮に勤める事が出来た。その方の御手当てでかろうじてこの邸は細々とやっているんだ。とても姫様に別のお相手を世話できる余裕も、お願い出来る相手もありはしない。中納言様は姫様のためならこの邸にも援助を送る。後宮にいる姫にも後盾をすと言っているが、それでも殿は嫌がる姫を無理に結婚させたくない、中納言様を断ろうとしているんだ」

あの姫は自分は親を追い落とした憎い相手に娶られるか、死ぬしかないと言っていた。お父様の足を引つ張るばかりだとも。そこまですぐに詰められていては、先を悲観しているのも無理はないのかもしれない。

「あんなに美しい人なのに。気の毒だな」

あの、死人のような眼。あの姫はこれから、一生あんな眼をしたまま生きて行くのだろうか？

「まったく気の毒だ。だが、俺達下々の者にはどうする事も出来ないのね」

琴の音（前書き）

あの・・・かなり適当に想像しています。莊園制度がきちんとしていたはずだから、あとから紹介って考えにくいかも。（馬も古代は軍馬の献上だったみたいだし。この頃ってどうなんだろう？）お話の都合で作っています。

琴の音

そんな話をしていると、遠くから細々と美しい琴の音が聞こえてきた。

「これは綺麗な琴の音だな。何だか優しい気持ちにさせてくれる」

私は思わず耳を澄ませて聞き入った。

「ああ、これは姫様がお弾きになっているんだ。姫様が琴をお弾きになるなんて、幾日ぶりの事だろう。このところすっかりふさがれてしまって、琴にお触りになる事さえなくなったと聞いていたのに」

「ここでは以前はよくこんな美しい音を聞けたのか？」

「姫様の琴が大変御上手なのは、都人の間でも有名だよ。お母上は琵琶の名手、姫様は琴がお得意。右大臣は二人の類まれな演奏者を御身の内に持たれてお幸せな方だと噂されていたものだ」

「そうだろうな。俺は田舎者で琴などロクに耳にした事もないが、こんなに優しい音色、他で聞いたことが無い」

「姫様の琴の音は特別だ。だが、今夜の音色はいつにもまして優しい音が勝っているようだ」

あのような美しい姫君が、こんな優しい音色の琴を弾いてらっしゃるのか。きつと御心もこの音色のように優しく、美しいに違いない。そんな方がご不幸な身の上にいるなんて、本当にやりきれないな。

私はそう思いながら琴の音を聞いていた。

「ところであなたは何をするために都に上って来たんだい？」

使用人の男がそう聞いてくる。今度は私が自分の事を話す番だった。

「俺は都人を相手に商売をしたいと思ってるんだ。俺の郷里の武蔵の国は本当に豊かな国で、耕しやすい広い平野ととり囲む山々、温暖な気候に恵まれている。さえぎるものが無いから風が強いのが難点だが、その風さえも豊かな恵みをもたらしてくれている。だから絹糸も日当たりと風通しの良いところで育った良い桑の葉を食べさせた繭からとっている。丈夫でしなやか、それでいて光沢がいい。都風の織り方をすればきつと都の絹に負けないものが出るはずだ」

「ほう？ それは高貴な方々にも喜ばれそうだな」

「だろう？ それに馬も良い馬が多い。帝のための勅旨牧（朝廷に献上する馬を育てる牧場）もあるくらいだからな。俺の里の馬だって広い大地でよい草をほみ、のびのびと育っているから体格もいいし良く働く。多少気の荒いところもあるが、本当に良い馬飼いが育てれば実に言う事を聞く。もともと頭がいいんだ。都の高貴な方々が乗っている馬達にも引けを取らないし、帝から下賜された馬にだって劣らないと俺は思ってるんだ」

私はここまでを熱く語っていたのだが、ふと、我に帰った。

「だが、俺には都人との繋がりが無い。つてがなにもないんだ。だ

「俺は郷里の素晴らしい品々を都人に知ってもらいたい。そして認めてもらいたいんだ」

「その絹や馬は、本当に良い物なんだな？」

「ああ、本当に良い物だよ。武蔵の国は遠いが絹糸は舟を使えば運べるし、馬は長旅にも耐えられるくらいに丈夫だ。広い大地を駆けまわって育っているから」

「そう言う事なら何かお前の役に立てるかもしれないな。このお邸は困窮気味で物や金の工面はできないが、殿の顔の繋がりは大変広いものだ。今でこそ帝や中納言様への遠慮から人の行き来が絶えてはいるが、少し前まで大変な御威勢だった。今でも使用人同士のつながりは結構生きている。その品が本当に良いものなら、興味を示してくれる邸もあるはずだ。これは殿に御相談してもいいかもしれない」

「本当か？ そうしてもらえれば願ってもないことだが」

「あんたはウチの姫様の命の恩人だ。俺もできるだけの事はするよ。とにかく明日になったら姫様の乳母を通して殿にご相談申し上げよう。以前だったらとてもそんなことはできなかつたが、今では使われる下人も減って、乳母に直接頼み事さえできるんだ。姫様の事を思うと、それも悲しいことだがね」

そう言うって使用人の男は請け負ってくれた。

あの僧侶はよほど自分の姫を助けられた事に感謝していたらしく、身分の低い私のために力を貸してくれる気になつたらしい。その日

からこの邸の使用人と共に暮らす事を許され、私は間違いなく邸に郷里の品々が届くように手配する事にした。

馬や牛と言った家畜はすぐにといいわけにいかないが、手元に取り寄せられる品は出来るだけ早く邸に届くように、信頼できる郷里の者達に手紙を送り、頑丈な船と腕のいい船乗りたちを手配した。邸の使用人たちも協力的で、良い機の織り手も紹介してくれた。私はようやく自分の願いを叶えるきっかけを得る事が出来たことを心から喜んでいた。

だがこれではあまりにも身に余る。こちらが礼をしたいほどだ。私はそう思つて邸の雑用を買つて出た。人の少ない邸では雑用をこなす人間は明らかに足りていないようだったから。私は使用人の男の手伝い、やり水すら枯れた庭の体裁を整え、建物の近くにまではびこつて行く雑草を払つたりして郷里の品々が届くのを心待ちにしていた。

姫様の御寢所からはあれから毎日、美しい琴の音が聞こえて来る。

使用人たちはそのことをとても喜んでいて。あれほどふさぎこんでいた姫様が毎日のように琴を弾かれるようになった。まだ先に明るさは見えなくとも、何か生きる希望を見つけたのではないかと、そしてこのままお元気になられれば、お父様の仏道修行の成果が現れて何か良い事が起こるのではないかと、話すようになっていた。

どうやらこの邸にとってあの姫様は明るいともし火の様な存在らしい。たとえ周りが暗く夜の闇の呑みこまれていても、あの姫様が明るく気丈にお過ごしなら皆心明るく希望を信じる気になる事が出来るらしい。おそらく姫様の方でも周りにそう思わせるように常々気を使つてお暮しになつておられたのだらう。自分がこの邸に

とってどんな存在か良く理解していて、その責を全うされようとなさっているのだろう。

私が姫様と会ったのはほんのわずかの間だったが、あのはかなげな中に見せた凜とした態度や最後に送って下さった華のような瞳が私にそう思わせた。そして使用人にいたるまで誰もが姫様を慕っている姿を見ると、その人柄は信頼に値すると思えた。

そのような素晴らしい姫様だからこそ、あのように心穏やかになれる優しい音色を奏でる事が出来るのだろう。私は毎日その琴の音を聞けることが喜びとなった。出来るだけあの音を聞いていたい。もっと近くで、もっとじっくりと。そう思わずにはいられないほど甘い、心揺さぶられる音色がその音にはあったのだ。

私はある日、あまりの琴の音の美しさに我慢できなくなり、邸の庭の姫様の御寢所近くに寄って行った。近づけば近づくほどにその音ははつきりと、そして一層優しげに心に染みてきた。私は自分がどこにいるのかさえ忘れて、その音色に聞き入ってしまった。

すると、建物の方から芳しい、良い香りが漂ってきた。

私はこの香りを嗅いだことがある。そうだ、姫様を背に背負った時、川の水にぬれてしまいながらも、ほのかに焚きしめた香の香りが漂っていたのだ。これは、姫様の香の香りだ。

目の前の建物の御簾の向こうに、僅かに人の気配がする。そこからこの香りは漂って来る。このすぐ近くにあの姫様がいらっしやる。こんなに近い所に深窓の姫様がいるとは私は驚いて声も出なかった。

近くにいては失礼にあたる。頭ではそう思っても身体が動かない。私はそのまま良い香りに包まれた美しい姫様の気配を感じながら、その、甘い音色に聞き入っていた。

すると突然、

「そこにいるのは、先日私を助けて下さった方ですね？」

と、美しい、囁くような姫の声が聞こえた。まさか自分にお声がかかるとは思わず、私はおろおろとしてしまった。

「申し訳ありません。こんな奥にまで入り込んで、とんだ失礼をしました」

私はそう言ってその場を離れようとしたが、

「待つて下さい。少しも失礼などではありません。私はあなたに聞いていただきたくて、琴を弾いていたのですから」

「私に？」

「ええ、私はあなたにお礼をしたいのです。父はあなたを助け下さっているようですが、私には何もする事が出来ません。せめてこの琴の音が、あなたのお耳に届いてお心のやすらぎになればと思つて」

「まさか……そのために毎日のように琴をお弾きになってらしたのですか？」

私は真底仰天した。自分の様な者のためにこんな身分の高い姫君様が、琴を演奏して下さいなどとは思ひもしなかったのだ。

「その通りです。どうでした？ 私の琴は」

「もったいない。私などの耳では演奏の良し悪しなど分かるはずもありません。ただ、あまりにも優しく美しい音色なので、その音につい魅せられてしまい、こんなところにまで入り込んでしまったのです。それほどあなたの琴の音は素晴らしいのです」

「喜んでいただけ嬉しいわ。あなたが聞いて下さっていると思うと、私も弾かずにはいられなくなるのです。どうか、これからもこの音を聞きに来て下さいね」

そう言うと姫が建物の奥へと入って行く気配がした。わたしはただ、呆然と立ち尽くすばかりだった。

返事

その次の日も私は姫の琴の音に誘われるままに姫の寝所に近付いてしまった。

人の少ない邸とはいえ、誰にも咎められないのは不自然だったが、それでも私はそうせずにはいられなくなっていた。夏の暑さも、容赦なく庭を照りつける日差しも、私を止めることは出来なかった。

爽やかで涼しげな、芳しい香りが漂って来る。今日も姫は御簾の端近くにいらっしやるようだ。優しい琴の音が庭に響いている。姫のお心を現すような優しい音色が。

曲が終わり、あたりは静寂に包まれた。ああ、これでまた奥に引きこまれてしまうのだなと、私は名残惜しい気持ちで御簾を見つめていた。

すると突然、御簾が姫自身の手によって掻きあげられた。そこには几帳すらおかれていないので御姿があらわになる。

出会った時には想像もできなかった、見違えるような御姿がそこにはあった。

白い肌と美しい顔立ちはそのままだが、涼しげな色合いの品の良い衣装を身にまとい、長く豊かな黒髪は乱れることなくその背に流れ、口元に紅がひかれたため、お顔の色が輝いているように見える。

そして何より、瞳が得も言われぬほど美しかった。

あの日の様な死人を思わせる陰など微塵もなく、優しく、気高く、生き生きとした華の様な瞳が輝いていた。

私がつっかり見とれておるとすぐに御簾は降ろされ、衣擦れの音と共に姫の気配が奥へと消えて行ってしまう。私は今起こった事が信じられなかった。

姫は自ら私にあの御姿をお見せになった。何の身分もない、いやしい私に。

姫をお助けしたあの日も夢幻かと思ったものだが、今の出来事の方がよほど白昼夢のように思えた。

もう、忘れる事など出来ない。私の様な者にはあの姿は美し過ぎる。どうしようもなく物苦しい想いに駆られてしまう。

何故、私にあのようなお姿をお見せになったのですか？

私は姫に問いただしたい気持ちでいっぱいになった。

その夜、久しぶりに邸に客人が訪れると言うので、私達はかがり火や、門を開ける準備をした。いらっしやるのは中納言様だと言う。

いよいよ姫の御結婚の事で御返事をなさるらしい。やはり中納言様に娶られことになるのだろうか？ 私は気が気ではなくなってしまう。

中納言様の車がお越しになると、私は主の僧侶に呼ばれた。何の

用かと思っていると、縁のすぐ下で話を聞いているようにと言われる。

何故私がとは思ったが、命ぜられるまま縁の下に膝をつき、かしまった。

中納言様がお見えになると僧侶は挨拶もそこそこに前置きもなくこう言った。

「姫の結婚の件だが、やはり、お断りさせていただく。姫には私や妻と同じく仏門に入って髪を下ろさせる事にした。もう、この邸に近づかないでいただくよう」

中納言様は驚きのあまり、ひきつったような声を洩らされた。

「姫を、尼になさると？ 尊い血を継がれた、あのように美しい姫を。御正気か？」

「姫は中納言殿とだけは結婚したくないと申しておる。ついに一度はその身を川に投げかけた。そこまで嫌がる結婚をさせるわけにはいかない」

「身を投げようとした？ 私と結ばれるのがそんなにお嫌だと姫は申したのか！」

「その通りだ。私は父親として姫にそのような結婚をさせる訳にはいかぬ。中納言殿は姫を幸せにすることが出来ない」

「そんなことは無い。私は心から姫を大切に思っております。父親のあなたとは政務の事で衝突したが、姫の事とは別のはず。姫を心

からお慕いしている私の心をお伝えしきれずにいるだけです。私は必ずや姫を幸せにする。この邸も整え、後宮におられるもう一人の姫の後ろ盾にもなりましょう。あのように若く美しい姫の髪を下ろされるなど、それこそ姫にとっては御不幸。一生、女人としての幸せを断つてしまわれるおつもりですか」

「身を投げるほどの苦しみを味あわせるそなたと結ばれるぐらいなら、それもよからう」

「そんなことは無い！ それは若い姫ゆえに一時お心が揺れておられるだけだ。私の妻となれば姫は必ず幸せになる！」

「では、中納言殿は姫のために夜の川に飛び込む事が出来るか？」

「勿論だ。姫のためなら加茂川だろうと、桂川だろうと、命懸けで飛び込みましょう」

すると僧侶は縁に出て私を指さした。

「この者をご覧あれ」

「なんです？ ただの下人ではないか」

「この者の腕に大きな傷跡があるであろう。この傷は夜の川に身を投げた姫をこの者が助け出した時に負った傷だ」

「この下人が、姫を？」

「本当に命を賭けてでも姫を幸せにできると言うなら、今すぐ夜の川に飛び込んで見せるがよい。言葉ではなんとでもいえる。だが、

実際にそこまでできる者はそう多いものではないだろう」

「私に、下人のような真似をしるとおっしゃられるのか？」

「姫は私の事で本当に傷ついている。その傷ついた姫を幸せにすると言つのなら、そのくらの事は覚悟していただきたい。出来ぬと言つなら姫と結婚はさせぬ。川に飛び込む気が無いのなら今すぐお帰りいただきたい」

中納言様は顔を怒りで真っ赤に染められ、足音も荒々しく牛車に乗り込むと従者たちを怒鳴りつけ、邸を出て行った。

「巻き込んでしまつて、すまなかつた」

中納言様が出て行かれると、僧侶は庭に下りて私にそう声をかけて下さつた。

「いいえ。それよりも中納言様にこのような事をなさつて良かったのですか？」

「私は元からあの者を信用できぬのだ。私が朝廷を去つた後、中納言は帝を思うように出来ずにいるらしい。帝の御気性に振り回されて政務も帝のいいなりになってしていると聞く。そんな状態をあの中納言が耐えられるはずがない。おそらくまた、何かを企てようとするだろう。そのような者に姫の身を預ける訳にはいかないのだ」

「では、姫君様はやはり尼になられるほかにないのですね……」

胸がキリキリと痛むが、自分にはどうする事も出来ない。私は齒

を食いしばっていた。

すると僧侶が身を低くかがまれて、私の姿をまじまじと見た。

「私は、姫のためならどのような罪も犯してみせる」

私の目を真つ直ぐに見ながら、そうおっしゃった。

「今の姫を仏門に入れるのはあまりにも心が痛む。中納言との結婚話が出てからと言うもの、姫の表情はそれは暗いものとなってしまった。苦悩と悲しみに曇った眼を、いつもうつろに漂わせていた。そしてとうとう川に身を投げようとまでしたのだ」

僧侶は苦しげに眼を伏せた。

「ところがお前に命を助けられてからはその眼の色に時折明るさが戻るようになった。以前のように琴も弾くようになった。その眼はお前の姿を追い、その耳はお前の気配を聞きとろうといつも研ぎ澄まされるようになった。あの琴の音は、お前に聞かせるためにつま弾いているのが分かった」

私は驚いた。僧侶の口からそのような言葉が出るとは思ってもみなかった。

「それはお心違いです。そのようなこと、決してございません」
私はただ、垂れた頭を横に振った。

「私は罪深い僧だ。仏門に入ったと言うのにいまだに親子の情から逃れる事が出来ない。私は姫が忍びない。ようやく取り戻した生き希望を姫から奪っては、おそらく姫はこれまで以上に苦しむであ

ろう。たとえ尼になろうとも生ける屍のような日々を送らねばならないかもしれぬ。私でさえ姫を思うとこれほどに心苦しい思いに駆られるのだ。若い姫が俗世に執着を残したまま出家すれば、その苦しみはいかほどであろうか？」

「お許しください。そのような事、決してありません。お許しください」

「姫はお前を慕っているのであろう。お前は姫をどう思う？」

「めっそもございませぬ。お許しください……」

私は他に言葉を失い、お許し下さいとだけ繰り返した。

恋盗人

「私は罪を犯そうと思う。父として、仏弟子として、人としても深い罪を犯そうと思う。そのためにたとえ夜の川はおるか、地獄の淵から落されようともかまわん。姫に生きる希望を持たせることが出来るのなら、どのような罪も犯す」

僧侶は私の肩をつかみ、無理に顔を上げさせた。

「私はお前をそそのかす。これ以上の罪深いことはあるまい。それでも私は姫が愛おしい。私は姫のために命を賭けたお前に姫の人生を賭けたい」

真つ直ぐに、私を見据えられる。

「この邸から、姫を盗んではくれぬか？」

私は耳を疑った。

「中納言には気の小ささとは別に強引なところがある。これほどはつきり彼の誇りを穢すような態度をとった以上、どのような手段に出るとも分からない。姫を守るために私は時を置かず、姫の髪を下るさねばならん。そうなれば姫は一生女人としての幸せを諦める事となる」

尼となれば男女の交わりは許されない。俗世を捨て、親子の縁さえ仏弟子としての交流にされてしまう。仏弟子になられるのは尊い事だが、姫は若くして孤独な生涯を送る事になる。

「もう一度言う。姫はお前を慕っておる」

そんなことは知っていた。あの、甘く優しい琴の音色。私にだけ見せた美しい御姿。

「罪は私にある。この不甲斐ない父親が姫を守り切れなかった事にある。それにもかかわらず私はお前を罪人にしようとしている。もしもお前が失敗すればお前の罪は免れぬものとなるだろう。悪くすれば死罪となるかもしれぬ。私はお前に再び姫のために命を賭けてほしいと頼んでいるのだ」

姫のために。命を賭けて。

ああ、今俺はあの川縁に居るのかもしれない。姫は絶望の中で俗世を捨て、仏門へと身を投じようとしている。

だが、あの時とははっきり違う事がある。あの時姫は俺を必要としていなかった。何故、死なせてくれなかったのかと問い詰めた。

しかし今度は姫が俺の助けを求めている。俺の中に生きる希望を見出してくれている。あの美しい華の様な瞳が俺を求めてくれるんだ。

「明日には寺に知らせがいく。明後日には私がこの手で姫の髪を下ろす事になるだろう。もし、覚悟が出来たなら、明日の夜、姫を盗み出してほしい」

そう言って僧侶は私の肩を離し、建物の中に向かう。

「明日の夜。待っている」

最後にそう告げて奥へと姿を消した。

姫を盗み出す。この邸から。

失敗すれば命は無いかもしれない。たとえ成功しても商人としての信用を無くし、手配した品々もすべてが水の泡と消えるかもしれない。

だが、姫に会わなければ、この邸にこなければ、初めからそれは叶わなかったことだろう。

何より私はすでに姫に惹かれてしまっていた。きっと、何も考えられずに川に飛び込んだ時には、あの、はかなげな姿と一筋の涙に魅入られていたのかもしれない。

姫に出会えなければこんな気持ちを味わうことはできなかった。この想いを遂げるためならば私も地獄の淵から飛び込んで構わないとさえ思う。

もう二度とあの姫に、死人の様な眼をさせたくはない。あの華の様な瞳を曇らせたくはない。

私は決心した。命も人生も投げ打って、姫を盗み出す事を。

翌日の邸の様子は妙なものだった。誰もが私から視線を外し、声すらかけてはこなかった。

それなのに嫌に注目が自分に集まっている事が分かる。どうやら昨夜、僧侶と私がどんな話をしていたのか知れ渡っているようだ。

だが、誰ひとりとして私を止めようとする者はいなかった。皆が姫の心を知っている。だから今まで私が姫の寝所に近付こうとも咎められることが無かったのだ。

そして朝から中納言様の「姫の出家だけは考え直すように」との文が、僧侶の元へ何度も届けられた。

だが僧侶は早速寺に姫を尼にする旨を書いた文を送り、中納言様には「私の決心が変わることは無い」とだけ返事を書く、その後は届いた文を受け取る事さえしなかった。

とうとう夕方には中納言殿が自ら車で邸の前へと出向いてきたが、邸の門は固く閉じられ、取次ぎの従者に返事すらなかった。中納言様は面目の立たぬまま帰らなければならなかった。

これほど強く拒絶されては中納言様のお怒りは相当なものだっただろう。もしかしたら強引な手立ても考えられているかもしれない。もう、あまり時は無いかもしれない。

陽が落ちるとすぐに私は姫様の寝所に近づいた。いつもならしっかりと御格子を下ろし、内側から掛け金が掛かっているのだが、その夜は私が姫様の姿を見たあの場所だけ僅かに格子に隙間があり、うっすらと明かりがもれていた。

私は早鐘の様にとどろく胸を抑え、ひどく忍んでその隙間に近寄り、そつと声をかけた。

「姫様は、こちらにいらつしやいますか？」

すると御格子が上げられ、

「こちらへ」

と、姫様の乳母が手招きをした。私はそのまま部屋に入った。

部屋の中には乳母の他に、僧侶と尼姿の北の方がおられた。北の方は姫様とすっかり手を握り合っておられて、たった今までお別れを惜しんでいたのが分かる。お二人の目には薄く涙の跡があった。そして僧侶は、

「ついさつき、中納言家の者が邸の様子を探っていたそうだ。ためらっている暇はない。以前姫が抜け出した築地塀の崩れた所に網代車が用意してある。その車に乗って私の甥の住む邸に逃げ込むのだ。甥の邸の建物の中に入るまで、決して誰にも見咎められてはならぬぞ。車を止めることなく、真っ直ぐ邸に入るように」

私は黙ったまま、ただ頷いて見せた。北の方と姫様もただ頷きあっておられる。

私は姫を盗み出す身だ。余計な言葉はかけない方がいい。急ぎ、ここを抜け出さなくてはいけない。

「姫、私の背にお乗りください」

あの、河原での時の様に私は姫に背を向けしやがみこんだ。姫もためらうことなく私の背に乗り、肩をつかんだ。姫の香の香りが漂って来る。

最後に乳母がたまりかねたように、

「姫様をよろしく願います」

と、涙声で言った。

私は部屋を出て庭に下りると暗闇の中、背に姫を背負ったまま全力での崩れた塀へと向かう。この姿を誰にも見られてはならない。たとえ屋敷のすべての者が黙認しているとしても、姿を見ながら取り逃がしたとあつては、その者にもどんなお咎めがあるか分からない。私はあくまで一人でこの姫を盗み出さねばならないのだ。

崩れた塀にたどり着くと周りに人の気配が無いことを確認して目の前にある網代車に乗り込んだ。車は人を乗せた気配を知ると、牛飼いは何の言葉もなく動き出した。いつもなら貴人を乗せゆつくりと進むであろう牛車が、ガタガタと激しい揺れを伴いながら急ぎ進んでいる。そのような経験のない姫は私にすっかりとしがみついて青い顔をしていた。私も姫を支えながら息を殺すような思いでいる。

ようやく車は速度を落とす、一度停まると誰かの囁くような話声が聞こえ、門の開く音と共に忍びやかに邸の中に入って行く。ひさしの下に車が止められ、建物の中に入るとこの邸の主らしき貴人が、

「ここは今、人払いをしておりますが誰に見咎められないとも限りません。早く、こちらへ」

と、私達を案内してくれる。

建物のもつとも奥まった所に御簾が掛けられ、さらにいくつもの記帳がおかれたところに畳や敷物が用意されていた。

「伯父上から事情は聞いております。この邸なら役人の手が回ることは無いとは思いますが、しばらくはこの部屋から出歩かない方が賢明でしょう。御不自由な事が多いと思えますが御辛抱下さい」

「何から何まで、ありがとうございます」

私は他に言葉が無くて平凡な礼を言うしかなかったが、

「いや、私も中納言殿には腹をすえかねておりましたから。これで少しは気が晴れました。狙っていた姫をまんまと盗まれたと知ったら、中納言殿はさぞかし齒がみをして悔しがることでしょうなあ」

と、主はむしる気持ちよさげに笑っていた。

父の反対

父はここまでを遠い目をしながら懐かしそうに話してくれた。

「では、お母様は幸せだったのね？ お父様と結ばれて」

「その時までには幸せだったよ。お前の母だけではない。私もそれ以上には幸せだった。命を賭けたかいがあつたと思つたものだ。お前の母にしてみればそれまでよその邸を訪ねた事もほとんどなく、乳母と離れて生活したこともなかったのだからさぞかし心細く不自由も多かったはずなのだが、それでも幸せそうな顔をしていた。若かつたのだ。二人とも」

「でも、私を身ごもつた後、お母様は元のお邸に戻られたのよね？」

「そうだ。初めは中納言様も躍起になつてお前の母を探していたが、とうとうその居所は見つけ出せなかつた。そのうち姫を手に入れられなかつた悔しさと自らの思うように出来ない帝の御気性に苛立ちを募らせて、帝に帝位を退かせる手を打つた。自らの息のかかつた修験僧に御病気の女御様の祈祷をさせ、帝位を東宮にお譲りすれば必ず女御様は回復すると進言させた。それを真に受けた帝が幼い東宮に帝位を譲られたものだから、それまでは尊い身の上の姫がさらわれた事をかしましく噂していた都人たちも、帝の突然の御国譲りに関心が移つて姫の噂はだんだん薄れていった。そんな時にお前の母が身ごもつたのだが、使用人や下人の口から洩れてはいけなとお前の母の世話を頼むわけにはいかなかった。初めての懐妊だし、不安も多い。だから思い切つてお前の母を帰す事にしたのだ」

「……なぜ、いいように噂されたんでしょうね」

都人の口さかのなさは、私も嫌と言うほどよく知っている。

「そつだ。むろん、私の事は表に出す事は出来ない。姫がさらわれた日に邸から姿を消した下男がいることは知れ渡ってしまった。私は邸につてがある商人として邸に通い、こつそり忍んでお前の母に会っていた。それを都人たちは『お血筋の良い姫でも盗人の子を宿すと随分お気楽になるらしい。下司の田舎者を平気で邸に通わせるようになった』と噂をした。とうとう『あの田舎者が姫をさらった盗人じゃないのか?』とも言われ出したが何も証拠はない。その後回復したと思われる御病気の女御様が亡くなり、しかもお前の祖父殿はもしものために寺の僧頭から中納言様が修験僧に送った文を手に入れてくれた。中納言様が私を疑ったとしてもこれがある限り無理なこととはできない。それに祖父殿のおかげで商売の方も上手くいつて俺は財をなす元手を作る事が出来た。だが、お前の母にはつらい噂が流れて可哀想な事だった」

「それでも、きっとお母様は幸せだったと思うわ」

「だが心労も多かったらう。僧侶殿やお母上、その周りの一族に泥を塗った事をやはり気にかけていたようだ。つわりも激しく身体もつらそうで、お前が無事に生まれた時は本当にほっとしたものだ」

「そんな思いをしながら、お母様は私を生んで下さったのね」

「ああ。だからお前の事は本当に可愛かった。それはお前の祖父殿、祖母殿も同じだ。お前は誰よりも可愛がられ、誰よりも幸せを願われて育ったのだ。ただの一度たりとも疎まれた事などは無い。そこは決して誤解したりしないでほしい」

私は誰よりも可愛がられていた。疎まれた事など一度もなかった。

お母様は私を心から望んで生んで下さり、お父様は誰よりも慈しんで育ててくれた。

「お父様。大切な思い出を話してくれてありがとうございます。お父様が私を引き取って育ててくれたのは、私を都人の噂から守って下さるためだったのね」

「お前の祖父殿は本当にお心の豊かな方だった。都の考え方に縛られるような方ではなかったのだよ。御仏の目から見れば人は皆同じ身分や血筋に振り回されて不幸になっではいけない。都人の好奇の目に晒されて育つより、土地も、人の心も豊かな武蔵の国で育つ方がお前は幸せになれると考えられたのだ。だから御自分の元から遠く離れるのを承知で、私がお前を育てることを許して下さったのだ」

「私、本当に幸せ者ね。お母様も幸せだったのね」

私は心からそう言った。だが父の顔は晴れなかった。

「そうなのかもしれない。いや、そう思いたいのは私も同じだ。だが、本当にお前の母は幸せだったのだろうか？」

「そんなの、幸せだったに決まっているじゃない」

私は父の言葉が信じられなかった。女人にこれほどの幸せは無いと思っただから。

「だが、お前の母は常にお前の祖父殿、祖母殿の事を気づかっていた。実際、噂の矢面に立ったのはお前の祖父殿と祖母殿だ。私はこそこそと隠れ周り、祖父殿に頼り、その祖父殿の苦勞をお前の母は心配しながら身体を弱らせてしまった。私のとった行動は決して正

しかつたとは言えない」

「でも、お父様がお母様と結ばれなければ私は生まれていなかったわ」

「そつだ。だからお前の事はなんとしてでも幸せにしなければならぬ。それしか私はお前の母や祖父殿、祖母殿に報いる事が出来ない。だが、お前はやはり都人の血が流れている。お前にとっては田舎でのびのびと暮らす事だけが幸せと言う訳ではないよつだ。きつとお前の母の血がそつさせるのだから」

そつ言われると言葉に詰まる。確かに私は都にあこがれ、都の暮らしに手ごたえを感じていた。田舎でのんびりと穏やかに暮らすより、京で姫様……いや、お方様のもとで挑み心を持って立ち向かつて行きたい。そんな思いを強く持っている。

「私はお前の母の人生を大きく変え、お前をこんな田舎で育ててしまった。正直、悔む事も多い。若かつた時には見えなかつたが、今になつて心を痛める事も多いのだ」

「だつて、お父様はそつするしかなかつたじゃない」

「その時はそつするしかなかつた。だが、それをお前に繰り返させようとは思わない」

父の表情が険しくなる。嫌な予感がする。

「どついつ事？」

「お前は都で生きることを心から望んでいる。そつ思ったからこそ

私はお前を都に出した。だが、康行は全くの下司だ。私と同じで
前の人生をどう狂わせるか分からないのだ」

「お父様……。康行の事、反対なの？」

「反対だ」

父ははつきりと言った。

「そんな！ 私だって同じ身分じゃないの！ それにお父様は誰よ
りも、身分や血筋では人は幸せになれない事を知ってるじゃないの
！」

「たしかに身分では人は幸せにはなれない。だが、お前と康行では
生き方そのものがそぐわないのだ」

生き方がそぐわない。そうだ、前に康行も言っていた。御簾の内
と外では世界が違うと。

「それでも、お父様とお母様は結ばれたじゃない。そしてこうして
私は生まれているじゃない」

「そうだ。そして私はお前の母を苦しめた。幸せではあったが同時
にお前の母は苦しみましたはずだ。私もつらい。あの日のお前の祖
父殿に頼るばかりだった自分が今でも許せない。私はお前に同じこ
とを繰り返させたくはない」

「違う、違うわ。私と康行はお父様達とは違うわ。私、康行じゃな
きゃダメなの。康行が帰ろうと言ってくれたから、この邸に帰って
これたの。お父様に話を聞く勇気が持てたのよ」

「それほど康行を想っているのか？」

「ええ」

私は即答した。だが、

「では、お前は一生この武蔵の国で暮らさない。二度と都に出ることは許さない」

と、父に言われると、私は動揺した。

「だって、私、お方様の女房なのよ。必ず都に帰ると約束したの」

「それはあきらめなさい。康行と一緒にいるならいずれこの邸も財も康行に譲ろう。お前はこの邸を守り康行を支えてやりなさい。どうしても京にもどると言うのなら、康行とは別れるんだ。大将様の妻になるか、他の御簾のうちの方と結ばれるか、一人で勤め続けるかはお前次第だが、どの道を選んでも私はお前の後ろ盾はしてやろう。お前の母は自分の運命を選ぶ事が出来なかったが、お前は自分で決めなさい」

「そんな……。お父様」

「一人で決められることではないだろうから、あとで康行を呼んでやる。二人で話し合っただけで決めればいいだろう。自分達が一番納得のいく答えを出しなさい」

そんなの、どっちを選んだって納得なんてできないわよ！

「とにかく今日は旅の疲れもあるだろう。部屋に戻って身体を休めなさい」

父はそう言って私との話を打ち切ってしまった。

私は途方にくれながら、帰ってきたことを深く後悔していた。

親心

翌日、お父様は約束通り康行を私の邸に呼んでくれた。私は父が反対している事情をかいつまんで説明しようとしたが、

「その辺の話は聞いている」

と、康行はさえぎった。どうやら昨日私が聞いた話とほぼ同じことを康行にも父は説明したらしい。

「お父様ったら、自分だってそれほどの思いをしてお母様と結ばれたのなら、私達の気持ちも分かってくれていいはずなのに。なんで都に行くなら別れるなんていうのかしら？」

康行に言っても仕方のない事なんだけど、私は愚痴らずにはいられなかった。

「いや、俺は御父上の気持ちが分かるな。お前の父上の後悔は本当に深いものなんだと思う」

「どうして？ お母様は絶対幸せだったと思うけど」

「そうかもしれないが、お前の父上の気持ちとしては満足はいかなかったはずだ。俺も身分のない男だから御父上の立場だったら、きつと同じような気持ちになる。身分のある方々は通う先の親たちに世話してもらうのは当然の権利かもしれないが、俺達の様な男はたとえ半人前に満たなくともせめて自分の身は自分で始末がつくようになってから、自信を持って妻を娶りたいものなんだ。財も身分もなく身体一つで生きている以上、自信が無ければ妻も我が子も守れ

ないから」

「でも、お父様は命懸けでお母様を守ったじゃない。康行だって私を二度も助けてくれたわ」

「そういう守り方だけじゃ納得できないんだよ。男は特に。それは一時の勢いで情熱に突き動かされての事なんだ。俺、お前が俺をかばって太刀の前に躍り出た時、目の前が真っ暗になった。二度とお前をああいう事に巻き込みたくはない。ああいう時は理屈抜きに行動に走ってしまう事が良く分かった。だから普段からお前をもっと守っていたいんだ」

「ずっと見守ってくれていたじゃない」

「それじゃ足りないんだ。お前が笑ってのびのびと暮らせるように出来る男になりたいって願うんだよ。御父上だってそうだったと思う。お母上をもっと、都の噂や人の目、いろんな圧力から守って差し上げたかったんだと思う。お前の祖父殿の影にいるのではなく、堂々とお母上を慈しみたかったんだと思う」

「でも、それならお母様だって守られるだけではお辛かったと思うわ。お父様達と一緒に耐える事が出来て嬉しかったんじゃない？」

足を引つ張るくらいならと川に身を投げられたお母様だもの。黙って守られていたかったはず、ないと思う。

「そうかもしれないな。でも、都の噂は本当に過酷なものだからな」

「それは私も知ってるけど」

しかし康行は首を横に振った。

「いや、本当には分かっていると思う。都には三種類の噂があるんだ」

「三種類？」

「一つは俺達庶民の噂だ。起った出来事を真正面からとらえ、憶測して次々と広まって行く。そこに男なら好き心を大袈裟に広めて面白おかしくする。そうやって仕事の息抜きに使うんだ。お前の噂だって町の男達からは女と夜忍び逢う時の枕詞のように言われているし」

「いやね。男って、どうしてもすぐそつちの話にするのかしら」

「顔も姿も分からない人間を憂さ晴らしに使うんだからそんなもんだ。女だってそうだ。こっちは日々の暮らしの憂さ晴らし。手の届かない世界を羨んで、妬みから勝手なことを言いだすのさ。お前の様に御簾の内にこもっていたら、聞こえないような噂でいっぱいだし」

「聞こえないんならそれでいいわ。聞きたくもないしね」

「だが、そういう噂は高貴な方々の耳に入ると、さらに歪む。それが二つ目だ。今度は単純な羨みなんかじゃない。自己保身がかかっている。妬み方も普通じゃないから歪み方もひどく攻撃的になる。こつという妬みはお前の方が知っているんじゃないか？」

言われると思いだす。桜子さんの妬み、憎しみ、他の女房達の冷たい視線。時にはわが身を滅ぼすほどの憎しみにさえ変わる。

「そして三つめ。さらに高貴な殿上人の方々に広まる噂だ。これは俺達庶民の耳に届く頃にはすべて終わっている事が多いが、コイツは相当タチが悪い。かなり意識的に話をゆがめて、都合のいい一人歩きをする。誰かの都合の良いところだけが伝わり、攻撃される本人にはギリギリまで耳に入らない。それも計画的に流しているから事が大きくなる。現にお前の祖父殿は失脚させられ、帝が帝位を御譲りになるくらいじゃないか。人や、国の運命さえも変えてしまう恐ろしい噂だ」

国の運命までも。恐ろしいことだが確かにそうだ。そして公達と
言うものは時に恐ろしく残酷な事も私は知っている。

「お前の祖父殿はそういう噂の矢面に立って、お前の御父上とお母上を守っていたんだ。しかもお母上はそれまで風にも当てないように育てられていたんだろう？ 現実が見えてきたお辛さは相当だったはず。そんなお母上を守る祖父殿の姿にお母上が苦しんだことも想像できるし、そのことを御父上が後悔なされるのも無理はない。なにしろご自分では何もできなかったのだから。男としてどれほど悔しかった事か」

そう言えば姫様……今のお方様がお小さい時に、ひどい噂やそれを気づかう周りの者たちの接し方にひどくお苦しみになって、ものけにつかれたようになったと聞いたつけ。都の噂の恐ろしさと言
うのは、私が考える以上の物があるみたい。

「おまけにお前は前帝様から狙われた身。いくら今は幽閉状態も当然のお扱いを受けているとはいえ、親心としてはお前を都に行かせたくなくて当然だ。俺達の事を反対しているのは生き方が違う俺達の先々の心配も勿論だろうが、本当はお前が都に戻ることを諦めさせたいんじゃないかな？」

親心。それを言われると私もつらい。お父様がどれほど私を大切に思ってたさっているか聞かされたばかりなのだから。

それなのにお父様は私が都で生きがいを感じていることを知って下さっている。頭ごなしには反対できなくて、なんとか康行とここで平和に暮らせるようにと、わざと私を煽っているんだわ。

「お父様も、お苦しいんだわ……」

「そうだな。どうする？ お前はここで俺と生涯暮らして行きたいか？」

「ずるいわ。私だけに決めさせようなんて。康行はどう思っているのよ？」

すると康行はいつものからかうような笑顔になって、

「どう思っても、お前が大人しく俺の妻だけでなんかいられるもんか。これだけ都の恐ろしさを教えられてもお前は都に戻りたくって仕方がないんだろう？ むしろ都人たちがあつと驚くような演奏をしてやろうと、挑み心が湧き上がっているんじゃないか？」

こっちの考えはお見通しなのね。康行ったら人が悪くなったわ。私のせいかしら？

「言っただろう？ 俺はお前を縛らないって。お前がどんな世界に飛び込もうと、出来るだけの事をしてお前を守ってやるよ。若殿にどんな無理を言ってもお前を見守るし、いつだってお前の帰る場所できてやる。俺達はお前の父上達とは違う。もっとやり方がある

はずだ。たとえ御簾の内と外に分かれていても、俺達は一人じゃない。俺には若殿がいるし、お前にはお方様がついていらっしやるんだ。諦める事なんてないはずだ」

そう私も思っていたけれど。そうするつもりで最初からいるのだけれど。

それでも康行にこう言ってもらえるのは心強かった。そう、私達は一人じゃない。どんなに世界が離れてしまっても、心はずっと繋がっている。これは決して一時の情熱に浮かされているんじゃない。私達には分かっているんだ。

だって康行は、私が忘れてしまっていた幼い日の約束を、叶えてくれたんだもの。

「あきらめないわ。髪が伸びたら私は必ず都に戻る。もちろん康行と別れたりなんかしない。お父様を呼びましょう。話を聞いてもらわなくっちゃ」

私はお父様に髪が伸びたら都に戻ると断言した。もちろん、康行と別れる気もないと。

「それは許さん。どうあっても都に行くと言うなら、康行を花房の近くには近づけさせん」

お父様はガンとして言い張った。しかし康行は、

「そうはいきません。私は御父上にお許しをもらって堂々と花房に

通いたい。ですが、花房から自由を奪い、ここに逃げ込むような真似もしたくは無いです」と言う。

「私の後を継ぐのは、逃げになると言うのか」

「私にとってはそうです。花房は都で自由に自分の力を試すべきだ。花房もそれを望んでいます。それをさせずに御父上の陰に隠れてココソと生きるような真似を、私はしたくありません」

「康行！　なんてこと言うの！」

私は叫んだ。まるでお父様の過去になぞらえて挑発するような言い方だ。

「自分の手の届かぬ御簾の向こうに花房を入れる事が花房の幸せだと言うのなら、何故花房と別れない？　御簾の内に入った花房にお前が何をできると言うのだ」

お父様は挑みかかるように康行に喰ってかかった。当然だ。康行の方がお父様を煽っているんだから。

決意

「私達は御父上達とは違います。私には若殿が、花房にはお方様がついていらつしやる。それもただお守りいただいているんじゃない。私達も若殿方を御信頼申し上げ、命懸けでお守りしたいと願っているのです」

「そのために自分の娘が危険にさらされることを喜ぶ親などいるものか。お前も花房を本当に想うのなら、何故、花房をここに引き留めようとしないのだ」

父は訝しげに、そしてはつきりと不満げにそう聞いた。

「花房はここに閉じこもっても幸せにはなれないからです。都には花房を必要としている人がいる。そして花房はそれに応えることを喜びとしているんです。そのためならどんな非難、中傷にも負けない、挑み心を持っていきます。その素晴らしい心を私は守り続けます。たとえ御簾の内に離れていても花房を守り、いつまでも待ち続ける覚悟があるのです」

「待ち続ける？ 御簾の内にはお前など及びもつかないような、素晴らしい公達がお尋ねになるのだぞ。そういう方なら御簾の内にいる花房を守って下さりやすいはず。お前の周りにも若い娘は大勢いる。本当に待ち続けられると思っているのか？」

「思っています。この心は若さの勢いなどではありません。御父上のような一時の情熱だけではないのです。私達はそれを知っているのです」

その言葉は嬉しい。嬉しいけれど、これは一層お父様への皮肉がこもったいい方になる。

「康行、言い過ぎよ。お父様に謝って」

私は痺れを切らしてそう言ったが、康行は首を横に振った。

「駄目だ。ここできちんと俺は決意を伝えなければいけない。御父上はお前が都に行くことが必要なのを知りながらも、お前を心配のあまり縛ろうとなさっている。だが、俺達は御父上とは違う。俺は直にそばにいる事だけが守るすべではない事を知ったし、お前はどんな事があるうとも負けずに挑み続ける心を持っている。その上で俺達は結ばれたいと思っていることを、分かってもらわなければならないんだ」

康行はいつになく厳しい顔をしていた。私に今まで見せたことのない顔だった。

父は怒りをあらわにした。二人は正面から睨みあっている。

「生意気を言う奴だ。だがよく考えろ。花房を守りたいなら自分の手元に置いておくのが一番いいはずだ。何故都にこだわる？ 無理をしても後で後悔することになるぞ」

でも、康行もひるまない。

「後悔などしません。いや、してもかまいません。私は自分が納得したいのではない。花房を、幸せにしたいだけなのです」

康行がそう言い放つと、お父様は言い返してこなかった。いや、

言つべき言葉を失つたように見える。

「お前がそういう考えなら、もう二度とお前達を会わせる訳にはいかぬ。帰れ！ 二度とここへは来るな！」

やっと口を開いたお父様は、そう怒鳴りつけた。

「今日のところは帰ります。でも、御父上が許して下さいるまで私はここに通つて来ます」

「来ても花房には会わせんぞ」

「それでもです。私は決して諦めません。必ずお許しをもらいます。花房、お前も諦めるな。必ず二人で都に戻るんだ。だからお前は髪を伸ばす事に専念するんだ」

「康行！」

私は康行のところに駆け寄ろうとしたが、父に止められてしまった。両肩をしっかりとつかまれ、身動きが取れない。

「康行、私もあなたを待つわ！ 私を待つと言ってくれたように、私も康行を信じて待つわ。絶対諦めたりなんかしない。二人で都に戻るのよ」

私がそう言うと康行は満足そうに微笑んで、そのまま屋敷を出ていった。

その頃都では、大將が自分が譲り受けた邸に暮らす北の方の顔をうかがっていた。切りだしにくい話があったからである。

「どうなさったのですか？ 今日には落ち着きがありませんこと」

北の方はふんわりとした、可愛らしい笑顔で聞いた。

「あ……いや。実はあなたにお話があるのです」

大將は意を決して話し始めた。

「今日、父上のところに寄って来たのですが、その時堀河殿の話が出まして」

「堀河殿？ あの、行列襲撃騒動の時に主上が手配下さった役人たちを取りまとめておいでだった方ですね？」

「ええ、そうです。その功績に報いるのに出世の他に何か願いは無いかと主上がお尋ねになったのですが、堀河殿は姫君に婿を迎えたいとおっしゃったのです」

「堀河殿の姫君は去年の冬、婿君を突然の病で亡くされたのではありませんか？」

「そうです。大変お気の毒なことです。でも、その姫はまだお若くていらっしやるので、堀河殿は姫の行く末を心配していらっしやるように」

「たしか殿とそれほどお歳が変わらなかつた筈ですわね？」

「二十一だそうですね。そこで父上から話があったのは……つまり」

「つまり、その方を妻にお迎えになると言う事ですね」

北の方の方から、先に本題を告げられてしまう。

「いえ、しかし位はあなたの方が上ですし、お立場もあなたの方がしっかりしていらっしゃる。何よりあなたは私の北の方なのですし」

大將はしどろもどろになっていい訳をする。実際、こういう結婚は自分の意志ではどうする事も出来ないのだ。今回は帝からの御褒美の意味が強いし、それを断ったりすれば父の面目が立たない。それは北の方も分かっているはずだが、まだ子供の様に可憐な妻が悲しげな表情を見せるかと思うと、さすがに大將も平気な顔ではいられない。

「あちらの姫はまだ、婿君を亡くされて半年。寂しく、心細くお暮しになっているのでしょうかね」

北の方は扇を広げて顔を隠しながら、それでも声に悲しさをにじませながら言う。

「そうですね。ですから私もお気の毒な方をお慰めする気持ちで通おうと思つのですよ。私もあまり情け知らずな真似は出来ませんからね」

「……まだ、お辛い中での御結婚でしょうから、殿もお気づかいをなさってくださいね」

幼さが抜けない十五の姫が、ここまで言うのは痛々しい物がある。

さすがに表情までは抑えがたいのだろう。その扇はしっかりと開かれたまま、姫の顔を覆っている。

居心地の悪さに大将はそそくさと邸を出ていった。

「大将様もお逃げになるようにお出かけにならなくてもいいでしょうに」

大将を見送るとさっそくやすらぎが北の方に声をかけた。こっちははつきりとした不満顔を隠しもせずに文句を言う。

「そんなおつもりではないのでしょうか。お話があったからには姫君に会いに行かなければならないのですから。大丈夫ですよ。殿は本当にお方様を大切に想っておいでなのですから。こういう時こそ、正妻としてしっかりとさいます」

やすらぎの母でもある北の方の乳母はやすらぎを視線で制し、北の方に言い聞かせる。こういう時に女房が動揺してはいけない。お付きの女房が主人の代弁者となつてはいけないのだ。

それを思い出してやすらぎも慌てて表情を取り繕った。

「琴でもお弾きいたしましょうか？」

やすらぎがそう聞くと北の方は黙ってうなずかれた。やすらぎの弾く明るい曲の琴の音が室内に響いて行く。弾き終わると、

「花房も里で琴を弾いているかしら？」

と、お聞きになった。

「きつと弾いていますわ。一日たりとも弾かずにはいられない人ですから」

やすらぎも懐かしそつに答えると、

「そつね。きつと弾いているわ。私も花房を見送った時には決意を固めたの。花房がいなくてもこの邸の女主としてしつかりして行くうって。花房の強さに負けないようにしないと」

「そうですね、お方様。大将様も頼もしくお思いになられると思いますわ」

やすらぎも励ますように明るくいった。

堀河の姫

大将は困り果てていた。

今までは中くらいの身分の気楽な相手と、心のどこかで堀河の姫を軽んじているところがあった。

ところが、会ってみるとこの姫、なかなか一筋縄ではいかなそうだと分かったのだ。

いや、自分も確かに悪かった。どこか姫を見下して、最初の挨拶だと言うのに強引に御簾の中に入ろうとしたのだ。

邸に行くとは堀河殿は頭をこすらんばかりの恐縮ぶりです、これ以上ない歓迎を受けた。

それはそうだ。自分は主上に直接仕える近衛の大将。堀河殿はこのたびの働きで目をかけていただいたばかりの、これから出世の糸口をつかもうと言う身。身分も立場もまるで違うのだ。

そんな堀河殿の姫の婿になり、その縁でこれから堀河殿を引き立ててやるうと言うのだから、堀河殿が恐縮するのも当然だろう。

そんな歓迎の後で気分も良くなり、多少の酒も入ったところで姫への御挨拶。少しばかりの好き心が自分を大胆にしたらしい。

しかも、姫の側でも女房の口を介したりせず、直接姫から御挨拶の御言葉があった。

夫を亡くして傷心の妻と思っていたが、結構砕けたところもあるのかもしれない。姿をちょっと垣間見てみるのも面白いんじゃないだろうか？

元の人妻と言つのも男心を刺激した。どれどれとばかりに御簾の中に半身を入れて見る。すると姫は、

「いきなり御簾を掻きあげられるとは、高貴なお立場の公達とも思えぬ御振舞いをなさるのですね」

と、几帳越しに凜とした声をあげられた。

「それはあなたのお声がとても美しいからですよ。私たちは夫婦となる身。あなたも元は人の妻だった方だ。何も分からぬ訳ではあるまい。少しばかりその御姿を垣間見たいと思つても、男心としては仕方のない事でしょう？」

「男心とはそんなにはしたないものなのですね。でも、確かに私たちは夫婦となる身。……それではどういたしましょう」

そう言うが早いか、なんと姫は目の前の几帳をわきに押しやり、顔こそは扇で隠しているものの、その姿をさらけ出したのだ。

仕える女房でさえ、相応に会話をするときには身をかがめ、なるべく姿を隠そうとする。それなのに自ら几帳を押しのけるとは、この姫、普通の姫ではなさそうだ。

まるで花房だな。嫌でもそう思わずにはいらなかった。

そのうえ姫はこう言ったのである。

「女人の私が姿を見せたのです。客とは言えあなたは男君でございます。私の姿を見たいとおっしゃる以上、私もあなたの取り繕わぬ御姿を拝見したいわ。どうぞ、その頭の烏帽子をおとり下さいませ」

「烏帽子を？ 今、ここですか？」

これにはさらに仰天した。女の顔が裸と同じなように、男の烏帽子を外す事は、位の高い者ほどみっともなく恥ずかしいこと。ここには姫付きの女房達が自分を見ている。まだ夫婦でもないのにここで烏帽子を外せと女人の方から言ってくるとは思ってもよらなかった。

「今、ここです。そうすれば私もこの扇を閉じましょう。あなたと私では身分と立場には大きな差がありますが、ただの女人と男君としてはさしたる違いはありません。父の元はともかく、ここではあなたも私と同じただ人になって頂きます。その上で契り合おうと言っているのです」

いやはや。

ここまであけすけに物を言われるとは思わなかった。完全に姫に呑まれたまま烏帽子を外す。

女房達が遠慮から席を下がるうとするが、

「皆、ここにいなさい。私たちは挨拶をしているのですから」

と、姫が留めさせる。そして扇を閉じてその顔を見せた。

これが、生き生きとした美人だった。ただ美しいだけではない、

目の中に意思の強さをにじませた美しさだった。はつきり言って自分好みだ。

堀河殿のお立場がもう少し上であつたら、きっと評判になつたに違いない。

「どうなさいました？ 私に御挨拶の言葉があるのではありませんか？」

姫にそんな事を言われたと言うのに、この大納言の長男で主上の憶えも目出たい、歌に秀でた貴公子とうたわれた自分が歌はおるか、挨拶の言葉さえもどこかに飛んで行ってしまい、言葉を詰まらせているのである。

「……私は、この邸に通うのが楽しみになりそうです」

ようやく出て来たのがこの言葉だった。

「ありがとうございます。あなたは裏表のない素直なお方のようです。私も楽しみになりましたわ。これからよろしく願います」

「はあ……」

こうして私は上の空で堀河殿の邸を後にしたのだ。

私は完全に堀河の姫に主導権を握られてしまった。

それなのに少しも悔しいとも、情けないとも思わないのはどうしたことだろうか？

それどころかあの姫を自分の妻に出来ると思つと、胸が躍るような心地がする。

北の方には愛おしい、大切にお守りしたいという気持ち強いが、堀河の姫には心弾むような充実感を憶えるのだ。

自分にとって北の方はかけがえない大切な妻だ。その気持ちに変わりはない。だが、それとは別に抑えようのない心が堀河の姫に湧きでて来る。

北の方を軽んじていけない。そこは胆に銘じなくては。

そう思いながらも何かと心が堀河へと行ってしまう事に、大将は戸惑うばかりだった。

困っていたのは大将だけではない。忠長も困っていた。

久しぶりに宿下がりをしたやすらぎの機嫌が良くない。その母親も同様だ。

「最近は大将様は上の空になつてばかりいらつしやるのね」

「お疲れでいらつしやるんだよ。近衛の大将と言うのは帝をお守りするため御所の警備のすべてを取り計らわなくてはならないお役目。最近はいかがわしい物乞いなどが御所の中にまで入り込もうとするから、大変なんだ」

「堀河の姫君つて、どういう御方なの？」

やすらぎは遠慮なくはつきりと聞いてきた。そこを聞かれても困るんだが。

「堀河殿は姫の前の夫のおかげで、ただの蔵人（御所の役人や女房への連絡係）からやつと蔵人頭になったところだった。御結婚で姫が出世したとしてもそんなに急に地位が上がることは無いさ。お方様の方がずっと立場は上でいらっしやる」

「そういう事を聞いているんじゃないの。どのようなお人柄だったこと」

それが分からない程鈍くは無い。だが……

「俺みたいなただの従者が御結婚前の姫にお会い出来るもんか。人柄なんか分からないよ」

本当は若殿から「几帳を押しのけ、顔を見せた」とんでもない姫だと聞かされてはいたのだが、乳兄弟で従者の自分が主人の妻となる方の悪口を言うわけにはいかない。

だが、そういう姫だからこそ、若殿が姫におおいに惹かれていることは自分にも手に取るように分かった。普通の奥ゆかしい姫や、要領のいい女房など若殿は飽きるほどお相手になさっているから、そうではない方のほうがずっとお好みに合っているのだろう。

主人の好みに合っていて、妻になる方も幸せになれる御縁組。従者としては喜んで差し上げるのが筋なのだが、やすらぎは北の方の乳兄弟の女房。さらに母上は乳母でいらっしやる。

はつきり言って余計なことは口にできない。ここでは板挟みになっ
てしまうのだ。

「そう。あの大将様がお方様を軽んじられる事なんてないとは思
けど……」

やすらぎは何かしっくりいかないような表情だ。

「そうだよ。若殿はそんな方じゃ無い。お前こそ身近でお世話をし
ているんだから、若殿の事も分かってきただろう？ お心に優しい
ところがありなんだ。北の方だって大切にされているじゃないか」
「そうだと、いいんだけど……」

せつかくの夫婦水入らずだと言うのに、若殿のおかげで気まずい
思いをさせられる。

忠長は心の中で嘆くしかなかった。

許し

父から康行と引き裂かれてひと月。私は毎日のように琴を弾いていた。

あれから康行は約束通り、毎日邸を訪ねてきた。気持ちの沈みそうなうつつとうしい雨の日が続いてはいるが、どんなに激しく雨がたたきつけようとも、邸の庭先より奥に入る事が出来なくても、康行は一日も欠かすことなく通い続けていた。

そして私は康行の声が聞こえると、琴を奏ではじめる。

でも、私が奏でる琴は生みのお母様がお父様に奏でた琴とは違うものだった。

きっとお母様が奏でたのは、お父様への感謝の気持ちと、お父様を想う一途な心だったんだと思う。

でも、今私が奏でているのは康行への想いだけじゃない。もちろんそれも込められてはいるんだけど、私はもつと伝えたい事があった。

私も康行の心を伝えるわ。必ずお父様の心を解いてみせる。

私達のはのぼせて自分たちの我を通したくているんじゃない。私は都の人々に伝えたい思いがある。都にはお方様のようにそれを求めて下さる人がいる。康行にだって私と同じくらい守りたい人がいる。その方々のために私達は闘う覚悟がある。決して誰も苦しめたりしないし、私も康行も苦しんだりはしない。

私が苦しめば康行も苦しむ。康行が人を斬って苦しんだ時私も苦しんだように。だから苦しむようなことはしない。私達は幸せになるために、お方様や殿をお幸せにするために、都に戻るんだ。

お父様は私達にはそれが必要だと言う事が分かっていながら、反対をしている。それはお父様の親心で理屈で割り切ったりは出来ないもの。それほど心配して下さっている。

だけど、分かって頂かなければならない。私はもう、お父様の傍から離れる時が来ていることを。

私達はお父様達のように、運命に流されて生きるんじゃない。それでもお父様達は出来るだけの事をして幸せだったと思うけど、私達は違う。

そんな、お父様への思いも込めて、私は一日に何度も何度も琴を奏で続ける。

そして髪が早く伸びるように、髪の手入れにも専念した。髪に良いとされる食べ物を、毎日残さずたいらげた。

海で取れた物が良いと言うけれど、日持ちのしない今、なかなか取り寄せるのも難しかったが、茹でた貝や、海藻などに貴重な氷を詰めさせて、出来るだけ早く運ばせては懸命に食べた。

頭を冷やし、髪を長くしてくれると言う米のとき汁を（当時はそう信じられていた）康行からもらった櫛に浸し、何度も丁寧に櫛と

いっていく。

一日も早く髪が伸びますように。私達の想いがお父様に伝わりますように。

そう願いながらせつせと櫛けずり続けていた。

だけど長雨の季節が終わり、夏の日差しが照りつける頃になると私は痺れを切らしてきた。もう、随分長く康行の姿を見ていない。

実は何度か邸を抜け出す機会はうかがっていた。髪が伸びるまで信じて待つとは言ったものの、全く話もできなくなるとやっぱり不安もついて回った。

でも、ここは田舎の邸。父は物持ちだが家族が共に暮らす事を望んで、部屋こそは分けているものの、私は父と同じ屋根の下で暮らさなければならぬ。以前はそれが嬉しかったのだが、事がこうなってしまうと抜け出すには厄介だ。気配がすぐ、誰かに気取られてしまうから。

庭には出られても、門前には使用人がいる。裏口だって見張られているし、父に固く言われているのは分かっていた。ここは父の邸なのだから父の言う事は絶対だ。

ある日私は邸の松の木に目がいった。子供の頃は良くあの木に登って、お義母様にしかられたっけ。松も立派に育って邸の塀の向こうまで枝を伸ばしてしまったのね。

ふと、思いついた。あの木を登って邸の外に出られないかしら？

登り方は身体がすっかり覚えてしまっている。あの枝をつかんで、あのあたりに足を引っ掛けて……。子供の頃の記憶が鮮明に蘇る。

田舎での暮らしなので都にいる時ほど取り繕うような装いはしていない。しかも今は暑い時期なので軽く、薄い物を身につけている。今までよりはずっと動きやすい格好だ。

着物の裾を紐でからげて見る。結構動きやすそう。一番重くて動きの邪魔になる髪も、皮肉なことに今は短い。何とかなりそう。

康行が今日も邸の門で父に会いたいと言っている。邸中の注目が門の方を集っている。登るなら今の内だろう。

私は思い切って松の木の枝に手をかけ、登り始めた。やはり身体はよく分かっていた。子供のころと変わらず、するすると上へ上へと登って行く。

塀の向こうへと伸びる枝に手をかけた時、康行が私の姿に気がついた。慌てて枝の下へと駆けつける。

「なんて事をしているんだ！ お前は！」

康行が大声を出したので、皆も私に気づいてしまった。

「大きな声出すからみんな気がついたじゃない。大丈夫よ。この木には子供の頃良く登っていたから登り方のコツを知っているの」

「そういう問題じゃない！ お前、子供の頃と身体の大きさが違うんだぞ！」

「へ？」

そんな事を言っている内に枝がみしみしと音を立て、ついにはボキリと折れてしまった。私は前かがみに落ちて行ってしまおう。

康行は私の真下へ来て見事に私を受け止め……ると言うよりは、私の下敷きになってしまった。

「康行、康行、大丈夫？」

私は急いで飛び退くと康行に怪我が無いか確かめた。

「大丈夫だが、本当にとんでもないなお前は。目が離せない」

康行はいつものあきれ顔で私を見ていた。うん、この表情が康行らしいわ。

「まったくだ。私も育て方に自信が無くなった。甘やかしすぎにも程があつたのかもしれない」

気がつくとも父が私達を見下ろしていた。

「お父様、これは私が勝手にした事なの。康行は関係ないわ」

私は慌てて父に言った。だが父は、

「そんなことは分かっている。このような娘を田舎に大人しく閉じ込めておけるわけがない。私が育て方を間違ったのだ。これでは御簾の内の方々でも目の行き届きようがないであろう。康行に見張らせるしかないではないか」

と、ため息交じりに言った。

「お父様？」

「会つても良いと言っているのだ。康行もこんな娘でよいのなら、しっかりと見張り続けてくれ。でなければこちらの寿命が縮んでしまいそうだ」

「御父上……ありがとうございます」

康行がひざまずき、深々と頭を下げた。

「花房、何をぼやぼやしている。康行を邸に入れて、打ったところが無いか見てやれ。お前が原因なのだからな」

お父様が、ようやく許してくれた。私達の事を分かってくれたんだわ。

「さすがは馬飼ひ。このようなじやじや馬を良く手なづけたものだ」

父はそういいながら笑ったが、私達に向けた背中が、少しだけ寂しそうにも見えた。

返し歌（前書き）

作中の和歌は私（作者）のオリジナルです。王朝和歌として正しいかどうかも分かりませんが、話の流れに合わせて作っています。間違いやおかしな部分があれば、お詫びするとともに御指摘を頂けたら大変助かります。短歌を作ったりする趣味は、残念ながら無いもので。

返し歌

大将は堀河の姫との痛烈な対面の後、少し遅れて歌を贈った。

歌詠みとして名の知れた自分が、歌も残さずに堀河邸を後にしたのはかなり癪の種だ。だが、すぐに追いかけるように歌を贈るのもかえってみつともない。ちょうど七夕の頃なのでそれにあわせて情緒豊かな歌を贈ろうかとも思ったのだが、正妻を邸に置く自分が、身分が下の女人に年に一度の逢瀬の伝説を伝える七夕の歌を贈るのは皮肉になってしまふ事に気がついた。

結局七夕もすぎて、結婚間近になってからようやく歌を贈る事が出来た。

あのような大胆な態度をとった姫である。果してどんな返事が来るのか。いや、そもそもまともに返事が来るのかどうかも分からなかった。

いくら姫の身分が高くないと言っても最低限の教養は修められていることは間違いない。あのはきはきとした物言い、強いほどの矜持。こういったものはある程度の自信が無ければ表れるものではないだろう。

それだけに身分の高い自分に下手に自信を傷つけられることを恐れて、ロクな返事もこないかもしれない。来ても、通り一遍のありがちな言葉程度の物かもしれない。

それに女人の教養は官職に関わる男の教養とは違い、男女の情や友情と言った交友を深めるためにある。ただ、知識があればよいと

いうものではない。持っている知識を上手く活かした感性や社交性が問われるのだ。それには位の高い貴人との交流に慣れがあった方がやはり有利。姫の父の身分ではそこは難しい物があるだろう。

そう言った事からあの姫が、自らを守るためにまともな返事をよこさない可能性は大いにあると思っていた。だから届いた返事が簡素に折りたたまれた短いすような紙であった事にも、大將は別段気に留めなかった。

文に書かれているのはきつと、よくある挨拶の言葉だろうと思っただのだ。

だが開いてみると、中には歌が書かれていた。大將が贈った歌への返歌だ。読んで大將はまたもや驚かされた。

大將が姫に贈った歌はこうだった。

「月見れば 今宵堀河 涙河 短夜君に 心 つくせり（すり減る）」

それに対する姫の返事の歌は

「ほりかわは ふかきかわゆえ みじかよの つきかげ（月明かり）あれど わがみなかる（流れる）」

と、あった。

大將は「今夜月を眺めているとあなたを恋しく想うあまり堀河を私の流す涙の河に変え、夏の短い夜の間でも心をすり減らしてしま

います」

と、情熱的な意味の歌を贈った。

涙河と言つのはもともとは漢詩の中の言葉で貴族の男にとって欠かせない教養なのだ、その意味を本歌取り（有名な和歌に洒落たアレンジを効かせる手法）するように使うのが流行になりつつあった。公達には意味がすぐに分かるし、女人でもその情緒は伝わりそうな言葉だろう。せつかくなのでそれを姫の住む堀河になぞらえたのだ。

その返事に姫は

「私（堀河）のほろが深く想っているので、涙河を夏の月明かりが照らそうとも溺れてしまふ事でしょう」

と、さらに情熱的に返して来たのだ。

しかもこの返歌は堀河が姫の事を表していることは勿論、涙河の意味も理解していなければ詠めない。涙河はただ、顔に残る涙の跡を川に例えているのではない。あまりにも流し過ぎて本物の川のようになってしまうほどの意味で使われる。姫はそれが分かっているのだ。

「河」と言う言葉にかけた遊び心と、大将の漢詩を使った流行に見事に応じている。しかも大将が眺める月の明かりが照らそうとも、流した涙で自分の身体が流されてしまふと言つ。「堀河」「涙河」「短夜」「月」大将の歌をここまで踏まえながらも男の涙でその身が流されるとは艶っぽい。しかも「流るる」は「泣るる」とも読める。大人の風情のある歌だ。

それでいてこの歌には自尊心も見え隠れする。大将は心がすり減るが、姫は思いの深さに溺れてしまつて言っている。つまり、大将の想いはまだそれほど深くないだろうと、軽く皮肉って見せているのだ。

これは姫を甘く見るな。人妻だったからと言って軽んじるような態度は許さないと言っている。歌を贈るのが遅れた事への抗議かもしれない。

熱く艶やかな表現の中に、不快感を感じさせない程度のピリツとした皮肉を効かせる。

何と言う機転。何と言う頭の良さ。大将は舌を巻いた。

奥ゆかしくないと行ってしまえばそれまでだが、歌詠みの大将にとってこれは大変魅力的な資質だった。この姫とはこれからこんなやり取りをかわす事が出来るのだ。これほどのやり取りが出来る女人が、この都に何人いると言うのだろうか？ その一人を自分は妻に持つことが出来るのだ。

大将はすっかり有頂天になってしまった。

堀河の姫に魅了されてしまった大将は、北の方のいる自分の邸には何とも居づらい。何でも無い顔をしているつもりが、いつもの情人相手の恋ならそうすることはたやすいのに、今度はどうしても心が堀河の姫を想ってしまい、北の方の目を見る事も出来なくなってしまう。

訝しげな北の方の様子に耐えかねて、御所での宿直を増やしたり、友人の家の宴に行ったり、大納言家に顔を出しに行ったりして過ごすようになる。

そしてようやく待ちに待った、堀河の姫との初夜がやってきた。大将は夢心地だ。

寢所に入り、御簾と几帳の影に入って二人きりになると、姫はこの方らしく身仕舞いを正し、きちんと頭を下げ待っていた。

「素晴らしい返歌を頂いて、ずっとこの日を心待ちにしております。あなたの様な頭の良い方を妻に持てて、私は大変に光栄です」

大将は夢うつつな気持ちでそう言った。本当に得難い人を手に入れた気分だった。

「それほどの事ではありません。あの歌はたまたま思いついただけですから」

「その、機知が素晴らしいのです。あなたも私と同じように歌の素晴らしさを分かりあう事が出来る。しかもあなたは御美しい。正直、前の夫が羨ましい。このような方を独り占めになさっていたなんて」

だが、この日の姫は様子が違った。うつむきがちで顔色も良くな、言葉少なで黙りがちだった。

「いかがされましたか？ お具合が悪いのでしょうか？ 薬湯でも持って来させましょうか？」

「いえ、何でもありません」

「」遠慮はいらないのです。私の身に寄りかかって……」

そう言いながら姫の身を抱き締めようとした時、姫が身を固くして、嗚咽をこらえている事に気がついた。大将は思わず身を離してしまふ。

「私を、恐れておいでなのですか」

大将は啞然としながら聞いた。

「……いけませんか？ 私はこれまで前の夫以外の方とまともにお話もした事がありませんでした。夫はとても優しくしてくれましたし、私を大切に守り続けてくれました。元が人の妻だったとはいえ、男の方を受け入れるのに恐れを抱く事は子供じみていると思われまですか？」

「いえ、私はてつきり、あなたは私を受け入れるつもりでいて下さっていると思つて」

「勿論そのつもりです。私はあなたをお慕いしたい。ですから失礼な態度を取り続けていた事もお詫びいたします。少しでもあなたの心に近付いて、あなたをお慕いできるようにになりたいと思つたのです」

慕えるようになりたい。裏を返せば姫はまだ前の婿君に未練が残つておいでなのだ。まだ私の事を慕ってくれてはいないのだ。大将は愕然としてしまった。

「……今宵はこのままお休みになつた方がよろしいですね。私は少

し離れたところで休みましょう。どうぞ、几帳を立ててお休み下さい」

そう言つて大将は立ち上がろうとした。どうしたら良いのか分からなかつたのが本音だつた。

だがそれを姫が留めた。大将の手を取つてその場に座らせる。

「そのような訳には参りません。私達は夫婦にならなくてはならないのです。お父様も、この邸の者達も困りますし、大納言様も困りになるでしょう。帝の御好意にそむくことにもなります。大将様も北の方様にも御迷惑をおかけすることになるでしょう。夫を亡くして傷ついたのは私だけではありません。私はこれ以上誰も不幸にほしたくないのです」

「あなたは、そのようなお気持で私と契られるつもりだつたのですか？」

「いいえ、違います。私はただ、素直でのびやかなお心を持った、あなたをお慕いしたいだけなのです。私達は夫婦にならなければならぬのです」

姫の必死の表情に大将は自分を恥じた。元の人妻と侮り、身分の低さを心のどこかで軽んじていた。意外な才能を知ると得難い物を手に入れた様な得意な気にもなつていた。

この方は元の人妻などではない。傷ついたお心のまま私の妻になるうとしている方だ。これ以上傷つけてはならない方だ。

「無理に、お心まで開こうとなさらずに、いいですよ」

そう言いながら、大將は姫を抱きしめた。

松の葉

堀河の姫は大将を受け入れた。心以外は。

三日夜も無事に済ませ、これで姫は正式に妻となってくれた。

だが、その姫の心が固く閉ざされている事は明らかだった。決して冷たい態度を取られた訳でも、辛い言葉を言われた訳でもない。それどころか大将の顔を潰す事のないように、女房達の前では明るく、朗らかにさえ笑って見せていた。

才あふれ、心優しい姫君。だが、その一番美しい心を私に開く事は無い。

どうすれば私に心を開いてもらえるのだろうか？ どうすれば前の夫を超える事が出来るのだろうか？ 大将は一層堀河の姫にのめり込んでしまった。

それまでは時折には帰っていた自分の邸に寄りつく事さえなくなってきた。従者の忠長が何を言ってもまったく耳に入らない。周りが皆心配してもどうする事も出来なかった。

姫の方でも「私も、北の方様も困りますから」と言って来るが、姫にそう言われると大将は余計に切なさが増すようで、姫への情が強くなってしまふ。

姫方では大将を拒むようなことはできないし、たとえ理由をつけて拒んだとしても、今の大将では気持ちを抑える事が出来るようには思えなかった。

そんな日々の中、北の方は暗い気持ちを紛らわせようとしてもするかのように、毎日を琴や、物語や、巻物の絵や、暮、すごろく、言葉遊びを女房達と繰り広げ、華やかに、賑々しく過ごしておられた。

絵巻物や物語は広く東西から集められ、女房達と感想を述べ合ったり、批評したり解釈を加えたりして活発にやり取りされながらお楽しみになった。そんな中即興で物語が語られたり、歌が出来たり、それに合わせた曲が奏でられたりする。新しい趣向が日々試みられ、後宮の流行にも劣らぬほどの文化の花が咲出した。

「こんなに楽しい遊び事をたくさん御用意しているのに、殿は御損ね」

北の方はそんなことをおっしゃって、ほほ笑んでいらっしやうた。

女主がこのように明るく御振舞いなのである、やすらぎ達が沈んだ顔などする訳にはいかない。邸の中はいつも以上に華やぎあふれ、都人の評判になるほどだった。

だが、そんなある日。北の方はいつものように琴を弾いていた。が、ちよつとした指先の引つ掛かりで演奏が途絶えた。北の方は続きを奏でようとしたのだが……。

指が思うように動かなくなった。指先が震え、嗚咽を漏らすと熱い涙が突然琴の上に落ちていった。

皆、突然の事に声をかける事も出来ない。北の方はしばらく静かにお涙を流されていた。

「お方様……」

ようやく乳母が声をかけると、

「大事な花房の琴を汚してしまうわ。誰か他の方が弾いてちょうだい。なるべく明るい曲がいいわ」

そう言われて近くの女房が琴を奏でる。乳母は北の方にお声をかけた。

「お方様。難しくお考えにならないで、殿にお文でもお書きになったらいかがでしょう？」

「……今の殿では、お読みになって頂けないわ。きっと」

北の方は悲しげにほほ笑まれる。

「でしたら、御歌を差し上げてはいかがでしょう？ やはりお心をお伝えする事は大切だと思います」

やすらぎもそう言ったのだが、

「今の殿にはどんな御歌も心に響かないわ。私も悪いの。もっと早くに殿と良くお話をしておけばよかった」

そう言って小さくため息を突かれる。

「花房なら、私の心を琴の音で、殿に伝えてくれたかしら……？」

北の方は目をぼんやりとさせながらおっしやった。

ああ、本当に、こんな時こそ花房が必要なのに。お方様の傍に、いてほしかったのに。

やすらぎは心からそう思ってしまう。

やすらぎは宿下がりの夜に忠長に喰ってかかった。

「本当に、殿はどうしてしまったと言うの？ ほとんど邸に帰らなくなつて、たまさかお帰りになつてもお方様の顔すら見ようとなさらないじゃないの。都人も噂を始めているわ。近衛の大將様はうつけたように堀河の姫の邸に通っているって」

「分かつてるよ。俺たちだつて困っているんだ。このままじゃ絶対に若殿には良くない。堀河の姫だつて、身もわきまえず若殿を捕まえて離さずにいるはしたない女人だなんて噂されて、若殿は一層ムキになっているし。元はと言えば若殿のせいなのに全然聞く耳を持つてくれないんだ。こんなことは今まで無かつたのに。とうとう帝までご心配なさっているらしい」

「まあ、帝まで」

「このままじゃ誰も幸せになれない。良かれとしたご結婚でみんなが困つたことになるなんて帝もお顔が立たないじゃないか。でも、どうしたら若殿ののぼせた頭を覚まさせる事が出来るのか、皆目見当がつかないんだ」

「忠長でさえ、そうなの？ 乳兄弟のあなたぐらいしか今の殿に耳

を傾けさせることはできないと思うのに」

やすらぎも困り顔だ。

「じゃなきゃ、北の方様にお諫めしてもらっしかない。大納言様に言っていただけでもこういう事は親が口を出すほど上手くいかなくなる。なのにそのお方様を若殿は避けていらっしやる。なんとかお方様のお心を若殿に伝える方法は無いものだろうか？」

「分かったわ。それなら無理にでも私、お方様にお文でも御歌でも書いていただくわ。忠長もなんとかしてそれを殿にお見せしてちょうだい。それしか方法が無いんだから」

「分かった。やってみる。お文をいただいたら俺に渡してくれ。どうにかして若殿に読んでもらうから」

自信は無いがこのまま手をこまねいていても仕方がない。二人は出来るだけの事をする事にした。

ある日、忠長は大将に中納言家への使いを頼まれた。公務上のことらしいのだが、大将は中納言家に顔を出しにくいらしく、文をしたためると忠長に中納言様に届けるように行った。

忠長としては中納言様に直接お諫めしてもらえる機会だと思っていたのだが、若殿はどうあっても自分で中納言家に出向くつもりはないらしい。おそらく自分も中納言様に八つ当たりされるのだろうが、これも従者の役目。仕方なく中納言家に出向いて行く。

うだるような暑さの中重い足取りで行ってみるとご機嫌の悪い中

納言様から散々小言と嫌みを言われ、うんざりしながらうつむき加減で帰ろうとする。

その時足元に落ちている松の葉が目にとまった。忠長の記憶が、早春の日に戻って行く。

あれは北の方様へ、ご結婚前の初めての挨拶に出向いた時の事だった。寝所に向かう渡殿を歩いていると、足元に松の葉が散っていた。近くの松から落ちた物らしい。

忠長が何気なく払い落そうとすると、

「その松の葉を、ひとつ拾ってくれ」と若殿に言われた。

「どうなさるのです?」

「いや、何故かとおきたくなつた。この松の葉はおそらくこれから訪ねる姫が私を想って下さるから、葉もここで待っていてくれたのだらう。聞けば愛らしい、優しい姫だと言つではないか。きっとこれは姫のお心に違いない」

そう言つて大切そうにその葉を懐におしまいになつたのだ。

そう、あの日は自分も初めてやすらぎの声を聞いた日だった。

(春とは言え、いまだ梅も咲き初めぬような冷やかな夜に、わざわざ足をお運びくださり、ありがとうございます……)

あの日はまだまだ寒い、正月明けの頃だった。誰もが一日も早い初花を待ち望んでいる時だった。その中で聞いたやすらぎの可愛ら

しい声。自分には忘れられない思い出だ。

もしかしたら、若殿もあの日のことは覚えておいでなんじゃないだろうか？

忠長はやすらぎの元に飛んでいった。

「やすらぎ！ お方様をお願いする文、中納言家に初めて若殿がご挨拶に行った時の事を書いてもらってください」

「初めての御挨拶？」

「いい考えが浮かんだんだ。ひょっとしたら若殿も思い出してくれるかもしれない」

男心

しばらくしてやすらぎはようやく北の方様のお文をいただいたいき
た。気の向かないお方様から半ば強引に書いていただいたのだと言
う。

「ほんの一言しか書かれていないけれど、これ以上はとてもお書き
に出来ないそうなの。無理に書いていただいたんだから仕方ないけ
ど」

「あの夜のことなら何でもいいのさ。若殿に思い出していただけ
ばいいんだ。若殿はお方様の事をとてもお若い可愛い方だと聞
いていた。そんなにお若い姫にお会いになったことがなかったから
本当にあの日を楽しみにしておられた。あの日の事は若殿にとつて
もいい思い出になっているはずなんだ。心弾みをお持ちになってお
られたのを俺もおそばで見っていたんだから」

「その時の気持ちを思い出していただこうって事なのね？」

「そうさ。若殿だってお方様が御嫌になった訳じゃない。決して御
愛情が冷めたとか、ご不満があつたりする訳じゃないんだ。ただ、
お好みに合つた訳ありの美女を手に入れられて、その方の気を引い
てみたくて仕方が無くなっているんだ。御本人は本気の恋のおつも
りだろうけど、慈しまれるお気持ちはどこまでお持ちなのか俺には
あやしく見える。どっちかって言えば振り回される楽しさに酔って
しまわれているようにも見えるんだ。だから堀河の姫も本当には若
殿にお心を開けない。このままではあのお二人は御不幸な事になっ
てしまうだろう。御夫婦としてはまだまだこれからなんだから、若
殿の熱に流されていてはいけないんだ」

「いやに若殿のお気持ちが分かるのね？ 乳兄弟にしても」

「乳兄弟だからじゃないさ。男心はそういうものだよ。愛情とは別に魅力のある者には惹かれてしまう。どちらが深い、浅いということではなくて、どちらにも同じように想いを寄せるんだ。ただ、その時により強く惹かれた方にのぼせがちにもなってしまうんだ」

「忠長も他の方に惹かれるの？」

やすらぎはおもしろくなさそうに聞く。

「惹かれないとは言わない。だが、慈しむ心は別だ。そういう心はすぐに湧いて出るもんじゃない。お互いのいい所、そうでないところが分かって来て、いい所は愛おしく、そうでないところは自分が助けてやりたいと思う事でだんだん生まれ出て来るものなんだ」

「忠長に都合のいいようにも聞こえるけど」

「だから男心なんだって。どんな高貴な方だって男心は一緒だよ。若殿は人気があるから惹かれた方に慕われることに慣れてしまっている。相手が慕ってくれる心に甘える事が出来るから恋にも練れていると思ひ込まれている。でも、今度はすぐに慕ってもらえなかったから戸惑う御心が本気の恋だと思わせてしまった」

「だから堀河の姫様にのぼせてしまわれたのね」

「だけどお互いの事なんてまだ何にも分かっていないし、その間のお方様のお苦しみさえも見えなくなってしまうれているんだ」

やすらぎもここまで聞いてみると忠長を攻める気持ちは無くなっている。

「男心って、我がままなものなのねえ」

やすらぎはあきれた声を出した。

「そうだな。だが若殿は本当はお心の優しい方だ。冷静になられれば堀河の姫のお心が和らぐのを待つこともできる。思いやりのある態度もとられるようになるだろう。それにあれほど大切になさっていた北の方様のお苦しみを知れば、御自分がどれほどお方様を慈しまれているかにも気が付かれるはずだ。我がままなのは男心であって、若殿御自身ではないんだから」

「何だか、自分もそうだと聞いたそうね。でもいいわ。殿がお方様を大切に想う御心は私も知っているし、忠長だって殿の事で他の方にのぼせたりしたら、女人がどれほど苦しむのか良く分かったでしょうし」

「俺はやすらぎを苦しめるようなことはしないよ」

本当かしら？ やすらぎも話の流れから忠長の言葉をすんなりとは信じきれない思いもあるが、今のところは本気で言っているはずだと思つとその言葉はやはり嬉しかった。

「とにかく、このお文でなんとか殿の目を覚まさせて。忠長、責任重大よ」

「任せておけ。これでも若殿の乳兄弟だ。自分の夫を信用してくれ」

忠長はやすらぎにいい所を見せられると、胸を張っている。そんな姿が可愛らしいとやすらぎも自分の夫をほほえましく見ていた。

今日も大將は堀河の邸に向かっていた。その心の中はどうしたらあの姫の心を本当に自分に向けられるかでいっぱいになっている。陽が落ちても昼間の暑さの名残が残り、吹く風さえも生温かさを残していて身じろぎするのもつらいのだが、それでも大將の足を留めることはできない。何より心はいつも堀河に残したままの様な日々が続いているのだ。

邸に着くと忠長は上の空のまま車を降りる大將に声をかけた。

「若殿、お方様からのお文でございます」

「北の方の？ 珍しいな。分かった、後で読もう」

大將は文にちらりと目をやっただけですぐに懐に入れようとした。

「それから、これもお持ちいただけますか？ 中納言家の松の葉でございます」

「松の葉？」

「思い出しませんか？ 初めての御挨拶の時の事を」

「いや、思い出話なら後で聞く。今は早く姫に会いたいのだ」

そう言って文と共に松の葉を懐にねじ込むと、一時も待てぬように姫の元へと向かう。

すぐには思い出してもらえなかったか。いいや、きっと思い出していただけ。慌てずにしばらく待ってみよう。

忠長も本当は気が気ではなかったのだが、主人を信じる気持ちを揺るがせてはならぬと、自分に言い聞かせて大将に着き従っていた。

今の大将には姫の事しか見えていなかった。姫の顔を見ると真っ先に姫の近くに寄って、早く会いたかった。時の立つのが長くて気が遠くなりそうだったと、想いを熱く語っている。

姫は黙って大将を優しく見つめてはいるが、お言葉は無い。そのしぐさも恋しい方を労わると言うよりは、まるで幼子をあやすかのようにも見えた。

「どうしたら私の心を本当に分かって頂けるのか」

大将は悔しそうに言う。

「大将様のお心は、私にも良く届いておりますわ」

姫はそう言うが、

「いいや、まだ分かっていたではない。だからいまだにお心を開いていただけていないのだ。私の心をこの身を刻んでお見せる事が出来ればいいのに」

大将はのぼせ気味にそう言っていた。その時。

大将の懐から北の方の文が落ち、松の葉が散らばった。

「まあ、これは……。北の方様からのお文なのではありませんか？」
そう言われて大将は慌てて文を手取る。だが、姫は散った松の葉を手にとった。

「大将様も罪な方ですね。私にはこの松の葉が北の方様のお涙に見えますわ」

姫はそう言つてため息を突かれた。大将はしかたなしに手の中の文をようやく開く。そこには、

「咲き初めぬ初花」とだけ書かれていた。

松の葉。初花もまだ咲き初めぬ冷やかな夜。中納言家の松の葉。夏の夜にもかかわらず、大将の心に早春の記憶がよみがえった。

そして次々と北の方との日々が思い出される。命懸けで花房と入れ替わり、脅えながら大納言家の寝所に車から降り立った幼い顔をした姫。その可憐さに目を見張ったこと。

花房を妻にしたいと言つた時、まだその意味も良く分かり切つてはいなかったであろうに、戸惑いながらも、「それが、花房と大将様のお幸せになるのなら」と、ほほ笑んでくれたこと。

花房の才を見抜いて、「こつという方を私たちは守らなくてはいけませんね」

と凜とした態度で言つた事。

自分をいつもくつろがせたおっとりとした優しさ。明るく可憐な笑顔。まだ決して長い月日ではないが、二人でつなぎ合って来た心……。

大將は突然、立ちあがった。

「申し訳ない。私はあなたに甘え過ぎていた。懸命に受け入れようとして下さるお心に頼ってしまった。だが、私は本当に自分の心をお伝えするべき方をおろそかにしてしまった。こんな私の心ではあなたが受け入れられないのは当然だ。何故、今まで気がつかなかったのだろう？」

姫は静かにほほ笑まれた。

「よろしいのです。ようやくあなたは御自分を取り戻されたのでしよう。早くお帰りあそばして。またしばらくしたらこちらにもお寄りください。それまでには私も心をもっと和らげておきますから」

「ありがとう」

大將はそういって、「馬を！ 急ぎ馬を用意してくれ！」と叫ばれた。

初花

大将は堀河殿に馬を用意してもらつと、車や共達に目もくれずに一目散に自分の邸へと向かった。忠長は一緒に用意してもらつた馬で、懸命に主人の後を追つた。

北の方はまだ幼く頼りない心と身体で懸命に私に導かれようと、心をつないで下さつていた。

早くに親元からも離されて、私について行くので精いっぱいだったはずなのにいつも微笑んで下さつた。

それなのに私の浮ついた心に振り回され、突然つないだ心を振りほどかれてどれほどの不安にかられたことだろう？ どれほどの涙で袖を濡らしたことだろう？

夜の都路を暑い折と言う事もあつて大将は汗まみれになりながら必死で馬で駆け抜けた。暗い中だと言うのに速度を落とそうなどはつゆほども思わず、まるで転がりこむように自分の邸の中に飛び込んだ。

馬を下りると庭を全力で駆け抜け、誰もが声をかける間もないままに北の方のいる奥の寝所へと急ぐ。女房達は驚き動けず、北の方のお相手をする女童めわいわと言う幼い少女たちが慌てて飛び退いて行った。

そして北の方の御姿を見るや否や、驚く北の方にかまいもせず駆け寄り、抱きしめる。

「すまなかつた！ 辛かつたであろう……」

それだけ言うのが精いっぱいだった。早春に誰の心をも和ませる初花の心を持った方、「初花の上」は、果して自分を許して下さるだろうか。

しばらくは驚きで声も出せずにいた北の方は、ようやく心落ち着かれると大将の胸の中で、

「お帰りなさいませ」と言った。

そして顔を上げると笑顔でこう言った。

「殿は良い時に戻られましたわ。今宵は私から嬉しい知らせがあるのです」

「嬉しい知らせ？」

「ええ、花房が都に戻るそうです。野分のわきの季節が過ぎたら郷里を立つそうです」

お父様に許された私と康行は、毎日邸に通って来る康行と楽しい時間を過ごしていた。

けれども都の事は気がかりで、風の噂でも届きはしないかと気をもんでいた。

だけどやっぱり都は遠くてなかなか武蔵の国にまでその噂は届か

ない。私は康行の櫛に願いを込めて相変わらず髪をくしけずる日々を送っていた。

髪が伸びるまで、まだどれほどの時間がかかるのだろうとじれていると、ある日お義母様がこちらにいらっしやいとおしゃった。

行ってみるとお母様は蒔絵を施した箱の中から、見事なかもじを取り出してみせた。

「人に頼んでおいたかもじがようやく届きました。あなたの髪の色とあっていれればいいのですけど」

そう言っただけ私にかもじをあてがって見る。

「良かったわ。大丈夫なようね。あなたの髪も少しは伸びて背に広がらなくなってきたことだし、これなら北の方様の御前に出ても大丈夫でしょう。でも、あまり激しく頭を揺らしたりはなさらないように。髪の中でダメになったり、取れてしまわないとも限らないから」

「あの、お義母様。お義母様は私を都にやるのが御嫌だったんじゃないですか？ 恐ろしい目にあわされるからって」

「そうね。今だって心配よ。出来ればこのままあなたをここに置いておきたいわ。でも、それはあなたにはつらい事になってしまうのでしょう？ あなたには都人の血が受け継がれているのだから。お父様がお苦しみを越えてお許しになった以上、私もあなたをお止するつもりはありませんよ」

「お義母様。お父様と私のお母様の事、御存じだったの？」

私は驚いた。

「いいえ。お父様からは何も聞いてはいません。でも、あなたのお母様は御身分のあつた方。何があつたかは知らなくてもお父様があなたのお母様と結ばれるには大変な御苦労があつただろうことは見当がつきます。そして生まれ、お育てしたあなたをそれでも都に行かせる事を許された。どんなにご心配でもそうする必要があるとお父様は考えられたのでしよう。きつとお父様は都でああなたのお母様とお幸せにしておられたのだわ。たとえどんな御苦労があつたとしてもね」

「お義母様、悲しくはありませんか？ お父様が私のお母様をとても慕っていたと知って」

お義母様は首を横に振った。

「そんな事はありませんよ。若い日にお父様がお幸せだったことは私にとつても嬉しい事です。何より私は今、お父様の傍にいられるのですから」

「お義母様、お父様をこれからもよろしくね」

お義母様はお父様を想つて下さっている。私の事も心から心配してくれている。何より私をここまで育てて下さったのはお義母様だ。

「ええ、大丈夫ですよ。お父様の事は私に任せてちょうだい。私とお父様もここであなたを遠くからだけれど見守っていますからね」

「お義母様、ありがとう。このかもじ、髪が伸びた後も大切にしま

す

「いいのよ。心配せずに都で頑張りなさい。そして何かあったら文でも書きなさい。子供のいない私にとって、血は繋がらなくてもあなたはたった一人の娘なのだから」

「私も、お義母様の娘でいられて幸せです」

そう言っておかずにはいらなかった。そしてこの言葉をお義母様に伝えられただけでも、帰ってきて良かったと思っただ。

「娘って、すぐに大きくなって大人になってしまふのねえ」

お義母様はそういいながら私の頭を幼子のようになでて下さった。

お義母様のかもじもあって、私はすぐにでも都へ旅立ちたかったのだが、康行が言うには、

「いや、今は季節が悪い。ちょうどこれから野分（台風）の季節になる。野分は陸でもひどい嵐になって木々を倒したり川の水をあふれさせたりするが、海ではもっとひどい嵐になるんだ。女人のお前が都まで旅をするには、海を船で渡る必要がある。女の足に都は遠すぎるんだ。草枕の旅と言うわけにもいかないし何かあるとも分からない。せめて嵐の季節が過ぎるのを待たなくてはいけない」

と、言う事なのだそうだ。

「せっかくお義母様からかもじをいただいたのに」

「そう不満を言うな。もともと俺達はお前の髪が伸びるまではここにいるつもりだったんだ。俺もこの春に生まれた仔馬たちの成長を見る事が出来る。焦る事は無い。せっかくだからゆっくり待とうじゃないか」

康行はそういういながら笑っている。それは私を説得するほかに、

「せっかく二人で楽しく過ごせる時間が出来たんだ。慌てる事は無いじゃないか」

と言う意味もこもっているようだった。

「そうね、焦る事もないわよね」

私もそう答える。私だってようやく許された康行との時間は、楽しくってしょうがなかったんだもの。

その頃、都の嵯峨野では前の帝がついに仏門にお入りになり、人々からは嵯峨野の院と呼ばれるようになっていらした。

院はしばらくは嵯峨野の邸で周辺の整理をしながら仏道に励んでいらっしやるが、時期に奥の山寺に御入門する事になっていて、邸には連日のように山寺からのお使者が来るようになっていた。

幽閉状態の身とはいえ、元は帝でいらした方が山寺へ仏道修行に入られるのだ。あちこちからお別れのお文が届いたり、お別れを惜

しんでの訪問客があったりと最近は邸もにぎやかに、あわただしい様子が続いていた。

警備の者の監視も厳しいものがあつたのだが、こういう時なので高貴な方の御訪問などには柔軟に対応をしていたようだ。院におなりになるにはまだ少しお若い方だけに、この御入門を憐れむ方々も多かつた。

そして季節は秋になり、激しい野分の季節になつた。特に都から奥まつた嵯峨野などでは雨も風も恐ろしいばかりに吹きすさび、風がうなりを上げ、川の水は濁り、建物がギシギシと嫌な音を立てるほどだつた。

院の邸でも警護の者までが戸締りや、邸の物が壊れないようにと対応に追われ、誰もが野分に振り回されていた。

野分は一晩中荒れ、ようやく明け方近くに風も雨もおさまつて来て、明るくなるとあちこちで木が倒れたり、物が飛ばされた後がある様子が見て取れた。

そんな中で警護の物が血相を変えて他の役人に叫んでいた。

「院が！ 院の姿がお見えになりません！ 院が御身を隠してしまわれました！」

野分の後片付けに追われていた役人たちは、皆、驚き慌てて院の御姿を探し求めていた。

初花（後書き）

帰郷編はここまでです。次回からは最終編、再びの京編です。

再びの京（前書き）

最終編のスタートです。

再びの京

私と康行はようやく京の都に戻ってきた。本当ならもつと長い時間がかかったはずなのだからようやくというのはそぐわないのかもしれないけれど、都に戻れると分かってからは一日一日が本当に長く感じてしまっていたので、私の気持ちはようやくという言葉がちょうど当てはまるくらいになってしまっていたのだ。

だから都の外れにまで辿り着いた時は感慨深く二人で足を止め、

「ようやくお方様や殿にお会いできるのね」

「そうだな。皆、お元気でいればいいが」

などと話しあっていた。

ところがその時にいかめしい役人の集団が姿を現し、

「近衛の大将様の北の方の女房、花房殿でいらっしやいますね？」

と、尋ねられた。

自分の名前に「殿」なんてつけられる事は無いものだから少し戸惑ったが、

「ええ、私は花房ですけど？」と、一応答える。

「大将様にあなた方の護衛を申し使ってまいりました。お邸に入られるまでくれぐれも御油断召されぬよう」

「はああ？」

私達ははわけのわからない内に役人に取り囲まれる。

「待て、お前達が大将様の命で来ている確かな証拠はあるのか？」

康行が私をかばうようにして聞いた。そうだ、以前私が襲われた時は役人の姿をした前帝側の人間もいたんだっけ。それこそ油断は出来ない。

「おいおい、いくら都を離れたとはいえ、もう俺の顔を忘れたわけじゃないだろう？」

役人たちの中から少し下がったところにいた侍姿の男が康行に声をかける。その顔を見て私も思い出す。確か康行と一緒に中納言家の警護をしていた男だ。この人たちは確かに大将様からいい使ってきた役人に違いなさそうだ。

「とにかく俺達はあるた達を無事に邸に連れて行かないならなんだ。詳しい事は邸に着いたら若殿から聞いてくれ。ここで何かあったりしたら俺達の責任問題だ」

そう言って侍は私達を牛車に押し込めようとした。

「おい、花房はともかく俺は車に乗れる身分じゃ……」

「特別だそうだ。お前が徒歩でいて何かあったら花房様もおとなしく車の中になんかいなだるうから、二人とも車で連れてくるように言われてるんだ。おとなしく言う事を聞いてくれ」

そうは言っても私だって大将様から牛車で迎えてもらうような身分じゃない。所詮お方様付の女房だ。何がどうなっているのやら。私達は何も分からないまま車に乗せられ、大将様のお邸に連れて行かれてしまった。

邸につくとさすがに康行は庭先で車から降ろされる、私はひさし下の縁につけられた車からようやく降りると、そこには大将様とお方様、やすらぎまでもが待っていてくれた。

「無事着いたか。まずは良かった」

大将様はそうおっしゃるが私はよくない。まだ化粧もしていないし、旅装束のまま短髪にはかもしすらつけないのだ。本来なら高貴な方にお会いするような姿ではない。

しかも何も分からないままここまで連れて来られてしまった。出立する時も「特別」に扱っていただいたが、戻ったそうそうこれは特別を超えて「異常」な事態だ。

「このような見苦しい姿で申し訳ありません。でも、これは一体どういう事でしょう?」

「説明が後になってすまなかった。実は前の帝が嵯峨野のお邸から姿を消されたのだ」

「前帝様が?」

「お前は都を立つ直前にその身を狙われた。もしやの事が無いように、安全に邸に入らせたかったのだ」

「それは、御配慮いたみいりますが、それで私が狙われるかどうかは……」

「いや、その可能性はあると思う。先日、中納言家に呪いの言葉の書かれた文が届いたそうだ。お前の叔母の元にも同じ文が届いたと言う。これでは何も知らずに都に入ろうとするお前の身を案じない訳にはいかぬではないか」

中納言様と私の叔母を恨む人。そんなの世の中広いとはいえ、前帝様くらいしか思い当たらないわ。

私、とんでもない時に都に戻ってしまったのかしら？

とにかく今の姿のままでは失礼過ぎるので、私は取り急ぎ局に戻り着替えと化粧をして髪にかもじを添え、どうにか見られる姿を取り繕って殿とお方様の前に参上した。

そしてようやく殿から詳しい話を聞く事が出来た。

私達がまだ武蔵の国にいる頃、ある野分の晩に今では仏門にはいられ、嵯峨野の院と呼ばれている先の帝様が行方知れずになった。

色々あったとはいえ仮にも前の帝様。もしや不敬にもこの方の身を預かり、今の帝様に何かあだなそうとする輩がいるのかもしれない。初めは役人たちもそう考えて、院の御姿を必死になって探したそうだ。

ところがいくら探しても院の御姿は見つからず、これと言って御所や帝の元に脅迫めいた事が起こるわけでもなかった。

そのうち都人たちは、

「あの院の事だから仏門に入ったのも渋々の事。いよいよ山寺での厳しい仏道修行を前にして恐れをなして自ら山に逃げられたのではないか？」

などと噂し始めた。そして、

「院の御姿がいつまでも見つからないのは無謀にも山中に逃げ込まれたのでどこかで行き倒れて、すでに亡き人となっているのではないか？」

「御遺体も見つからないのは山の獣にその身を持ちさらわれてしまったからではないか？」

などと言われていたのだと言う。元は帝だった方にもかかわらず、悪事を働き人々に恐れられた方だったので、皆、そんな残酷な噂を平気で流していたようだ。

しかしそんな噂が流れる中で、中納言家に何処からとも分からぬ文が届いた。誰が取り次いだ憶えもないのに、中納言様の寝所の縁にいつの間にか置かれていたのだと言う。

文に気付いた女房はどこかの男君がここに勤める女房にでも届けようとした文が、使いの者の間違いでうっかり取り落としてもしたのだろうと思い、誰への恋文かと面白がって開いてみたそうだ。

ところがそこには中納言様を恨む言葉と、中納言家の榮譽は長くは続かないと書かれていた。

これを見た中納言様は顔色を青くされながらも、

「嵯峨野の院が姿を御隠しになったのをいい事に、このような文を送る輩がいるとは」

と、この文はただの脅迫にすぎないという姿勢でいらしたそうだが、その日の内に御所の奥深く後宮にいる私の叔母の元にも元の大
臣の娘を恨むと言うような内容の文が届けられた事を知ると、

「院が生きて私を恨んでおられる。いや、ひよっとしたらものけ
となつて、一層恨みを深くしておいでかもしねぬ」

と言つて、寢所の中に引きこもり、震えてしまっているようだ。

大将様もこれを知ると私達に都に戻るのはしばらく待つようにと
の文を送つて下さつたそうなのだが、遠く離れた武蔵の国。文はす
ぐにはつかずに、私達と行き違いになつてしまった。

そこで何も知らない私達の身に何かがあつてはならないと、大将
様が私達に護衛と牛車を用意してくれたと言つわけだったのだ。

「それでは郷里の父の元に、その文は送られてしまったのですね」

あんな思いをして康行と都に戻る事を許してもらつたのに。今頃
郷里でお父様も、お義母様も死ぬほど心配してるんだらうなあ。

「とにかく早く御両親に無事についた事を文にしたためて差し上げ

なさい。それから当分この邸の外には出ないように。これであなたの身に何かがあれば、私はあなたの御両親に申し訳が立ちません」

お方様も私を心配そうに見つめながら、そうおっしゃってくれた。恨む相手の孫の私より、娘のお方様の方がよっぽどご心配なお立場だと思っただが、こう言っただ下さるのがお方様らしいところ。

やっぱり今戻ってよかった。私の手で、お方様の身をお守り出来るんだもの。

必ずお方様の身は、守り抜いて見せる。

私は心の中でそう誓っていた。

目標

それにしても嵯峨野の院様の御恨みの根深いこと。これほどの時が経ち都の人々に恐れられ、御自身が仏門に入られてもその恨みは直接お立場を追い落とされた中納言様だけにとどまらず、娘のお方様や、行動をお諫めした私の祖父やその娘の叔母、果ては孫の私にまで至ってらっしゃる。仏の慈悲もこの方には届く事が無かったのだろうか？

いやいや、それどころじゃない。末代の私にまで恨みを持たれる方だから、もっとお恨みになってらっしゃる方がいる。

恐ろしいことだけど、院が本当に御恨みになっているのはおそらく今上の帝に違いない。

院は安心できる後ろ盾もないまま帝に立たれたのに誰を信じて良いのかも分からず、孤独の中でやっと手になさったであろう心安らげる方を亡くされ、ついには中納言様達の策略に乗せられてその地位を東宮に譲られた。

それに比べて今上はごくごく幼い時に帝におなりになったので、御母上である元の中宮様、今の太后様に守られ、御政務も心強い大納言様や中納言様のお力のもと良い卿や学者たちを集められて、御成人後も順調に滞りなく務められている。

後宮においても中宮様との御仲も何ら問題は無く、女御様、更衣様ともそれぞれ御立場を難しくすること無く（梅坪の更衣様みたいに我慢してらっしゃる方もいるだろうけど）、次の東宮もお生まれになってその御世はしばらく盤石なように見える。

院が帝でいらつしやつた時とは何と云う違いだろう。そりゃ、恨みもあるだろうし、妬みもあるわ。ついにはその帝に幽閉同然の身にされて仏門に入るしか無くなつていたんだから。

帝も今までは御身内の方の事だからと甘いと言われるほどに院の事には目をつむつておられたけど、あの行列襲撃にいたつては役人たちまで悪事に加担させて、都人に帝の信頼を揺るがせようとなさつた。ここまで来るとさすがに帝も黙つてはいられなかつたんだらう。

帝のつた処置は当然の事だ。そうでなくては都の治安は守られない。

でもこれで、院にとっては唯一自分の行動を許し続けてくれた人を失つた。自業自得ではあるけれど院の様な御気性の激しい方にこれは堪えたんじゃないかしら？

そんな事を考えたのは何も私ばかりではない。当然帝をお守りする役人たちだつてそう考える。そして、殿もそうお考えになった。当然だ。殿、大将様は帝を直接お守りするのが一番の御役目なんだから。

だから殿は帝をお守りする陣頭指揮を取らなくてはならない。今までの経緯から考えればお方様の身だつて十分に危ないのだけれど、御自分の役目を後に回して妻を守る様な訳にもいかないのだろう。

私が京に入った日は私達が何も知らなかつた事を考慮して出迎えて下さつたが、その後はずっと御所での宿直が続いている。それも

仕方が無い。あの、院の恨みのこもった文は御所の奥深く後宮にまで届いたのだから。

それも不自然とは言えない。院は幼い時から後宮でお育ちになったのだ。後宮の事は誰よりもよく知っている。

都では院は恐ろしい人のように言われているが、後宮の中では今でも院に御同情を傾ける人も少なくないと言う。幼い頃の院は利発で何でも素直に応じる事が出来る、可愛らしいお子様だったそうだ。御心が純粹な方だったらしい。それだけに周りの大人に振り回され傷ついていかれるお姿は、院をよく知る女房達には見えていたたまれない程だったと言う。

そんな姿を見ながらも後宮勢力の流れに逆らえなかった方々は、今でも院にこっそりと御同情しているらしい。院は意外に御所の中にお味方を持っているようなのだ。

そして私の叔母が仕えているのは御立場の弱い更衣様。更衣様は帝の御寵愛が多いとは言えないものの、お気に入りな方とされている。それは何かと後宮内の嫉妬を呼びがちだ。

そういう更衣様に仕える叔母にあいつた文を忍ばせるのに躊躇をしない人も中にはいるかもしれない。後宮の中は外からはうかがい知れないものがあるようだし。

そうなると殿が躍起になって帝の警護に取り組むのも当然のこと。御所の内にどんな内通者がいるとも分からない。特に殿は帝の事を臣下としての敬意だけではなく、幼い頃から親しまれた、御親友の様なお気持ちも持っていらっしゃる。お方様の心配はしていても、

やはり主上の安全が何より大事になってしまふ。

そんな殿のお心を想うと私も精いっぱいお方様をお守りしたいと思う。本当なら殿がおられなくて一番不安なのはお方様だと思ふのに、殿の御無事も日々願つておられると思ふのに、お方様が御自分の思いよりも私を心配して出迎えて下さった気持ちを考えて、その思いは一層強く湧き上がる。

だって私はこの方を守り、この方の思いを琴の音に乗せて多くの方に知って頂くために、ここに戻つて来たのだから。

でも、お方様の住むこのお邸は、そんな緊張感や暗さとは遠い世界が繰り広げられていた。

私のいない間にこの邸は都人の注目の的になっていた。お方様が院に狙われた事があるからではない。お方様が御自分で作られたこの邸の持つ華やかさ、楽しさ、魅力を誰もが認めただった。

お方様にはお父様の中納言様の後ろ盾があるし、近衛の大将である殿の御協力もある。何を手に入れるにしろ、財力も人脈にも困る事は無い。

でも、それだけでは人々が認めない事は誰もが知っている。どんなに物をかき集めてもかえって眉をひそめられる方々だっていっぱいいる。けれどお方様が作った世界はそういうものではなくて、このお邸にいればどんな素晴らしい事が起こるか？ どんな良い物が生まれて来るか？ と、明るい期待を持つ事が出来る世界をこの邸にもたらしたのだ。

私はすっかり感心してしまい、お方様にその感動を懸命にお伝えした。

「あなたはきつと褒めてくれると思ったの。あなたならこういう雰囲気の良さを分かってくれると思ったのよ。花房がない時だからこそ、私はあなたが帰った時に琴を弾くに値する世界を作っておきたかったの。明るく、楽しく、豊かな世界。この邸で生まれた物に誰もがほほ笑んでくれるような世界を」

そうおっしゃるお方様は僅かの間にずっと大人びていて、私には眩しいくらいだった。よほど素晴らしい事があったのかとお方様に尋ねたが、お方様はほほ笑まれるだけで教えてはくれない。

私がない間の事情を知ったのは、後からやすらぎと二人で話をした時だった。

「殿もしょうがないわね。いつも素晴らしい女人に囲まれてばかりおいでだから、お方様の素晴らしさが分からなくなったのかしら？」

私はつい、不満が先に出たが、

「そんな事は無いわ。少し他の方に目移りしてしまわれただけよ。でも、その事でお方様の素晴らしさが一層引き立ったのは間違いないわ。こういう時ってどうしても御心がみだれて、邸の雰囲気もとげとげしくなってしまうものだから男君も余計に戻りにくくなったり、周りから同情や皮肉な目で見られたりして難しくなる事が多いのよ。なお方様は邸の雰囲気を一層賑やかで華々しい物に変えられてしまった。誰もが憧れるような世界を御作りになってしまった。これはとても凄いことなのよ」

そつだろつな。一番つらく苦しい時に、人が憧れるような世界を作る。こんなこと誰にでもできる事じゃないだろつ。

「私達もそれで身が引き締まったの。私達がお仕えしている方は普通の方じゃないわ。本当に豊かな感性をお心に宿していらつしやるの。殿は今ではお方様の事を『初花の上』とお呼びになっているわ。春の一番最初に誰もが待ち焦がれる、すべての人の心を和ませる白梅の様な方でいらつしやるから」

成程。殿は私の事も『藤花』と呼んで下さつたつ。これは親しみだけではなく、誰かを御認めになつた時の殿の癖みたいなものかもしれない。

お方様は何があつてもどんなに立場が低い者にも、決して咎めたり、詰め寄つたり、御怒りをあらわになさつたりはしない。悲しい事があつても、それをどんな身分の者でも当たられたりなんかしない方だ。それが邸に閉じ込められた生涯を送らねばならない女人にとって、簡単そうに見えてどれほど難しい事か殿も気がつかれたのだろつ。そんな御方様に御愛情とは別に尊敬の念をお持ちになつたのかもしれない。

私にとって殿がいい寄つて来られた日の事は、もう遠い昔のようになつてしまつている。殿に対して尊敬と感謝の気持ちは今でも変わらないけれど、自分の中の何かが大きく変わったのだとこんな時に感じてしまう。同じようにお方様も短い間に何かが大きく変わられたに違いない。

私は以前都にいる事に寂しさを感じていた。自分だけが取り残されたような気持になつた事があつた。

でも今はそれを感じない。私はもう守られるだけの存在ではなくなったからだと思う。自分で自分の誇りを守り、大切な誰かを守る。それを支え合ってくれる人がいる。そういう事が分かった今は、孤独や不安におびえる必要が無くなったのだ。私達はこの素晴らしいお方様を守る事が出来る。その喜びだけで私は都で生きていける。何よりも大切な目標がここにある。

でも、康行にとっては都の事情が変わっていた事は少なからず厄介な事だったようだ。

侍を続けることを辞めた康行は、殿の馬達を自分の知恵と経験で素晴らしい名馬にして差し上げる事を新たな目標にしていた。殿の御信頼を得る事で私の事も守って頂けるように、どんな名馬にも負けないほどの馬に育てようと思っていた。

ところが院の不穏な動きが明らかになってしまい、大将様は御所の御勤めに忙しくなってしまった。既にいる康行は御簾の内にいる私達の様子を知ることが出来なくなってしまったのだ。

康行は不安にかられたらしい。ある日私が縁に出るとそこに康行がいた。しかもその姿は腰に太刀を差した、侍の姿だった。

正成

「康行、どうしたのその格好？ 侍は辞めるって言っていたのに」

あれから康行は侍を辞めると言っただけでなく、私とも人を傷つけるような真似はしないと約束をしていた。あれだけどうしようもない状態で私の身を守った康行なのに、人の命を奪った後の彼の苦しみようは、大変なものだった。もう、二度と康行のあんな姿を私は見たくなかったのだ。

「やはり俺は侍に戻るよ。若殿の許可も得ている」

康行は目も合わせずに言った。

「殿の許可は関係ないわ。私との約束はどうなったのよ」

「すまないが事情が変わった。この邸に若殿はほとんどいないし、お前だけじゃなくお方様の事も心配だ。今度は戸締りをよくすればいいってわけじゃない。御所の人間まで利用する事が出来るのなら、どんな人間が誰をここに忍ばせてもおかしくないじゃないか。見張る人間は一人でも多い方がいい」

「でも、大将様が侍を増やしてくれるって」

「新参者には注意が必要だ。役人が保証した身元は信用しない方がいい。出来るだけ長く大納言家や中納言家に飼われている、見知った顔で警護を固めた方がいい。俺は大納言家に結構長く飼われているからな」

そう言われても私はいい顔はできない。腰に差した太刀にばかり目が行ってしまう。

「そんな顔をするな。簡単にこの太刀を抜いたりはしないから。そんな事にならないようにするために、一人でも多くの目で邸を見張りたいんだ」

「でも……」

「何だよ、文句も言わずにためらうとはお前らしくもないな。しおらしく心配されると調子が狂うじゃないか」

康行はからかうように笑って言う。こっちが本気で心配しているのは分かっているくせに。私はつい、むくれてしまった。

「そつだそつだ。そうやってむくれている方がよっぽどお前らしい。心配はいらない。俺は見張り役をしたくてこんな姿をしているだけだ。それにこの邸の侍たちとは長い付き合いだ。彼らが懸命に邸を守るうとしている時に同じ邸にいる俺が黙って既に引っ込んでなんていられないんだ。じつとしていられないんだよ。分かるだろう？」

こんな話をしている時だと言うのに、私はふと、懐かしさを感じてしまった。初めに上京したての時、康行をこうやって縁から見下ろしながら良く口げんかをしていたっけ。

康行もどこか嬉しそうな、懐かしそうな目をしている。そう、私達はこの世界に戻りたくて都に戻って来たんだっけ。

「しかたのない人ね。分かったわ。でも、十分に気をつけてよ」

言葉ではこう言ったけど、きつと顔はほころんでしまっていたに違いない。康行も頷くと、

「お前の方こそ気を付ける。特に、同胞の女房に」

「それは大丈夫。みんな中納言家の時から一緒にいる人たちばかりだし、お方様をお守りしようと思心合わせているんだから」

「だいいが。女心は分からないからな。後宮にだって院に同情している女房がいるくらいだ。もし、御所に勤める男君と通じている女房がいればどんな裏切りがあつても不思議じゃないからな」

「まさか」私はギョツとした。

「ないとは言えないだろう？ やんちゃ者のお前でさえ、俺が太刀を持っただけで妙にしおらしくなってしまった。普通の女人ならなおさらだ。下男下女や使用人が小金のために動いても、そんなのほんの小細程度の事だろうし、良く見ていればすぐにばれる。だが、お方様に心からの信頼を寄せている女房が男君にそそのかされたら、どんな思いきつた事をするとも限らない。近しい人間を疑えとは言わないが、せめて気をつけてほしいんだ」

「お方様を御信頼しているのに、それでも裏切る人がいるって言うの？」

「分からない。女心は俺には分からないよ。でも、誰もがお前と同じように考える訳じゃないだろう。実は都で姫君がさらわれる時は、そういう女房の裏切りが一番多いらしいんだ。とにかくこういう時に一番怖いのは信頼できる人間に裏切られることだ。用心するに越したことは無い」

確かに。桜子さんの時の事もあるし。身近な人の裏切りが一番怖いのは確かだわ。

「今は俺の心配より、自分とお方様の心配をした方がいい。俺はい仲間にも恵まれているから、大丈夫だよ。安心してくれ」

これは、半分は本当の事で、半分は私を安心させようと言っている言葉なのだろう。康行のそういうところが私はなんとなくわかるようになって来ていた。でも、きつと私達は大丈夫だ。お互いが相手に何かがあった時、どれだけ苦しい思いをするのかを知っているから、決して無茶はしない。私だっていつまでもやんちゃ者じゃないわ。

御所の内で火事があったという知らせを聞いたのは、康行と話をしたほんの数日後の事だった。出火したのはあの梅坪で、火の気のないところから火が出た不審火だと言う。

幸い人的な被害は無かったが、梅坪の半分ほどが被害を受けてしまい、そこに住まわれていた更衣様はどこかほかのお邸に仮住まいされなければならなくなった。

本来なら御実家に戻られるべきところだが、更衣様のお父様が勢力的に厳しいお立場にあるため、更衣様の御勤めにそのお力をすべて注がれてしまっていたので、お邸はかなり貧窮しておられた。この春にも急なお里下がりされたばかりで、こう立て続けに更衣様をお迎える状況ではない。

他に外威もなく、院に狙われている私の叔母を召し使っている事などもあり、他の邸に仮住まいを申し出てもどこも良い返事は無い。更衣様のお立場は御所でも苦しいものだが、御所の外に出て主上の木陰を頼りにできなくなると、一層厳しい物になってしまう。

そこに御声をかけて下さったのはお方様だった。だが、お方様自身も院に狙われている身。大将様は勿論、御父上の中納言様も大反対なさったのだが、

「更衣様は私の使っている花房が大変お世話になった方。どうしても見捨ててはおけません。それにこの邸が受け入れるならばもったいなくも、主上から警護の方々を直々にお遣わし下さるとおっしゃって下さっています。むしろこの邸の警護を固める良い折ではありませんか。主上の御信頼を得ることもできます。梅坪の修理が終わるまでは殿も気の張る日々を送らねばなりませんし、こちらの守りが固められる事は良いことなのではありませんか？」

そうおっしゃって、中納言様を納得させてしまわれた。

私は康行が言っていた、

「新参者には注意しろ」

「御所の人間に気を付ける」

という言葉が引っ掛かっていて不安も憶えてはいたのだが、私がお世話になった更衣様がお困りのところをお方様が助けて下さっているので、とてもお方様をお止する訳にはいかなかった。

仕方が無いのでやすらぎにだけ、こっそりとその辺の話を伝えて

おく。やすらぎも殿の従者で夫の忠長様に伝えてくれたから、忠長様も殿に進言して下さったはずだ。

「殿に御心配事を増やしてしまったわね」

私は申し訳なく思っていたが、

「大丈夫よ。忠長の事だからその辺は上手く伝えてくれたでしょう。こちらの警護ももともと固いのだし、使わして下さる方々の人選さえ気を配っていただければいいのだから。むしろ殿も御自分で選ばれた方を遣わせるのだから御安心でしょう」

と、やすらぎは言ってくれた。

ところが使いにやってきた忠長様が、お方様には内緒で私達に耳打ちされる。

「殿は今度お遣わしになる役人の正成に気をつけるようにとおっしゃるんだ」

「気をつける？ そんな、殿が御信用できない方をこちらに遣わすなんて」

やすらぎはひそひそと信じられないと言った声を出す。

「いや、そんな事は無いんだ。正成は真面目実直で殿は勿論、お方様の事もとても尊敬している。誰が見てもお方様をお守りするには一番の適任だと思うんだが、何故か殿はあまりいい顔をなさらないんだ。彼の熱心さは御認めになっているから彼を遣わしたと思うのに、何故なのか俺にも分からない。でも、殿なりに訳があるのか

もしれないし」

「信用できるけど、気を付けろっておっしゃるの？ 変な話ねえ」

やすらぎは首をひねるが、私は康行の言葉を思い出していた。

「怖いのは信頼できる人間に、裏切られることだ……」

小雪

正成は真面目で実直だと言うだけの事はあつて、お方様への挨拶も実に折り目正しく、気持ちの良い青年に思えた。

私の噂も色々聞いてはいるはずなのだが、あくまでも尊敬する近衛の大将夫人の女房として、実に礼儀正しく接してくる。少しも元の身分や都の噂を勘ぐって軽んじるような様子は無い。

役目がらか、生真面目な性質からか、決して愛想がよいとか口がうまいとかいう事は無いのだが、その表情は柔和で近寄りがたいとか、猛々しいなどと言う事は無かった。与えられた役目を誠実に黙々とこなす人間に見える。人柄は悪くないようだ。

去年まではあの、堀河殿の前任で蔵人頭を務めておられたそうで、邸内でお迎えした更衣様への御挨拶のための伝言役などを、滞りなく実に手なれた風にこなして下さる。

御蔭でこちらでも戸惑うことなくお方様から更衣様への御挨拶を取り行う事が出来たし、私まで更衣様に御挨拶をする事が出来た。

久しぶりに更衣様に私の琴をお聞かせすることまで出来て、私は大満足。その間の正成の様子も控えめで、さりげなく手順よくお方様のご様子に気を配って警護してくれたので、とても心強かった。

それどころか、

「せっかくの秋の風情漂う御庭を、ゆっくりご覧になれない身の上となっておられますから、せめてものお慰みに」

そう言ってお方様に庭にある紅葉の落ち葉の美しい所を時絵の硯箱の蓋の上に美しく並べ、松の葉を散らして持ってきて下さった。蓋の上に施された時絵とも相まって美しい秋の情景が彩られている。御簾越しに私が受け取り、几帳の中でやすらぎがお見せすると、

「まあ、ありがとう」と、やすらぎを介さずに御自分でおっしゃった。

お方様はことのほか喜ばれた。警護のために落ち着いてお庭もご覧にはなれずにいたのだ。

「いえ、見回りの途中で思いついて拾っただけのことですので」

「松の葉を共に散らされているのも、憐れ深いわ」

お方様は感慨深そうにおっしゃった。

「良い、思い出があると伺って良かったです。では」

そう言っさつさと持ち場に戻ってしまふ。

「一見無愛想にも見えますけど細やかな方ですね、正成は」

お方様はそうほほ笑んでいらっしやる。

ただ、私はちょっと引つかかった。松の葉の思い出。殿が正成にお話になったのかしら？ それとも忠長様から又聞きしたのかしら？ この邸の人間なら誰でも知っていることだけど、わざわざ正成に話したりするものかしら？ 小耳にはさむと言ふ事はあるだろう

けれど。

普通なら何でもない事だけど、殿にくぎを刺されている事が気になって、変に勘ぐるうとしてしまう。悪い人間には思えないだけに、私はスッキリしない。

私は身内の気やすさで叔母のところを訪ねた。叔母は院に狙われるかもしれないと言う事で他の女房の方々は特別に部屋を分けられている。周りの警護も厳しいが、私は身内と言う事で通してもらえた。

私は正成が松の葉の事を知っていたのが気になった事を叔母に言ったが、

「ああ、それは正成様にはこちらのお邸に親しい女房がいらっしやるからじゃない？」

と、叔母が言った。

「親しいって、恋人として？」

「噂だけだから本当かは分からないけれど、そんな話を聞いたことがあるわ。妻にするほどの仲ではないのでしようけれど、情人としては長い付き合いなんだとか。正成様はそんなに女人と付き合いが多い方ではないから本当にちらりと噂が流れただけですけどね。私もすっかり忘れていたわ」

御所勤めの男君と、この邸の女房。殿が何故か気にかけていらっしやる。

まさか、まさか。

ただの偶然かも知れないけれど、私は康行にこの事を伝えた。

「正成様から目を離さないで」と。

正成のお相手は誰だろう？ お方様の女房に若い方はいっぱいいる。お方様自身がとてもお若いから女房も若い女人が多いのだ。

こういう事は皆、あまり表ざたにしたがらない。もし男君がいると分かれば結婚して邸を辞めるかもしれないと噂が立ってしまう。上手くいけばそれでもいいが、こればかりは男女の事なので分からない。男君の存在はあまり大っぴらにはしたくないのが本音だろう。

場合によっては身分の違いや家の事情で、ずっと情人のままであることだってある。むしろ邸勤めを続けるために後盾になつてくれる男君と関係が続いている人もいるだろう。そういう仲は秘密にされて当然だ。女同士の噂は一度歪むと厄介で恐ろしい。だから男君に利用されたりしやすいんだらうけれど。

そんな事をいつも考えていたからだろうか？ それまでは気にも留めなかった女房達の様子にいつの間にかついつい目がいくようになっていた。

すると私は気がついた。若いが地味で、いつもお方様の目に留まる所にいる訳ではないけれど、いつの間にかお方様近くに寄り添っている小雪と言う女房がいる事に。

小雪は気がつくとお方様がどうしても思い出せずにいた御歌の一節をさりげなく口ずさんだり、物語を読んでいた女房の声の調子を察してそっとお水を渡したり、遊び事の後にちよつと気の抜けた間が開かないように、耳に障らない調子の琴を掻きならしたりしている。

だが、夕暮れ時のいつも決まった頃に「ふつと」消えるように姿が見えなくなるのだ。

それはほんのわずかな時間で、ほとんどの人が彼女が居なくなつた事にさえ気が付いていないのだが、あまりに鮮やかに姿を消している様子に、私は胸騒ぎを覚えた。

彼女の気の配り方、たたずまい、なんだか正成がお方様に紅葉を差し上げた様子に似たところがある。お相手はきつと小雪だ。私は確信した。

二人が何かしでかすとは思いたくなかつたが、油断はできない。私は小雪の姿を常に目で追うようになった。

ある夜、小雪がいつになく早くにお方様の御前を下がつた。私は念のために康行に知らせた。そして一度私も御前を下がつたが、皆が寝静まつた頃にお方様の御簾の近くにそつと忍んでいった。

すると、お方様の回りにいるはずの女房達の姿が無い。外も警護の者の気配が感じられなかつた。殿がいらつしやらない夜にこんな人少なげなのはおかしい。

そう思っていると、妻戸（寝殿に入る扉）の方から人の気配がし

た。小さな明かりがもれる。

誰かが御簾をくぐって母屋へと入ってきた。人の影は二つ。

小雪は私に気が付き、ハツとした顔をしている。その後ろにはやはり正成様がいた。

「花房さん。お願いだから見逃して。正成様に、一目お方様の御姿を見せてあげて」

小雪は泣きそうな顔で私に懇願した。

「頼む。決してけしからん真似をしたりはしないから。一目、初花の上の御姿を見せてくれ。そうしなければ私は恋死にしまいそうだ」

正成にいたっては私にすがりついてきた。目にいっぱい涙をためている。

誠心誠意の御挨拶。驚くほど丁寧な仕事ぶり。そしてあの紅葉の心配り。これらはただの仕事としてではなく、お方様への恋慕が彼にそうさせたものだったのか。

あの紅葉は彼に出来る精いっぱい捧げものだったのだろう。でも、

「小雪さん。あなたそのためにこんな大それたことをしたの？」

「お願いよ、私この人がこんなに苦しそうにしている所をこれ以上見てはられないの。この人はお方様がお小さい時に吉野にいらし

た姿を偶然垣間見てから、ずっと長いことお方様に憧れていらしたの。手の届かない方なのは分かっていても、この邸にいる内に一度でいいから御姿をご覧になりたいのよ。それを一生の思い出になさりたいのよ」「

正成が紅葉をお方様に捧げた時、小雪はどんな思いでそれを見ていたのだろう。

「小雪さんはそれでいいの？ あなた、正成様を慕っているからこんなことしているんでしょう？ 正成様も小雪さんの心を利用するなんて」

「私は正成様が苦しまずに済むならなんだっていいのよ！」

小雪がとりみだしたようにそういった時、突然、背後から男達が現れた。私達の事は無視して、一目散にお方様の御簾に近づこうとする。

だが、そこに突然役人が姿を現した。あつという間に皆を取り押さえてしまう。

「花房さん、これは……？」小雪が取り押さえられたままつぶやいた。

「ごめんなさい。私、あなたの様子が気になって康行に正成様の様子を見てもらっていたの。そして今夜は何かありそうだから、役人にここに隠れてもらっていたの。お方様には私の局にいらしてもらっているわ。こんな所をお見せしたくないから」

「違う！ 違うんだ！ 私は本当に一目、あの方にお会いしたかつ

ただけだ！　こんな奴等は知らない！」

正成様は顔色を変えて叫ばれた。男達は目をそらし、小雪さんも必死に頷いている。どうやら本当に知らなかつたみたい。でも、それでお方様が危うく危険な目にあうところだつたんだ。

「詳しい話は役人にして」

そう言つて私はその場を離れた。二人とも悪い人ではない事を知っている分、いたたまれなかつたのだ。

康行のところに行こう。事の成り行きを説明したい。そう思つて妻戸を出ると、何かが飛んで来て身体に当たる。見ると紙を石で包んだ物らしい。紙には何かが書かれている。開くと、

『康行を預かっている。助けたくば誰にも言わずに西門の横に止めてある車に、一人で乗つてこられよ』

と書いてあつた。

逃走

何故？ 何故、お方様や叔母や更衣様でなく、康行が連れ去られるの？

私は文に書かれている言葉が信じられなかった。騒ぎに気付いてやってきた侍の一人に康行はどこかと尋ねてみる。

「康行？ そういえば見えないな。騒ぎが起きる前まで近くにいたのに」

「厩にいるのかもしれないわ。見て来る」

私はそう言って厩や侍所などを見て回ったが康行の姿は無い。本当に何者かに連れ去られてしまったらしい。

康行は私に言われて一人で正成を見張っていた。正成が小雪とお方様の寝所に入ろうとしている所を、仲間と離れて一人で隠れ見していたに違いない。おそらくそこを狙われたのだろう。

失敗だったわ。正成の事に気を取られて私ならともかく、まさか康行の身が狙われるなんて考えていなかった。普通に仲間と一緒にいたら康行はこんな目に遭わなかったのに。

心の中が後悔の渦でかき乱されながらも、なるべく人目につかないように邸の庭を駆け抜ける。一人で邸を抜ける事に戸惑いが無いわけではなかったが、康行の無事が確認できない以上、私に迷いはなかった。

私は急いで西門に向かった。門番には、

「知り合いが急な病で」

と言ひ繕い、暗闇の中に僅かな松明の灯りと網代車を見つけると、躊躇なく乗り込んだ。

「花房殿、ですね？」

車の中には顔を隠した男が二人乗っていた。その物腰や牛車に乗り慣れた様子から、それ相応の身分の人だと分かる。これはやはり院の一派の仕業か。

「康行は無事なの？」

康行が素直に連れ去られる訳が無い。大きな馬でもたやすく扱う彼は、動きが機敏で力も強い。私が連れ去られた時は男を一太刀で斬り殺したし、襲われた私を助けた時も、太刀を合わせた相手に力勝ちしている。そんな康行がやすやすと連れて行かれたとは思えなかった。

かなりの手ひどい目にあわされたか。それとも……

「無事です。多少抵抗があつたようですが、あなたの傍にいる役人に声をかければあなたをどうにでもできると言つたら、素直に従つたそうです。院を追いながらも内心院に目をつけられたくない役人は、意外に多いものですから」

良かった、無理な真似はしなかったらしい。そうよ、康行は約束したんだから。簡単に太刀を抜いたりしない。お互いが苦しむよう

なことはしないって。

今は互いの身の安全が第一だわ。おとなしく言う事を聞いておこう。

男の一人が外の様子をうかがっている。その時、この車は御簾の内側に大きな布がかけられていて、外の様子が見えないようになっている事に気がついた。その布を男が降ろしてしまうと中は全くの闇になった。一気に不安が強くなる。

「約束は守られたようですね。追手がいる気配はないようだ。……行っっていいぞ」

男の言葉に反応して、牛車がゆっくりと動き出す。邸からどんどん離れていく。

「私をどこに連れていくの？ 康行はそこにいるの？」

たまらず、私は聞いた。

「とある山寺にお連れします。どのあたりのどのような寺かは申せません。康行もそこにいます。行けば顔くらいは見られますから心配なく」

顔だけ見せてもらってもちっとも有り難くないんだけどね。そう言ってしまうわけにもいかず、私はむっつりと黙りこんだ。

大体のんきに話ができるような心情にはなれない。こんな真つ暗闇の中で男二人に囲まれた経験など無い。いやでも緊張する。

以前、さらわれた時は薬を盛られて身体は痺れ、ついには意識のないままに何も分からずに連れ去られた。気がついた時にはあの小屋の中だったから、恐怖を感じる暇が無かった。

だが、今は自分の足で乗り込んだ真つ暗な牛車の中にいる。何をされるか分からない恐怖と、どこに連れていかけるか分からない恐怖。そして康行の無事を一刻も早く確認したい気持ちがある中でせめぎ合う。

せめて、康行の顔を見るまでは無事でいたい。

だが女一人の身ではどうする事も出来ず、ひたすら祈るよりほかなかった。

牛車は忍びやかに町の中を進み、いずこかの橋を渡り、町から離れていく。すると牛車は速度を上げ、時が移ったせいか町から離れた山が近付いているせいか、空気が変わってひんやりとして来た。どちにしても人の多い所からは大分離れてしまったのだろう。

やがて速度を早めていた車がまたゆっくりと進みだした。さらに坂道を登る気配がする。山の中に入って来たらしい。暗い車中がさらに暗さを増して、私は余計に身を固くしてしまう。

車は小石を踏み、草を踏み分けて進んでいるらしい。時折激しく揺れ、道端の草が轢き潰された匂いが漂っている。時折車に小枝が引つ掛る音がするから、普段牛車が通るところではない事が分かる。

牛飼いが持つているのであろう松明の明かりが、車の前の隙間からチラチラと差し込んできて、かろうじて自分たちのいるところが

分かる程度で、後はすべて深い闇に包まれている。夜の山中とはこれほど不気味なものなのかと、私も言葉を失ってしまっていた。

一緒に乗り合わせた男達も特に私に話かけて来る様子はない。どうやら彼らも無事に目的の場所まで私を運ぶまでは安心できずにいるようだ。緊張を強いられているのは私だけではないらしい。

そんな中で山道を進むうちに白々と夜が明けてきたようだ。車の中にもうつすらと朝日が差し込み、物の姿が見えて来ると少しだけホツとする。闇はそれほど心に恐怖を宿らせるのだ。

ところが突然、「わあっ！」と言う男の叫びが聞こえたかと思うと、いきなり牛車が止まり、車の中が大きく揺れて私も男達も身体を投げ出されてしまう。

何が起こったのかも分からないまま何とか身体を起こそうとすると、車に飛び込んできた誰かにその身を助け起こされた。

「花房、怪我は無いか？」

「康行！」

驚く暇もなく、康行は私を車から引つ張りおろす。一緒に乗っていた男達はまだ、身体を起ここせずにいた。

「逃げるんだ、早く」

そういう康行に引つ張られて私達は木々と草むらの中に飛び込み、駆け出した。

「康行、どうしてこんなところに？ 捕まっていたんじゃないの？」

「逃げだしたのさ。連中、俺の太刀を取り上げるのに気を取られて、腰に馬の蹄を削ってやるための小刀を下げているのに気がつかなかったんだ。俺を縛りあげて閉じ込めたはいいが、俺は小刀を使って縄を斬り、物入れの戸を壊してまんまと抜けだしたんだ」

そう言う康行に顔には大きなあざができていた。手からも血が流れている。

「ひどいあざ。あいつ、康行は無事だって言ったのに嘘つきだわ」

「命があつたんだから十分さ。この手は強引に縄を切ろうとしたんだから仕方がない」

康行は苦笑している。

「でも、どうして康行が狙われたのかしら？ 院とは何の関係もないのに」

「それを言ったら孫のお前だって関係ないはずだ。だが、院の狙いはとりあえずお前にあるらしい」

「私？ そんなに私って狙いやすいのかしら？」

「文一つでまんまとこんなところに連れて来られていちゃ、文句は言えないな。俺も捕まつたんだからお前の事は言えないが。ただ、なんだかお前には恨みとは別に興味を持っているような口ぶりだった。ああいう奴にはお前のように人の身代わりになったり、晒し者

になつてでも琴を弾き続けたり、俺をかばつて太刀の前に身を投げ出したりするようなことは理解できないだろう。お前の様な人間の考えている事を知りたがっているらしい」

「私自身に、興味があるって言うの？」

「そんな事を言つてたな。だが、良い感情ではないことは確かだ。そんな奴のところにお前が連れて行かれる前に助ける事が出来て良かった。俺のせいでお前が危うい目に遭つたんでは、俺も立つ瀬がない。お互い無事でよかつた。早くお邸に戻つてお前の警護も固めてもらおう」

私は逃げる足を止めた。康行が訝しげに立ち止まる。

「どうした、怪我でもしたか？」

「ね？ さっきの道の先に院様がいらつしやる山寺があるのね？」

「そうだが」

「康行。私、院様に会つて来るわ。あなたは殿やお方様に助けを呼んで来て。私は院様を足止めしておくから」

わがまま

「会って来るだって？ お前正気か？ 狙っている奴のところ、自ら捕まりに行くって言うのか？ やつとここまで逃げたって言うの？」

康行は怒るのも忘れたように目を丸くしてそう聞いた。

「院様の狙いが私にあるのならいくら逃げても無駄だわ。殿のお邸に戻れば今度はお方様や叔母を危険にさらしてしまう。中納言様や御爺さまへの恨みは過去の物だけど、私への興味は院様が今強く持っているものだろうから」

「中納言様達への恨みはもとからあるものじゃないか。お前がいようがいまいが、あの方々は狙われている。お前が院と会ったからと言って、あの方々への恨みが消えるわけじゃあるまい。ただ、お前が危険な目に会うだけだ。馬鹿なことは考えるな」

今度こそ康行は怒っていた。いや、怒ると言うより、私の勝手は許さないとその眼が言っている。その両手もしっかりと私の手をつかんでいた。

「馬鹿なことじゃないわ。院様がいまだに恨みを持っておられるのは、昔の傷が癒えないからじゃない。そんなのあまりにも長すぎるし不毛だわ。きっと、今の帝への嫉妬や私への何かの感情が院様を動かしているのよ。それなら私、そこから逃げるわけにはいかないわ」

康行の心配はもつともだ。きつと私より康行の言っていることの

方が正しい。でも、私はここで康行に折れるわけにはいかない気がした。私は院様から逃げるために都に戻った訳じゃない。

「その感情が危険だと言っているんだ。分からないのか？」

「分かってるわよ。分かっているけど逃げたくないの。院様と一度話をしておきたいの。だって御爺さまは院様を立ち直らせようとなさっていたんだから。私、御爺さまの心を院様に知って頂きたい」

「院の回りには欲の塊のような貴族や僧たちがべったりとくっついている。お前の声が届くかどうか分からないぞ。それなのにお前は自分の祖父のために、俺の心配をよそにして院を説得しようって言うのか？ 無茶なことだと分かっているのに」

私は御爺さまの事なんて知らない。顔すら分からない。ただ、慈しんで下さったと言う話を聞いただけ。康行の心配してくれる心はよく知っている。それでも。

「ごめん、康行。これは私のわがままなの。それでも私、院様と向かい合いたい。康行は絶対に私を助けに来てくれるでしょう？ だから、康行に甘えさせてもらいたい。康行が来てくれるまで、私が院様を足止めしておくから」

「何がお前をそこまで突き動かすんだ？ 俺はお前を院のところに行かせるわけにはいかない。そんなに言うなら俺が院のところに行く。お前は殿に助けを呼んでもらって来い」

康行はどうあっても私を行かせるものかと言わんばかりに、私の腕をしっかりとつかんだ。それ以上に目の光が鋭くなって、私を行かせないためならなんだってしかねない顔をする。

「それはできないわ。院様が興味を持っているのは私。私とやら言葉をかかわしたいと思われても康行を行かせたなら、院様はあんたを容赦なく斬って捨てると思う。院様と話ができるのは私か帝しかないの。それに私、真つ暗な車に乗せられていたから、帰り路も分からないし」

私も康行に負けないうように視線を送る。康行ならきつと分かってくれる。

「何より私も院様と話がしたいのよ。このまま院様に追われ続けながら都で暮らすなんてまっぴらだわ。言いたい事は言わせてもらう。今そうしなきゃ後悔するわ。約束したわよね？ 私達は幸せになるために都に戻るんだって」

「……院は俺のように説得されない。命だけじゃない。何をされるか分からないぞ」

「何もさせないわ。心配なら一刻も早く迎えに来て」

私は笑って見せた。その方が康行には覚悟が伝わるのを知っているから。

「ええいつ。こんなじゃじゃ馬、俺でさえ扱いかねる。いいか？ それならせめてしばらくはどこかに身をひそめて時間を稼いでくれ。向こうも必死で探しているはずだから隠れていてもいずれ見つかるだろう。だが、その間に少しでも山を下りておきたい」

「分かったわ。康行」

私は康行を見つめた。本当はもしかしたら彼の顔が見られるのが最後かもしれないと、心のどこかで思っていた。出来るだけしつかりとその顔を目に焼き付けたい。でも、そんな気持ちも伝わっては困る。見つめながらも笑顔が崩れないように、懸命にこらえる。

「どうした？」

「必ず、助けに来てね」

言葉ではそう言った。

「行って」

そう言っただけで康行の手を払うと、康行はふもとに向かって駆け出した。その姿を見届けると私は今逃げてきた道へと戻って行く。康行にはああいったけれど、私は隠れる気はなかった。

私が隠れると言っても山の中でのこと。右も左も分からないところでたいして動く事も出来ない。そんな事なら早く院様のところに行った方がいい。そして康行を追わせないようにした方が安全に康行を逃がす事が出来る。あとのことは私次第だ。

道に戻ると車の姿こそなかったが、轍の跡がくつきりと残っている。この後をたどって行けば誰かに出会うなり、山寺まで辿り着くなりするはずだ。私はできるだけ急いで、車の轍を見失わないように注意しながら山道を登って行った。

一方康行は山の道なき場所を駆け下りていた。花房に身を隠せと

は言ったが、こんな山の中では道に迷ったり、獣に襲われたりしないとも限らない。だが、ああまで院と話がしたいと花房が言う以上は、引きとめることは無理だ。そんな事が出来るなら、最初から花房は都に出て来ることなど無かつただろう。彼女がわがままを言いだしたらどうする事も出来ない。

「まったく、どうしようもない強情者だ」

あの調子では院の前でも言葉を選んだり、しおらしく見せたりなどはしないだろう。そんな花房が自分との別れ際に、「必ず助けに来てね」などと、彼女らしくもない言葉を言ってきた事が気になっていた。もしかしたら良からぬ考えでもあるのかもしれない。ぐずぐずはしていられない。

逃げ出す時に使った小刀で、目の前に伸びる小枝を払い、草をかき分け、時には岩に捕まり、崖地を滑り降りる。出来る限り距離を縮めて山を下って行く。

もう少しで山を下りきることが出来る。連れ去られた時は殴られた揚句馬の背に乗せられ、あれよと言う間に寺に連れて来られたが、山を強引に下りた事で行きとそう変わらぬ時間でふもとに出られそうだ。

だが、ここからは人の足で走るのだから時間がかかる。一刻も惜しいと言うのに。こんなことなら逃げる時に寺から馬を盗んでおけばよかった。

……待てよ。この辺は農地だ。耕す馬くらい、農家にいる筈じゃないか？

そう思つてふもとの農家を覗くと、まさしく今、朝の作業のためだろう。厩から馬を連れ出そうとする農夫の姿が目に入った。全力で農夫に向かつて行くと、

「すまない。この馬、貸してくれ！」

そう言うが早いか馬の背に乗り、その腹を思い切り蹴る。馬は驚いて走りだした。

「ど、泥棒！ 馬泥棒だー！」

農夫は慌てて追いかけてしようとするが、馬の脚には敵わない。見る間に離されてしまう。

「悪い、必ず返すから！」

よりによつてこの俺が馬泥棒する羽目になるとは。親父が聞いたら嘆くだろうな。いや、それ以上に今の状況を見たら花房の両親は息も止まるほど驚く事だろう。郷里が遠く離れていて本当に良かった。俺達は二人揃つてとんでもなく親不孝者だから。

「お前も驚かせて済まないな。だが、俺の大事な人の命がかかっているんだ。少しでも我慢して言う事を聞いてくれよな」

康行は馬にそう語りかけたが、驚いている馬はただ、狂つたように走り続けるばかりだった。

鞍もない馬の背に乗っているのはなかなかつらいが、仕方がない。全力で駆ける馬にしがみつくように乗って、ひたすら邸を目指す。その辺の役人に頼むのでは事情の説明が面倒だ。邸の人間に殿に言

づけてもらった方が早いはずだ。

そう思っていたのだが、京の町にようやく入ったところで見慣れた顔に行く先に見つけた。同じ邸にいる侍者だ。慌てて馬を止める。

「康行！ どこにいたんだ？ 花房さんもいなくなるし、役人の二人と正成様と女房の一人も姿を消して邸は今、大騒ぎだ」

「正成様達が？ 殿やお方様の許可なく連れ出したのか？」

「なぜ、正成様が役人に連れ出されるんだ？ お方様は事情は花房とお前が知っているとおっしゃったが、肝心のお前達が姿を消したから俺達には何が何だか分からないんだ」

役人が勝手に姿を消した。おそらくその役人も院の手の者に違いない。正成を逃がしてしまったか。これでは役人は当てにはならない。

「侍仲間を至急集めてくれ。花房が嵯峨野の院のところにおいて危ないんだ。役人には院の息がかかっている。あてにできない。だれか、直接殿に知らせてもらわないと」

女主（おんなあるじ）

「それなら俺が行く。忠長様を呼びだしてもらえば間違いが無いだろう。」

仲間の男はそう言ってくれる。あり難い。少しでも早く殿には知らせさせて欲しかった。

「ああ、忠長様なら安心だ。やすらぎさんの名前を出すといい。あまり役人に気取られたくないんだ。なるべく何気なく呼んでもらってくれ。」

「急ぎで何気なくか？ 注文が多いな。分かった、やってみよう。」

花房の危険は察していても役人がどれほど信頼できない状況か、あまり伝わってはいないのだろう。笑いながら答えている。だが、忠長様と殿には分かるはずだ。正成様でさえ油断の出来ない状態だったことを二人は知ってくれている。

康行は伝言を任せるとまた馬を走らせ、真つ直ぐ邸に向かった。事情を知る康行がようやく帰ったので、門番もすんなりと通してくれ、早くお方様に説明するようにと促される。

馬を下りると直接やすらぎが出迎えて、お方様のところへ引つ張って行く。

「俺がこんな奥に入っちゃまずいんじゃないのか？」

「何言ってるの。以前はお方様の寝所の塗り込めの中に隠れたこ

とだってあるじゃない。花房さんの身が危険なんでしょう？ あな
たから直接話を聞けなければお方様だって納得して下さらないわよ」

康行の躊躇などかまうことなくやすらぎは、邸のもっとも奥まっ
た所にあるお方様のお住まいになる北の寢殿の庭に連れて来ると、
康行をそこに控えさせ、自分は身も隠さずに（隠しても今更だが）
すのこの上で御簾と几帳の向こうにいらっしゃるお方様に声をかけ
た。そして、

「さあ、詳しく説明してちょうだい。昨夜から何があったの？」と、
質問する。

気は焦ったがとにかく邸の主に事の次第を理解してもらわなけれ
ばならない。康行は出来るだけ手短に正成が小雪の手引きでお方様
の寢所に近づいたこと、花房がそこに役人に待機させていたこと、
だがその役人は院の息がかかっていたこと、それを利用して自分た
ちが院にさらわれ、花房だけが院のところへと向かった事を説明し
た。

「それじゃ正成たちと役人が姿を消したのも皆、院の手の内だった
と考えていいのかしら？」

やすらぎが康行に聞くとというより、自分が確認するように言った。

「おそらくそうでしょう。このままでは花房の身が危ない。だが、
この役人はどこまで信用して良いか分からない。殿には連絡しま
したが、信用のおける人物をそろえるには時間がかかるでしょう」

「そうかもしれないけど、早く助けに行かないと花房さんの身が…
…」

やすらぎの声にも焦りが混じる。奥のお方様も息を飲んでいる様子を感じられた。

「そこでお方様にお願ひがあるんです。ここの邸で飼われている侍を全員、院のいる山寺に俺に連れて行かせてもらいたいです」

康行は深々と頭を下げながら言った。

「侍たちを全員？ 役人も連れずに康行達だけで行くというの？」

さすがにやすらぎも驚いた顔をする。そんな事はおそらく前例がないだろう。

「申し訳ありませんが、正直お役人はこの場合あまり信用できません。相手が院では最後までこちらの味方でいてもらえるか分かりませんし、本当に花房の身を守ってもらえるかも分かりません。最悪、院の方に寝返られたら花房に何が起こるか分からないのです。この邸の侍たちは私が大殿に飼われていた頃からの顔なじみばかりです。皆、気心が知れていて信用できる。どうか俺達に花房を助けに行くことを許してもらいたいです」

「でも……。そんな特別な事を、殿の御許しもなく決めてしまうなんて」

やすらぎは顔色を変えていた。そんな事を許可してもし、侍たちが何か問題でも起こすものなら、責任は大将様が問われる事になる。しかもお方様や更衣様のために動くのではなく、お方様が個人的に使っている女房のためにそこまでするというのは、何かあったらどれほどの非難を受けるか見当もつかないことだ。

お二人の立場が重たいだけに、やすらぎには花房を心配する心とは別に、戸惑う心が強く出てしまった。それほど康行は難しい願いを言ってきたのだ。

「かまいません。康行、早く花房を助けに行きなさい。殿には私からお伝えします。こちらの守りは役人と下男たちがいれば大丈夫。役人も主上に召しあげられている更衣様や、近衛の大将夫人である私を危険な目に会わせるわけにはいかないはずですから」

戸惑うやすらぎをよそに、初花の上は自分からそう声をかけた。きっぱりとした、何者にも反論を許さない言い方だった。

「花房は私に命懸けで仕え続けてくれたわ。何の他意も打算もなく、私への好意だけで自分の役目以上の事をしてくれた。彼女はそれほどひたむきに私に向かってくれたの。康行はそんな花房の心を知っている。そして、それを私も知っているのが分かってから頼んで来たのよ。私と花房の間には確かな信頼がある事を信じてくれたの。単に花房の主人としてではなく、人としての信頼を寄せてくれているの。私はこれに応えなければならぬわ」

そしてやすらぎにそばに来るように言うと、

「邸中の侍を集めて皆に馬を与えなさい。康行に協力してやるのです。役人たちには使用人と共に各門をしつかりと守らせなさい。たとえ何人たりとも私の許可なくこの邸に立ち入らせないようにするのです。役人が勝手に邸を出る事も許しません。康行達を送りだしたら、誰も門を出入りする事が無いようにしなさい。殿がお留守の時は私がこの女主おんなあまのじです。私の言葉には皆に従ってもらいます」

と、おっしやった。

「康行、必ず花房を無事に連れ帰るのですよ。さあ、急いで」

そうお方様が言つとやすらぎは侍所へ、乳母は役人のところへと急ぐ。康行は深々と頭を下げた後、厩へと急いだ。

康行が邸に飛び込んだ頃、正成と小雪は身体を縛られ車の中にいた。てつきり検非違使達のいる所か、大将様の前に突き出されるものと思つていたが、どうやら方角が違う。明らかに都からは離れようとしてゐるらしい。

「一体どこに連れて行かれるのだ？　いくら私が罪人同然とはいえ、ぞんざいに扱つて良いというものでもあるまい。確かに私は主の許しを得ずに寢所に入ったが、それ以外は何もしていない。初花の上様の御姿さえ見てはいないのだ」

正成はまだ、心惜しげにそう言った。こんなことになるのなら、いつそ一度は強引にでもその御姿を垣間見ておけばよかつた……。

「そつだ、お前は肝心の大将様の妻の姿を見てはいない。このままでは未練も残るだろう。それならいつそ、大将様に逆らつて見てはいかがかな？」

正成の隣にいる役人がそう言った。一体何を言つてゐるんだ？　と、正成は思つたが、

「実は俺達は嵯峨野の院様にご同情申し上げている。院様の御退位がもとで不遇の身になられた方々にもだ。どうだ、ここで俺達に協力をしないか？ このままではお前は罪人同然に扱われた上、大納言様にも中納言様にも遠ざけられ、お前の一族は二度と日の目を見る事が無くなってしまうだろう。だが、世の中が変わればお前の立場は一変する事になる」

「世の中が変わる？」

「今帝が御退位し、院がもう一度帝に立たれば、世の中は全てが変わるさ」

「そんなバカなこと、出来る筈がないだろう」

「出来るかどうかはやってみなければわからないぞ。院が直接帝になる事が出来なくても、大納言や中納言、大后に関わる者らをすべて排斥してしまえば院の力が返り咲いてもおかしくは無い」

「たとえ帝が御退位なさっても東宮様がいらつしやるじゃないか。東宮様の母上は大納言家の御長女だ。大納言家の権力は揺るがない」

「東宮はまだ赤子だ。赤子が突然亡くなる事はよくあること。東宮と言えど人の子。無事に成長なさる保証はないだろう」

「まさか、東宮様の御命を狙っているのか？」

「俺達が狙うわけではない。後宮の中には色々な事があるのだろう。だが、必ず院様の世は来る。あのような強引な御国譲りが許されていいはずがない」

正成は目が覚めた。初花の上への恋情はあるものの、それによつて帝への忠誠や自らが今まで勤めてきた役目への誇りまでも失つたわけではなかった。しかも幼い東宮様の命を奪おうなどは露にも思わない。それこそ神や仏すら恐れない、非道な御国譲りではないか。

「人を見下すのも大概にしろ。確かに私は罪を犯したが、それでも帝に忠誠を誓つたこの国の役人だ。どんな事があるうとも帝と東宮様をお守りするのが私の使命。お前達の様な日和見の悪党と一緒にするな！」

そう言つて正成ははねつけた。腹に力を込め、奥歯を食いしばつて役人を睨みつけた。

「ほう、そこまで言うなら仕方がない。この女がどうなつてもかまわんのだな？」

役人がそう言つともう一人の男が小雪の首に細い紐を回した。そしてその首を締めあげる。

落すべき命

「小雪！」

正成の顔色が変わるのを見て、男が締め上げた手を緩める。小雪はむせかえり、苦しげに息をしていた。

「いくら大将の妻に近づくために利用した女とは言え長い仲。情をかわし続けた女であろう。目の前で殺されては気分が悪いのではな
いか？ この女はお前に利用されたにもかかわらず冷たくあしらわ
れて絶望し、我々の元から逃げ出して山中で首をくくって死ぬのだ。
お前のために自分の主人を裏切った程の女を、そんな目には会わせ
たくはないだろう？ 大人しく我々の方についた方が利口だぞ」

男は顔色すら変えることなく紐を手にしたまま小雪の背後でそう
言った。正成は齒ぎしりをする。

「正成様。こんな戯言に耳を傾けてはいけません」

小雪は枯れた声でそう言った。

「戯言ではないぞ。世が変われば院様に逆らい続けた大納言、中納
言、大将も失脚する。大将はどこかの地方に流されるか、さもなく
ば世を捨てることになる。まだ若い妻を巻き込まないためにお前の
妻にすればよいのだ。お前の長年の願いが叶うではないか」

「いいえ、戯言よ。そんな事したらお方様はご不幸になる。あな
たの今の思いは本当の御愛情じゃない。手に入れられない方への未
練と、殿への嫉妬があなたの心を蝕んでしまっているの。ご自分の

恋情のために私に情けをかけたたり、お方様の寢所に忍び込もうとなさったり。きつと、本当にお方様にお会いになつたら、あなたはご自分を抑える事が出来なかつたでしょう。幼い子が母を求めるように、お方様のお苦しみなど忘れてしまわれたに違いないわ。もしそうなっていたら私はお方様を傷つけ、あなたの人生を狂わせてしまつていたの。正成様、私は間違つていました。私、あなたを愛おしいと思つていただけ、それも本物じゃ無かつた。あなたを慕う事よりあなたに溺れる事に酔つていただけなの。ここで私が命を落すのは、私自身の罪なのよ。あなたはこれ以上、罪を重ねないで」

首を絞められたあとで苦しいはずの息を、懸命に抑えながら小雪は訴えて来る。ようやく目が覚めた正成に小雪の言葉は重かつた。

「だめだ、私のためにお前を死なせるわけにはいかない」

正成はそう言った。

「そうだろう。おとなしく我々の言う事を聞くんだ。お前はあの邸の内部も、御所の事も良く知っているからな。間違いなく院様のお役に立つはずだ」

役人がそう言うところの空気が緩んだ。その隙に正成は小雪の傍にいた男に突進した。男は転がるようにひっくりかえり、車は大きく揺れて傾いた。

今度は小雪の身体を無理やり車から押し出してやる。自らも車から飛び降りると、

「逃げるぞ、小雪」

そう言つて小雪が立ちあがるのを助ける。身体を縄で縛られていたので立ち上がりにくい。どうにか起き上がって走りだしたが、すぐに役人たちが追つてきた。

「いかん。このままでは追いつかれる。小雪、逃げのびてこの事を邸の者に伝えるんだ。役人以外の誰でもいいから」

正成はそう言つと踵を返して役人たちの方へと向かつて行く。

そのまま役人の一人に体当たりすると、不意をつかれて体制を崩した男のアゴに、自分の頭で頭突きをくらわす。だが、その後ろからもう一人が太刀を抜いて構えていた。

「正成様！」

小雪が悲鳴のように叫んだが、男は正成に刀を振り下ろした。正成も避けようとしたのだが、太刀の刃は正成の肩から腕に向かつて斬りつけ、縄が切れるとともにおびただしい血が流れ出る。

だが正成は深手を負いながらも相手の手元をたたきつけ、太刀を奪い取つた。そのまま返す手で相手を斬りつける。男も胸元に傷を追い、脅えた目でその場から逃げだした。頭突きを受けた男も慌ててその後を追つ。

だが、男達が去ると正成は太刀を投げ出し、その場に倒れ伏してしまつた。

「正成様、しつかり」

小雪が正成の元に駆けつけるが、

「何をしている。早く邸に伝えるんだ。東宮様が危ない」

「でも、正成様。血が……」

「頼む。罪のために命を落すべきは私の方だ。私は自分の欲望のために信頼して下さった方々をことごとく裏切ってしまった。帝、大將様、初花の上……そしてお前もだ。せめて自分の誇りだけは守りたい。どうか東宮様の命だけは守ってやってくれ。早く、この事を知らせに行ってくれ」

「すぐ、知らせるわ。だから正成様、死なないで。必ずすぐに人を呼んで来るから」

そう言つと、小雪は投げ捨てられた太刀の刃で自分の縄を斬ると、帯紐をとき正成の傷口に巻いて縛りつけた。

「決して死んではいけないわ。待っていてください」

そう言つて小雪が走りだすと、行く手に馬の集団が見える。一瞬、避けなければと思つたが、良く見るとそれは見知つた邸の侍たちの面々だった。

良かった！ 今なら正成様を助けられるかもしれない。

小雪は道の真ん中に飛び出し、両手を広げた。先頭にいた康行が慌てて馬を止める。

「どう、どうつ。何だ、道の真ん中に飛び出して危ないじゃないか。危つく馬に蹴り倒されるところだぞ。……おや、あんたは」

「お願い！ 正成様を助けて下さい！ 御命が危ないんです。そして東宮様も狙われているんです！」

小雪は涙ながらに康行に懇願した。

「正成の命が危ない？ どういう事だ」

康行と数人の侍が馬から降りて聞くと、

「嵯峨野の院様の息のかかった役人から私を逃がそうとして、斬られてしまったんです。役人は逃げましたが正成様が深手を負ってしまつて。とにかくこっちに来て下さい」

小雪の指さす所に男が横たわっているのが見える。近づくと正成が息も荒く朦朧としていた。

「かなりの深手だ。だが、しっかりと止血はされている。今すぐ邸に運べば助かるかもしれない。俺が馬で運ぼう」

侍の一人がそう言つて正成を背負つた。

「お願いです。私もどなたかの馬でお邸に運んでいただけませんか？ 東宮様の身が危ないのです」

「東宮様が？」

「後宮の誰かに狙われています。でも、私やあなた方では御所に訴えてもきつと聞き入れてはもらえません。お邸にいらっしやる更衣様からお伝えいただければ、きつと……」

すると正成を背負った侍の隣にいる侍が馬を下りた。

「分かった。あんたは俺の馬に乗れ。康行、お前は急いで花房さんを助けに行くんだ。この二人を邸に届けたら俺達もそっちに向かうから」

「すまない。その二人を頼む」

そう言うと二人の侍はそれぞれに瀕死の正成と小雪を載せて邸へと馬を走らせた。

「よし、俺達も急ぐぞ」

康行も馬に乗ると、花房がいるはずの山寺へと急ぎ向かった。

私はゆっくりと山道を登っていた。轍の跡を見逃さないようにと下ばかり向いて歩いていたので、目の前に山寺の山門に続く石段がある事に目前まで気がつかなかった。

人の気配を感じたのでようやく顔を上げると、

「そなた、花房殿か？」

と、若い僧に訊ねられた。信じられないと言った表情だ。

「ええ、こちらは嵯峨野の院がいらっしやる山寺ですね？ 院に御

取次下さいます？ 私花房が院にお話をしたくてまいりましたと

私は胸を張ってそう言った。

昔話

若い僧は私を寺の中に入れてくれた。そしてすぐに取り次いでくれるという。間もなく立派な法衣を身にまとった、中納言様よりも少しお歳若なくらいの方が私の前に現れた。

「お前が、花房か」

僧侶の姿をしたその方が訊ねた。

「そうです。あなたが嵯峨野の院様ですか？ 主上の兄上でいらっしやる」

「いかにも、私がそうだ。帝の兄と言うのはよけいだが」

よけいと言われてしまったが、どうしてもそう実感せずにはいられなかった。お顔の形や鼻の作り。口の作りなどさすがは血を分けた御兄弟。実によく似ていらっしやる。細かく見れば違う所も多いしお二人は御母上が違っていらっしやるのだが、持っている雰囲気というものが良く似ているのだ。

だが、その眼は違っていた。主上の持つ柔和さはまるで感じられず、険の立った冷たい光を蓄えた様なギラギラした眼を持っていらっしやる。

そして主上よりもやや御やつれ気味で、それもこの方をとげとげしく見せているようだ。院様は主上がお歳を召して、いかめしくなられたらこんな感じかもしれないと思わせる風貌だった。

「お前を逃がしたという、若い侍者はどうした？ 寺の外にでも隠れているのか？ ここには私に組する山賊達も忍んでいる。男一人ではどうする事も出来ないぞ」

「康行なら先に逃がしました。そろそろお邸につく頃です。もう彼に手は出せないわ」

実際にはいくら男の足とはいえ、邸についたかどうかはおぼつかないが、康行の安全のためにはそう言っておいた方がいい。私の言葉を信じれば康行に追手がかかる事は無いだろう。

「侍の方には用は無い。私が見があるのはそなただ。よく、この寺に参られた。歓迎しよう」

院はそうおっしゃりながら敷物の上にお座りになると、ゆったりと脇息に寄りかかってくつろがれながら私を見た。

「少し、私の昔話に付き合っていたらどう。私を大切にしてくれた者達の話」

「お呼びとお聞きしましたが、いかがなされましたか？ 主上」

御所の清涼殿で、かなり年を重ねた白髪交じりの古参の女房が、主上の前に参上していた。

「ああ、右衛門の命婦^{みよつぶ}。いや、大した用ではないのだ。少し琵琶の音が聞きたくなって」

「陣の座で何か気の張る事でもございましたか？ 私のつたない音色でよろしければお耳をお慰めさせていただきますわ」

命婦はそう言つと女官に渡された琵琶を手にとって、慣れた手つきで琵琶を奏ではじめる。

この右衛門の命婦は亡くなられた先々代の中宮に付き添つて御所に上がつてからというもの、その後、前の帝について今帝でいらつしやる主上の御世話も見てきた、後宮の中でもかなりの古株の女房だ。

祝いの席などでは晴れやかな歌を詠み、言葉尻も優しく落ち着きのある声なので物語を読ませると、誰もが安心して聞き入つてしまふ。そして琵琶の名手でもあつた。

主上も何かにつけては心を落ち着かせるために、彼女の琵琶の音を所望している。

「命婦は随分長く後宮にいるようだね。私の兄上もずいぶん世話になつたらしいから」

「でも、嵯峨野の院様と主上では、まるで器が違いますわ。主上は何事にも鷹揚でいらつしやるから」

命婦は琵琶を引く手を休めることなく答える。

「私が子供の頃から命婦はそう言つてくれていたね。いつでも兄上より私を褒めてくれた。おかげで私は自分よりずっと年上の兄上に引け目を感じることなく育つ事が出来た」

「わざとそう言っていた訳ではございませんわ。本当に主上は落ち着いたお心をお持ちの御子様でしたから。院様がお子様の時は気が休まる暇がございませんでしたもの」

「子供の時は命婦が私にとって一番の味方だった。きっと母上以上だ」

「そのような事は御座いません。母が子を想う心は、何にも勝るものでございます」

「……命婦は、自分の子を亡くしていたね。私が生まれるより前に」

「ええ、はかない運命を持って生まれた子だったのでしよう。それは悲しい事でしたが、その分私は乳母でもございませんのに主上という素晴らしい方のお世話をさせていただけました。もったいない事ですわ」

「私の兄上も、だね？」

「主上の方が立派にお育ちになられました。院様はお気の難しさが大人になられても直りませんでしたし、物事に躊躇なさらないところが心配した通りの結果をもたらしてしまいました。主上は落ち着いておられて……」

「そうやって、兄上と比べては私を褒め続けてくれる。命婦、それはあなたの私への真心と思って良いのだろうか？」

「何をおっしゃっているのですか？ 私はいつも心より主上の素晴らしさを感じているだけなのですが」

「そして、兄上の素晴らしさもあなたはよく知っていたはずだ。私を兄上と比べるとという事は兄上の事をよく知り尽くしているという事だ。あなたは私の兄の事を、私や母上よりも知っている」

「ただ、長くここにいると言っただけの事です」

「そして私達を長く見守ってくれている。あなたが私達に捧げられる献身は本物だ。私はそれを疑う事は無い。ただ、その想いは兄上により強く持つておいでなのではありませんか？」

琵琶の音が止まる。右衛門の命婦が、主上を見つめる。

「あなたが兄上のお世話をなさったのは、ご自分の子を亡くした直後だったとか。あなたは兄上に自分の子の面影を重ねていらっしやるのではありませんか？」

右衛門の手が僅かに震え、琵琶の音は止まったまま表情が固まって行く。

「私は主上を尊敬しています。太后様も」

「それは勿論そうでしょう。そのお心は確かだと思う。だが、それ以上に兄上の事はご心配して下さい。兄上はそのあなたの一途なお心を利用しているではありませんか？」

「どうして、そのような事をおっしゃるのですか？」

右衛門の命婦がそう言った途端、その目から大粒の涙が落ちた。

私は山寺で院と向かい合った。院は私と話す機会をようやく得て、何か満足そうだ。

「私は母を亡くした後、乳母と右衛門の命婦に育てられた。二人とも本当に私によくしてくれて、私には母との思い出よりもこの二人との思い出の方が、よほど大切に思えるほどになっていた」

院は物憂げな表情で語り始める。

「乳母はとにかく私を甘やかしてくれた。命婦の方はいつも私の傍にいてあれこれと世話を焼いてくれた。なんでも命婦は子供を失ったばかりで、その想いをすべて私に傾けてくれたようだ。乳母は病気で若いうちに亡くなってしまったが、その時も命婦が私を慰め、支えてくれた」

院は私をねめつけるように視線を険しくした。

「だが、それはほんのひと時の事だった。新しく中宮になった方は、私を煙たがっていた。彼女は自らの手で、国母（帝の母）になる野望を抱いていた。後宮に上がった時から中宮の座を狙っていたが私の母にその座を奪われ、私と母を恨んでいたらしい。そんな中宮が私によい感情を持つ事は無かったが、それなら私を放っておいて欲しかった。しかし彼女は私を監視し、何をすることも口を出し、そして私を否定し続けた」

その辺の話は私も知っている。都でも噂になり、今では故郷の者でさえ知っているだろう。

「さらに中宮は私から命婦を奪った。彼女を自分付きの女房とし、東宮が生まれるとその世話を彼女にさせた。もし、彼女がもっと若ければどうにかして彼女を乳母にしようとした事だろう。中宮は命婦の夫にまで口を出し、彼女を無理やり自分に従わせたのだから」

母親を亡くし、乳母を亡くし、新たな母に疎まれる。子供の頃の院が世間の同情を買ったのは当然だろう。だが、実際には身近な母同然の人さえも奪われていた。院の受けた喪失感は想像以上に深いものだったに違いない。

「だが、私が奪われたのは命婦だけではない。私は自分が慕わしく思った相手は全て、あの母子に奪われ続けたのだ」

院の目が怪しく光る。それは遠い過去の怒りというより、今はっきりと感じている感情が表している表情にさえ思えた。

人の心

「命婦は私から離れる際に、私に一匹の子猫をくれた。後宮には犬も猫もいるが犬は殿上する事が出来ないため、庭先を駆け回るばかりで私の手に触れる機会は少ない。猫にはきちんと位を与え、乳母をつけて面倒を見てもらう事が出来る。おかげで私は随分慰められていたのだが、この乳母が中宮に言いくるめられてその猫を中宮の元に連れ去ってしまった。彼女は否定したがこの乳母意外に猫を連れ去る者など考えられないのだ」

慕わしい物は全て、今の太后様に奪われた。それは小さな生き物にまで及んだのか。

「その猫はその後どうなったと思う？」

院が皮肉な笑いをお顔ににじませてお聞きになる。

「もしや……」

「そう、その猫は打ち殺されてしまった。役人が外猫と見間違えたという事になっているがそのような事は信じられない。猫は中宮に懐かなかつた。赤子だった東宮にはもつと懐く事は無い。いつも私の元に戻るうとする猫を、中宮は疎まれたに違いない。まるで私を疎むように」

「院様と猫は違います」

「いや、中宮にとっては同じだっただろう。中宮は本当なら私を手にかけたいくらい憎んでいらした。花房は私の顔を見て弟を想い浮

かべたであろう？ 皮肉な事に私は弟によく似ている。中宮にとつては憎い私の母から生まれたにもかかわらず、私は父上や弟によく似てしまった。それは中宮の憎しみをより強めるものだったに違いない。その猫は私の身代わりに殺されたのだ」

憎しみの対象が我が子に似ている。それはどんな心境なのだろう？

「私は自分が帝の地位に立った時、真つ先にその乳母を処分した。位を取り上げ、御所から追い出した。私は激しく非難を受けた。だが、彼女は位を失っただけではないか。私の小さな猫はいたづらながら殺されてしまったのだ。人にとっては命というのは位に比べよほど軽い物らしい。私が狂っていると言うなら、あの御所の中の人間は全て狂っているのではないか？」

「位はただの権威ではないわ。それで一族を養い、自分の役目を担っているんです」

「小さな生き物を打ち殺す役目をか？ 命とははかないものよ」

院様は笑っておられた。ぞつとするような笑顔だ。

「私は非難した者達も次々処分した。おかげで私の周りの者は皆が私を恐れはじめた。私の中宮になった女人さえそうだった。私には誰ひとり味方はいなかった。ただ、一人の女人を除いて」

「お亡くなりになった、女御様ですね？」

「そうだ。彼女だけは私の孤独を理解してくれた。私の感情がどれほど高ぶるうともそのすべてを受け入れてくれた。まるで、亡くなった乳母が生まれ変わったような方だった」

「若くにお亡くなりになったのは、お気の毒でした」

私の言葉を受けて、院の顔色が変わられた。

「気の毒？ ああ、気の毒だ。お前の祖父に余計な事を言われて、ついには病に冒されて。彼女を失った時、私はどれほど絶望したか」

「それは誤解です。誤解なんです。私は祖父の本当の心を伝えたくてここに来たのです。祖父は本当に院様を心から心配していたのです」

私は声を強くして言う。ここを分かって頂くために私はここにいるのだ。

「皆、下がってくれ。命婦と二人だけで話したい」

主上はそう言って女官や女房達を下がらせた。命婦は嗚咽をこらえてうつむいている。

「命婦。私はいつもあなたに自信を与えてもらっていた。その事は今でも感謝している。そして、感謝しているからこそあなたを救いたい。あなたの心を苦しめる闇から、あなたを解き放ちたいのだ」

命婦は首を振った。

「人の闇というものは、その人が自ら作り上げるもの。他人が手を

出せるものではありません。己が作った闇は、己が消し去るよりほかないのです」

「やはりあなたには、苦しめられている闇があるのですね？ もうずっと、長いこと」

主上は悲しげにお聞きになった。

「いつからお気づきになっておられたのですか？」

命婦はこぼれた涙をぬぐいながら聞いた。

「いつともなく……。あなたが私を兄上と比べる時、あなたはどこか苦しげでしたから。いつもならば厳しい中にもお優しく、心細やかに接して下さるあなたが兄上と比べる時に限って心落ち着かぬような様子をお見せになっていました。そういう事は表面を取り繕っても分かるもの。本当は兄上の事を大切に思っておられるのではないかと」

「さすがは国の帝になられる方ですわ。私の様なつまらぬ女にまでお心を砕いて下さる。主上は本当に、良い帝になりました。私は鼻が高うございます」

命婦はそう言つと、「コホン」と小さくせき込んだ。

「失礼いたします」

そう言つて懐から小さな紙包みを手に取つた。それを何気なさげに口元に運ぼうとする。

「やめよ！」

突然、主上の横に据えられていた几帳の陰から、大将が飛び出した。命婦の手をつかもうとその手を伸ばす。命婦は大将を避けながら包みの中身を開く。そして……

「花房。そなた、年はいくつだ？」

「十六です」

「では、女御が生きていた頃はお前は生まれていないな。生まれていたとしてもほんの赤子だ。なぜお前に真実が分かるというのだ」

「私が生まれているからでございます。院様は、私の生まれた事情をどのように聞いていらっしゃいますか？」

「そなたの母が邸からさらわれ、後に懐妊して邸に戻された。そなたはその時の子であろう？ 女御の私への思いやりを政務の妨げと切つて捨てた大臣の事。自分の娘がそのような体裁の悪い事になったのだ。そなたを都に置いておけず、憎いはずの父親の故郷に遠ざけたのも頷ける」

「それは違います。私は祖父に遠ざけられたものではありません。むしろ祖父に守られたのです。院様は世間のうわさに惑わされていらつしやいます。私は祖父に助けられて、この世に生まれたのでございます」

「そなたは、あの大臣に助けられたというのか？」

「私ばかりではありません。私の父と母も助けられました。その証拠に私の父は祖父から受取った中納言様の書いた文を持っております。中納言様が祈祷の僧に院様を騙し賺せとそそのかされた文です。院様は中納言様に騙されたのです」

「それは分かっている。私はあの者によって位を譲る事になった。だが、今更私には帝の位など未練はない。いや、もともと帝になどなりたくてなつた訳ではないのだ。生まれ持った宿命にあらがう事が出来なかつただけだ」

「誰にでも宿命というものはございます。院様だけではありません。私の父と母が結ばれたのもおそらくは宿命。私が生まれて来たのも宿命だったのでしょう。ただ、それは祖父が身分の違つた父と母を守つた結果でした。祖父はそういう方だったので」

院様は不思議そうな顔をした。

「お前は会つたことのない祖父を、なぜそのように信じられる。なぜ自分が生まれる前に起こつた事を信じ、このような所に来てまで祖父の汚名を晴らそうとするのだ？」

「祖父のためでは御座いません。院様のためです。院様が人を信じられなくなったのが私の祖父への誤解のせいならば、どうしても誤解を解かなければなりません。そうしなければ院様は人を信じる心を取り戻す事が出来ないではありませんか？」

院はニヤリとされる。

「人を信じる？ そのような心、私には……」

「ございますわ。亡くなった女御様へのお心は、決して失ってはおられないでしょう？」

「女御が生きていた頃までなら持っていたかもしれない。しかし今ではそのような心は忘れてしまっている。いや、そういう心さえも現世の人々に奪われてしまったのかもしれない。私は人の心をも奪われてしまったのだよ」

「心の自由は誰にも奪う事は出来ません。ご自分次第のはずです」

「ではそれでよい。私は自ら人の心を手放したのだ。幼い東宮の命を奪うほどに」

「東宮様の……まさか」

私は息を飲んだ。すると、

「失礼します。御所にいる者から知らせが届きました」

さつき私を案内した、若い僧が院様に声をかけた。

「うむ、首尾よくいったのか？」

「失敗でございます。右衛門の命婦は主上に見破られ、東宮に盛る毒を自ら煽って言切れたそうです」

僧は、淡々と知らせを伝えていた。

守の無き宿

「院様は、ご自分の母のように慕っておられた方を、東宮様の御命を奪う道具として利用なさったのですか？」

私は背にいやな汗をかきながら聞いた。

「その通りだ。命婦は私への罪悪感から逃れることは出来なかったのだ。私のために結局はこうして命を落としてくれた。今こそ命婦は私の元に帰って来てくれたのだ」

院様は視線を落しながらも満足げにそうおっしゃった。

「なんて、非道な事を」

「非道？ 小さな命を奪い、私を孤独に追い詰め、陣の座のみならず後宮までも根回しによって私や私の母に関わる者を不幸にする事は非道ではないというのか？ 帝という地位は決して幸福な立場ではない。私は人の心を失い、帝はこうして裏切られる。これも帝の宿命であろう」

院様は意地の悪そうなお顔で私を見る。

「教えてやろうか？ 大后はあの中納言を手なづけている大納言の事を快くは思っていない。大納言の権力のために仕方なく認めているだけだ。帝の中宮はその大納言の娘。大后と大納言の関係次第では東宮も政略に巻き込まれるだろう。裏切られたり人の心を失うくらいなら、物心つかぬうちに命を終えるのも不幸ではない」

「でも、実際に亡くなられたのは命婦様ではないですか！ それに帝や東宮様がお幸せかどうかなんて、院様には決められないわ。そんなの帝や東宮様次第よ！」

「そなたには内裏だいりという場所が分かつてはおらぬのだ。あそこは人の心を狂わせる。人が人で無くなる場所なのだ。私は私の母や乳母、私の愛妾が本当に病魔によって亡くなったのかも疑っている。私が恨んでいるのは過去ではない。今もそのようなことがまかり通る内裏のありようを恨んでいるのだ。地位と憎しみが渦巻く内裏は虚実が常に入り混じる場所。誰も幸せにはなれぬ場所なのだ」

「ご自分がそうだったからって、他の方の命を奪っていい理屈にはならないわ。その方の命と心はその方の物。誰にも勝手に奪う権利なんてないはずよ」

「たしかに権利など無い。だが私は、非道には非道で答えてやっただけだ。私は非道によって奪われた者達によって生かされている。花房、そなたの命もそうだ」

「私が？ なぜ」

「そなたが生まれた真実はともかく、そなたの祖父母と母は心ない都人の噂によつて、心労の末に奪われたようなものだろう。そなたも非道に奪われた命に生かされている。その上都人はお前によい噂をしない。下司の子が貴人の女房になつていて事を足げざまに罵るばかりだ。ある意味恐れを抱く私への噂よりもたちが悪い。そなたはそのような都の人間が憎くは無いのか？」

私は院様の目をしっかりと見た。

「私は、郷里で人を信じる事を教えられて育ちました。都に出てからも信じあつた心を何よりの頼りに生きてきました。私は郷里で育つ事が出来て幸せです。誰が何と言おうと身分は低くとも父の娘として生まれる事が出来て幸せなのです」

「成程。田舎育ちとは気楽なものだ。だが悔しくは無いのか？　あなたは琴の名手と聞く。父の血がいやしくなければそなたの才は誰ももつと称賛したであろうに。世の人々や貴人として才を認められる者達を妬ましいとか、恨もうとは思わぬのか？」

「思いません。それよりも父や育ての母や様々な方から受けた愛情の方が私には大切ですから」

「それは、果して本心であろうかのう？」

院は疑わしげに私を覗き見た。どこか、おからかいになっていらつしやるようにも見える。

「……こちらの御寺には、琴はございますか？」

「琴か？　ありきたりな和琴なら一応あるが」

「それで結構でございます。私の本心を知りたいのなら、私の琴をお聞きください。私は琴弾き。言葉よりも琴の音にその心は表れますから」

「よかるう。今、用意させよう」

そう言つて院様は奥から人を呼び、琴を持ってくるように告げた。

「どうです、正成の具合は」

初花の上は正成の容体を見てきたやすらぎに問いかけた。

「ええ、どうやら助かりそうです。典薬も、もう大丈夫だろうと申しておりますし」

「良かったわ。正成と小雪は院とは関係が無かったようだし。二人とも悪い人間ではないのだから」

「本当にようございました。けれどもこれでは役人たちは本当にどこまで信用して良いのか不安です。侍たちを全て康行と行かせてしまつて良かったのでしょうか？」

やすらぎは不安そうに聞いた。侍たちを行かせてしまつたので邸の内は役人以外は僅かな使用人と女子供ばかり。もし、多数の役人に裏切られたらどうする事も出来ない。母親である乳母がやすらぎをたしなめる目つきをしたが、その顔はやはり不安を隠しきれないものだった。なにしろ今、邸には更衣様もおられるのだから。

「大丈夫。私にはあなた達が、更衣様にも女房達がいいますもの。役人たちよりも頼りにしているわ」

上はいつものようにほほ笑んだ。そこに女房が何か文を持ってきた。

「失礼します。堀河の姫君様からお文と、警護の者たちが参ってお

ります」

「堀河から、人が？」

驚きながらも文を開けると、

「ほりふかき わがやどなれば こころなき ひとこえがたき もり（守）もいらずに」

私の住む堀河の堀は深いので、心無い者も越えるのが難しく警護も要りません。という歌と、

「出過ぎた真似とつとおしくお思いにならないで下さい。父は蔵人頭。警護の者は用意できますが、私にそれほどの守りは必要ございませんから」

という言葉が添えられていた。

「まあ、これは姫君の御真筆。ご自分の事も顧みず、私たちを心配して下さったんだわ」

初花の上は早速警備の者を配置されるように言いつつ、

「もりのなき やどにさきたる そのなは こころなくとも やすくたおれず（手折れず）」

守りのないあなたの宿でも、美しい花のように気高い心を持つあなたを、心無き者も簡単に手出しする事など出来ないでしょう。という返歌に、

「ご配慮、ありがとうございます。感謝いたしますわ」

と、感謝の言葉を添え、使者に持たせた。

「こう、人の目が多くなれば、もしも院の息がかかった者がいたとしても、簡単には事を起こせないはずです。これで更衣様も御安心なことでしょう。よろしゅうございましたね」

乳母もホツとした表情を見せる。やすらぎも安堵した。

「これは殿にも少しだけお目こぼししなければいけませんね。私のつたない歌を、お二人に笑われなければよいのですけど」

上はいつもの調子でほんのりと笑って見せた。

大将に突き倒された右衛門の命婦の身は、床に強く放り出されていた。それを大将が抱え起こす。命婦はぐったりとしていた。

「どう、なったのだ？」

主上が恐る恐る聞く。

「大丈夫です。毒を飲んではいません。気を失っているだけです」

そう言いながらも大將は命婦の懐を探る。

「何をしているのだ？」

「ああ、やはりあった。もう一包み、薬を隠し持っておりまして。おそらくこれは毒ではありませんまい。命婦は初めから東宮に毒を盛る気はなかったでしょう。失敗したふりをして、自分だけが毒を煽って死ぬ覚悟だったと思われませう」

「罪を、一人かぶって死ぬ気だったのだろうか？」

「おそらくそうでしょう。ここでは命婦は毒を煽って亡くなった事にしておきましょう。でなければ命婦の命が危ない。あとで命婦に繋がりのある人間を白状させましょう」

そう言って大將は命婦をそつと横たえると、ため息をついた。

「私も早く花房の元に行かねば」

心の音

私の前に琴が据えられ、用意が整えられた。私は少し音を確認すると、

「では、弾かせていただきます」

と言って、まずはあまり抑揚のない、単調な曲を弾き始めた。

「弾きながらお話してもよろしいでしょうか？」

「そなたがそうしたいのならば、私はかまわない。そなたの本音を聞きたいと言っているのだから」

「ありがとうございます。では、院様はなぜ直接太后様や帝に手を出さずに、お方様や東宮様、私に手を伸ばしてこられたのですか？」

院様は一層底意地の悪い表情をする。

「人というのは自分が何かをされるより、身近な者が自分の手の届かぬところで苦しむのをもっともつらく思うからだ。私はそれをよく知っている。太后は帝が苦しむ事が一番こたえるはずだ。そして帝は兄の私がそなたや、愛妾の君、親友の妻に恐怖を与える事を最も嫌がるはず。その命を奪われればさぞかし嘆く事だろう。下々の者の苦しみに、帝は直接手を出す事は出来ないだけに、その苦しみは大きいはずだ」

「院様のお可愛がっていた、猫のようにですか？」

「その通りだ」

「なぜ、そのように残酷になれるのでしょうか？」

「言ったであろう？ 非道には非道で答えるのが私のやり方だと。私はそれほど残酷だとは思っていない。残酷なのは変わることになく繰り返される内裏でのありようだ。どうする事も出来ぬ宿命だ」

「どんな宿命があろうとも、人の心は自由です」

「そんな事は無い。悪意は人の心をゆがめるものだ。人の世を生きる以上、心に自由はもたらされぬ」

「誠に、そうでしょうか？」

私は曲調を変える。少し、ゆるやかでのびのびとした流れのある曲を弾く。

「私は身分のないまま田舎で育ちましたから、高貴な方々の不自由なお苦しみなど知りませんでした。特に女人が存在その物を罪深く扱われていることが、どれほど苦しい事かも知りませんでした。むしろ、そう言った事に物憂げでいられる様など、お美しく、羨ましくさえ思っております」

「羨ましいか。実情を知らず、みやびやかな姿だけを目にすればそのようにも感じるのであろうな」

「そうですね。でも、私は知りました。身の重い方々がどれほど御不自由な中で日々を暮らされているか。女人が自らの心を現す事が

どれほど難しい事か。そういう部分だけを見れば、確かにそう言った方々のお心は自由が無いのかもかもしれません」

「そなたにどの程度理解できるかは判らぬが、多少は理解しているという事にしようか」

「たしかに理解が浅いかもかもしれません。けれど、私はそれでも人の心を信じます。私の仕えるお方は御身の上が重くなられようと、ご自分の出来る事がどんなに限られようと、その中で精いっぱいなさって生きていらっしやいます。大將様もそうです。ご自分の宿世がどうあっても、最初からあきらめたりなどなさいません」

そう、この音色は自由を求める心。そしてそれを諦めない心。明るくしなやかな心。

「だが、最後には諦めるより仕方がないのが宿世であろう」

「たとえそうであろうとも、出来る限りのことをする。それが心の自由でございます。ご自分の力及ばぬことを嘆かれるのではなく、出来る事を少しでも多く叶えようとする心。それこそが本当の自由でございます」

「力及ばぬことの方が多くてもか？」

「自由は数の多さで計るものではありません。自分の心の計りにかけるものでございます」

私はそう言うと曲を変えた。お方様と大將様の三日夜で演奏した曲だ。あの、桜子さんの心を現した曲だ。

だが、私はあの時とは少し弾き方を変える。今は目の前にいらつしやる方の鏡になった気持ちでその心を現そうと弾いた。

「院様が私を最初に連れ去った時に利用した女房。桜子さんは私に強い嫉妬を持っておりました。下司とさげすまされているはずの私に。もしかして、今の院様も同じようなお心をお持ちなのではございませんか？ 多少罵られようとも自分の思うがままに生きようとする私に」

「そうかもしれん」

「今弾いているのは桜子さんが自害した後、私が彼女の心を現そうと弾いた曲でございます。自らの思うに任せぬさため。誇りを踏みにじられ、そんなものとは縁のない暮らしをしていた私に大切なものを奪われる。どなたにも届けることのできない、女人の声……。彼女は身分ある女人の心を映し出す鏡の様な方でした。哀れな方でした」

私は悲しく琴を掻きならす。怒り、苦惱、悲しみ、恨み。そんな心の音を哀切な音で現す。

「ですが、私は彼女が自害に逃げた事を許してはおりません。彼女を憐れみはしますが、彼女が心の自由を手放した事を許す事は出来ないのです。それは院様も同じ。なぜ、簡単にお逃げになるのですか？ 他の方を御恨みになる心に逃げ込んで、ご自分の心と闘おうとはなさらないのですか？」

琴の音は一転し、激しさと強さを表す。怪しく、強く掻きならされる音は、高い音も低い音も絃よ切れるとばかりに強くはじかれる。

「なぜ、私が自分と戦わねばならぬのだ。変わらなければならぬのは人の世の方であろう。命を軽んじ、人の心を踏みにじる、この現世の方であろうが」

「違うわ。私たち人が闘わねばならないのは自分の心。院様だつて、ご自分のお心に負けた揚句、命を軽んじて桜子さんや、命婦の命を奪っているじゃないの！」

「それはこの現世が非道であるからだ！」

「その心が現世を非道にしているのよ！ 院様はご自分に負けて大切な方々のお心を踏みにじておられるわ。命婦様のお心、亡き乳母様や女御様のお心、そして、憐れな猫の心も」

「言うな！ それならばこの現世に生きる者達は、皆、自分の心に負けておるではないか！ だからこの世は、このように狂っているのではないか！」

「そうではない人もいるわ。自分の心と戦い、負けたくないと思う人もいるわ。祖父や、父や、お方様はそうだわ。人生や、人の心をあきらめたりなんかしない」

私は絃を弾く指を早める。より早く、より激しく。

「私もそうだわ。私はここに祖父の名誉を晴らしに来たものではありません。院に憎まれる宿命を背負った自分の心と、闘うためにここに参ったのです」

激しく琴を弾き続ける。本当に絃が切れてしまいそうだ。それで

も私は手を緩めない。

「やめよ……。その琴の音を今すぐ止めよ」

「止めません。これは私の心の鬨の音色です。そして院様のお心の鬨の音でもあるのでしよう。院様は昔の事を恨んでいらっしやるんじゃないわ。帝に甘えていらっしやるのよ」

「私が何故、あの憎い者に」

「いいえ。院様は帝に甘えられてきた。帝をお苦しめになっても帝は院様を許し続けていらっしやっただから。女御様を失った後初めて甘えさせて下さる方を見つけて、すっかり御頼りになってしまわれたの。その帝に突き放されて御動揺のあまり、帝の気を引こうと脅迫の文を送られたの。そして今は、ここまでノコノコやってきた私に当たられているんだわ」

「生意気を申すな。……やめよ。その音を止めるのだ」

「止めません。私達の鬨の音を止める事は出来ません。この音こそが私の鬨の心。そして、院様の御本心にございます」

私はより熱を込めて琴を弾いていた。その時、

バン！

院様が琴を蹴り飛ばされた。そして私の襟元をつかみ、私を無理やり立たせる。

「人を呼んで、その大事な指を斬りおとされたいのか……？」

院様が私を睨む。

「院様にそれはお出来になれません。院様は今の音でお気づきになられたはずですから。ご自分の御本心に」

私も院様を睨み返した。

最高の夫

康行達は山道を馬列をなして駆けあがっていた。馬達には慣れぬ山道だが侍たちの気迫に答えるように、勇壮果敢に狭い道を駆け登ってゆく。

中腹にある山寺まであと少しと思われるところで、康行達の前に数人の僧が立ちはだかった。

「そなたたち、このような山道に馬を駆ってこの山寺に何用ぞ。この寺は高貴な方がおわす寺。侍者などが訪れるようなところではない。早々に立ち去るがよい」

「その、高貴なお方に御用がある。その方の元に大将様の北の方に仕える女房が訊ねられているはずだ。その方たちに会わせていただくために我々はここに来たのだ」

康行は馬に乗ったまま声を張る。しかし僧たちは、

「そなたたち侍者の分際で、馬上より声をかけるとは無礼であろう。今すぐ即刻立ち去れ。さもなければ痛い目にあう事となる」

そう言っつて一人の僧が手を挙げると、どこからともなく荒々しげな男達が姿を現した。そのいでたちはどう見ても山賊だ。ただ、その腰には彼らには不釣り合いなほど立派な太刀を下げている。

「高貴な方がお使いになつていゝとは思えぬ風貌の輩だな。このような者達にまで礼を尽くす義理、我々には無いと存ずるが」

すると山賊達は、

「おう。こつちだつてあんたらに礼を尽くす気など無いわ。ここから去る気が無いのなら、我々の餌食になつてもらうだけのこと」

と、せせら笑つ。だが康行も負けずに叫ぶ。

「山賊の分際で、我々侍者を襲おうと言つのか。我々は山道を旅する商人とは違つぞ」

康行の言葉に侍たちの士気も上がる。皆、熱っぽい目で山賊達を睨みつけた。

「そつちこそ我らをただの山賊と侮るな。この程度の手数で我々に刃向つた事を後悔させてやろう」

と言つて、太刀に手をかけ構える。すると僧たちは脅えた顔で寺の方へと逃げ、男達が一斉に康行達に襲い掛かつてきた。

確かに数では康行達は少ないが、馬上にいる分相手の太刀が及びにくく決して不利とは言えなかつた。山賊達をかき分け、山寺に近付いていく。

しかし、寺が近付くと同時に様相が違つて来た。山の中から投石が始まり、矢がいかけられると馬達は脅え、康行達は散りじりになつてしまふ。

するとそこに多数の山賊達が襲いかかつて来る。ついには馬上から落とされる者も出て来る。そうした者を助けようと駆けつけた者

がまた襲われ、その中からも馬から落ちる者が出て收拾がつかなくなってきた。康行達はたちまち苦戦を強いられる。

山寺はもう目前だというのに、康行は寺に近づく事が出来ない。気持ちばかりが早くて寺の門前に固まってしまったために、山賊達に取り囲まれてしまった。

あの寺の中に花房がいるというのに。康行は齒ぎしりをした。すると、

「どけ、どけい！ 不逞の輩共。近衛の大将様が院に御用があつてまいった。邪魔をするなら容赦はせぬぞ」

そう言つて馬に乗つた役人や侍たちが姿を見せた。奥には大将の姿も見えた。

「間にあつたか。康行、花房はどこだ？」

大将が馬上から山賊を蹴散らしながら康行に声をかける。その間にも役人達が山賊に負けじと矢をいにかけている。

「まだ、寺の中にいると思われませう。おそらく院様と一緒にでしょう」
「分かった。ここは役人たちに任せておけ。早く花房の元に行くのだ」

「分かりました」

康行は馬から降りて太刀を抜いた。大将も馬上から降りるとその後が続く。石段を駆けあがりながら邪魔をしようと立ちはだかる者

には、太刀を合わせ、力で振りはらって行く。他の侍たちもその後を追った。

「……外が騒がしいな。大将がお前を迎えに来るにはいささか早いと思うが」

院様は外の騒ぎに耳を傾けながら言う。

「早くなんかないわ。きつと康行が邸から人を連れて来てくれたんだわ」

「お前を逃がしたという侍者か。どおりで早いはず。大将や役人はすぐには気づけぬはずだからな」

「大将様に何をしたの？」

「何もしてはおらぬ。ただ、大将の邸から役人への御所への使いには眼を光らせておる。邸からの知らせは大将には届かぬのだよ。お前を助けてくれるはずの恋人は私の手の内にあるも同然。あてにできずに無念である」

院様は会心の笑み、といった表情をなさった。

「残念でした。康行は侍者。きつと御所への知らせも侍を使ったはず。真正面から大将様への使いとしてではなく、他の方への私用として知らせたに違いないわ。それに、私と大将様は本当に何でもないのよ。男女の契りなど無くても人は信頼を結ぶ事が出来るの。私

の夫は康行の方よ」

「何と、そなたは大将を退けて侍者を夫にしたと申すのか？」

院様は驚かれた顔をした。今度は私は笑う番だ。

「私は田舎育ちのやんちゃ女房。都人の理屈は通じないわ。さっきの激しい琴の音を聞いてもお分かりにならなかったの？ もう一度、弾いて差し上げましょうか？」

「女人は夫の気配を感じると強気になるものよ」

「気が強いのは生まれつきよ。今、康行が私を助けに来てくれるわ」

「私はそなたを甘く見ていたようだな。だが、これでも気強いままでいられるか？」

院様がそうおっしゃると部屋を仕切っていた障子が開かれ、見るからに屈強な、鍛え抜かれた体つきの修験僧たちが幾人も現れた。その手には似つかわしくもない槍や太刀が握られている。

今までこの向こうにこのように屈強な男達が構えていたのかと思うと、ぞっと鳥肌が立った。これでは院様が本気でかかられたら、私などひとたまりもない。

「これ以上生意気な口を利くようなら、本当にその指が斬り落される事となるぞ」

そう、院様が凄まれた時だった。

「そうはさせない。我が妻花房を返していただく！」

康行が部屋の中に飛び込んできた。

「康行！」

康行、あんたって最高。どんな高貴な男君よりも素晴らしい、私の自慢の夫だわ！

「無礼な侍者だな。断りもなく部屋の中に入り込むとは」

院様は慌てる様子もなく、康行を物珍しそうに眺めた。

「院様。あなたは先ほど帝により罪人として扱われる事となりました。非礼は承知の上。私達は帝の命により罪人を取り押さえに参ったのです」

「そのような事はさせぬ。私に手を出そうものなら、お前の妻、花房がどのような事になるか分かっておるうな？」

そう言つて院様は私に近づいた。大将様と他の侍たちも飛び込んで来たが、私達の姿を見てその足を止める。院様は私の手と衣をしっかりと捕まえてしまわれた。

「この女人なら、お前達のためなら命を落としてもかまわぬとくらは言い出しそうだが、もしも命より大事な琴を弾く指を斬りおとされればどれほど苦しむ事になるうかの？」

院様はそう言つて修験者に太刀を抜かせ、私の手を刃に近づけよ

うとする。

「そんなことしても無駄よ。手の指が無ければ足でも弾くわ。足が駄目でも身体はどこかを使ってでも弾くわ。私が弾けなくなってもきつと誰かが私の魂を引き継いで弾いてくれる。私はそんな事で苦しんだりはしないわ」

「では、そなたの命を奪う以外に手はないようだな。それが嫌ならこの山寺からは撤退してもらおう」

院にそう言われると康行も大将様も動く事が出来ない。その場に緊張感が漂って、誰もが息を殺して院様と睨みあっていた。

憎しみ

冗談じゃないわ。こうなったら簡単に殺されたりなんかするもんですか。

正直この山寺に来た時には、康行が無事に逃げきつてくれたなら自分はどうなってもいいって思ってたけど、気が変わったわ。

康行は「助けに来て」という私との約束以上の事をしてくれた。こんな短い時間でここに来るなんて、普通に山を下りたとは思えない。きつと考え付く限りの手を打って、急ぎ駆けつけてくれたんだわ。

しかも仲間と大将様を連れて来てくれた。邸の役人があてにならない事も、大将様に急ぎ知らせる必要がある事も、もしかしたら私が真っ直ぐに院様のところに向かった事も、見当をつけていたのかもしれない。全てを予測して、ありつただけの最善策を考えたうえで助けに来てくれたんだ。

私は自分に言い聞かせた。院様にやすやすと殺されてたまるもんですか。ここまでしてくれた康行の労に、ちゃんと報いるのよ。

私が捕まったままじゃ、康行と大将様は動けない。私が自分で院様から逃れなくっちゃ。

私はなんとか逃れる方法はないものかと、院様の隙を窺っていた。

先に動いたのは院様の方だった。私の衣をしつかりと捕まえ直し

て、私の身を引き寄せる。さらに私の手に近づけていた太刀を、自らつかもつとして私の手を緩めた。

私はこの機を逃すものかと緩めた手を引っ込めて、院様から離れようとした。

しかし院様は私の衣をグイッと引っ張り、私を抱え込もうとする。私はさらに抵抗し、院様が太刀を握ったまま御顔をそむけた隙に衣の袖から腕を抜いてしまう。

滑りの良い絹を幾重にも重ねた女房衣装。肩をはだき、腕を抜いてしまえばその身を自由にできるはず。私は思い切って衣を脱ぎ捨て、院様の腕から逃れようとした。

力任せに衣を脱ぎ捨てたので下着の片袖が破れてしまったが、身体が自由になる。しかし、院様は私を逃すまいと手を伸ばされる。その手は私の髪にかかり、しっかりと捕まえられる。

だがその時、私の髪が私の頭からずるりと離れた。

そう、私の髪は長さを補うためにかもじをつけていたのだ。お義母様から贈って頂いたかもじを。

院様が啞然となさっているうちに、私は康行の懐に飛び込んだ。康行はしっかりと私を受け止め、私をかばうように前に出て太刀を構えた。

「院様、もう、あらがつのはおやめになってください。院様の御名譽が傷つくばかりです」

康行が太刀を構えながらも院様に話しかけた。

「名誉？ そんな物はとうに失っているではないか。女人への寵愛がすぎて帝の地位を失い、幼い帝に追いやられたまま影のように暮らし、恨み心を恐れられた私だ。これ以上都人が何を言おうと、傷つく物など何も無いではないか」

院様は皮肉な笑みを漏らされる。

「私の様ないやしい侍でさえ、太刀を握る時には自分の主人や大切な者を守る侍としての誇りを持って太刀を握ります。それが無ければ私は人を斬る苦しさには耐えられません。都人が何と言おうとあなた様はこの国の帝だったお方。ご自分をお支えになる誇りをお持ちになっっているではありませんか？」

「今更私がお自分を支える必要など、あろうはずもなからう」

院様はますます自虐的な言葉を言われる。

「院様、ご自分のお心と闘って下さい。そうすれば必ずご自分の中にある誇りに気付かれるはず。院様は本当は帝に認めていたかったですでしょう？ 弟宮であられる帝に誇れる御自分でいたいたいのでしょうか？ そういってお心を取り戻して下さい」

私もそう、院様に言う。

「私は帝を憎んでいる」

「そして、気に留めておいでです。憎むという事はそれだけお心にかかっているという事。院様は帝を羨みながらも、帝のお苦しみを

共に感じておられるのです。帝もきつと同じです。院様のお心を想い、共に悲しんでいらっしゃるに違いありません。もう、このような事はおしまいにして良いではありませんか。これ以上ご自分を傷つける必要はないのです」

「誰も、私を許す者などいない。……おそらく、御仏でさえも」

院様は暗い顔でおっしゃった。

「誰に許されるのではありません。それでは院様は救われません。院様ご自身が、ご自分をお許しになるのです。それで初めて院様は救われるのです。ご自分の弱いお心と闘って下さい。そして勝って、ご自分をお許しになって下さい」「」

「私が、私を許す。それで私が、救われる……」

院様はそう言われると、しばらくその場で考え込まれてしまった。

やがて院様は修験者たちに、武器を納めるように言った。そして、

「私は憎しみに疲れてしまったようだ。自分を許す事がこれほど自分を楽にするとは」

院様はため息交じりにつぶやかれた。

「違います。院様は勝ったのです。ご自分のお心の闘いに」

私はそう言った。すると院様は、

「大将。車を用意していただきたい。帝の元に参るのに、罪人としての姿を下々の者に晒したくないのだ。願いを聞いてもらえぬか？」
と、お尋ねになった。

「すぐにきちんとした男車を用意させましょう。帝の元においてになるならあなた様は帝の兄宮。罪人ではございません。それは帝の決めること。私は付き人としてお供させていただきます。御兄弟でゆつくり話し合われるのがよろしいと存じます」

そう言つて大将様は膝をつきかしまつた。私達も遅ればせながら皆、ひざまづいてかしまつた。

大将様は院様に付き添われ、山賊と悪僧たちは侍たちと役人に取り押さえられて私達と先に山を降りる事になった。

康行は私を抱えて馬に乗り、正成と小雪の事、正成の命が助かったこと、邸の侍が忠長様に事情を伝え、大将様が東宮様の御命を守られていたことを教えてくれた。命婦も実は生きていて東宮様にも害が無かつた事は、大将様が教えてくれていた。

「お前は無茶をしないという約束を簡単に破つてくれたな。俺にはあんなにうるさく言っていたくせに」

康行はむくれた。

「無茶じゃなかつたじゃない。ちゃんと康行が助けに来てくれたん

だから。勇ましくて素敵だったわよ。康行」

私はにっこりとほほ笑んだ。康行は照れたような顔になる。

「おだてて誤魔化していやがる。しかしお前、なぜあんなに院様のお気持ちがあつたんだ？ お前が院様をあれほど説得できると思わなかつた」

「説得したわけじゃないけど。実は私もね、お父様を疑っていた時は、お父様の事がとても憎く思っていたの。でも、憎めば憎むほど自分の心も傷ついていったのよ。そして傷つくほど自分に負けそうになったの」

そう、あの時は苦しかった。お父様を憎み、自分に流れるお父様の血を憎み、自分が生まれた事を憎んだ。そうやって傷ついた心は上手くいかないことすべてが、宿命のせいに思えて一層憎らしかつた。お方様の事、院様の事、康行の事。そして憎む心に甘えてしまっていた。

「でも私は大将様に救っていただいた。康行もそばにいてくれた。みんなを信じる心がお父様や御爺さまを信じる心呼び起こしてくれた。結局、私自身の中にある憎しみという敵に勝つより他に、真実を知る方法は無かつたの。康行が故郷に帰る勇気をくれなかつたら私、自分のふるさとでも自分自身も失っていたかもしれない。そう思ったらなんだか院様のお苦しみも分かる気がしたの」

「きつと、救われたさ。院様も」

「うん。帝も救われたでしょうね。命婦様の事にお気づきだったのだから、院様のお苦しみも感じていらしたことでしょう。院様がお

心を開いて下されば、いい方向に向かうはずね」

「ああ、お前は頑張ったよ。太刀を持った院様から逃れようとした時はヒヤリとしたが」

「私も髪をつかまれた時はもうダメかと思った」

「あの時かもしじが取れたのは、お前のお義母上のお心が、お前を守って下さったのだろうな」

「こんな、親不幸な娘なのにね」

私は思わず笑ってしまう。

「それは俺も同じだ。特にお前の両親の前では大口をたたいたからなあ。それがこのザマでは」

「本当ね。私達、故郷にいらなくて良かったのかも。親たちの寿命がいくらあっても足りないものね」

そう言っただけ私達は笑いあっていた。

まさか、帰る先の大將様のお邸に、以前出した文を見て旅立った、自分たちの親が待ち構えているとも知らずに。

憎しみ（後書き）

次回で最終回です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6635y/>

藤の花の匂う頃

2012年1月14日12時52分発行